岡山県埋蔵文化財発掘調査報告115

前山遺跡
鎌戸原遺跡

国道429号線改良に伴う発掘調査Ⅰ

1997

岡山県教育委員会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告115

前山遺跡
鎌戸原遺跡

国道429号線改良に伴う発掘調査Ⅰ

1997

岡山県教育委員会

序

国道429号線は、倉敷市と津山市を結ぶルートであり、また山陽自動車道倉敷インターチェンジや岡山空港など広域交通の拠点が近くに存在するため、県の南北を連結するうえで、重要な役割を果たしています。特に改良区間の倉敷市西坂から総社市井手までは、交通量の激増による交通渋滞や歩行者の安全確保に対処するため早期改良が望まれております。

岡山県教育委員会では、都窪郡山手村及び総社市内の工区にある遺跡の保存について、関係機関と協議を重ねましたが、遺跡の現状保存が困難なものについて、やむを得ず発掘調査を行い、記録保存の処置をとりました。

本書に収録されておりますのは、山手村宿に所在する前山遺跡と鎌戸原遺跡であります。尾根上の前山遺跡では、142基の墓からなる弥生時代後期の集団墓地の様子が明らかとなり、5世紀代と考えられる墳墓からも注目すべき遺物が出土しております。また、この尾根の北側山裾にある鎌戸原遺跡では、古くは縄文時代から中世にかけての各時代の遺物が出土するなど貴重な成果が得られました。本書が、吉備地域の歴史を研究する一助となれば幸いであります。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書作成に際しては、岡山県文化財保護審議会委員の方々のご指導を得、また関係機関、発掘作業、整理作業に従事していただきましたみなさん、地元の方々から多大なる助力を得ましたことを記して感謝いたします。

平成9年3月

岡山県教育委員会

教育長　森　崎　岩之助

例　　言

1．本報告書は、国道429号線改良工事に伴い、岡山県土木部道路建設課（倉敷地方振興局）の依頼を受け、岡山県古代吉備文化財センターが、平成５年度に調査を実施した都窪郡山手村内の２遺跡、前山遺跡と鎌戸原遺跡の発掘調査報告書である。なお、発掘調査は、現在も総社市域において、条件整備の進展に合わせ断続的に実施している。

2．遺跡の名称変更を行った。前山遺跡の調査は、当初、遺跡名を「平山22・23号墳」として、古墳２基の発掘調査を目的とした。調査において、23号墳は古墳ではないことが確認され、新たに、葺石をもつ方墳1基と弥生時代後期の土壙墓群が検出された。これらを便宜上、「平山23号墳」、「平山遺跡」と呼称したが、報告書の作成にあたり、小字名を使用し、遺跡名を「前山遺跡」に変更し、「平山22号墳」を「前山１号墳」、「平山23号墳」を「前山２号墳」と変更した。鎌戸原遺跡は、「鎌戸原散布地」として調査に入ったが、遺構が確認され、本報告書をもって、「鎌戸原遺跡」とする。

3．前山遺跡は、都窪郡山手村宿字前山に所在する。

4．鎌戸原遺跡は、都窪郡山手村宿字鎌戸原1821-3ほかに所在する。

5．調査は、鎌戸原・前山の２遺跡を継続して行い、1993年（平成５年）４月から、1994年（平成６年２月まで行った。なお、他事業との調整により、途中９、10月の２か月間を中断した。

6．発掘調査にあたっては、岡山県文化財保護審議会委員の近藤義郎・水内昌康両氏より御指導、御助言をいただいた。また、現場において、土器棺内流入土の水洗に関して小田嶋梧郎氏、土壙墓Ａに関して亀田修一氏に御教示いただいた。そして、調査・整理を通して、山手村教育委員会の日野浦弘幸氏に御教示、御助力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。

7．報告書の作成は、1995年（平成７年）10月から、1996年（平成８年）３月まで、岡山県古代吉備文化財センター山手事務所にて行った。

8．本書の編集・執筆は、正岡睦夫が鎌戸原遺跡、物部茂樹が前山遺跡を担当し、とりまとめを物部が行った。また、遺物の写真撮影は、江尻泰幸氏の助言を得て、物部が行った。

9．特殊な遺物の自然科学分野における鑑定・分析を下記の諸氏・機関に依頼した。有益な御教示・報告文をいただいた。記して、厚く御礼申し上げる次第である。

歯の鑑定	小田嶋梧郎（岡山大学）
人骨鑑定	濱田　　穣（京都大学）
石材鑑定	妹尾　　護（倉敷芸術科学大学）
赤色顔料分析	本田　光子（別府大学）
胎土分析・玉材質分析	白石　　純（岡山理科大学）
不明黒色物質の分析	パリノ・サーヴェイ株式会社

10．出土遺物ならびに図面・写真等は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325-3）において保管している。

凡　　例

1．報告書に記載された高度値は海抜高であり、方位は特に示さない限り磁化である。

2．図番号、表番号は、例言～第一章、第二章、第三章、第四章各節ごとに番号を付けており、通し番号にしていない。遺物番号も同様に、第二章と第三章と番号を分けている。

3．遺構、遺物の略記号、略称は以下の通りである。

土器棺墓＝土棺　　箱式石棺墓＝箱　　土壙墓＝土（第二章）　　土壙＝土（第三章）

石器＝S　　金属器＝M　　玉類＝O　　土製品＝C

4．遺構、遺物の個別実測図の縮尺は以下の通りである。図中に、できるかぎり表示した。

土壙墓・箱式石棺墓1／40（土壙墓14のみ1／30）　　土器棺墓（遺構）1／20　　土壙1／30

土器・瓦1／4（大形品を1部1／6、1／8で掲載）　　土器棺墓（土器）1／6

石器1／4（石鏃のみ1／2、第二章S1は1／3）　　金属器1／2　　玉類1／1　　土製品1／2

5．図版の遺物写真のうち縮尺設定したものは表示した。

6．土壙墓、土器棺墓、箱式石棺墓実測図の掲載向きは、等高線に平行するものは横位に、直交するものは縦位に置き、掲載天地は斜面上方を天・下方を地となるよう配置した。ただし、編集の都合上、土壙墓15・25・28・31・39・49・77・87・102・103・104が、縦位と横位が逆になっている。

7．第一章の第2図は建設省国土地理院発行の5万分の1地形図を複製し、加筆したものである。

8．土色、および土器の色調は、小川正忠・竹原秀雄編集『新版　標準土色帖』1993年度版をもとに表記した。

9．土器実測図のうち、中軸線の左右に白抜きがあるものは、口縁部、底部の残存率が25%以下であり、口径、底径が不確かなものである。

10．写真図版のうち、遺物写真の番号は掲載遺物番号と一致する。

11．報告書中に用いる時代区分は、一般的な政治史区分に準拠し、それを補うために文化史区分、世紀を併用した。

目　　次

序
例　　言
凡　　例
目　　次
第一章　序　　章 …… 1
　第一節　調査に至る経緯 …… 1
　第二節　地理的・歴史的環境 …… 2
第二章　前山遺跡の調査 …… 4
　第一節　調査の経過 …… 4
　第二節　調 査 報 告 …… 5
　　1　遺跡の立地及び概要 …… 5
　　2　弥生時代後期の遺構・遺物 …… 6
　　3　古墳時代の遺構・遺物 …… 68
　第三節　ま　と　め …… 77
　　表 …… 78
　図　　版 …… 81
第三章　鎌戸原遺跡の調査 …… 95
　第一節　調査の経過と概要 …… 95
　第二節　調査報告 …… 97
　　1　縄文・弥生時代の遺構・遺物 …… 97
　　2　古墳・歴史時代の遺構・遺物 …… 102
　第三節　ま　と　め …… 106
　　表 …… 106
　図　　版 …… 107
第四章　自然科学分野における鑑定・分析 …… 111
　第一節　前山1号墳出土・歯の鑑別　岡山大学名誉教授　小田嶋梧郎 …… 111
　第二節　前山2号墳出土・歯の鑑別　岡山大学名誉教授　小田嶋梧郎 …… 112
　第三節　岡山県都窪郡山手村宿　前山1号墳出土人骨について
　　京都大学助教授　浜田　穣 …… 114
　第四節　前山遺跡出土の赤色顔料について
　　別府大学助教授　本田　光子 …… 119
　第五節　前山遺跡出土の初期須恵器の胎土分析
　　岡山理科大学自然科学研究所　白石　純 …… 122
　第六節　前山遺跡土壙墓A内出土ガラス小玉の分析
　　岡山理科大学自然科学研究所　白石　純 …… 124
　第七節　甕の底部に認められた黒色物質の材質について
　　パリノ・サーヴェイ株式会社 …… 125
報告書抄録 …… 129

図　目　次

第一章　序　　章
第１図　遺跡位置図（1／200万）…… 3
第２図　周辺遺跡分布図（1／5万）…… 3
第二章　前山遺跡
第１図　調査区配置図（1／2000）…… 4
第２図　調査前地形図（1／400）…… 5
第３図　縄文土器（1／4）…… 5
第４図　弥生時代後期遺構配置図（1／300）…… 6
第５図　丘陵断面図（1／130）…… 7
第６図　群分け図（1／600）…… 8
第７図　A群・遺構配置図（1／150）…… 9
第８図　土壙墓１（1／40）…… 10
第９図　土壙墓２～５（1／40）…… 11
第10図　土壙墓６～13・15（1／40）…… 12
第11図　土壙墓14（1／30）…… 13
第12図　土壙墓14出土遺物（1／6）…… 13
第13図　土壙墓16～18・20（1／40）…… 13
第14図　土壙墓19・21～25（1／40）及び、
土壙墓23出土遺物（1／2）…… 14
第15図　土壙墓26～32（1／40）…… 15
第16図　土壙墓33～39（1／40）…… 16
第17図　土器棺墓１…… 17
第18図　土器棺墓２…… 17
第19図　土器棺墓３…… 18
第20図　土器棺墓４…… 18
第21図　土器棺墓５…… 19
第22図　土器棺墓６…… 20
第23図　土器棺墓７…… 20
第24図　土器棺墓８…… 21
第25図　土器棺墓９…… 22
第26図　土器棺墓10…… 22
第27図　B群・遺構配置図（1／150）…… 23
第28図　土壙墓40～44（1／40）…… 24
第29図　土壙墓45～52（1／40）…… 25
第30図　土壙墓53～55（1／40）…… 26
第31図　土器棺墓11…… 26
第32図　箱式石棺墓１、出土遺物（1／1）…… 27
第33図　箱式石棺墓１（1／40）…… 27
第34図　箱式石棺墓１と土壙墓41との高低差…… 27
第35図　石列群（1／60）…… 28
第36図　石列群　断面土層図…… 28
第37図　C群・遺構配置図（1／150）…… 29
第38図　土壙墓56～57（1／40）…… 29
第39図　土壙墓58～61（1／40）…… 30
第40図　D群・遺構配置図（1／150）…… 31
第41図　D群・斜面土層図１（1／60）…… 32
第42図　流土中出土遺物（1／2）…… 32
第43図　D群・斜面土層図２（1／60）…… 32
第44図　土壙墓62～69（1／40）…… 34
第45図　土壙墓70～75・77（1／40）…… 35
第46図　土壙墓76・78～82（1／40）…… 36
第47図　土壙墓83～87（1／40）…… 37
第48図　土壙墓88～93・95・97（1／40）…… 38
第49図　土壙墓94・96・98～100（1／40）…… 39
第50図　土壙墓101～105（1／40）…… 40
第51図　土壙墓106～107・110（1／40）…… 41
第52図　土壙墓108・111～112（1／40）…… 42
第53図　土器棺墓12…… 43
第54図　土器棺墓13…… 44
第55図　土器棺墓14…… 44
第56図　箱式石棺墓２（1／40）…… 45
第57図　E群・遺構配置図（1／150）及び、
流土中出土遺物（1／1）…… 46
第58図　土壙墓113～115（1／40）…… 47
第59図　土壙墓116～121（1／40）及び、
土壙墓120、出土遺物（1／1）…… 48
第60図　土壙墓122～125（1／40）…… 49
第61図　区画墓　上：主体部と石列（1／40）
下：地形図（1／60）…… 50
第62図　弥生土器出土地区分け…… 51
第63図　上地区出土土器(1)（1／4）…… 54
第64図　上地区出土土器(2)（1／4）…… 55
第65図　1中地区出土土器（1／4）…… 56
第66図　2中地区出土土器(1)（1／4）…… 56
第67図　2中地区出土土器(2)（1／4）…… 57
第68図　3中地区出土土器(1)（1／4）…… 57
第69図　3中地区出土土器(2)（1／4）…… 58
第70図　3中地区出土土器(3)
－土壙墓60周辺－（1／4）一部（1／6）…… 59
第71図　4中地区出土土器(1)（1／4）…… 59
第72図　4中地区出土土器(2)
－土器溜り２－（1／4）…… 60
第73図　4中地区出土土器(3)
－土器溜り２－（1／4）…… 61
第74図　5中地区出土土器(1)（1／4）…… 62
第75図　5中地区出土土器(2)（1／4）…… 63
第76図　6中地区出土土器（1／4）…… 63
第77図　8中地区出土土器（1／4）…… 63
第78図　2下・5下・6下地区出土土器（1／4）…… 64
第79図　3下地区出土土器（1／4）…… 64
第80図　4下地区出土土器（1／4）・（1／3）…… 65
第81図　8下～北地区出土土器（1／4）…… 66
第82図　中央地区出土土器(1)（1／4）
一部（1／6・1／8）…… 66
第83図　中央地区出土土器(2)（1／4）…… 67
第84図　中央地区出土土器(3)
－土器溜り１－（1／4）一部（1／6）…… 67
第85図　古墳時代の遺構配置図（1／400）…… 68
第86図　前山１・２号墳、土壙墓A（1／150）…… 69
第87図　前山１号墳墳丘断面図（1／100）…… 70

第88図　前山１号墳主体部（1／40）…… 71
第89図　前山１号墳箱式石棺使用石材
　　接合関係 …… 71
第90図　前山１号墳箱式石棺内赤色顔料
　　塗付状況 …… 71
第91図　前山１号墳出土頭蓋骨の赤色顔料
　　付着範囲 …… 71
第92図　前山１号墳関連遺物１（1／4）…… 72
第93図　前山１号墳関連遺物２（1／2）…… 72
第94図　前山２号墳墳丘断面図（1／80）…… 73
第95図　前山２号墳葺石（1／60）…… 73
第96図　前山２号墳主体部（1／40）…… 74
第97図　前山２号墳出土遺物（1／4・1／2）…… 74
第98図　土壙墓Ａ（1／40）…… 75
第99図　土壙墓Ａ断面土層図（1／40）…… 76
第100図 土壙墓A出土遺物(1／4・1／2・1／1)…… 76
第三章　鎌戸原遺跡の調査
第１図　鎌戸原遺跡の調査範囲図(1／2000)…… 95
第２図　土層断面図（1／60）…… 95
第３図　鎌戸原遺跡遺構配置図（1／500）…… 96
第４図　縄文土器（1／4）…… 97
第５図　弥生土器１（1／4）…… 98
第６図　弥生土器２（1／4）…… 99
第７図　弥生土器３（1／4）…… 100
第８図　石器（1／2・1／4）…… 101
第９図　土壙－１（1／30）…… 102
第10図　土壙－２（1／30)・出土遺物(1／4)…… 102
第11図　土壙－３（1／30）…… 103
第12図　土壙－４（1／30）…… 103
第13図　溝－１断面(1／40)・出土遺物(1／4)…… 104
第14図　溝－１・２断面（1／40）…… 104
第15図　溝－２断面（1／40）…… 104
第16図　土師器・須恵器・埴輪・瓦・
　　鉄器（1／2・1／4）…… 105

表　目　次

第二章　前山遺跡の調査
第１表　土壙墓一覧 …… 78
第２表　土器棺墓計測値 …… 79
第３表　玉類一覧 …… 80
第三章　鎌戸原遺跡の調査
第１表　石器一覧表 …… 106

図　版　目　次

第二章　前山遺跡の調査
図版１　１．前山遺跡土壙墓群空中写真
図版２　１．前山遺跡空中写真（南東上空から）
　　２．南～西斜面の土壙墓群（南から）
　　３．頂上部の土壙墓群（Ａ群）（北から）
図版３　１．頂上部の土壙墓群（Ａ群）（南から）
　　２．土壙墓群２～５（Ａ群）（北東から）
　　３．北東斜面の土壙墓群（Ｂ群）（北東から）
図版４　１．南西斜面の土壙墓群（Ｄ群）（南東から）
　　２．西斜面の土壙墓群（Ｄ・Ｅ群）（南から）
　　３．区画墓（南から）
図版５　１．北斜面の土壙墓群（北東から）
　　２．箱式石棺墓２（南東から）
　　３．箱式石棺墓１（北東から）
図版６　１．土器棺墓５（南西から）
　　２．土器棺墓６・７（北東から）
　　３．土器棺墓２（東から）
　　４．土器棺墓12・13（北西から）
図版７　１．前山１号墳（南東から）
　　２．前山１号墳主体部（南西から）
　　３．前山１・２号墳周溝部の切り合い
　　（南西から）
図版８　１．前山２号墳（北西から）
　　２．土壙墓Ａ遺物出土状況（南西から）
　　３．土壙墓Ａ完掘状況（南から）
図版９　１．土器棺１・３・５・６・８（1／8）
図版10　１．土器棺２・４・７・11・12・13・14(1／8)
図版11　１．上地区出土土器
　　２．中地区出土土器(1)
図版12　１．中地区出土土器(2)
　　２．土器溜り２出土土器
図版13　１．下地区出土土器
　　２．中央地区・土器溜り１出土土器
図版14　１．前山１号墳関連遺物
　　２．前山２号墳土遺物
　　３．土壙墓Ａ出土遺物
　　４．箱式石棺墓１出土遺物（1／1）
　　５．土壙墓出土、及び流土中出土遺物
第三章　鎌戸原遺跡の調査
図版１　１．鎌戸原遺跡南部（東から）
　　２．鎌戸原遺跡北部（南から）
　　３．鎌戸原遺跡西部（南から）
図版２　１．溝－２（北から）
　　２．土壙－１（西から）
　　３．土壙－２（南から）
　　４．土壙－３（西から）
　　５．土壙－４（北西から）
　　６．溝－１（南から）
　　７．溝－２（西から）
図版３　１．縄文土器・弥生土器
図版４　１．土師器・須恵器
　　２．石器・鉄器

第一章　序　　章

第一節　調査に至る経緯

山陽自動車道の開通により、交通量が激増し、交通渋滞が著しくなっている状況を改善する目的で、倉敷市から総社市に至る一般国道429号線の改良工事が計画された。平成４年10月26日付けで、倉敷地方振興局長から文化財保護法57条の３に基づく協議書が提出された。ルートは現在の道路を拡幅するほか、一部バイパスも計画されていて、丘陵部の削平と水田部への新設が予定されていた。

現地調査の結果、古墳や集落跡が４か所存在することが明らかとなり、保存について協議を重ねたが、周辺部の状況から現状保存が困難なため、岡山県教育委員会は、平成４年10月30日付けで、倉敷地方振興局長に対して工事着手前に発掘調査を実施するように通知した。

協議に基づき、平成５年１月から総社市三須・都窪郡山手村に所在する大溝・今溝遺跡から調査に着手した。条件整備の都合などもあって、平成５年４月からは山手村宿に所在する前山遺跡・鎌戸原遺跡の調査を実施し、平成６年２月で完了した。その後は総社市内の調査を実施している。

調査体制

平成５年度

岡山県教育委員会		総務課長	北原　求
教育長	森崎岩之助	課長補佐	小西　親男
教育次長	岸本　憲二	（総務係長）	
岡山県教育庁文化課		主　査	石井　茂
課　長	渡辺　淳平	主　査	石井　善晴
課長代理	松井　新一	主　任	三宅　秀吉
課長補佐	高畑　知功	調査第一課長	（調査担当）正岡　睦夫
（埋蔵文化財係長）		課長補佐	山磨　康平
主　査	時長　勇	（第二係長）	
岡山県古代吉備文化文化財センター		文化財保護主任	（調査担当）槙野　芳典
所　長	横山　常實		平成６年１月より
次　長	葛原　克人	主　事	（調査担当）物部　茂樹

平成７年度

岡山県教育委員会		次　長	葛原　克人
教育長	森崎岩之助	（文化課本務）	
教育次長	黒瀬　定生	総務課長	丸尾　洋幸
岡山県教育庁文化課		総務主幹	守安　邦彦
課　長	大場　淳	課長補佐	井戸　丈二
課長代理	樋本　俊二	（総務係長）	
参　事	葛原　克人	主　査	石井　善晴
課長補佐	高畑　知功	主　任	木山　伸一
（埋蔵文化財係長）		調査第一課長	（報告書担当）正岡　睦夫
主　任	若林　一憲	課長補佐	松本　和男
岡山県古代吉備文化財センター		（第一係長）	
所　長	河本　清	文化財保護主任	（報告書担当）岡田　達矢
次　長	高塚　惠明	主　事	（報告書担当）物部　茂樹

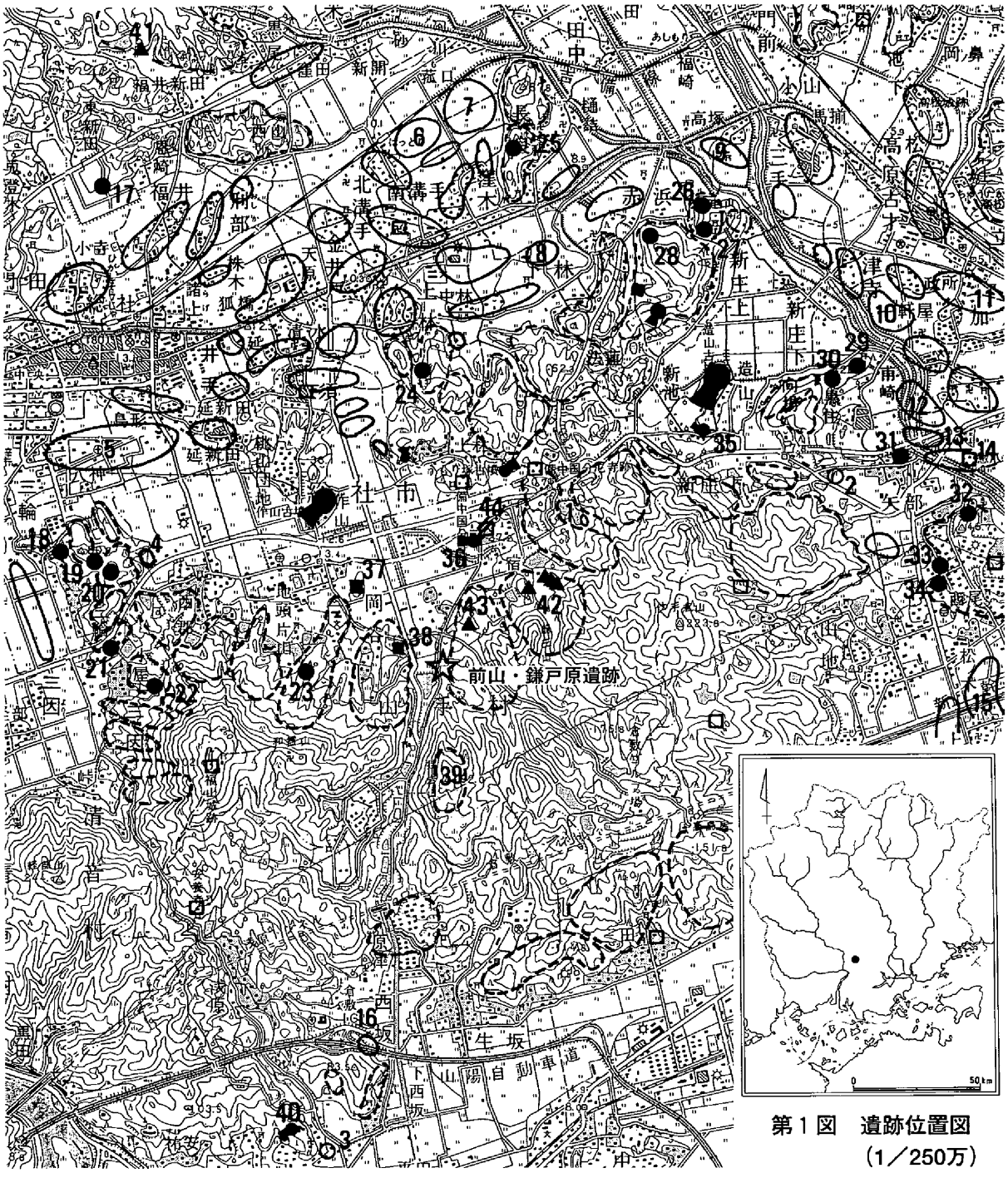
第二節　地理的・歴史的環境

前山遺跡・鎌戸原遺跡の所在する都窪群山手村は、古代、吉備地方の中心地であった総社平野の南縁に位置する。山手村の南には、標高302ｍの福山を頂点とする山塊が東西に横たわり、倉敷平野と隔てている。この倉敷平野は、旧石器時代終末からの氷河期の終息に伴う温暖化によって、海水面の上昇がおこり、おそらく縄文時代早期末から古代までの長期にわたり、入海、あるいは、湿地となっていたと考えられている。当時の海岸線と思われる福山、日差山山塊の南から東山裾には、矢部（奥田）貝塚、西尾貝塚、西岡貝塚など縄文時代中期から後期の貝塚がみられる。

一方、総社平野やその周辺では、旧高梁川・足守川の自然堤防である微高地が形成されつつあり、真壁遺跡から縄文時代早期の山形押型文土器が出土している。沖積平野へ集落の進出が本格化したのは、縄文時代後晩期からと考えられ、真壁遺跡、南溝手遺跡では、遺構・遺物が比較的多く検出されている。以後、弥生時代、古墳時代を通して、水田開発が進められ、しかも順調に進んだらしく、弥生時代中期後半から集落跡が急増し、特に足守川流域に高塚遺跡、津寺遺跡、足守加茂・矢部南向遺跡、川入・上東遺跡など大規模な集落が出現する。そして、周辺の見晴らしのよい低丘陵上に墓地が営まれる。第１図に示した範囲内に、弥生墳丘墓、土壙墓群、土器棺出土地を含めて18ケ所程みられる。中でも突出しているのは楯築弥生墳丘墓である。当時としては極めて巨大な墳丘をもち、木槨や排水溝を備えた主体部など従来に例をみないものである。これらを母体として古墳時代に入っても、この地方の中枢として注目すべき遺跡が生まれている。造山古墳、作山古墳は言うに及ばず、初期の横穴式石室をもつ千足古墳、鉄器制作の専業集落と考えられる窪木薬師遺跡、初期須恵器の窯跡である奥ケ谷窯跡、周囲の丘陵に作られた膨大な数の群集墳など、この地を特徴づけるものである。

このような吉備中枢部から海浜への交通路の一つとして、山手村から福山と狸岩山の中間の谷部、通称、水別れ峠を抜けて、倉敷市西坂へ出るルートが指摘されている。そのルート沿いには、初期須恵器を大量に出土した菅生小学校裏山遺跡や５世紀代と考えられる積石塚群をもつ狸岩山古墳群がある。また最近、西岡貝塚から続く丘陵上に古墳時代前期の全長80ｍに及ぶ前方後円墳、西岡行願院裏古墳が確認された。飛鳥時代から平安時代にかけては、多くの寺院が建立される。官衙関連遺構・遺物の検出された遺跡も多いが中でも菅生小学校裏山遺跡や、足守川の下流東岸に位置する川入遺跡は古代の海上交通を考える上で重要である。

山手村域についてみると大正池南岸で縄文時代早期の鍬形鏃と呼ばれる石鏃が採集され、天満遺跡では縄文時代中期の土器片２点が出土している。また今回調査の鎌戸原遺跡付近で、縄文後期の土器片が採集されている。弥生時代の遺跡には、天満遺跡があり、弥生時代後期から古墳時代にかけて竪穴住居53、掘立柱建物３、分銅形土製品や鳥形土製品が出土している。これらの遺跡は山際の緩斜面に立地している。古墳時代になると、山裾の尾根上や谷部に数多くの古墳が築かれている。大方、横穴式石室を蔵するが、低マウンドの群集墳や、箱式石棺を主体とするものもかなり含まれる。５世紀代と考えられる大形の古墳として、赤坂龍塚古墳、角力取山古墳、宿寺山古墳がある。飛鳥時代では末の奥窯跡が注目される。ここから出土した鬼瓦は飛鳥豊浦寺近くで出土したものと同笵といわれる。また宿寺山古墳周辺（宿廃寺）からも飛鳥時代の軒丸瓦が採集されている。白鳳期と考えられる道金山窯跡からは、「官」逆字の須恵器が出土している。



第１図　遺跡位置図
（1／250万）

○ 貝塚　● 弥生後期墓地　▲ 窯跡　□ 寺院　集落跡　古墳群

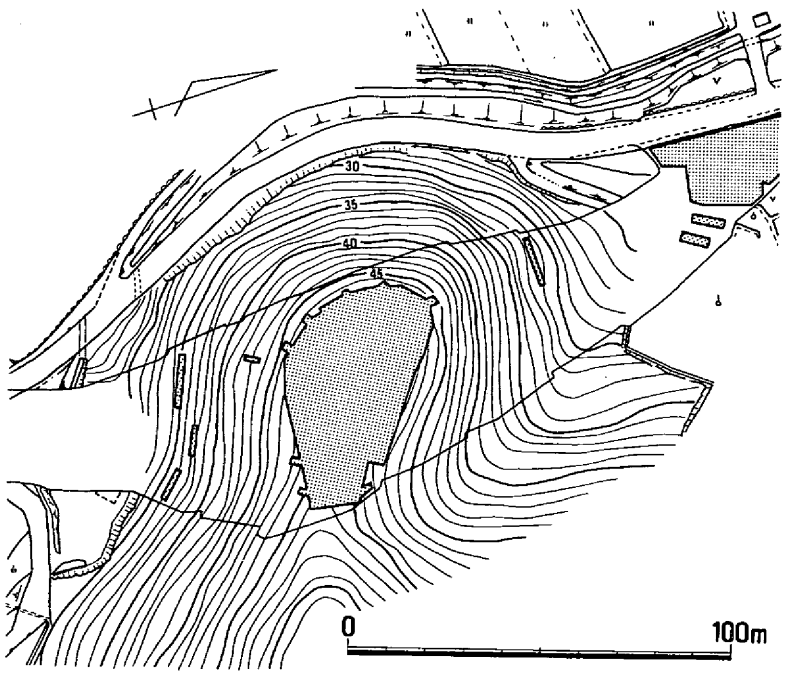
1．大正池南岸散布地
2．矢部貝塚
3．西岡貝塚
4．天満遺跡
5．真壁遺跡
6．南溝手遺跡
7．窪木遺跡
8．窪木薬師遺跡
9．高塚遺跡
10．津寺遺跡
11．政所遺跡
12．加茂Ａ遺跡
13．加茂Ｂ遺跡
14．矢部南向遺跡
15．上東遺跡
16．菅生小学校裏山遺跡
17．西山遺跡群弥生遺跡
18．宮山墳墓群
19．柳坪遺跡
20．岩屋遺跡
21．鋳物師谷１・２号墳墓
22．清音村三因の合口土器
23．津坂12号（土器棺墓）
24．上林土器棺墓
25．長良山遺跡
26．庚申山埋葬遺構
27．庚申山弥生墳墓
28．高塚山墳墓
29．甫崎天神山遺跡
30．雲山鳥打弥生墳丘墓
31．鯉喰神社遺跡
32．楯築遺跡
33．男女岩遺跡
34．辻山田遺跡
35．千足古墳
36．宿寺山古墳
37．角力取山古墳
38．赤坂龍塚古墳
39．狸岩山古墳群
40．西岡行願院裏古墳
41．奥ケ谷窯跡
42．末ノ奥窯跡群
43．道金山窯跡
44．寺山廃寺

第２図　周辺遺跡分布図（1／5万）

第二章　前山遺跡の調査

第一節　調査の経過

前山遺跡の調査は鎌戸原遺跡に引き続き、平成５年６月16日から開始した。当初は、尾根の先端部と鞍部に在る古墳２基（旧名称・平山22・23号墳）の調査を主眼とした。表土除去、及び、尾根の横断トレンチの調査の結果、尾根先端頂上部には古墳は存在せず、そのかわり、土器棺（土器棺墓５）と土壙墓が確認され、この尾根上に、弥生時代後期の集団墓地の存在が判明した。土壙墓は、トレンチで検討したかぎり、墓壙が地山に達しており、地山上層の花崗岩風化土での墓壙検出が困難と考えられたので、地山上面で検出を行う。７月は、尾根鞍部の古墳（前山１号墳）の調査と並行し、尾根先端頂上部の掘り下げ、及び尾根斜面各所にトレンチを設定した。その結果、土壙墓群は、頂上部だけでなく斜面にもあり、しかも、尾根先端を取り囲むように南から西斜面にかけ、また、北東斜面にも列をなしていること、さらに、南斜面の東端に、古墳時代の土壙墓１基と尾根鞍部に葺石をもつ古墳（前山２号墳）が確認された。８月には、一部、排土置場となっていた部分もあったが、人力にて調査区の拡張を行う。しかし、さらに斜面し下方に土壙墓群の存在が明らかとなり、トレンチを伸ばし、さらに下方へ土壙墓が存在しないことを確認し、８月31日で、他事業との調整により調査を一時中断した。11月１日から調査を再開。調査区を再び拡張するため、重機にて排土移動を行った。平成６年１月から調査員１名を増員し、１月中頃には、ほぼ掘り下げを伴う調査を終了したが、その後、遺構実測に１月を要し、２月15日をもって、すべての調査を終了した。また、尾根先端部に岩盤が崖となって露出しており、祭祀遺構を想定したが、調査の結果、存在せず、また、尾根山裾の地形、及び、鎌戸原遺跡と隣接することから、窯跡を想定したがトレンチ調査の結果、存在しないことが確認された。



第１図　調査区配置図（1／2,000）

日　誌　抄

平成５年

６月16日　調査開始

８月31日　一時、調査中断

11月１日　調査再開

平成６年

１月13日　埋蔵文化財専門委員会開催

２月15日　調査終了

第二節　調　査　報　告

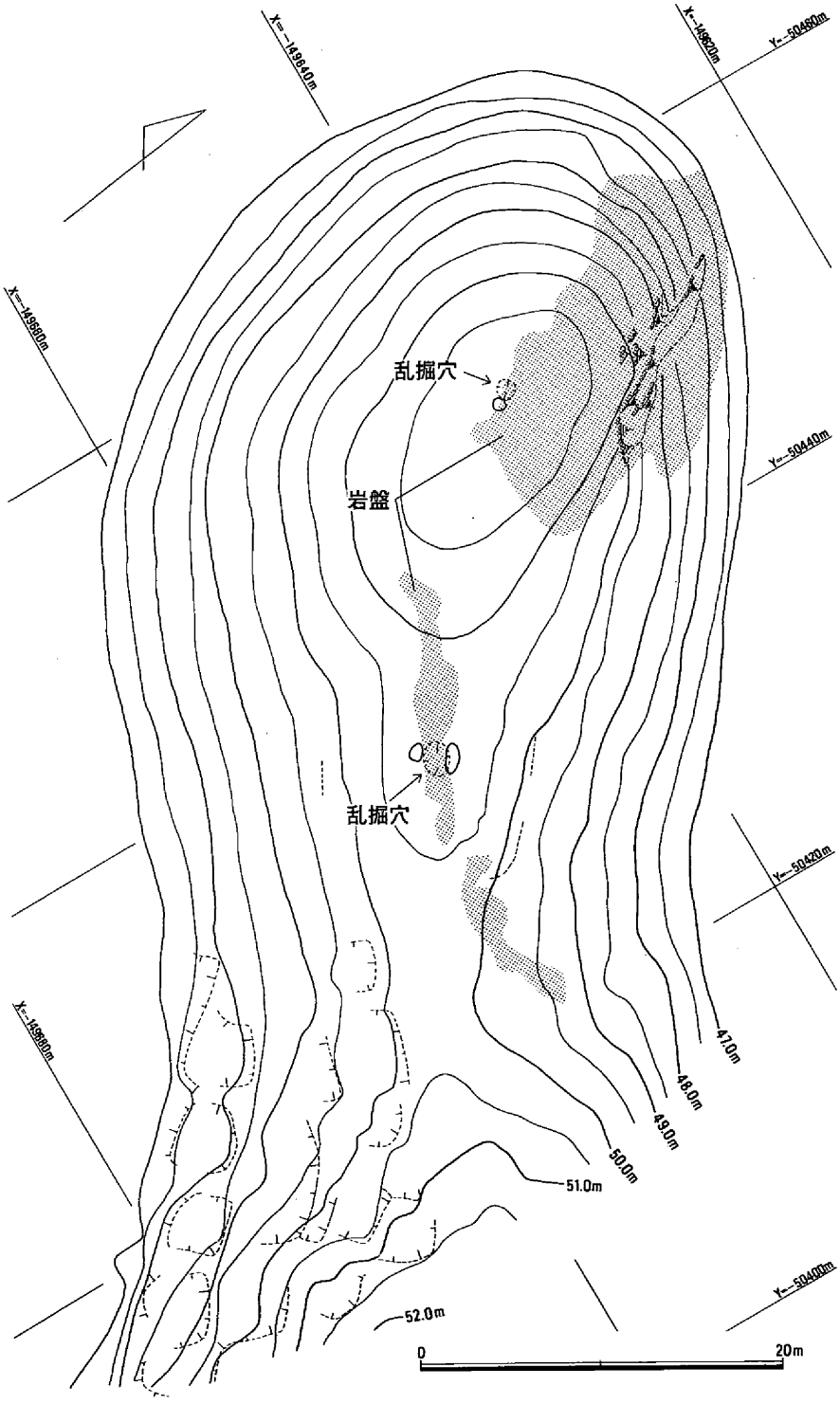
1．遺跡の立地及び概要

総社平野の南縁に位置する福山・仕手倉山を始めとする山塊のほぼ中央に、平野に向って扇形に開く谷がある。前山遺跡は、この谷に向け、北西に突出する標高50ｍ前後の尾根上に立地する。

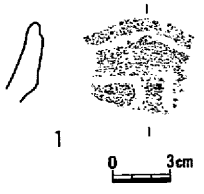
この尾根は花崗岩で形成され、先端部では岩盤が露出し、北側は崖になっている。また石英の岩脈が尾根筋に背骨のように通っている。

遺構は弥生時代後期と古墳時代中期の２時期に大別される。前者は、土壙墓（木棺墓を含む）、土器棺墓、箱式石棺墓など総数141基と、溝で区画された墓１基（以下区画墓とする）で構成される墓地であり、尾根先端部を中心に頂上部から斜面にかけて広がる。後者には、方墳２基と土壙墓１基があり、尾根の鞍部から南斜面にかけて所在する。その他は表土中より縄文後期の土器片（第３図）が僅かに１片出土したのみである。

以下、各説する。

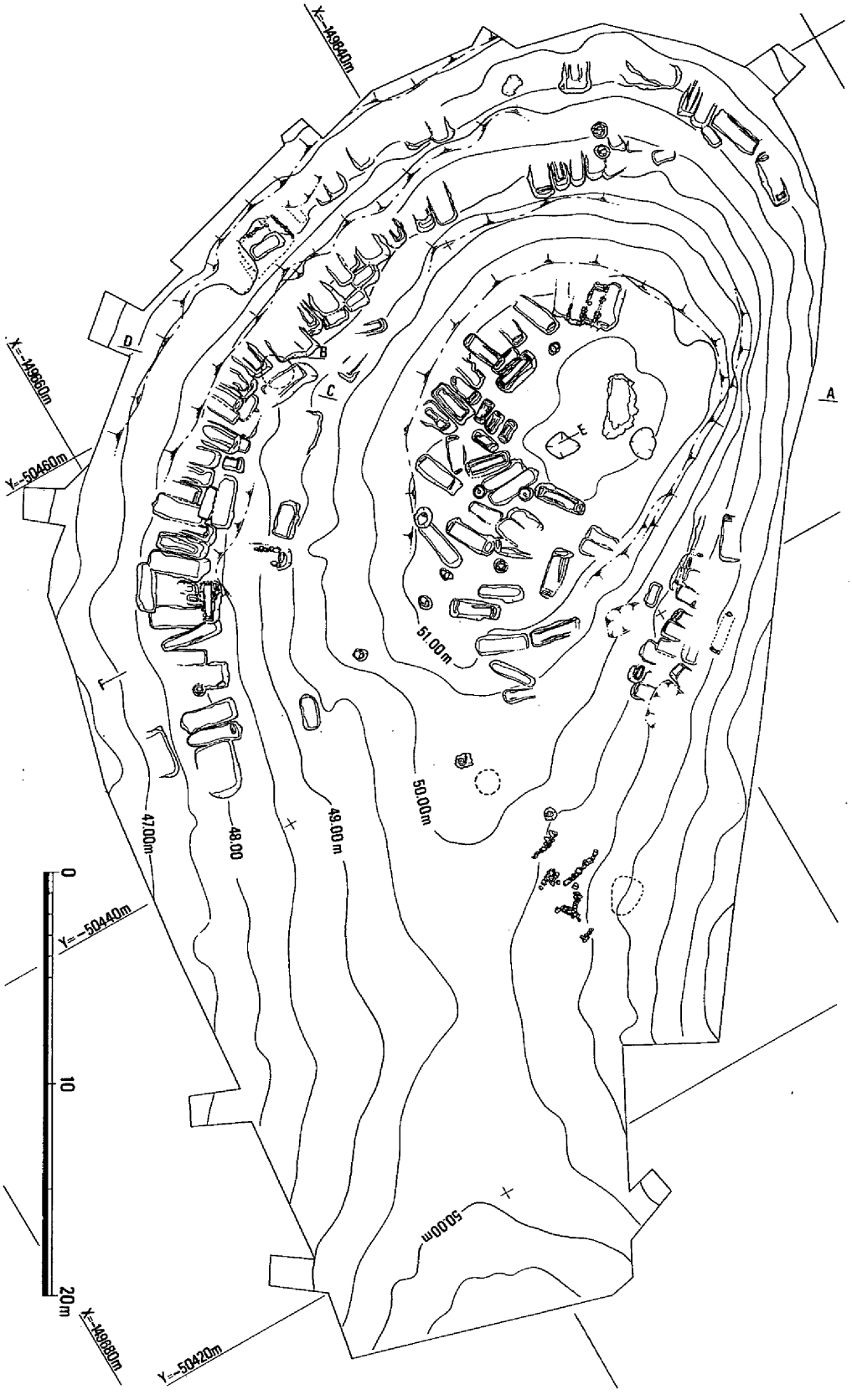


第２図　調査前地形図（1／400）

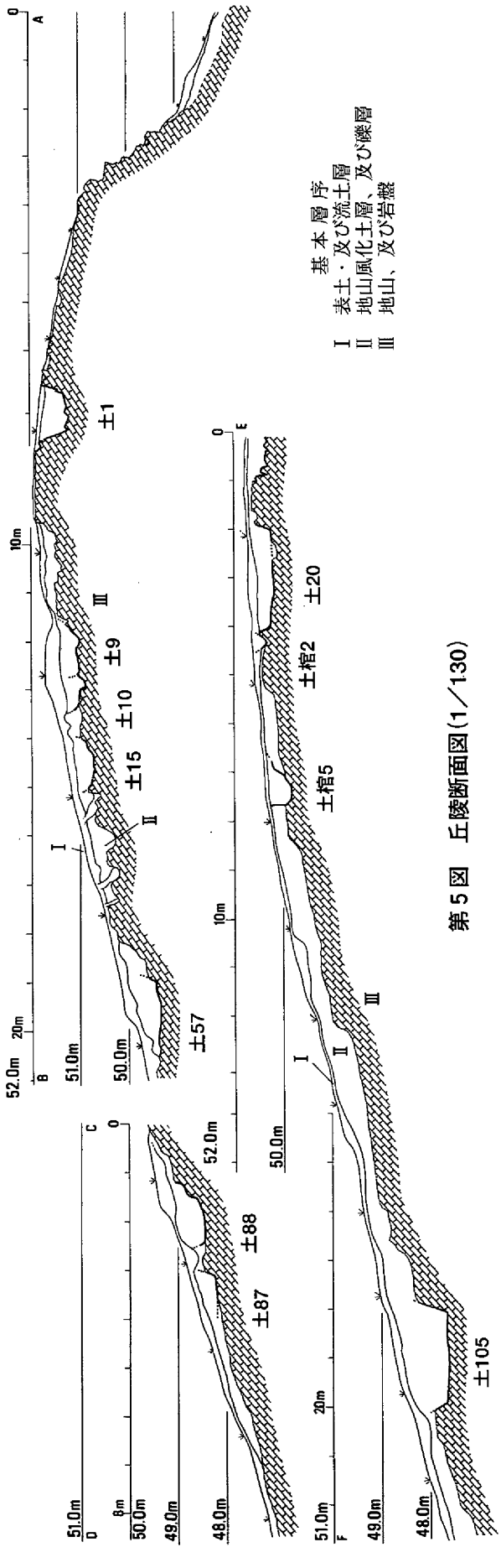


第３図　縄文土器（1／4）

2．弥生時代後期の遺構・遺物



第４図　弥生時代後期遺構配置図（時期不明の遺構も含む）（1／300）



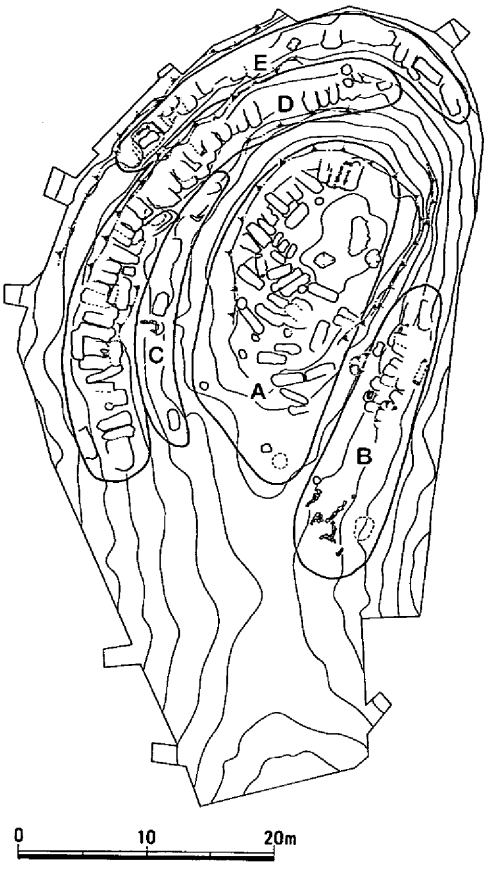
第5図　丘陵断面図(1／130)

(1)　概　要

埋葬遺構と考えられるものに、区画墓１基、土壙墓125基、土器棺墓14基、箱式石棺墓２基がある。これらの墓は、尾根が一旦浅い鞍部をつくり先端部で高まる。その尾根先端部頂上の緩斜面、及び、尾根先端部をぐるりと取り囲むように南～西～北～北東斜面にかけて密集して作られている。特に、南～西～北斜面では、ほぼ等高線に沿って階段状に墓が列をなしている。尾根鞍部を越えて山側上方では遺構、遺物とも皆無である。墓の総数は142基だが、遺構が地山風化土内におさまっていて検出し得なかったものが幾つかあると考えている。また、特に土器棺墓など流出してしまったものもある可能性があるが、それらを見積もっても150基を大きく越えるものではないだろう。

墓以外の遺構としては、石材抜き取り跡かと思われる穴が頂上部に２ケ所、北西斜面に１ケ所みられる。これらは岩盤の一部を割って抜き取ったように岩盤が不自然に窪んでいるものである。また、土器溜りが西斜面と東北斜面に各１ケ所、性格不明の石列群が東北斜面にある。

これら遺構上全域の流土中より、墓に供献されたと考えられる土器が破片となって多数出土した。時期は弥生時代後期の中におさまると思われる。確実に遺構に伴う土器は、土器棺を除いて土壙墓14の墓壙内に配置された大形の鉢片のみである。土壙墓、区画墓の時期は土器棺墓との切り合いなども考えあわせると、これらの土器の時期､弥生時代後期と考えて間違いない。箱式石棺墓２基は、それぞれ土壙墓を切って作られているが、土壙墓群中に位置していると思われ、弥生時代後期と考えてよいのではなかろうか。石材抜き取り跡かと考えられる穴も同様であるが、もし石材を採取したのであれば、第３項で記述する前山１、２号墳の箱式石棺、２号墳の葺石に使用された可能性もある。石列群は土層より前山１号墳築造以前である。



第６図　群分け図（1／600）

便宜上、遺構の群分けを行う。頂上部から斜面にかけて階段状に列をなすという土壙墓の特徴的な立地を特に考慮し、以下のように分ける（第６図）。

・Ａ群－尾根先端部頂上部から鞍部にかけての比較的平坦な場所に位置するもの
・Ｂ群－北東斜面に位置するもの
・Ｃ群－南～西斜面に在り、標高49ｍ付近に位置するもの
・Ｄ群－南～西～北斜面にかけて在り、標高48ｍ付近に位置するもの
・Ｅ群－西～北斜面にかけて在り、標高47ｍ付近に位置するもの

以下Ａ～Ｅ群ごとに遺構を各説する。ただし、土壙墓については数が多く、紙面の都合もあり、群単位で概要を示したのち、個々の説明は特徴のあるもののみとする。また土器溜まりの土器については「(7)**土器**」のところで説明する。土壙墓個々の計測値は第１表にて掲載。

(2)　**Ａ群**（第７図）

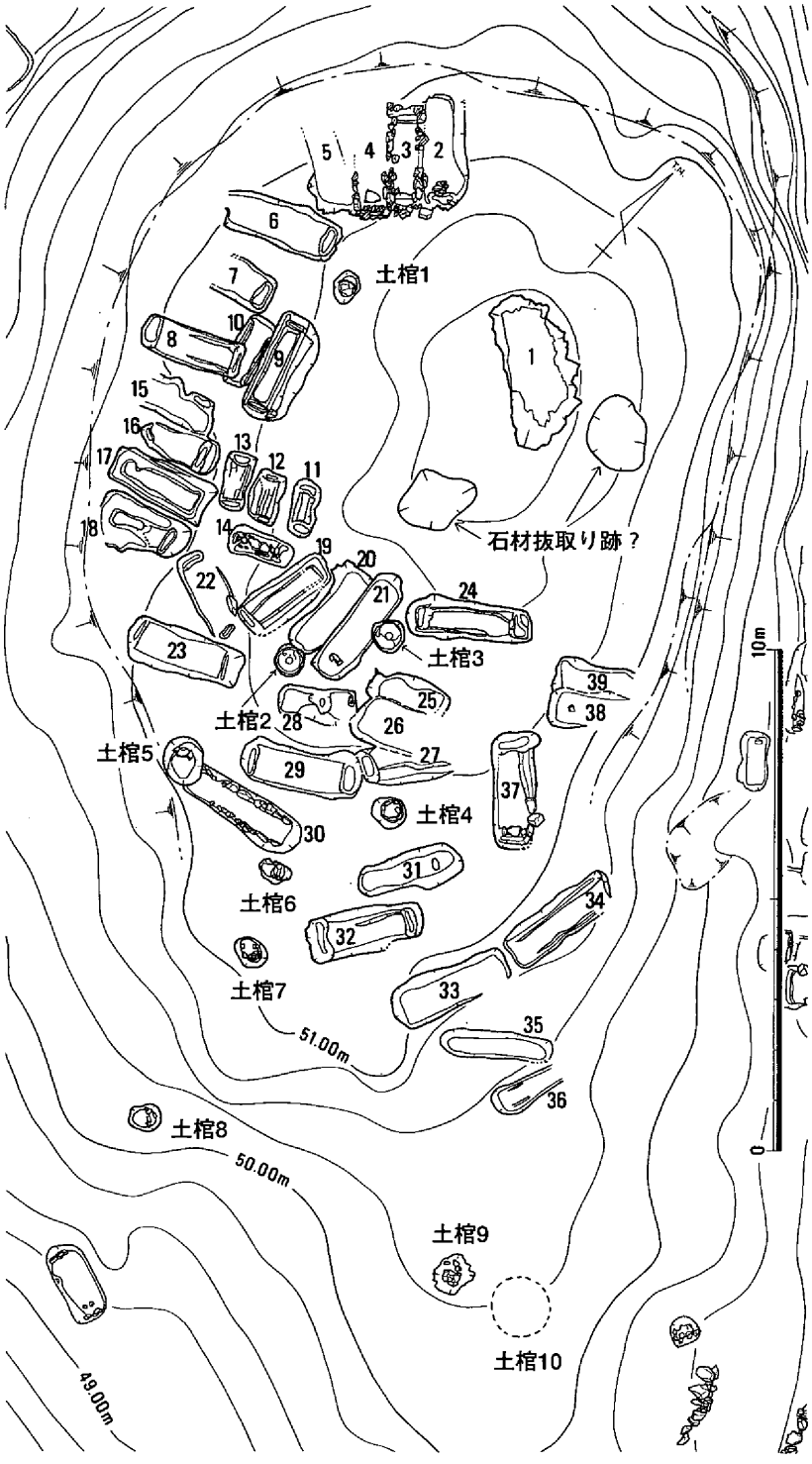
尾根先端頂上部から鞍部にかけての緩斜面に所在する一群である。頂上部でも最高所はやや北にあり、この部分は岩盤が露出している。岩盤は北側で崖となる。この岩盤が土中に沈み込むあたりを境にして、墓群は露岩を取り囲むように北西～西～南～南東にかけて広がりをみせる。土壙墓39基、土器棺墓10基、石材抜き取り跡かと思われる穴２ケ所が検出された。土壙墓、土器棺墓とも密集して作られている。切り合いは、土壙墓26と27を除いてわずかに墓壙の一部を掘り込む程度である。土壙墓と切り合う土器棺墓はすべて土壙墓を切っているが、わずかに墓壙の端を削るのみである。墓群からやや離れた位置にあるものもある。土壙墓１、土器棺墓８、土器棺墓９と10である。ただし、土器棺墓９・10周辺からは、かなり土器片が出土しており他に土壙墓が存在していた可能性が高い。土壙墓１は頂上部最高所の岩盤中に位置する。隣接して墓が作られていない。意識的に空間があけられたのか、単に岩盤を避けた結果なのか、定かでない。

〈**土壙墓**〉

主軸　緩斜面ではあるが、等高線に平行あるいは直交、一部斜交して作られていると思われる。

規模　相対的にみると、墓壙床面長１ｍ前後、床面幅0.4ｍ前後の小形のものと、長2.1ｍ前後、幅0.6ｍ前後の大形のものとに分けられるが、その中間サイズのものも少々ある。土壙墓１は大形のものの中でも最大規模である。Ａ群内で比べると、床面幅では他の土壙墓より30㎝大きい。Ａ～Ｅ群全体で比べると、それほど差はなくなる。

小グループ　群内でも土壙墓どうしが相互に意識され、規則的に配置されていると考えられるものがある。明瞭なものとして、４基並列する土壙墓２・３・４・５と、15・16・17・18、３基が並列する土壙墓11・12・13、これは土壙墓14も加えて４基でまとまるのかもしれない。２基が並列する土壙



第７図　A群・遺構配置図

墓20・21と、39・38、２基が直列する土壙墓33・34などがある。特に土壙墓11・12・13は小形の土壙墓のみが並列しており、他の群ではみられない。

木棺の痕跡　木棺の痕跡を検出できたものはない。が、小口溝、側板溝をもつものや、木棺と墓壙壁とのすき間に詰めたと考えられる石が平行して並ぶものなどから、木棺の存在とその規模を推定できる。

墓壙床の形状　A～E群を合わせてみると、大きく分けて、①小口溝、側板溝を有するもの、②床面小口部や床面周囲に僅かに段差を有するもの。③床面中央部が、浅くだらだらと窪むもの、④平らなものの４種類ある。①については小口溝・側板溝の両方もつもの、どちらかのみのもの、小口溝・側板溝とも両側にもつもの、片側のみのものなど多様であるが、ここでは一括する。また①と③は重複する場合がある。（第１表参照）A群では②以外の３種類がある。①25基(64%)、③３基（８%)、④14基（36%）である。先にあげた小グループと考えられるものの中でも床面形状の異なるものが隣合う場合がある。逆に土壙墓11・12・13は、規則的に並列し、３基とも小形であり、両小口溝をもち、さらに床面中程度がゆるく窪むという共通性をもつ。A群の特徴として、①の小口溝・側板溝を有する土壙墓の割合が他群に比べ特に多いことが挙げられる。

副葬品　鉄鏃１点のみである。土壙墓23の墓壙底面から10cm程浮いた位置に無茎式鉄鏃（第14図、M１）１点が副葬されていた。最大長31.5㎜、最大幅20.7㎜、最大厚1.8㎜、重量2.03ｇ。

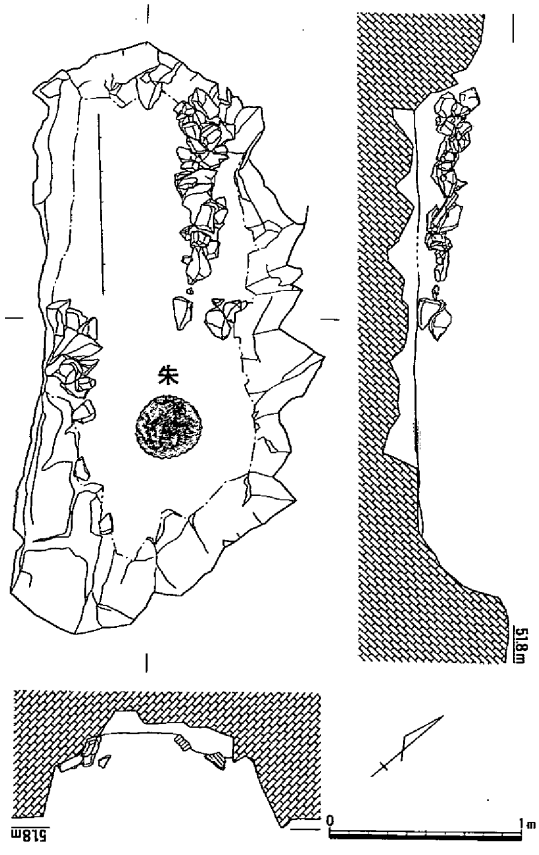
赤色顔料　土壙墓１・９・16・23の４基において検出された。検出位置は床面付近で、どちらかの小口側に片寄っている。30×30cm程の範囲内にぼんやりと赤味を帯びた部分があった。その土を採取し、鑑定分析を依頼した（第四章第四節）結果、水銀朱粒が土の中に混じっていることが確認された。水銀朱が層をなしているというものではない。この赤味を帯びた土の部分にのみ水銀朱が存在するのか、赤味を帯びていなかった他の部分にも水銀朱がわずかでも存在するのかどうかは不明である。床面各所で土をサンプルすべきであった。

石枕　石材の位置と配置状況から石枕を作り付けていると考えられる土壙墓は、４・19・21・24・37・38の６基であり、可能性のあるものは土壙墓31・39である。石枕に使用する石材の数は１個使用するもの、２個使用するもの３個使用するものの３種類あり、A群では１個使用するものが多いという特徴がある。石材の大きさは多様である。

その他　墓の目印として機能したのもではないかもと思われる石が検出された土壙が２例ある。土壙墓２には集石がみられた。集石は埋土中で検出され、中央部に落ち込んだような状況であった。集石の位置はちょうど墓壙主軸上の南東よりにあたる。５個以上の石があり、それぞれ密着しているが重なりあって２段になっていない。きれいに並べたというふうではない。土壙墓18では30～40cm大の石が床面近くまで落ち込んでいた。位置は墓壙主軸の東よりである。たまたま付近の石が流れ込んだとは考えにくかった。

土壙墓１（第８図）

岩盤の裂け目を利用し、岩を割り抜き取って墓壙としている。南西側墓壙壁がその裂け目にあたる。墓壙底は岩を抜き取った凸凹が著しく、明黄褐色土（2.5YR6／6）を敷いて平らにしている。墓壙内南西側及び北東側で部分的に列石がみられた。これは、木棺と墓壙壁間に詰めたものと考えられる。また、ほぼ床面上で平面観察において西側に、土の硬い部分と軟らかい土の部分の差が線状に検出された。詰めたと考えられる列石との関係から木棺側板を反映していると思われ、木棺幅40cm強と推定される。床面南東側には水銀朱により赤味を帯びた土の部分がある。出土遺物は無い。



第８図　土壙墓１（1／40）

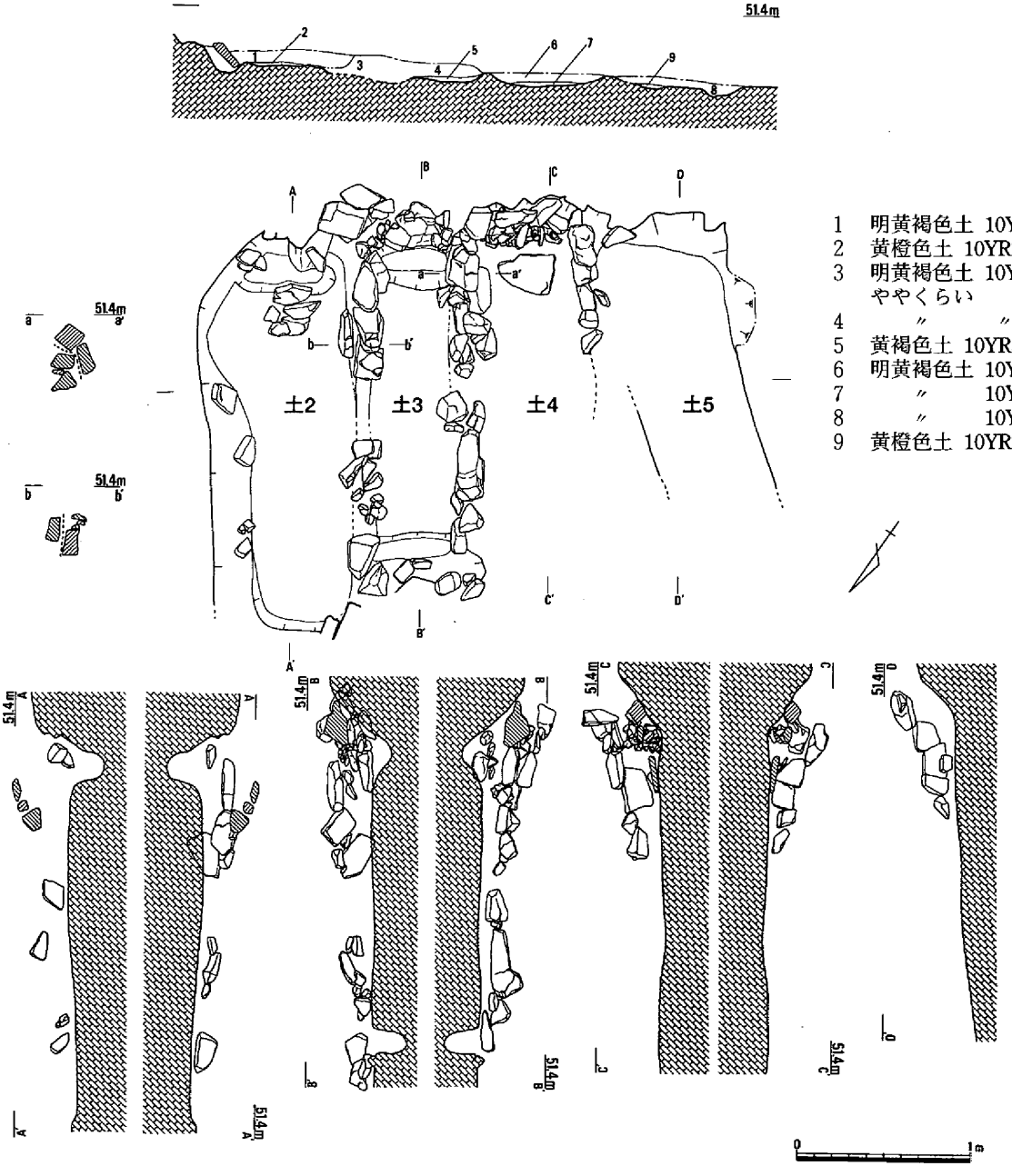
土壙墓２・３・４・５（第９図）

尾根頂上北西端部に位置する。４基の土壙墓が整然と並列する。４基とも墓壙上半及び、斜面側の大半が流出している。また４基とも南東側小口部は岩盤を削り込んでおり、墓壙底には黄色っぽい土を敷いている。土壙墓どうしの前後関係は、土の違いでは判別困難であったが、幸い木棺の周囲に詰めたと考えられる石が部分的に残っており、それらが重複している状況がみられた。その重なり具合を検討するに土壙墓４が土壙墓３を切っている。また、土壙墓を土壙墓の隣に作る際、

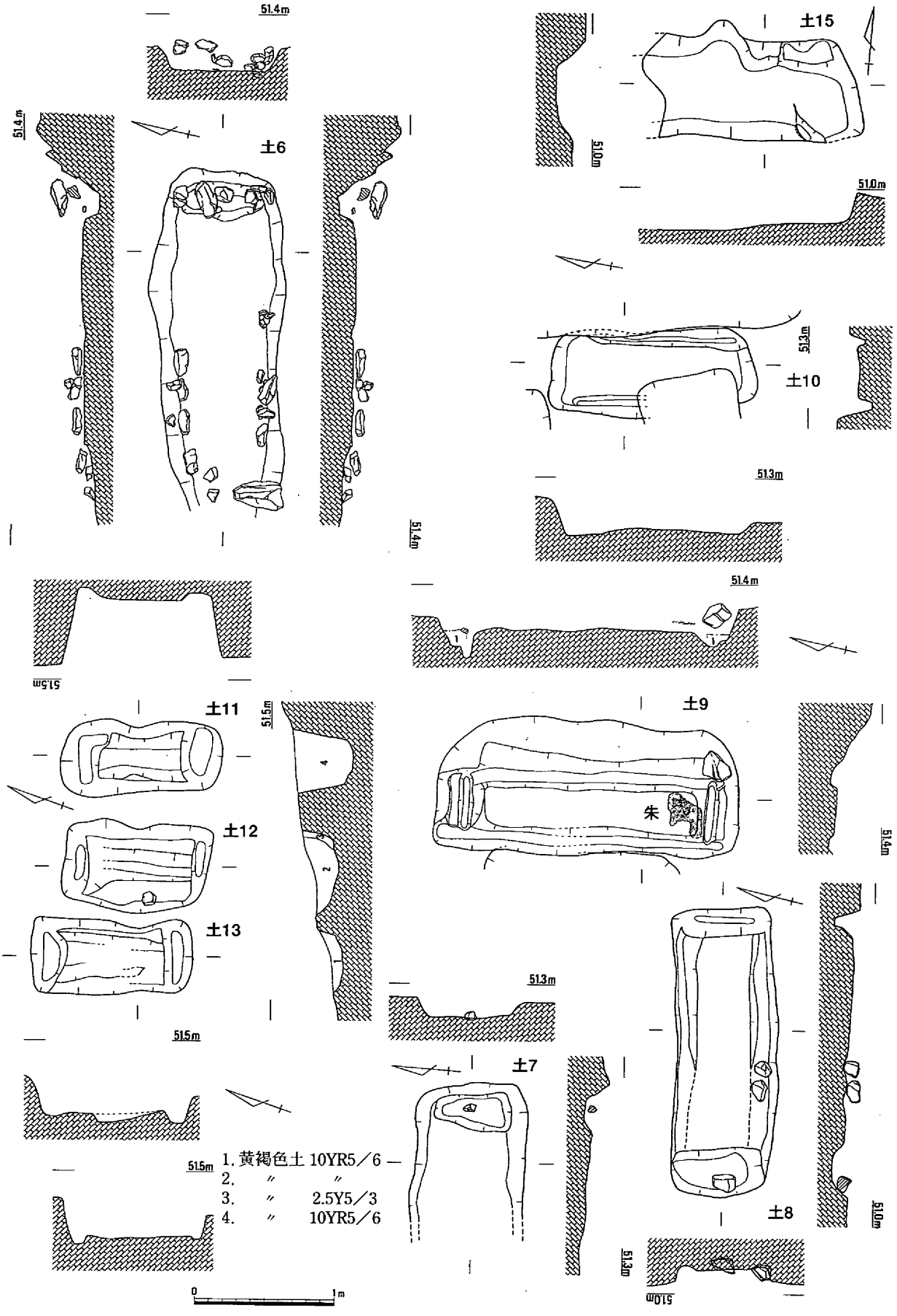
その墓壙壁に隣りの土壙墓の詰める石が露出した状態であったと考えられる。土壙墓４の枕石は30×20cm、厚さ４cm前後の薄い板石である。

土壙墓14（第11、12図）

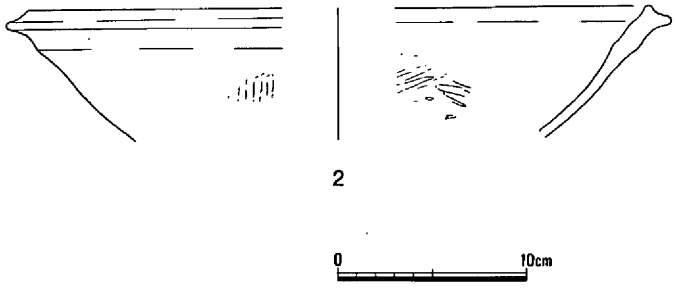
尾根頂上南部に位置する。小形の土壙墓である。墓壙内に板石と大形の鉢形土器の破片を組み合わせて配置している。両小口部には板石を横位に縦てて置き、その両石間に大小５個の板石を貼ったように並べている。その両端の板石は墓壙中央部に向け、傾斜している。これらの石材の両サイドには、主に土器片を立てかけて囲うように配置している。墓壙床面両小口部に小口溝状の浅い溝がみられる。木棺を想定すると、これらの石、土器片とどのような関係になるのか明らかに出来なかった。墓壙中央部の比較的大きな２個の板石は全く水平であり、木棺の腐朽に伴い落ち込んだ状態ではないように思われる。鉢形土器片は同一個体であるが、口縁部の一部と胴部下半及び底部を欠落する。口縁部はほぼ直線的に伸び、端部を僅かに上方へつまみ出す。時期は後期中葉と考えられる。



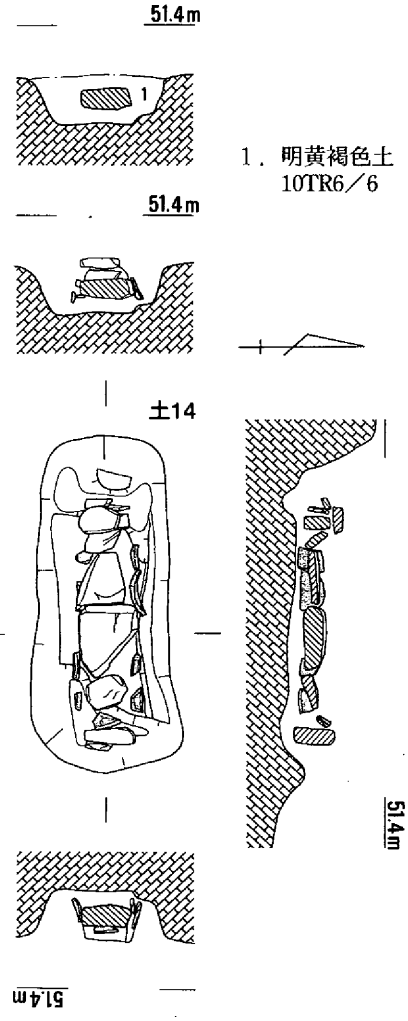
第９図　土壙墓２～５（1／40）



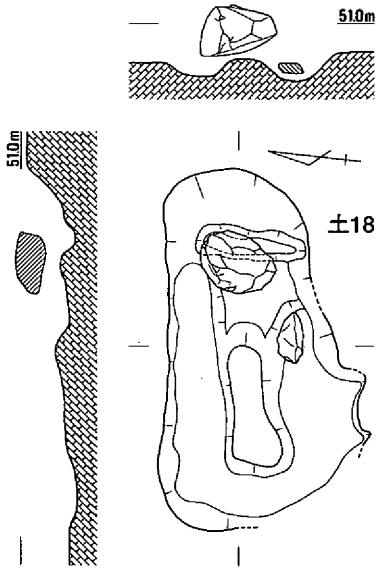
第10図　土壙墓6～13・15（1／40）

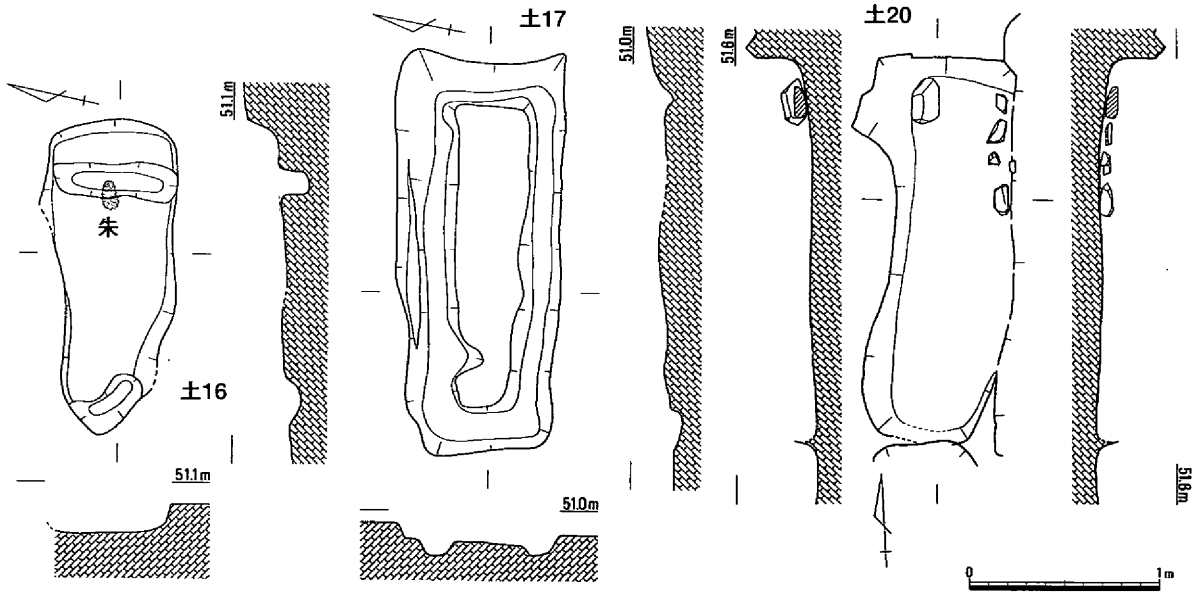


第12図　土壙墓14出土遺物（1／6）

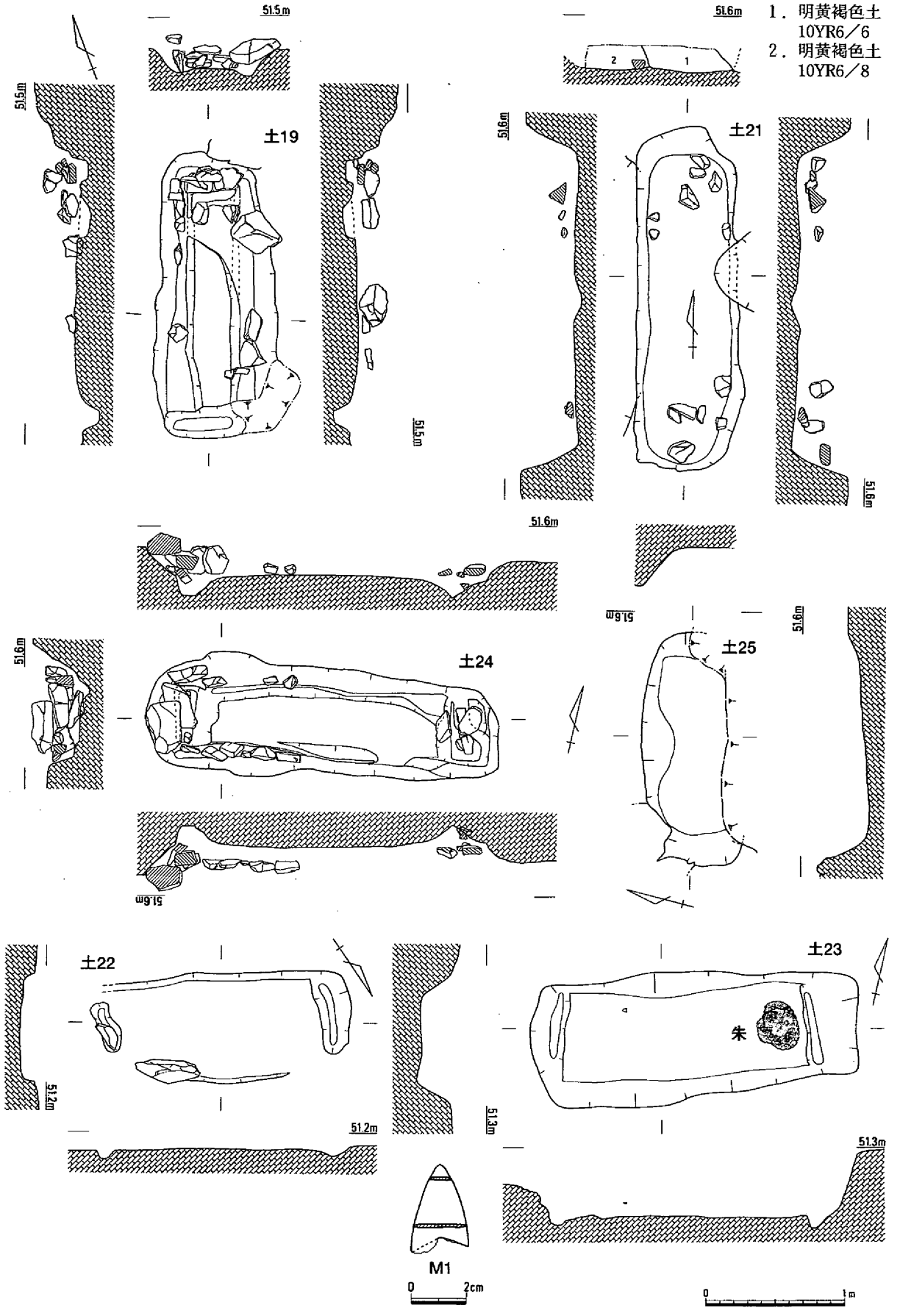


第11図　土壙墓14（1／30）

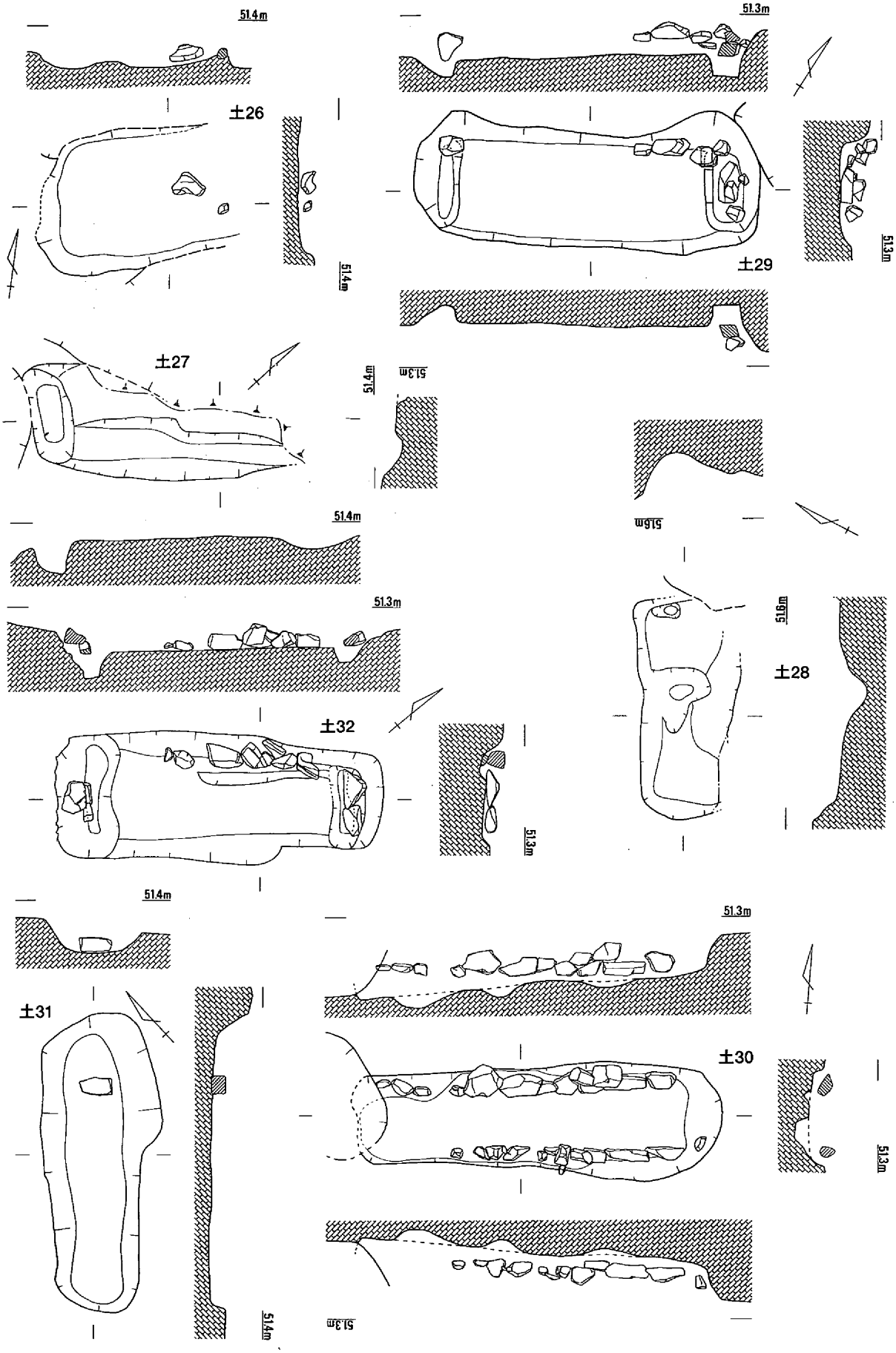




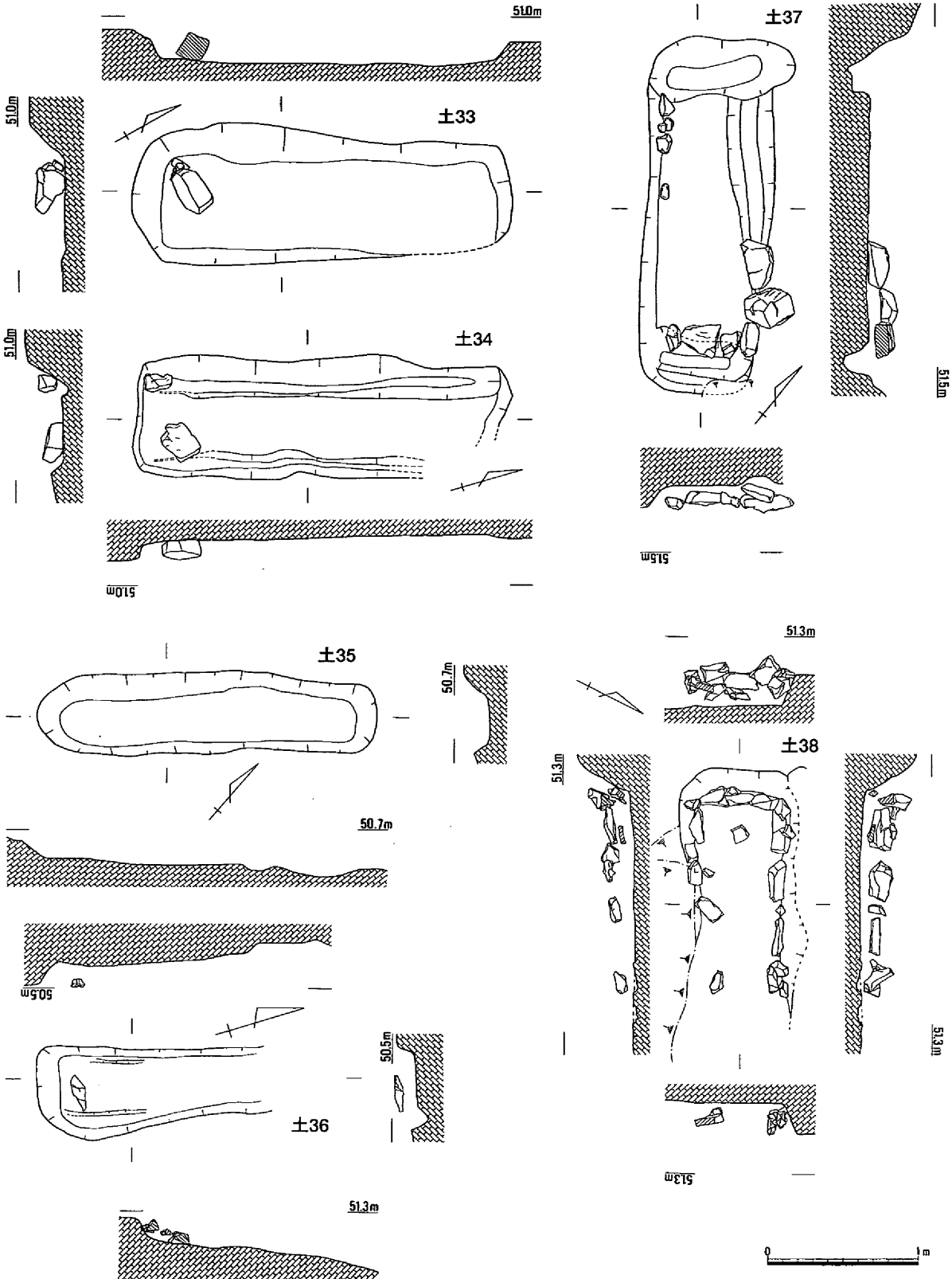
第13図　土壙墓16～18・20（1／40）



第14図　土壙墓19・21～25（1／40）及び、土壙墓23出土遺物（1／2）



第15図　土壙墓26～32（1／40）



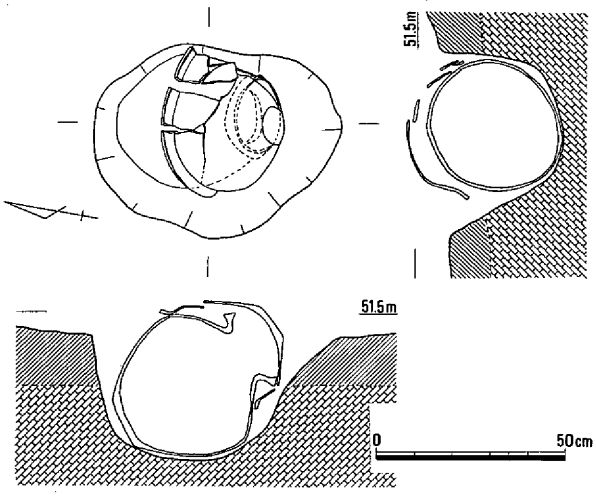
第16図　土壙墓33～39（1／40）

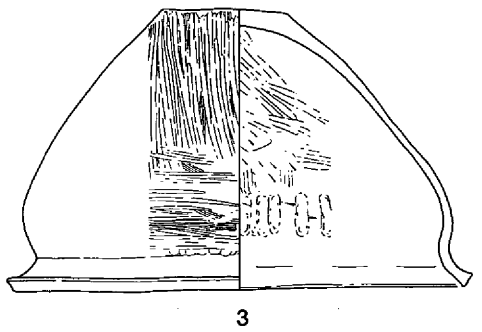
〈**土器棺墓**〉（第２表参照）

Ａ群には10基の土器棺墓がある。時期は後期前葉から中葉の中におさまる。すべて黄褐色、黄橙色を呈する。土器棺内堆積土の底面から５㎝程をすべて水洗したが、酸性土壌のためか検出物はない。

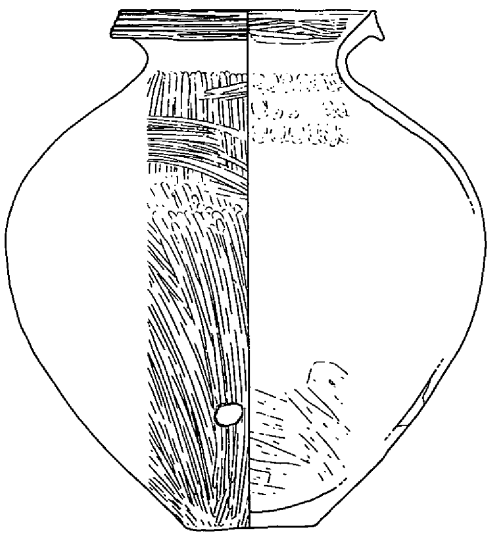
土器棺墓１（第17図）Ａ群の西部に位置する。棺身の壺は口縁部が斜め上方を向くように設置され、その口縁部を大形の鉢ですっぽり覆って蓋をしている。壺胴部下半に外からの径２㎝程の穿孔がある。壺の埋設状態で穿孔は最低底面に位置していた。壺の頸部内法は14×15㎝。**鉢３**は口径35.6㎝、底径9.8㎝。口縁部はあまり肥厚せず、端部を僅かにつまみ出す。**壺４**はよく張った胴部をもつ。口縁端面には螺旋のヘラ描沈線がみられる。口径20.0㎝、胴部最大径38.1㎝、器高41.0㎝。

土器棺墓２（第18図）墓壙は土壙墓20を僅かに切っている。棺として大形の鉢を床面に直接伏せて使用している。穿孔はない。鉢の内法は内径43㎝、内高25.5㎝。**鉢５**は、屈曲して開く口縁部をもつ。口縁部は肥厚し、端面に雑な凹線３条を施す。調整は内外面とも、ヘラケズリの

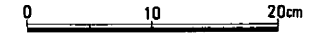




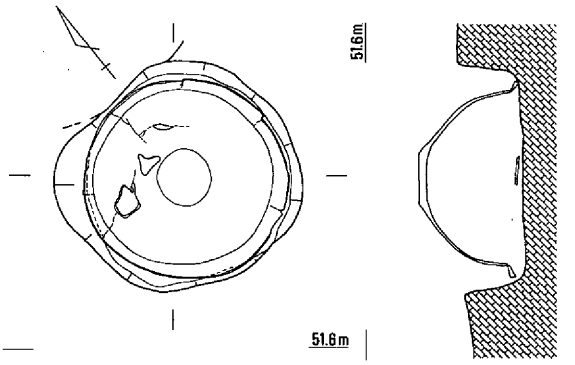
3

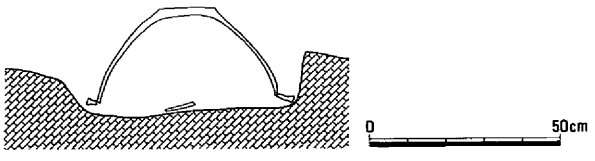


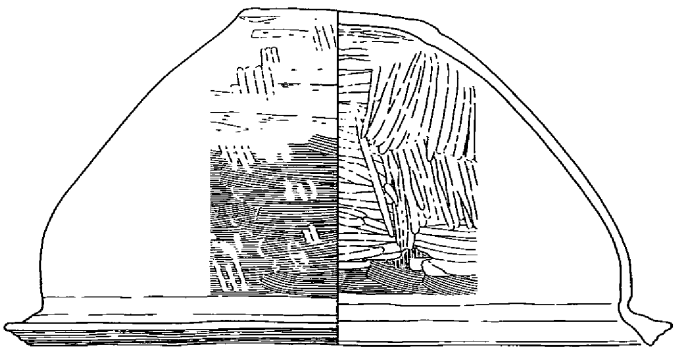
4



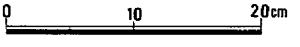
第17図　土器棺墓１　上：遺構、下：土器



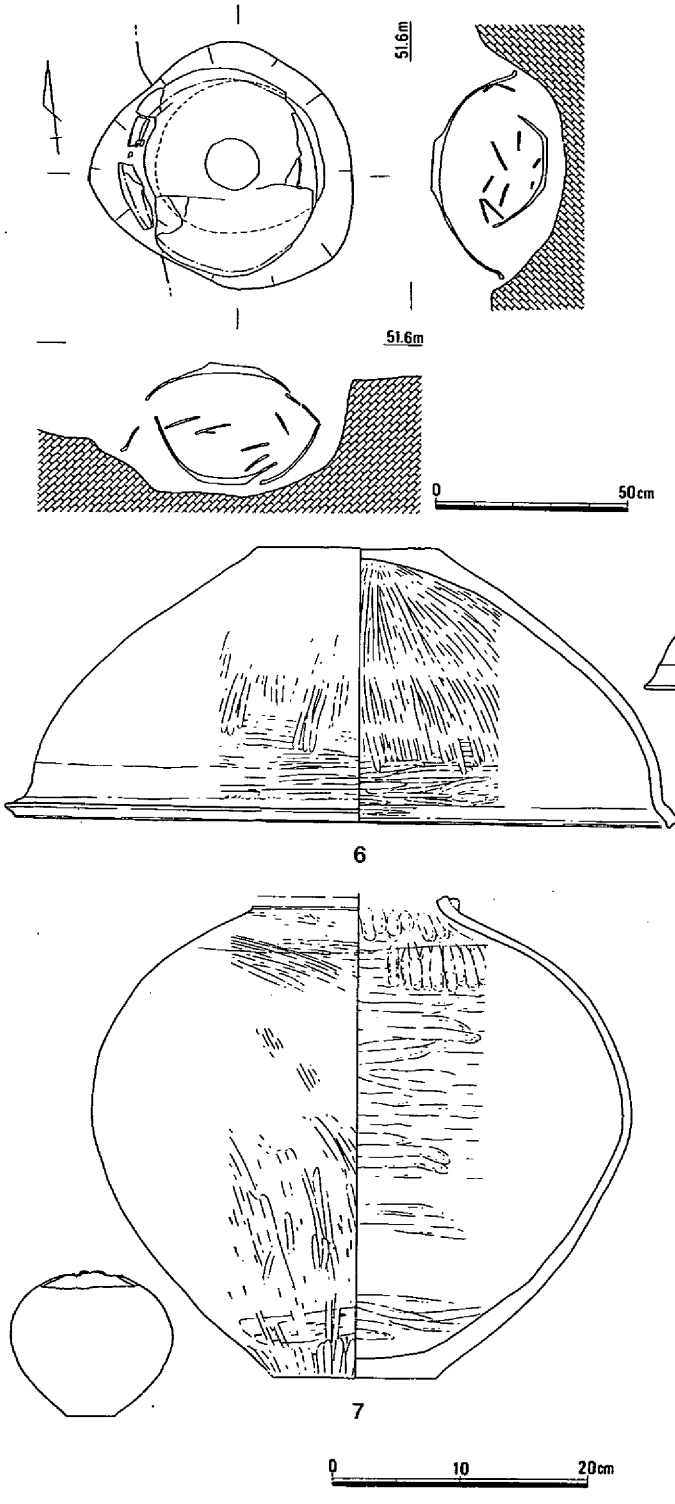




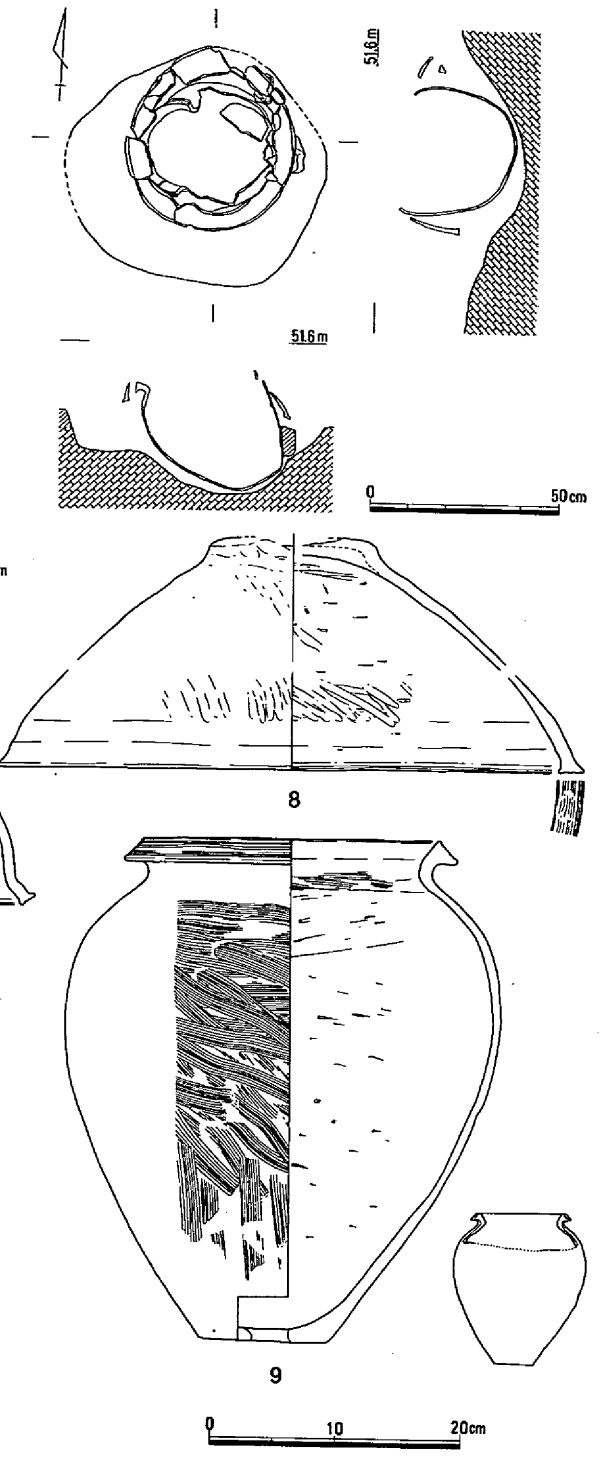
5



第18図　土器棺墓２　上：遺構、下：土器



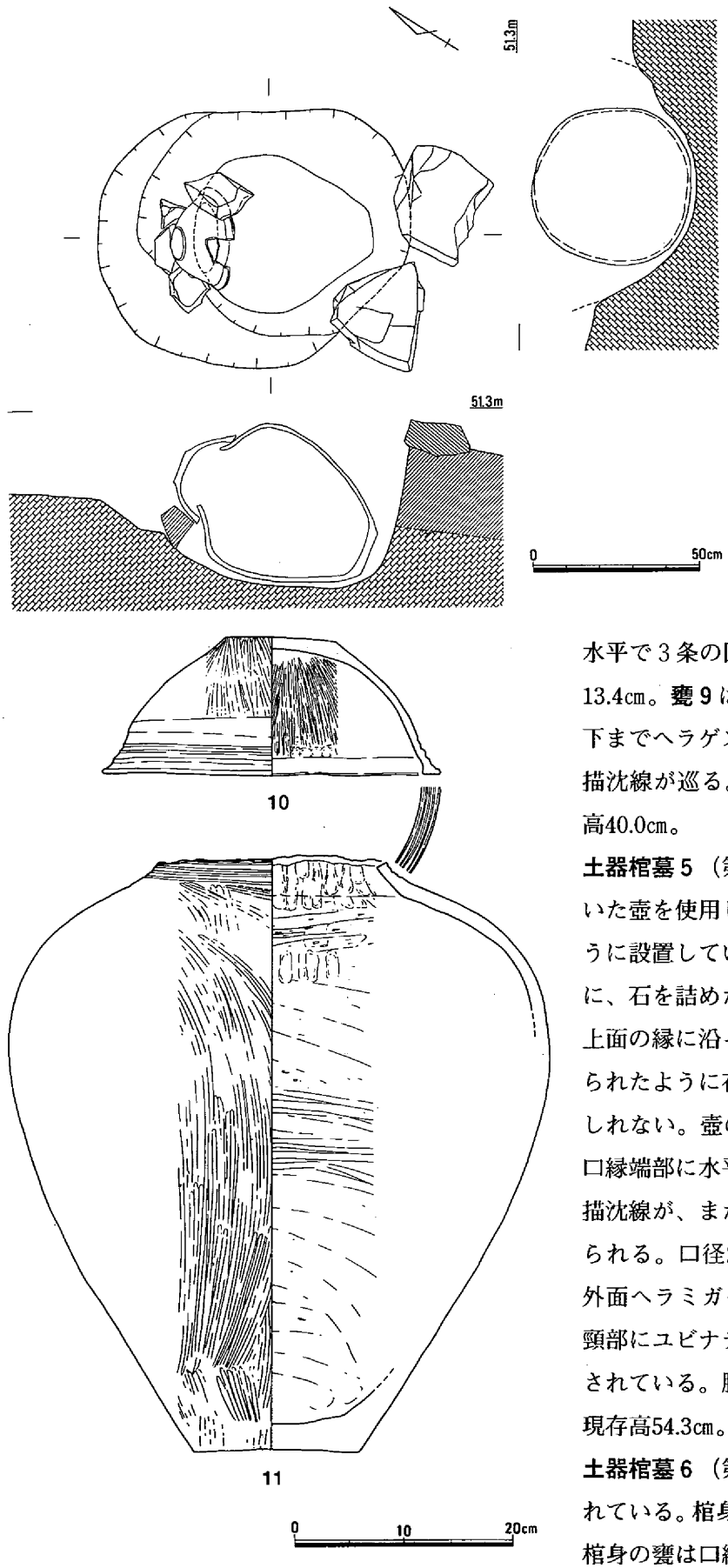
第19図　土器棺墓３
上：遺構、下：土器、左下：打欠き模式図



第20図　土器棺墓４
上：遺構、下：土器、
右下：打欠き模式図

ちハケメのちヘラミガキで丁寧である。口径48.8cm、底径14.1cm、器高26.5cm。

土器棺墓３（第19図）土壙墓21を切って作られている。棺身の壺を墓壙内に直立させて置き、棺蓋の鉢を真上から被せる。壺は口頸部と肩部の一部を打ち欠いており、径22cm前後に広げている。**鉢６**は口縁部が屈曲して開き端部を拡張させる。口径51cm、器高21.9cm。**壺７**は大きく張った胴部をもつ。



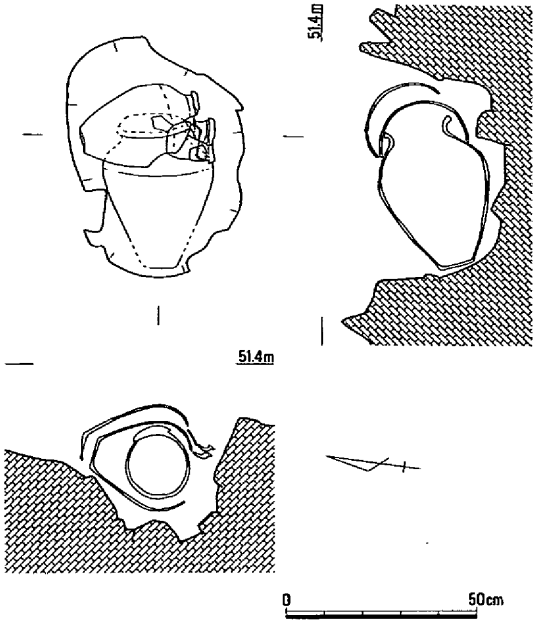
第21図　土器棺墓５　上：遺構、下：土器

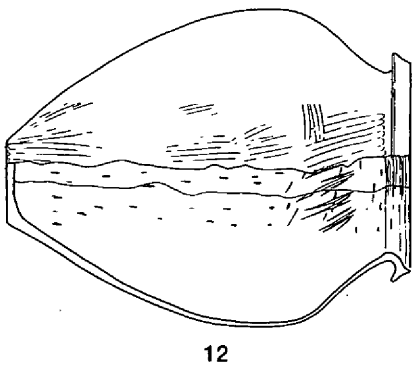
頸部下端に突帯１条を貼り付けている。内面にユビナデが目立つ。胴部最大径42.3cm、底径12.7cm。

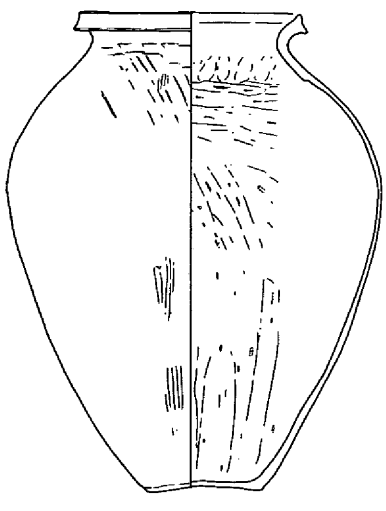
土器棺墓４（第20図）棺身の甕は口縁～肩部を1／3ほど打ち欠き、約25×19cmに口を広げている。この口の部分を真上にくるように甕を設置している。甕の底部中央に３cm大の外からの穿孔がある。棺蓋の鉢は真上からかぶせている。**鉢８**は口縁部に屈曲をもたず、肥厚しながら伸びる。端面は水平で３条の凹線がある。口径46.3cm、底径13.4cm。**甕９**は外面をハケメ、内面を頸部直下までヘラゲズリで、口縁端面に４条のヘラ描沈線が巡る。口径23.4cm、底径10.1cm、器高40.0cm。

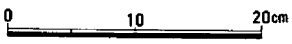
土器棺墓５（第21図）棺身に口頸部を打ち欠いた壺を使用し、その口がやや上方にくるように設置している。棺蓋の鉢を固定するために、石を詰めたり押さえたりしている。墓壙上面の縁に沿って板石が２枚、あたかも並べられたように存在したが、基盤層中の石かもしれない。壺の打ち欠き内径19cm。**鉢10**は、口縁端部に水平面をもち、そこに３条のヘラ描沈線が、また口縁部外面に３条の凹線がみられる。口径28.5cm、器高12.7cm。**壺11**は、外面ヘラミガキ、内面肩部までヘラケズリ、頸部にユビナデ、頸部外面にヘラ描沈線が施されている。胴部最大径49.5cm、底径15.1cm、現存高54.3cm。

土器棺墓６（第22図）墓壙は岩盤に掘り込まれている。棺身、棺蓋とも甕を使用している。棺身の甕は口縁部がやや上方へ向くように設置され、棺蓋の甕は縦に真二つに割り、重ね

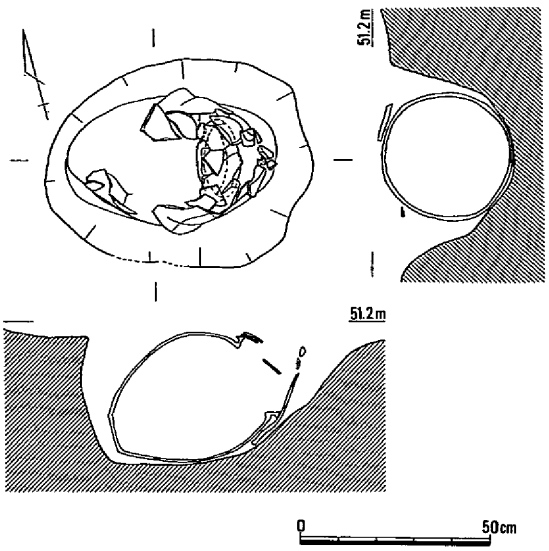


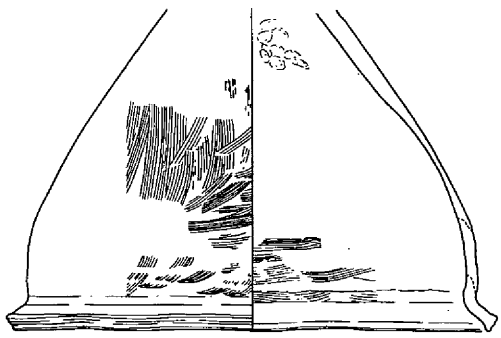


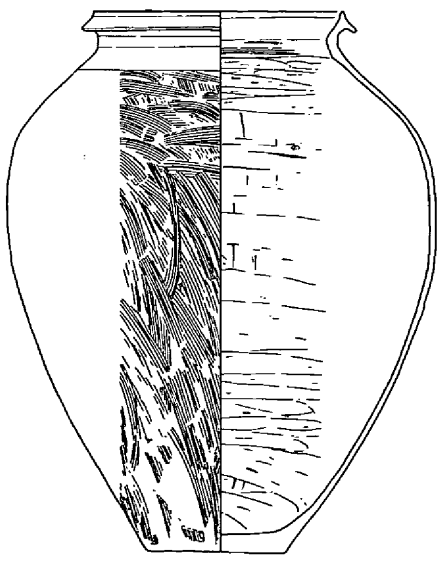


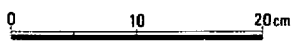


第22図　土器棺墓６　上：遺構、下：土器

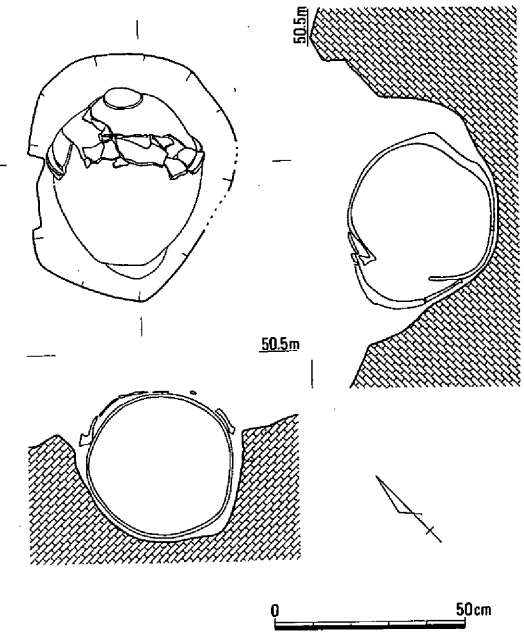


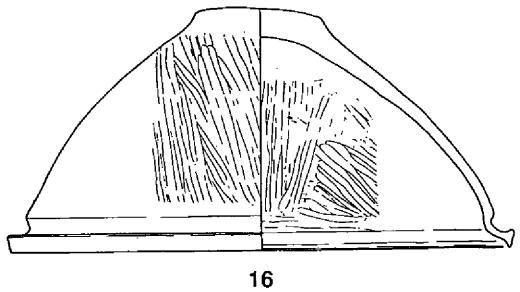


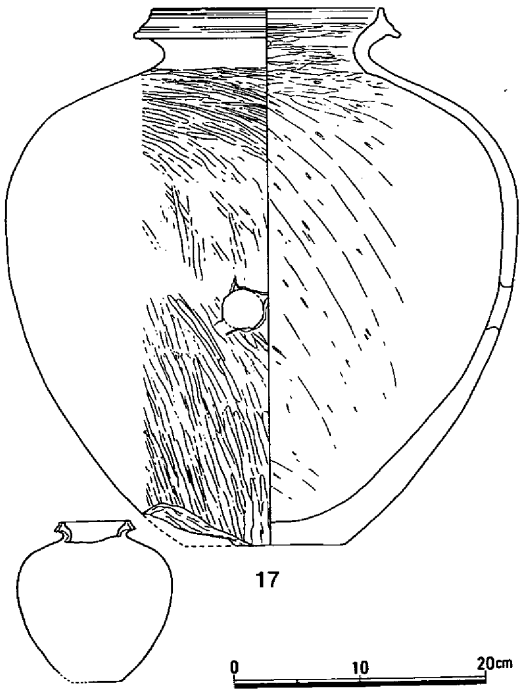




第23図　土器棺墓７　上：遺構、下：土器




16



第24図　土器棺墓８
上：遺構、下：土器、
左下：打欠き模式図

て棺身の口を覆う。**甕12・13**はほぼ同様な形態である。器壁は薄く、外面ヘラミガキ、内面は**12**は頸の屈曲まで、**13**は肩部までヘラケズリがある。両者とも口縁端部は拡張し、端面はナデて窪ませている。**12**は口径16.5cm、底径6.3cm、器高31.8cm。**13**は口径17.3cm、底径8.9cm、器高37.6cmで一回り大きい。

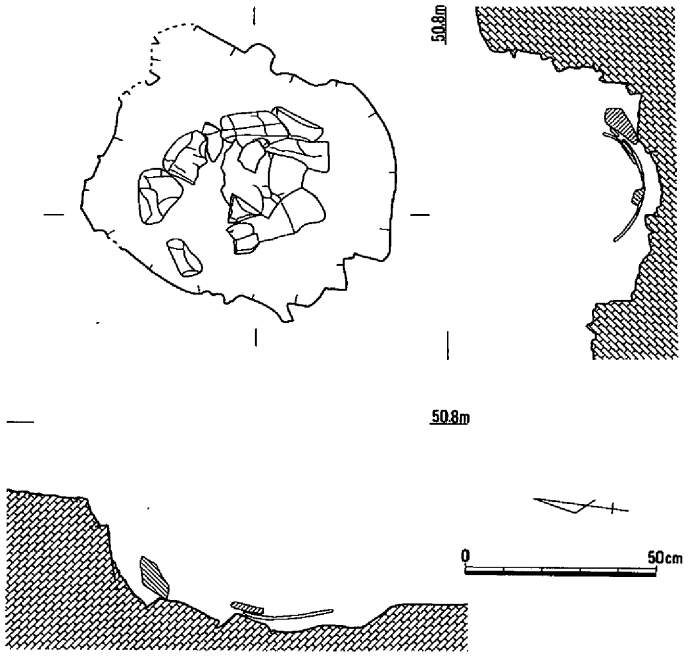
土器棺墓７（第23図）棺身に甕を使用し、口縁部がやや上方へ向くように墓壙に設置する。棺蓋には大形の鉢を用い、口縁部から肩部まで覆って蓋をしている。**鉢14**は深いもので、口縁部は屈曲し端部が肥厚する。外面はハケメ、内面はハケメをナデ消している。口径37.6cm、器高は現存で30.5cm。**甕15**は土器棺墓６の**甕12・13**と似た形態をもつ。やや口縁端部の上方と外方への拡張が大きい。また外面はハケメ、内面は頸部直下まで縦方向のヘラケズリのち横方向のヘラケズリ。口径19.7cm、器高42.9cm。

土器棺墓８（第24図）Ａ群の南端の、群からやや離れた位置に在る。棺身の壺は口縁部から肩部にかけて1／3程を打ち欠き、胴部に直径３cmの孔を外から開けている。この壺を、孔が真下に、打ち欠き口が斜め上方にくるように設置する。打ち欠き口内法は16×12cm程。棺蓋の**鉢16**は屈曲して外へ開き、端部が拡張する口縁をもつ。調整は内外面ともヘラミガキ。口径39.5cm、底径10.0cm、器高19.1cm。**壺17**は肩のよく張る器形で外面はヘラミガキ、内面は頸部直下までヘラケズリがみられる。口径33.2cm、胴部最大径40.6cm、底径12.7cm、器高42.5cm。

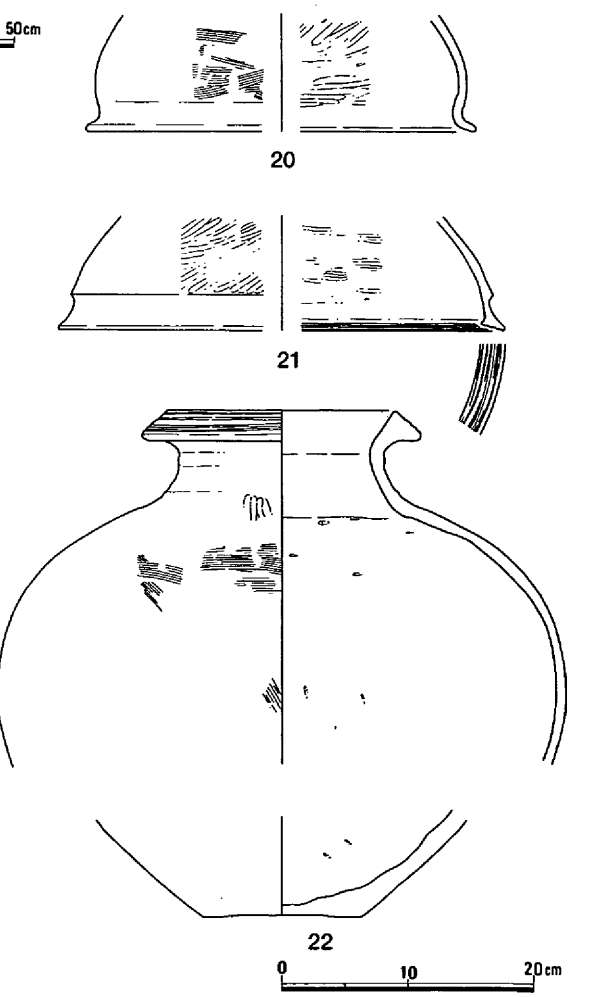
土器棺９（第25図）後述の前山１号墳墳丘下から検出された。墓壙は尾根の稜線に沿って走る石英の岩脈を掘り込んでいる。土器棺の大部分は失われ、棺身と思われる甕あるいは壺の胴部の1／4程が元位置を保っていた。棺蓋として使用されたと考えられる**鉢18**の破片は前山１号墳盛土中からも10片程みつかっており、全体で個体の1／3が存在する。口縁部は内湾ぎみに上方へ伸び、端部を

斜め上方へ引っぱり出しており、高杯の形態と類似する。口径38.0cm、底径9.5cm。**甕19**は肩部のよく張るもので、胴部外面にハケメ、内面にヘラケズリのち部分的にヘラミガキが施される。胴部最大径47.0cm。

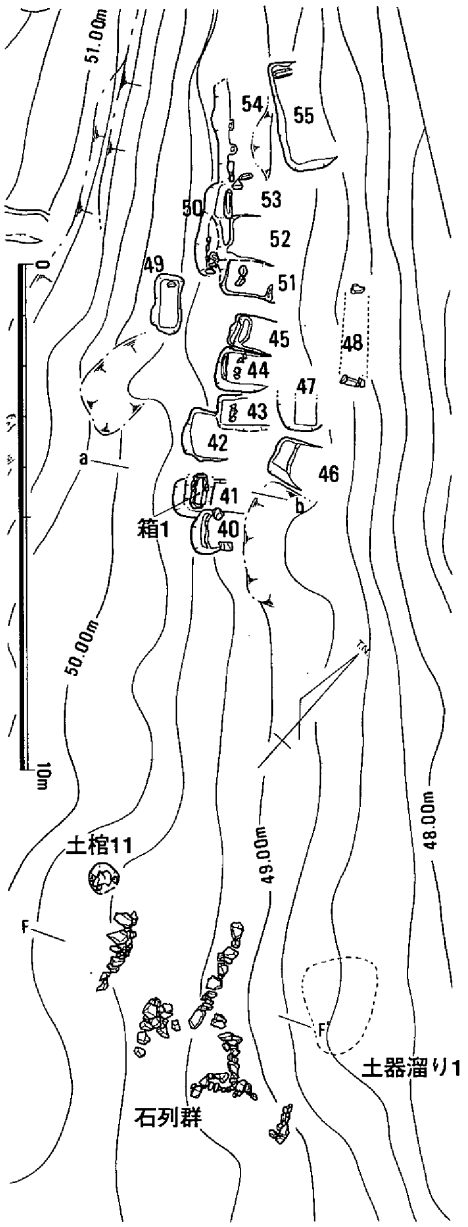
土器棺10（第26図）前山１号墳盛土直下で直径１ｍ前後の土器片の集中として確認されたものである。これらの土器片を整理した結果、鉢２個体、壺１個体のみであり、土器棺墓が崩壊した状況と判断した。**鉢20**は全体の1／4の破片が存在し、１号墳周溝流入土や、土器溜り１にも同一個体と考えられる破片が存在する。口縁部は短く外反し、端部が丸くおさまる。**鉢21**は全体の1／8程が残る。口縁端部は外方へ引き出され、端面にヘラ描沈線が施される。棺身と考えられる**壺22**は接合しないがほぼ3／4個体の破片がある。口径18.0cm。風化が著しい。**鉢20・21**のどちらかが棺蓋となるか決め難い。



第25図　土器棺墓９　上：遺構、下：土器



第26図　土器棺墓10　土器



第27図　B群・遺構配置図（1／150）

(3)　B群（第27図）

北東斜面に存在する一群である。土壙墓16基、土器棺墓１基、箱式石棺墓１基、石列群、土器溜り１ケ所である。これら遺構の分布は、尾根先端北側の崖の急傾斜が徐々に解消される北西側と、尾根鞍部に近い南東側に別れる。北西側には、標高49ｍ付近に約10ｍにわたって土壙墓16基と箱式石棺墓が密集している。南東側には、標高48～50ｍに土器棺墓、石列群、土器溜りが存在する。土器棺墓と石列群は後述する前山１号墳の墳丘盛土下に、土器溜りは周溝外縁に位置する。また、この周辺からは比較的多量の土器片が１号墳盛土中や流土中から出土しており、土器棺11、石列群の周囲に土壙墓が存在した可能性が高い。この調査報告においては立地条件の相違を重視してＡ群、Ｂ群に分けたが、Ａ群の土器棺９、10周辺とあわせて、まとまるかもしれない。遺構の切り合い関係が判明できたものが２例ある。土壙墓40が土壙墓41を切っている。箱式石棺１が土壙墓41を切っている。その他は不明である。また重複の程度は、墓壙の端が若干重なるものが大半であるが、中に墓壙が半分程重なる可能性があるものがある。土壙墓47と土壙墓43・44・45、土壙墓50と土壙墓51・52・53である。箱式石棺１は土壙墓41の南西小口部直上に作られているが、両者の床面高低差が58cmあり、土壙墓41を破壊していないと考えられる。

〈土壙墓〉

主軸　等高線に平行、あるいは直交する。

規模　大半の土壙墓は斜面下方側が流出していたり、地山風土化内で検出困難であったので、墓壙長・幅とも計測できるものは僅かである。土壙墓49は墓壙床長94cm、幅35cmの小形のものである。

小グループ　規則的に３基が並列すると考えられるものに、土壙墓43・44・45と土壙墓51・52・53がある。

木棺痕跡　検出できたものは土壙墓40のみである。木棺幅43cmである。

墓壙床の形状　①小口溝をもつもの６基（37.5%）、②床面に若干の段差をもつもの３基（18.75%）、③床面中ほどがゆるく窪むものはない。④床面が平たなもの７基（43.75%）

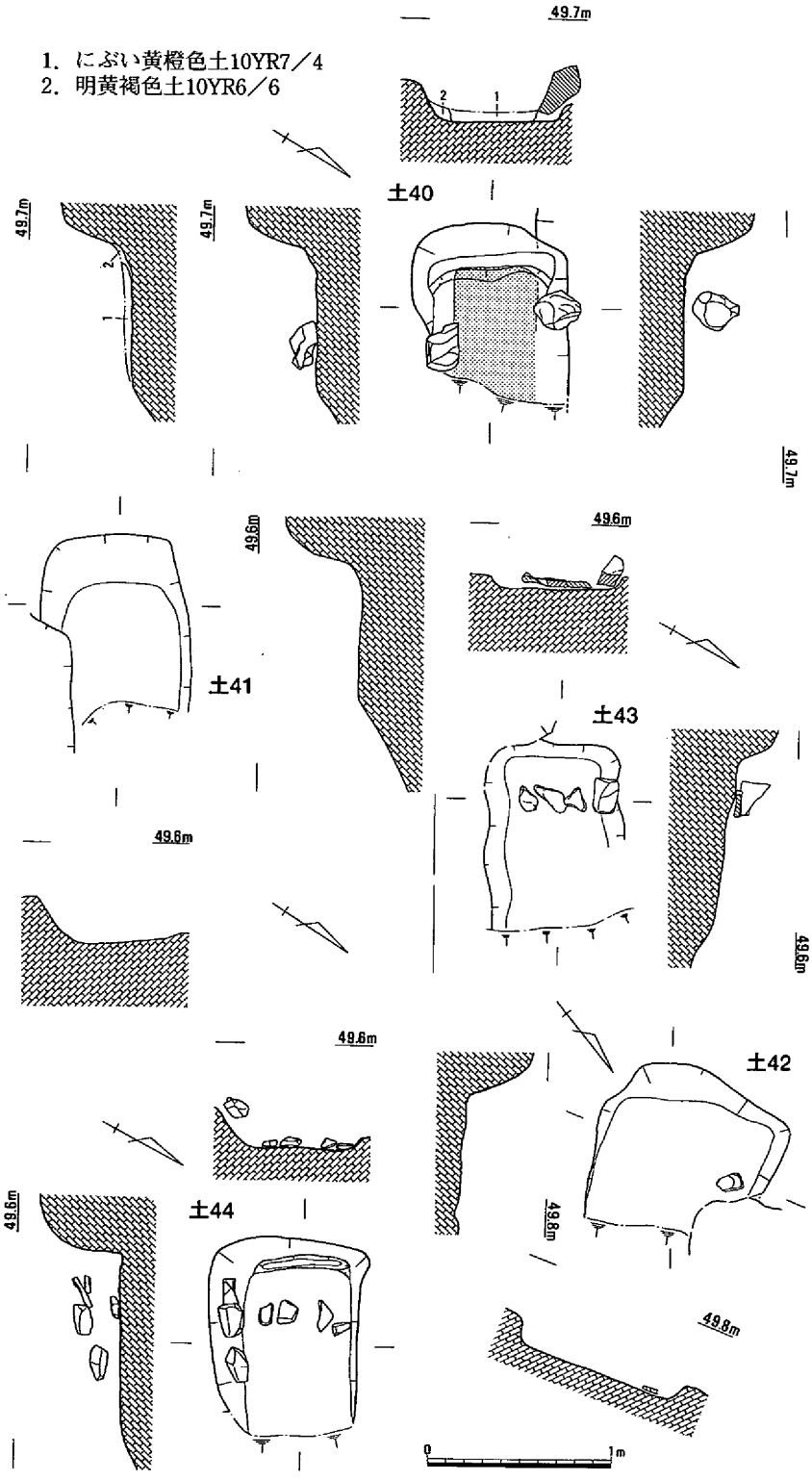
副葬品　ない。

赤色顔料　ない。

石枕　石の形状、配置状態から明瞭に石枕と判断されるものは、土壙墓43のみであり、３個の石材を使用している。その他、可能性のあるものとして、土壙墓44、49、51がある。

土壙墓40（第28図）

墓群の南東端に位置する。土壙墓41を僅かに切って作られている。B群中、唯一木棺痕跡を検出できたものである。また、基壙床面の南西小口部に僅かな段をもつ。この段差と、木棺痕跡南西小口の線がほぼ重なる。このことから、この床面の段差が小口板を立てる際のひっかかり、おさえとして機能した可能性がある。



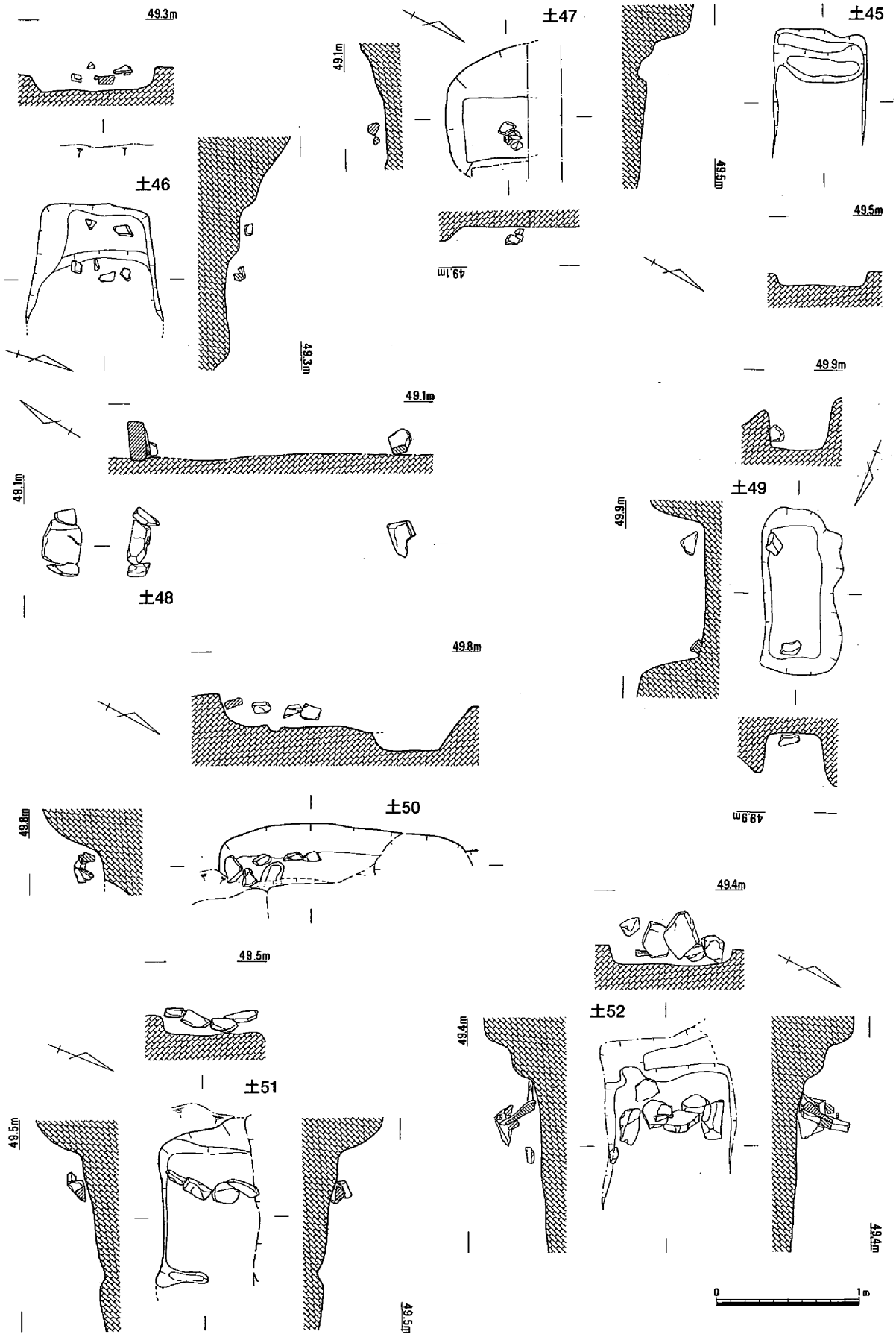
第28図　土壙墓40～44（1／40）

土壙墓48（第29図）

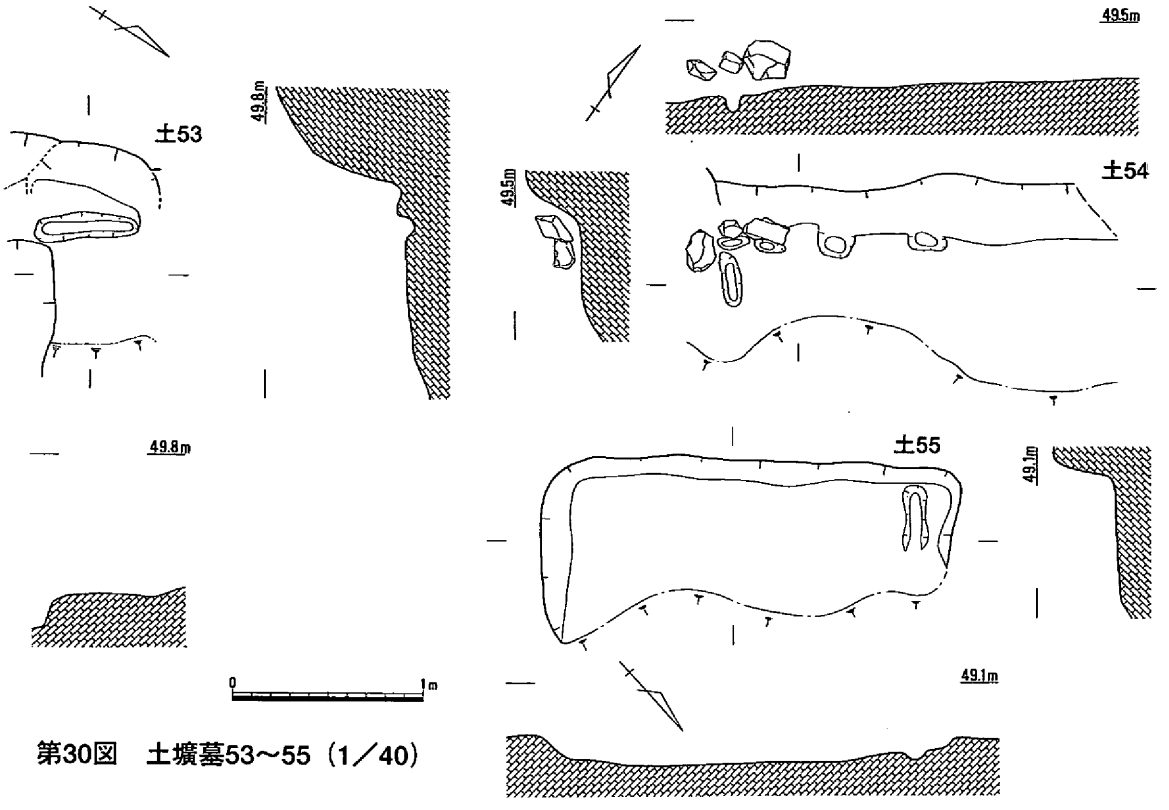
墓群の中で最も斜面下方に位置する。検出できたのは、土壙墓の両小口部に位置すると考えられる石のみである。そのうち、南東小口部のものは3個の石を組みあわせている。中央に30×27cm、厚さ10cmの大きな石を横位に立て、その両側に小さな石を配している。小さな両側の石は中央の石に寄りかかっている状態であった。おそらく、木棺側板で中央の立石をはさみ、小さな石でおさえたのではなかろうか。北西側小口の石は1個であるが、きちんと立てている状況ではない。両小口の石材の間隔は170cmである。

土壙墓52（第29図）

墓群のほぼ中央部に位置する。墓壙の南西側、南東側、北西側が、それぞれ土壙墓50、51、53と重複しているが、前後関係は不明である。斜面下方側は流出している。南西小口部には20×30cm程、厚さ5cm程の板石が2枚、並列して、縦位に立っている。やや墓壙の中央に向けて傾いている。その2枚の板石の南東側には、木棺の側板を固定させたと考えられる石がある。



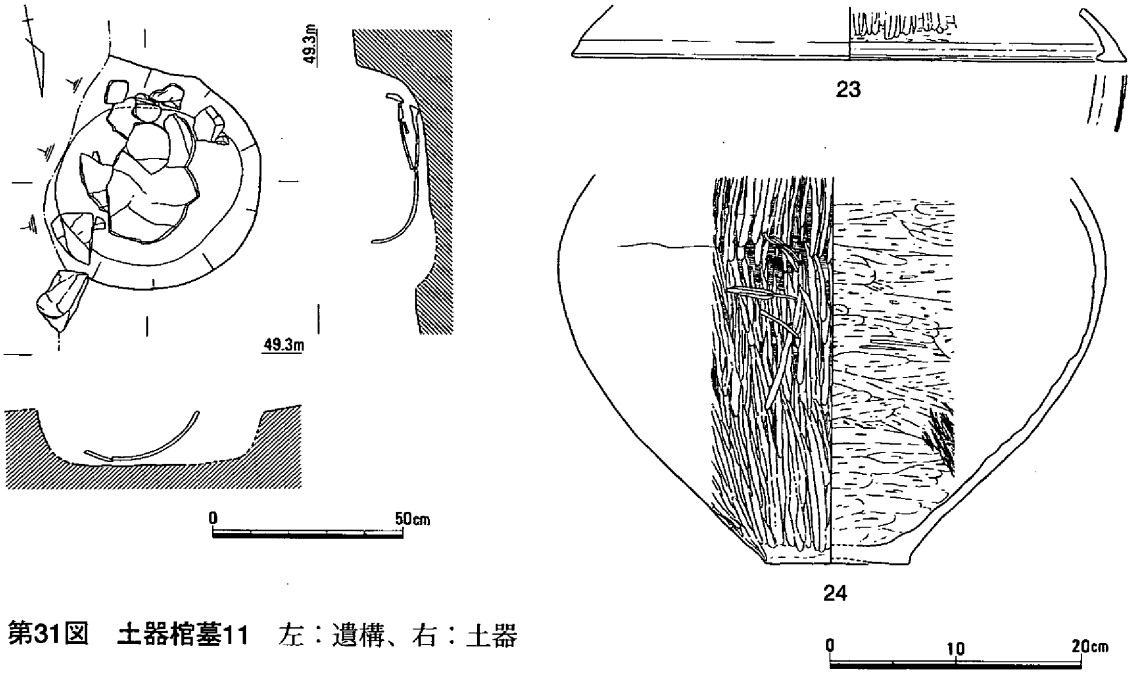
第29図　土壙墓45～52（1／40）



第30図　土壙墓53～55（1／40）

〈土器棺墓〉

土器棺墓11（第31図）前山１号墳盛土下で検出された。墓壙、土器棺とも上半部を削平された状況であった。棺身の壷の胴部から底部1／4程が現位置を保つ。口縁部を斜め上方へ向けて設置されている。棺蓋の**鉢23**は1／4個体分の破片が残存するが、接合したのは口縁部1／2のみである。口縁端部は拡張しナデ調整された水平面をもつ。口径44.2㎝。**壷24**は土器溜り１より出土した土器片１点と接合した。器面の保存状態が非常によく光沢がある。胴部最大径43.7㎝、底径11.8㎝。色調は、23・24



第31図　土器棺墓11　左：遺構、右：土器

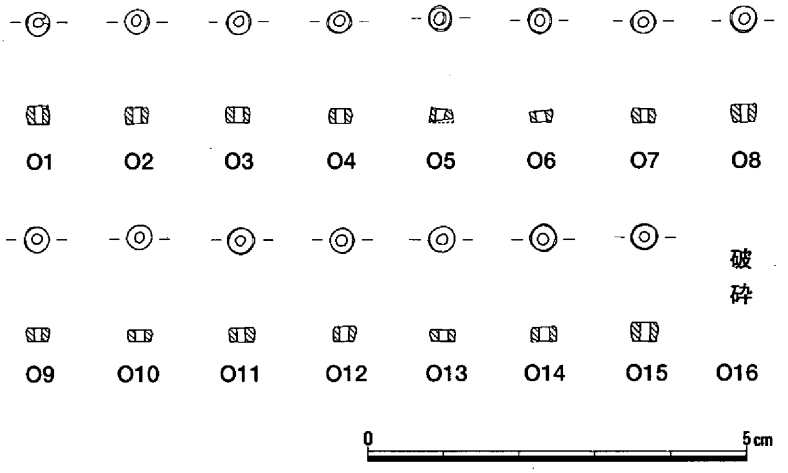
とも、にぶい赤褐色（5YR4／3～5／4）を呈し、他の土器棺と異なる。時期は、鉢の口縁部から後期前葉と考えられる。棺内堆積土を棺底から5㎝程水洗したが、何も検出されなかった。

〈箱式石棺墓〉

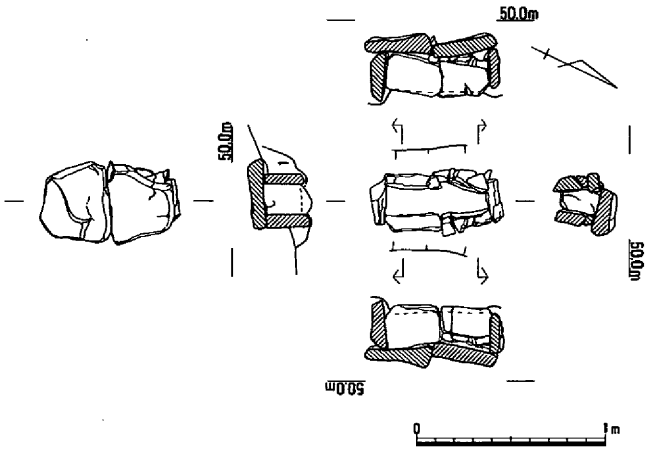
箱式石棺墓1（第32～34図）土壙墓41の南西小口部上に位置する。前述したように、箱式石棺1と土壙墓41との床面比高差は58㎝である。調査前より天井石の一部が露出していたが、箱式石棺と認識できず、土手を残して周辺を掘り下げてしまい、墓壙は土手の部分のみとなった。また土層観察において、盛土あるいは周溝と考えられる土層は確認されない。石棺には板石を両側石に各2枚、両小口石に各1、天井石に2枚使用し、北西側側石上には小さな石を積んでいる。小口石で側石を挟む。石棺内法は、長軸54㎝、短軸は南東小口部で16㎝、北西小口部で10㎝、深さは19㎝。床面はしっかりしておらず、流入土と比べて僅かに硬いかなという程度であった。石棺内の流入土下半を水洗した結果、緑色凝灰岩製の小玉16点が検出された（第32図、第3表）。最大径がほとんど3.3㎜程度であることから、管玉状のものを切断して成形されたと考えられる。石棺石材のすべてを鑑定依頼した結果、すべて花崗岩であり、容易にこの尾根から採取できるものである。

〈石列群〉

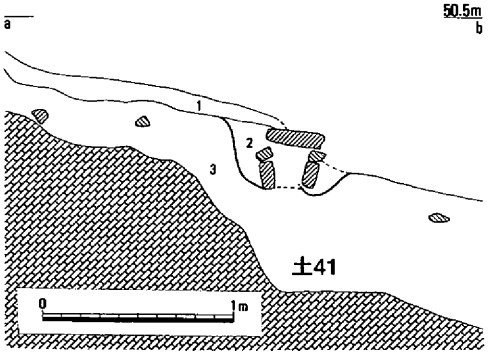
石列群（第35・36図）は、後述の前山1号墳の墳丘下に位置し、土層の観察において、盛土より下層に包含されていることから、1号墳築造以前のものと考えられる。石列群は、まとまりとして6列が確認される。そのうち2列のみ南北方向に主軸をもつが、他の列は、それぞれ異なる方向の軸をもち、重なり合う列も存在する。しかし、すべて、斜面下方に面をもつ。石列は、一番長いもの



第32図　箱式石棺墓1　出土遺物（1／1）

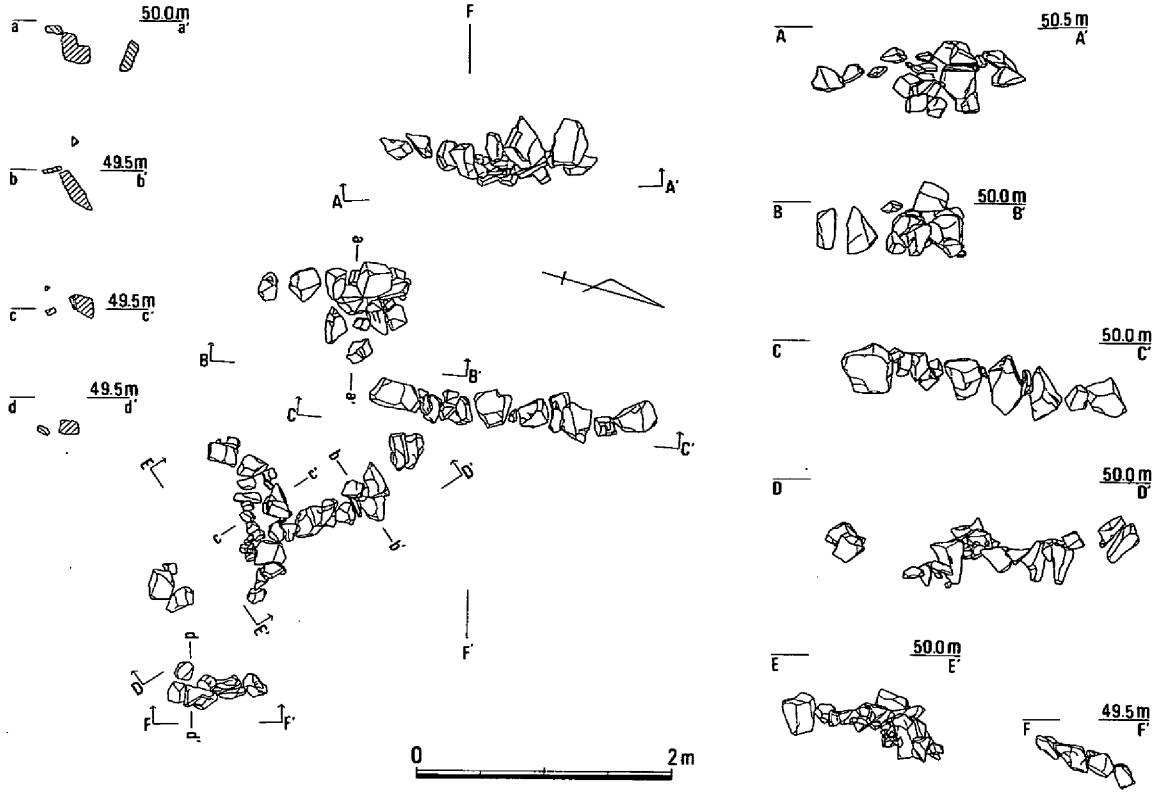


第33図　箱式石棺墓1（1／40）

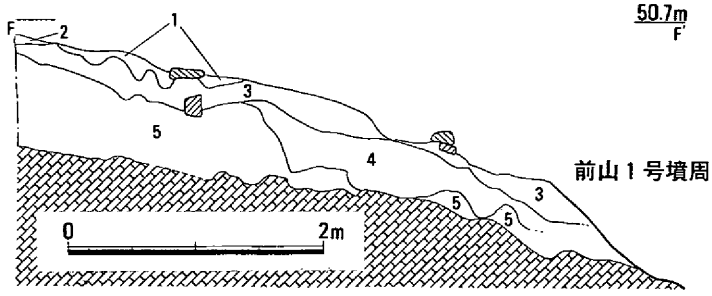


1. にぶい褐色土10YR5／4
2. 黄褐色土10YR5／6
3. にぶい黄褐色土10YR6／4

第34図　箱式石棺墓1と土壙墓41との高底差



第35図　石列群（1／60）　左上：断面、中央：平面、右：立面



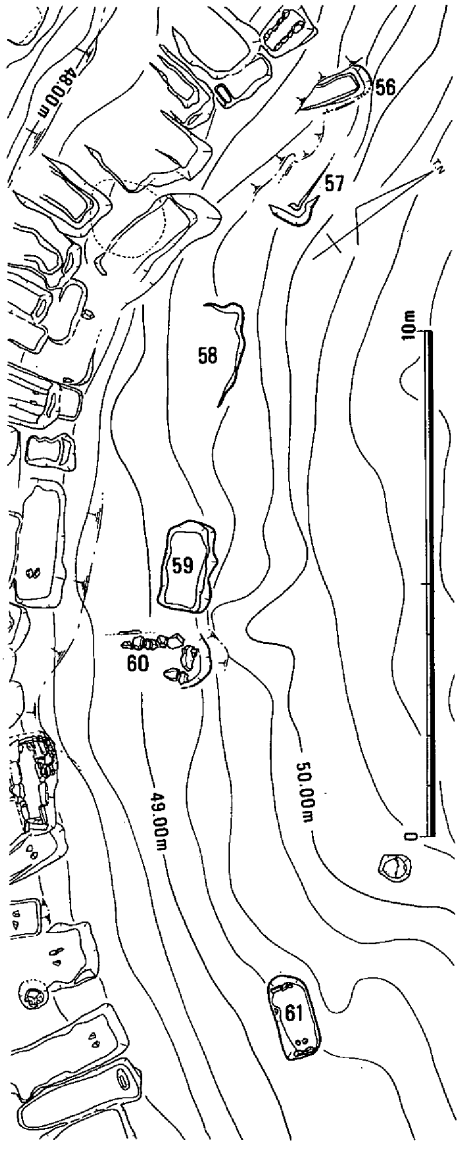
1. にぶい黄橙色土10YR7／2
2. 明黄褐色土10YR6／8（1号墳盛土）
3. にぶい黄橙色土10YR6／3
4. 灰黄褐色土10YR6／2
5. にぶい黄橙色土10YR6／4

第36図　石列群断面土層図

で2.3ｍ。大小不揃いな石を縦位に配列するものが多く、残りのよい部分では、高さ50㎝程度に石を積んでいるが、非常に雑である。石材の材質は石英質のものがほとんどであり、付近に石英の岩脈があることから、採取は容易である。断面、平面の検討では、掘り込んで石を並べた状況は確認されず、性格は不明と言わざるを得ない。土壙墓に伴うものか、あるいは、前山１号墳の墳丘下に弥生墳丘墓が存在し、その墳丘に伴うものか、など想定したが、明らかにできなかった。時期としては、石列を包含する層から、弥生時代後期の土器片がかなり出土していることから、その時期のものと考えたい。

〈**土器溜り**〉

土器溜り１（第27図）位置は、上記の石列群の下方斜面に在り、前山１号墳の北東側周溝の外縁にあたる。直径約1.5×2.0ｍの範囲に土器片と角石が厚さ30㎝程度に混在する。角石は、石英質のものも多数あり、上方の石列群の石材とよく似ている。また、土器片はすべて弥生時代後期のもので、土器整理の階段で、土器棺墓11の土器棺との接合が１点、また、土器棺墓10の土器棺と同一個体と考えられる土器片が数点、その他、斜面上方より出土した土器片とも接合がいくつかみられた。よって、この土器溜りは、上方から流出して来たものと考えられる。流出の時期は土師器が一片も存在しないことから、古墳築造時というより、それ以前と考えたい。出土土器は、後述の「(7)**土器**」にて掲載。



第37図　C群・遺構配置図（1／150）

(4)　C群（第37図）

南～西斜面に在り、標高49ｍ付近に位置する一群である。土壙墓６基のみである。この６基は密集せず、約20ｍにわたり、間隔を開けて作られている。土壙墓56と57、土壙墓59と60は、それぞれ近接するが重複しない。

〈土壙墓〉

主軸　等高線に平行、あるいは、直交、斜交する。

規模　C群内で一番大きなものは土壙墓58で床面長193㎝強、床面幅90㎝強である。小さなものは、土壙墓56で床面長120㎝、床面幅31㎝程度である。

小グループ　不明

木棺痕跡　土壙墓61のみ検出できた。木棺長125㎝、木棺幅34㎝、両小口側における木棺幅の違いはほとんどない。また、両小口部の詰め石に木棺側縁の線がぶつかるので、小口板で側板をはさむ木棺であった可能性がある。また、土壙墓60には、木棺の側板と墓壙壁との間に詰めたと考えられる石があり、木棺幅が推定できる。木棺幅42㎝程。

墓壙床面の形状　②床面に僅かな段差をもつもの２基（33%）、④平たなもの４基（67%）である。①小口溝、側板溝をもつものと、③床面中程が浅く窪むものはない。僅か６基ではあるが、①の小口溝、側板溝をもつものが全くないことが特徴として挙げられる。

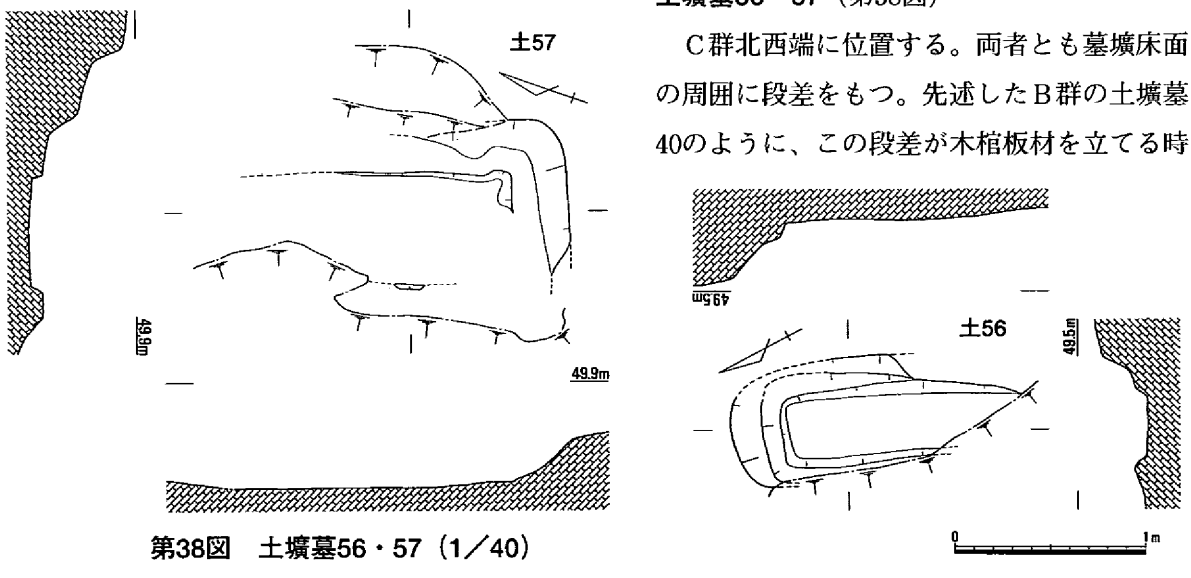
副葬品　ない

赤色顔料　ない

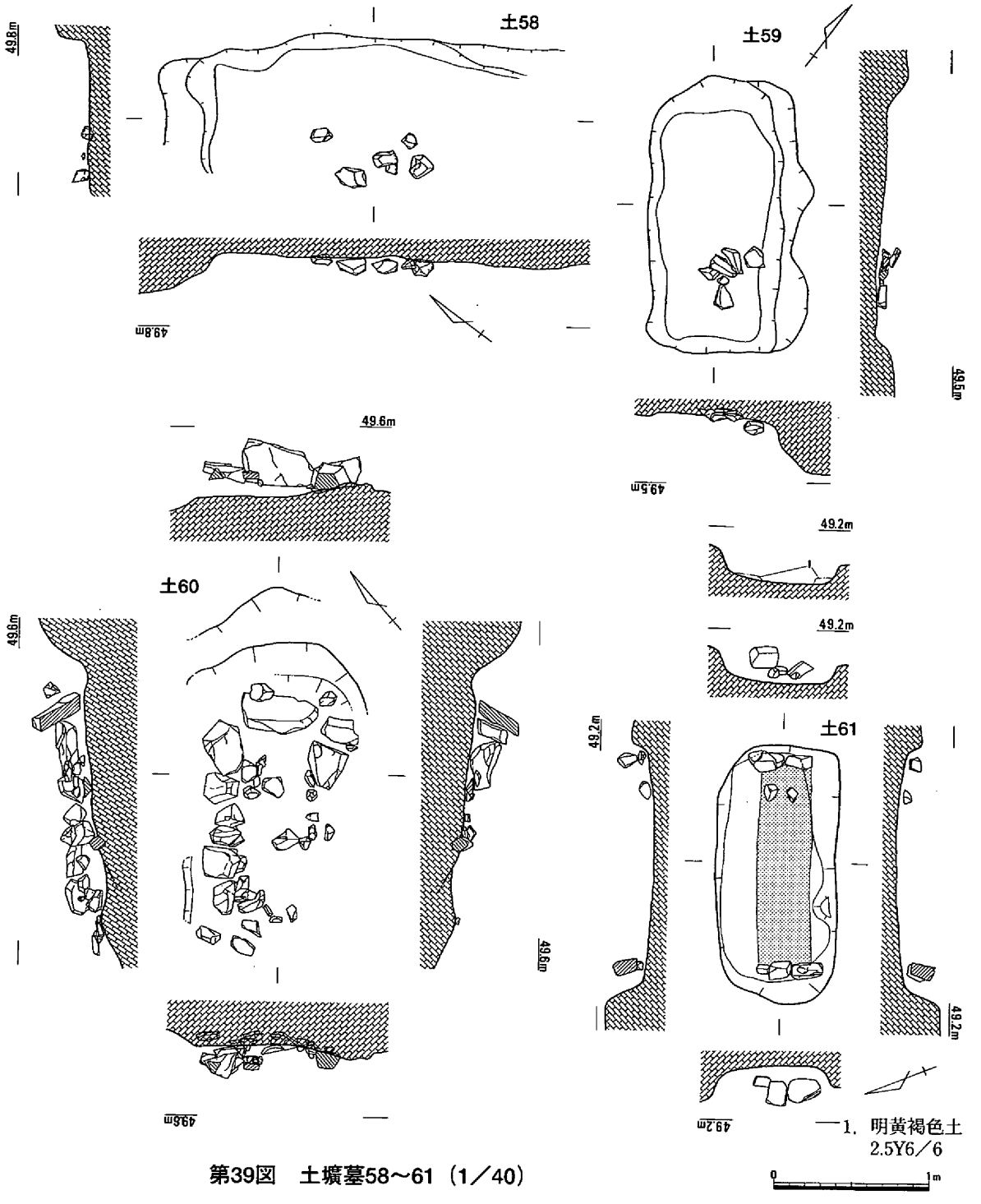
石枕　明瞭なものは、土壙墓61のみである。握大の石を２個配置して石枕としている。

土壙墓56・57（第38図）

C群北西端に位置する。両者とも墓壙床面の周囲に段差をもつ。先述したB群の土壙墓40のように、この段差が木棺板材を立てる時



第38図　土壙墓56・57（1／40）



第39図　土壙墓58～61（1／40）

のひっかかりの役目の可能性があるならば、木棺規模が推定できる。土壙墓56は木棺幅30㎝程、土壙墓57は木棺幅55㎝程と推定される。

土壙墓60（第39図）

C群中程に位置する。木棺板材と墓壙壁との間に詰めたと考えられる石が北西、南東両側に列状にみられる。北東側小口部には、50×30㎝、厚さ８㎝の板石を横位に立てている。墓壙中央部に傾斜した状況で検出された。

第40図　D群・遺構配置図（1／150）

(5)　D群（第40図）

南～西～北斜面にかけて在り、標高48ｍ付近に位置する一群である。土壙墓51基、土器棺墓３基箱式石棺墓１基、土器溜り１ケ所が所在する。約40ｍにわたって、一部４ｍ程、間隔の開く所があるが、ずらりと密集している。土壙墓の大半、土器棺墓と土壙墓、箱式石棺墓と土壙墓は切り合い関係にあるが、その重複は、すべて僅かなものである。

〈土壙墓〉

主軸　すべて等高線に平行、あるいは直交、一部斜交する。

規模　およそ、墓壙床面長１ｍ前後、幅40cm前後の小形のものと、墓壙床面長1.5～2.5ｍ、幅50～90cmの大形のものに分かれる。大形のものの規模は非常に幅があり、まとまりは不明瞭である。土壙墓111は格段に大きなもので、床面長226cm、幅174cmである。慎重に墓壙埋土を下げていったが、土壙墓が２基並列している状況は確認されなかった。

小グループ　確実なものとして、２基並列する土壙墓70・71が挙げられる。その他は、規則的な関係を示す土壙墓も多くあるが、非常に密集して

おり、確実性に乏しい。

木棺痕跡　検出できたのは土壙墓98のみである。木棺長175cm、幅56～49cmで、斜面下方の南西小口部で、やや狭くなる。

墓壙床面の形状　①小口溝、側板溝をもつもの７基（14%）、②床面に僅かな段差をもつもの１基（２%）、③床面中ほどが浅く窪むもの10基（19%）、④床面が平らなもの33基（65%）。他群に比べ、③の中窪みのものが10基と多いこと。また、A群とは逆に①の溝をもつものより④の平らなものの割合が大きくなっていることなどが特徴として挙げられる。

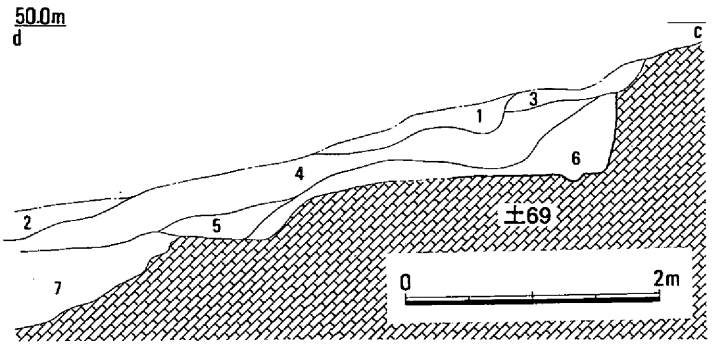
副葬品　土壙墓に伴うものはない。流土中より無茎式の銅鏃（第42図）が１点出土した。出土位置は、土壙墓67の上層流土中で、A群の土壙墓から流出した可能性が強い。最大長23.2mm、重量2.28ｇ。

赤色顔料　ない

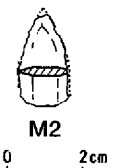
石枕　石の形状、配置状態から石枕と考えられるのは８基の土壙墓にみられる。８基（土壙墓68、70、91、94、96、105、107、109）とも、石材２個をハの字、あるいは、少し間隔を開けて配置し、枕としている。この他にも数基程、石枕の可能性がある石材を持つ土壙墓がある。D群の土壙墓の特徴として、２個の石を使用した石枕をもつ土壙墓が多いということが挙げられる。

土壙墓77（第45図）

南西斜面に位置し、等高線に平行して作られている小形の土壙墓である。墓壙床面長88cm、幅38cm。床面直上には一面に、厚さ0.5～１cmの薄い粘土（にぶい橙色7.5YR6/4）が敷かれていた。また、床面直上に東西側の墓壙壁に沿って２列の石列がみられた。これは、木棺の側板と墓壙壁の隙間を埋め

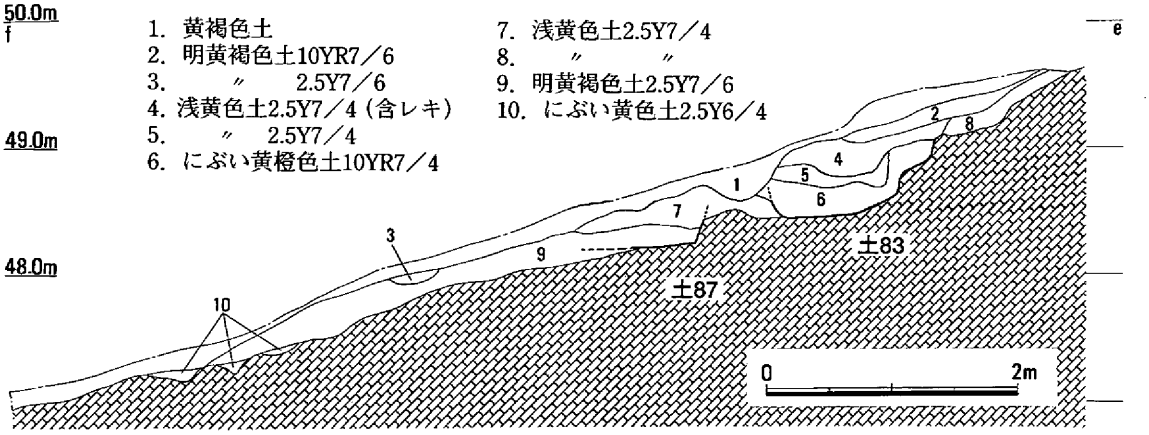


1. 黄褐色土2.5Y5／3
2. 〃　〃
3. にぶい黄色土2.5Y6／3
4. 明黄褐色土2.5Y7／6
5. にぶい黄色土2.5Y6／4
6. にぶい黄色土2.5Y6／3
7. 灰黄色土2.5Y6／2



第42図　流土中出土遺物（1／2）

第41図　D群・斜面土層図１（1／60）



1. 黄褐色土
2. 明黄褐色土10YR7／6
3. 〃　2.5Y7／6
4. 浅黄色土2.5Y7／4（含レキ）
5. 〃　2.5Y7／4
6. にぶい黄橙色土10YR7／4
7. 浅黄色土2.5Y7／4
8. 〃　〃
9. 明黄褐色土2.5Y7／6
10. にぶい黄色土2.5Y6／4

第43図　D群・斜面土層図２（1／60）

たものと考えられるが、そうすると木棺幅は約23cmとなり、非常に小さなものと推定される。

土壙墓23（第47図）

D群の墓群のほぼ中央部に位置する。等高線に平行して作られている。墓壙床面長204cm、幅67cmの大形ではあるが、前山遺跡土壙墓の中では一般的な規模である。床面は平らである。この土壙墓83の墓壙上層から斜面下方にかけて径1.5mの範囲に土器の集中がみられた（土器溜り2）。この土壙墓83を横切る土手の断面土層観察で、土壙墓83の墓壙内に落ち込む土層（図43の第4層）と、土器留り2の土器の一部がこの層に含まれることを確認したが、確実に土壙墓83に伴う土器群を分離することができず、土器溜り2の土器として「(7)**土器**」の覧で一括して掲載した。

土壙墓84（第47図）

土壙墓83の南東約1mに在り、等高線に平行して作られている。墓壙内には木棺を墓壙壁の隙間に詰めたと思われる石が多くみられる。床面には、浅い円形の窪みがみられるが、これらは地山に墓壙を掘る際に生じた凸凹であると考えられる。

土壙墓90・91（第48図）

土壙墓84の南東隣りに在り、2基とも等高線に直交する。土壙墓90は土壙墓91と重複しているが、土壙墓90の木棺の周囲に詰めたと考えられる石が一部、土壙墓90の墓壙上にのびているので、土壙墓91を切っていることがわかる。土壙墓91は、床面長177cm以上、幅90cmで、北東小口部に小口溝を持つ。さらに床面中ほどが浅く窪む。北東小口部壁面に沿って、おそらく木棺小口板の外側に詰めたと考えられる石が、ほぼ垂直に2段、雑に積まれたような状態で検出された。

土壙墓99（第49図）

南西斜面に位置し、等高線に直交して作られている。土壙墓98・100と重複するが、前後関係は不明である。南西側小口部は流出しており、床面長は128cm以上、幅75cmである。床面は中ほどが緩く窪む。この窪みの北東小口側に深さ10～15cm程の穴を掘り、50×25cm、厚さ10cm程の石を縦位に立て据えている。窪みの底面から計ると約40cmの高さがある。この立石は非常にしっかり固定され、埋土除去後に少々押してもびくともしなかった。

土壙墓100（第49図）

土壙墓99の南東に隣接する。等高線に直交して作られている。墓壙床面長205cm、幅80cm。床面の中はどが緩く窪むものの典型である。窪みは、長さ約180cm、幅40～58cm、深さ5～10cmで、底面は明瞭な平面を持たない。また、北東小口側と南西小口側とも、窪みの下がりは垂直ではなく、側面の下がりと同じように、だらだらと下がる。

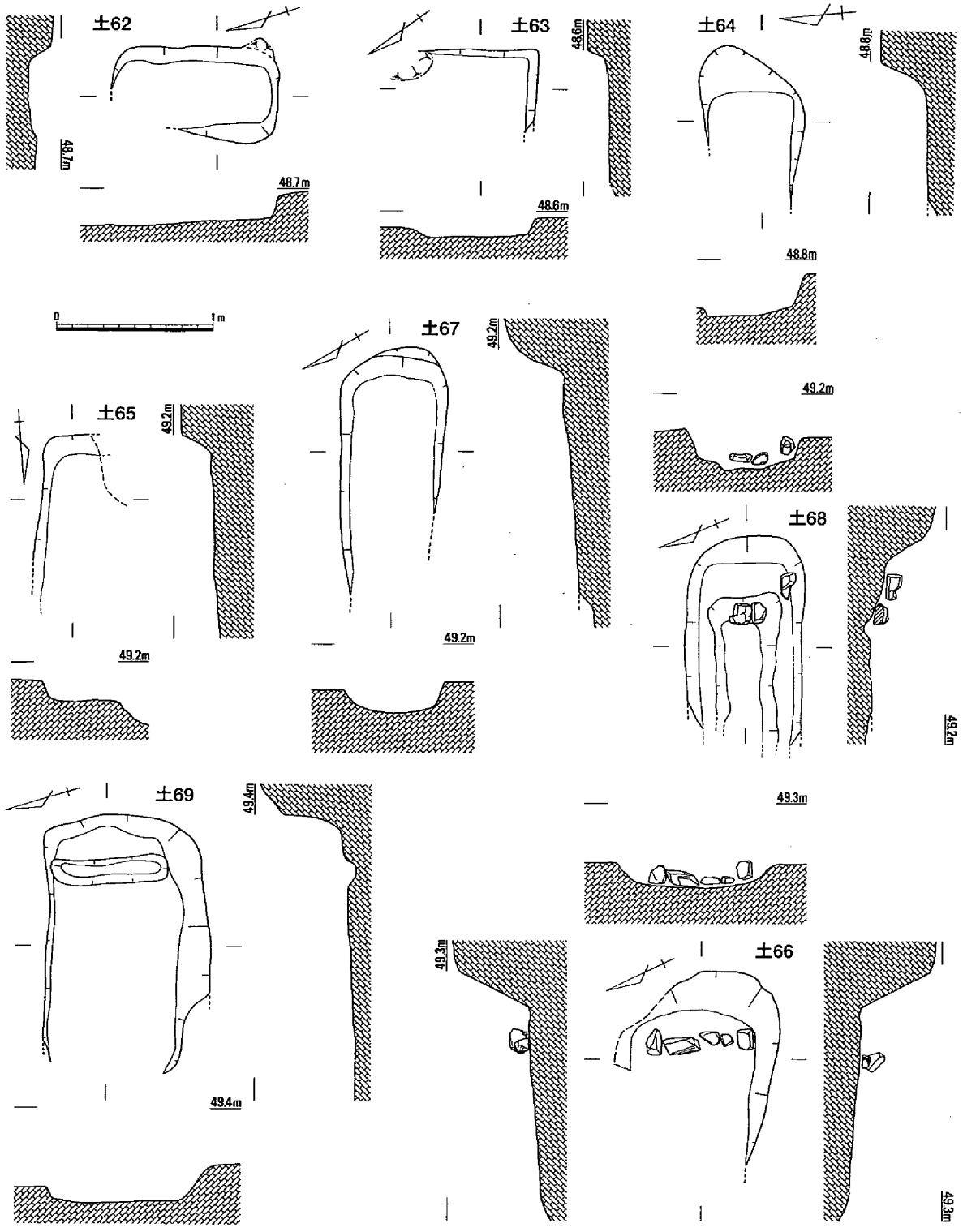
土壙墓102・103（第50図）

土壙墓102・103は南西斜面に位置し、等高線に直交する。あたかも、土壙墓101、104、106に3方向を囲まれた空間に在るように思われる。土壙墓103は、箱式石棺墓2にその北東端の上層を切られている。土壙墓102と103の2基は若干ずれて並列する。切り合いが見られるが前後関係は不明である。2基とも非常に小形の土壙墓である。土壙墓102は僅かに大きく、床面長90cm、幅54cm、土壙墓103は床面長65cm、幅48cmである。2基とも床面中ほどが緩く窪む。窪みの規模は、土壙墓102は長さ90cm、幅49cm、深さ5cm程、土壙墓103は、長さ52cm、幅25cm、深さ7cm程である。両者とも、この窪みを囲むように石を配置している。土壙墓102の、詰め石は、北東小口辺と北西側辺に残在し、その2辺の石列は直角に配置されている。土壙墓103の詰め石は南東、北東、北西の3辺に残存する。10～20

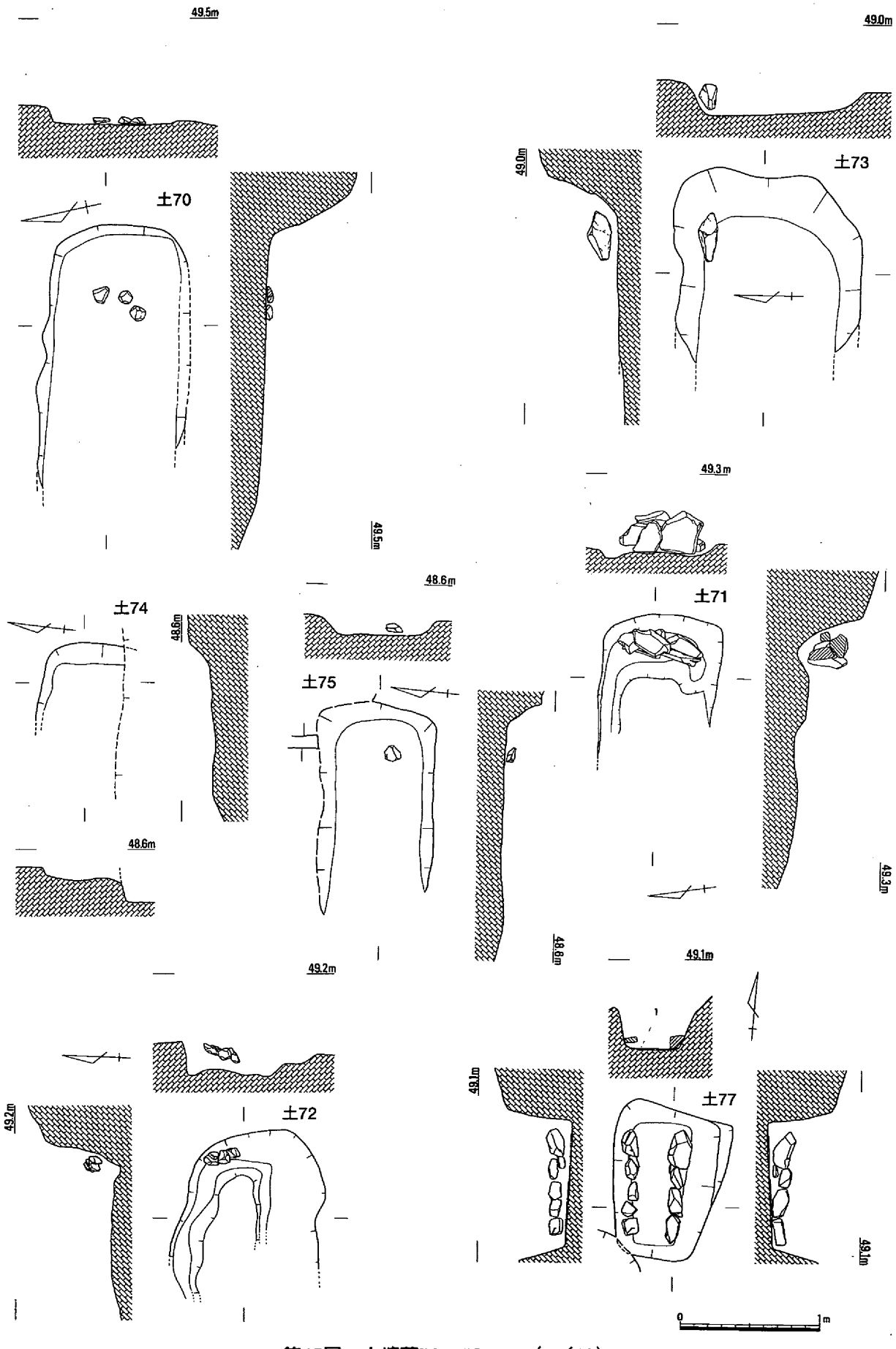
cm大の角石である。南東辺の２個の石は内側を真っ直ぐに揃えているが、他の２辺は面をもたず、ややくずれている。南東辺の石と北西辺の石の間隔は15cmと非常に狭い。北西辺の石が内側に倒れ込んでいるとしても20cm以上にはならないと考えられる。

土壙墓111（第52図）

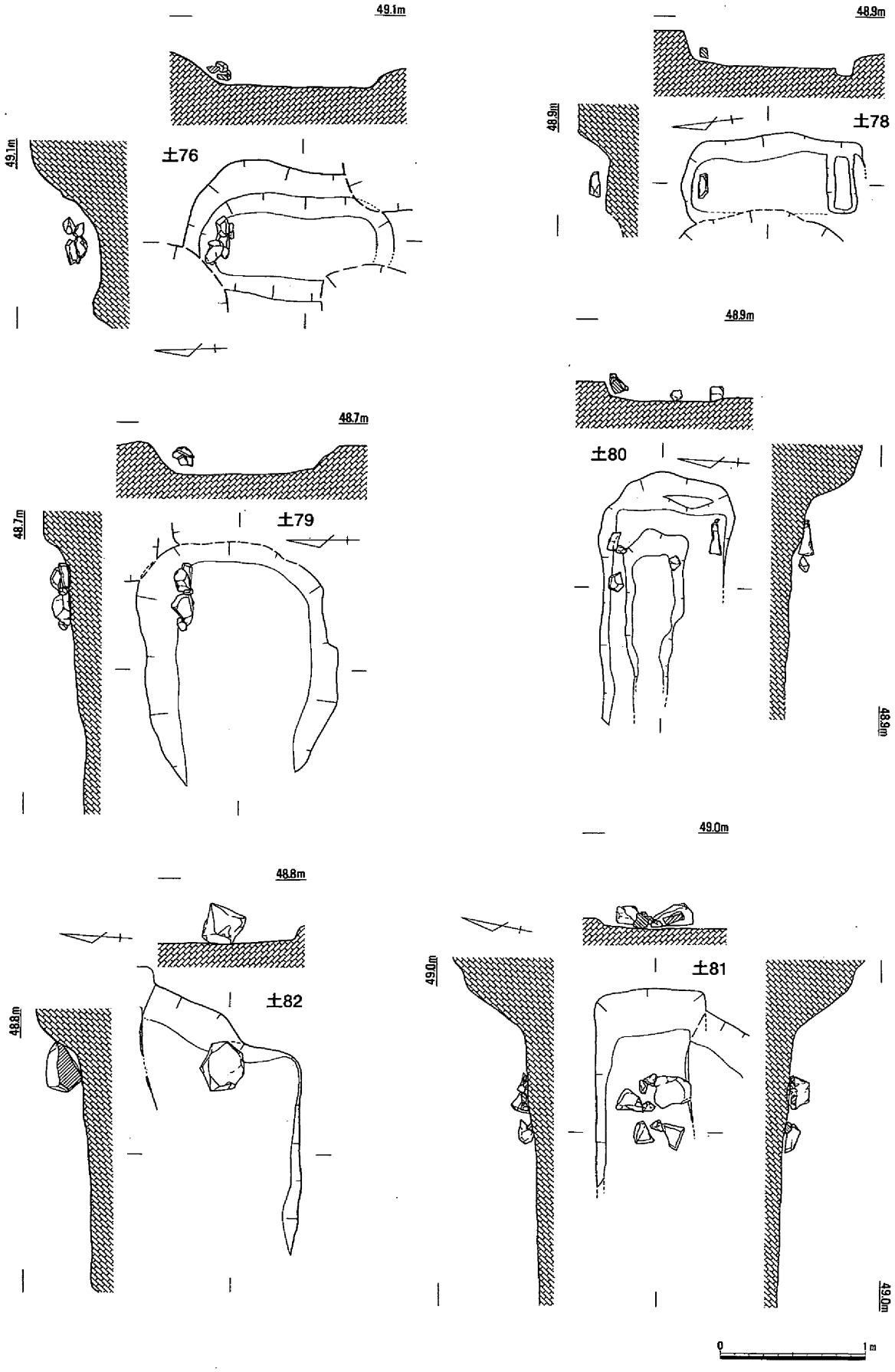
D群墓列の東端に位置する。等高線に平行して作られている。規模の所でも記したが、前山遺跡



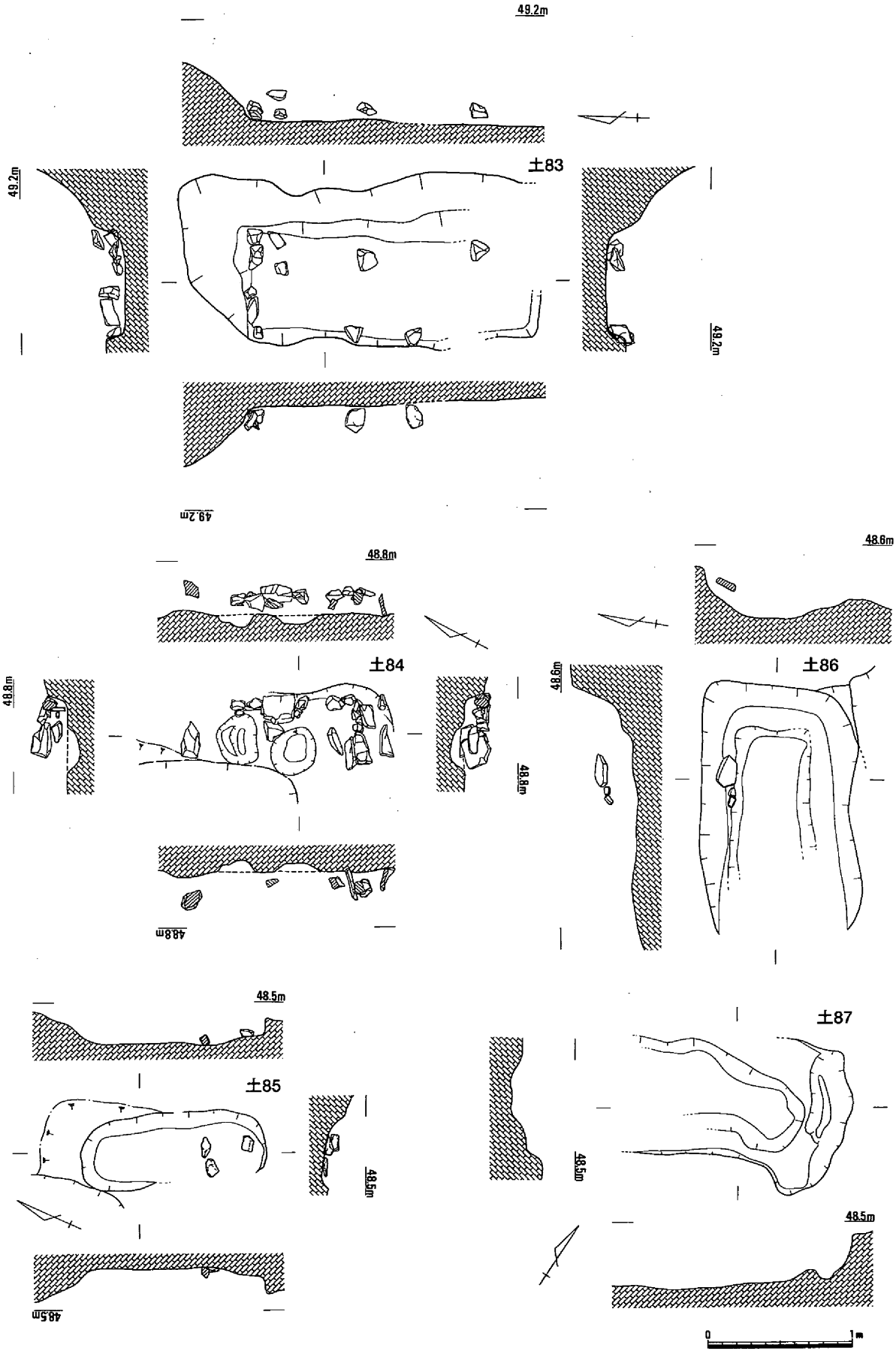
第44図　土壙墓62・69（1／40）



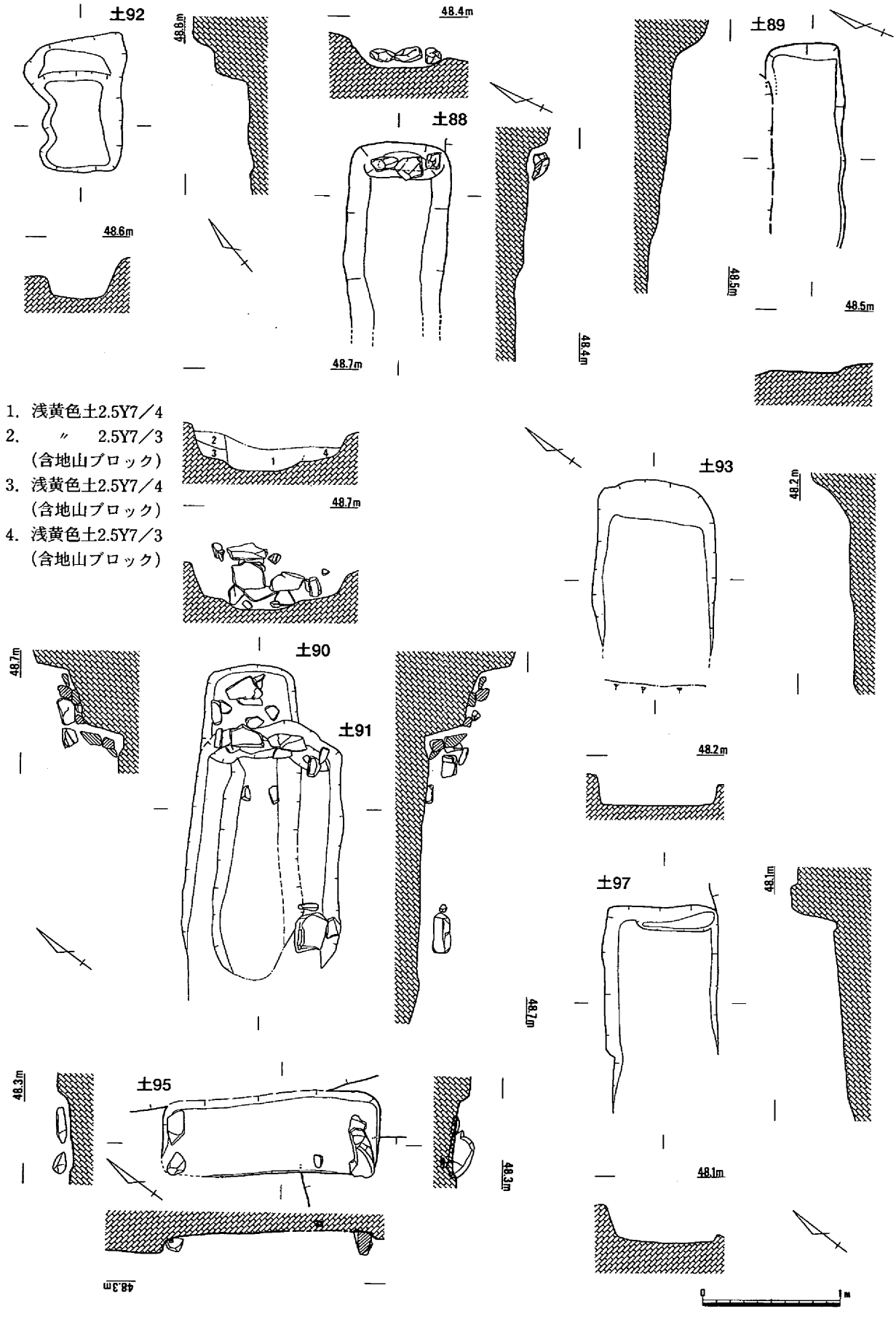
第45図　土壙墓70～75・77（1／40）



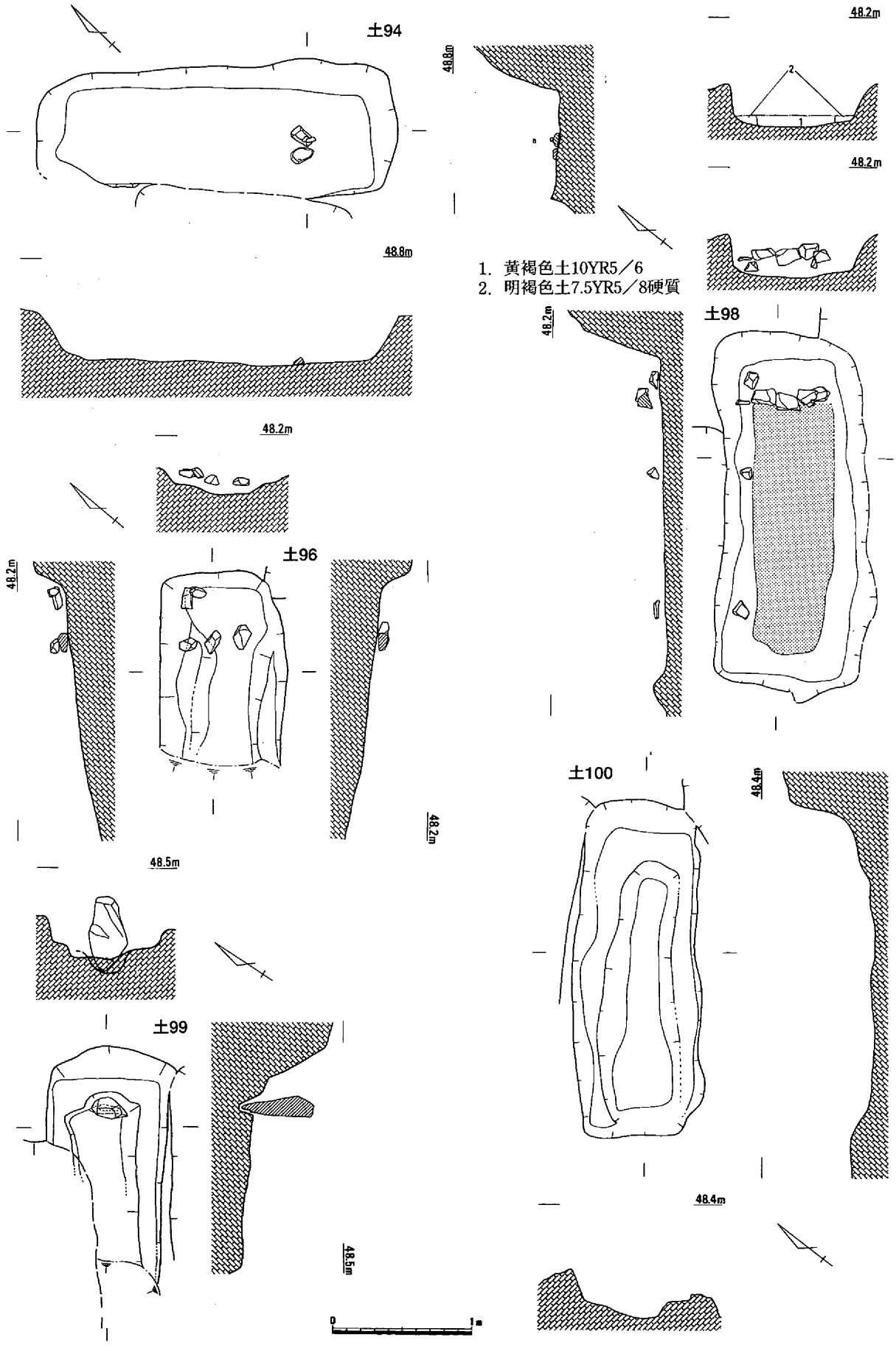
第46図　土壙墓76・78～82（1／40）



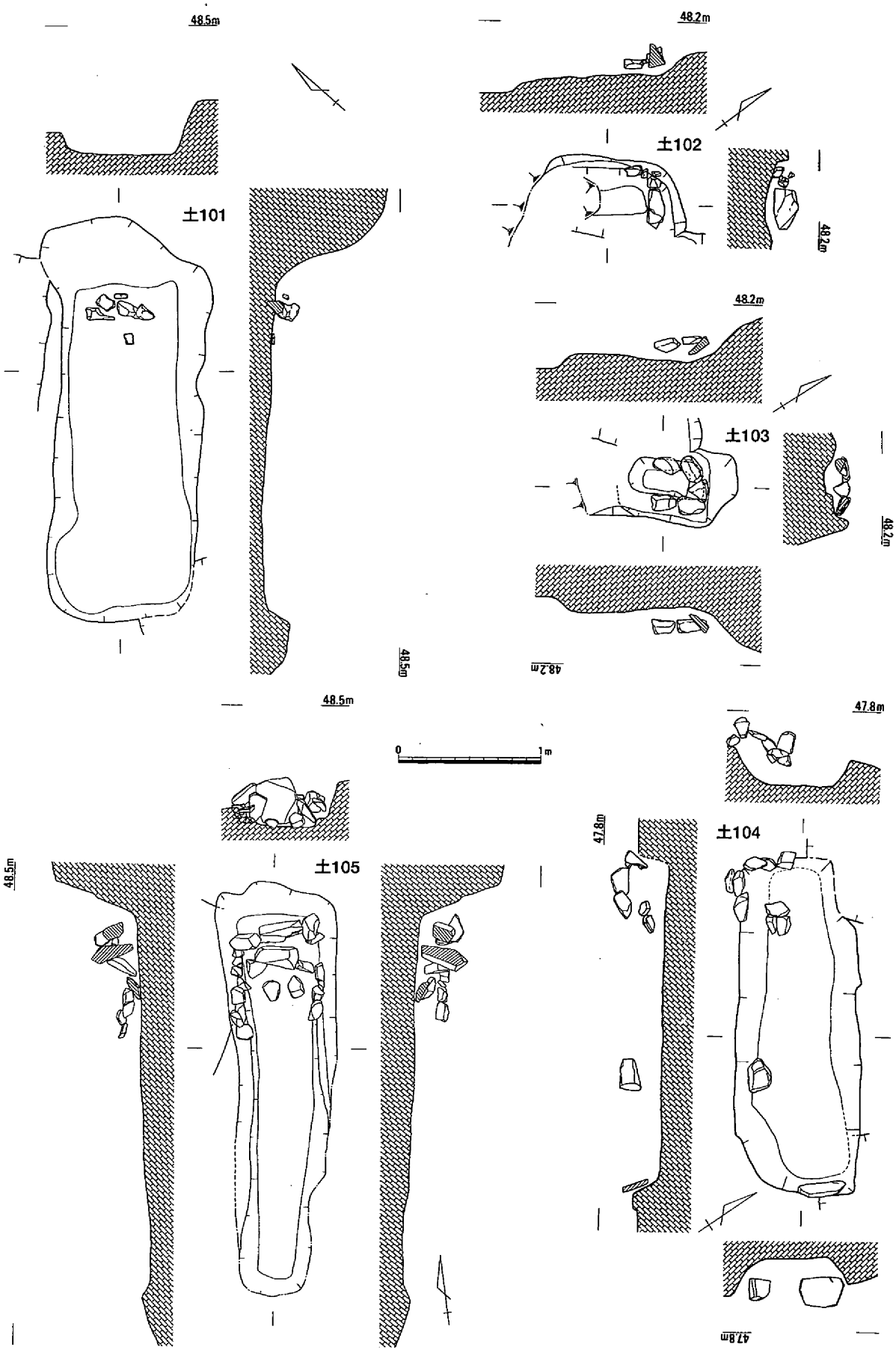
第47図　土壙墓83～87（1／40）



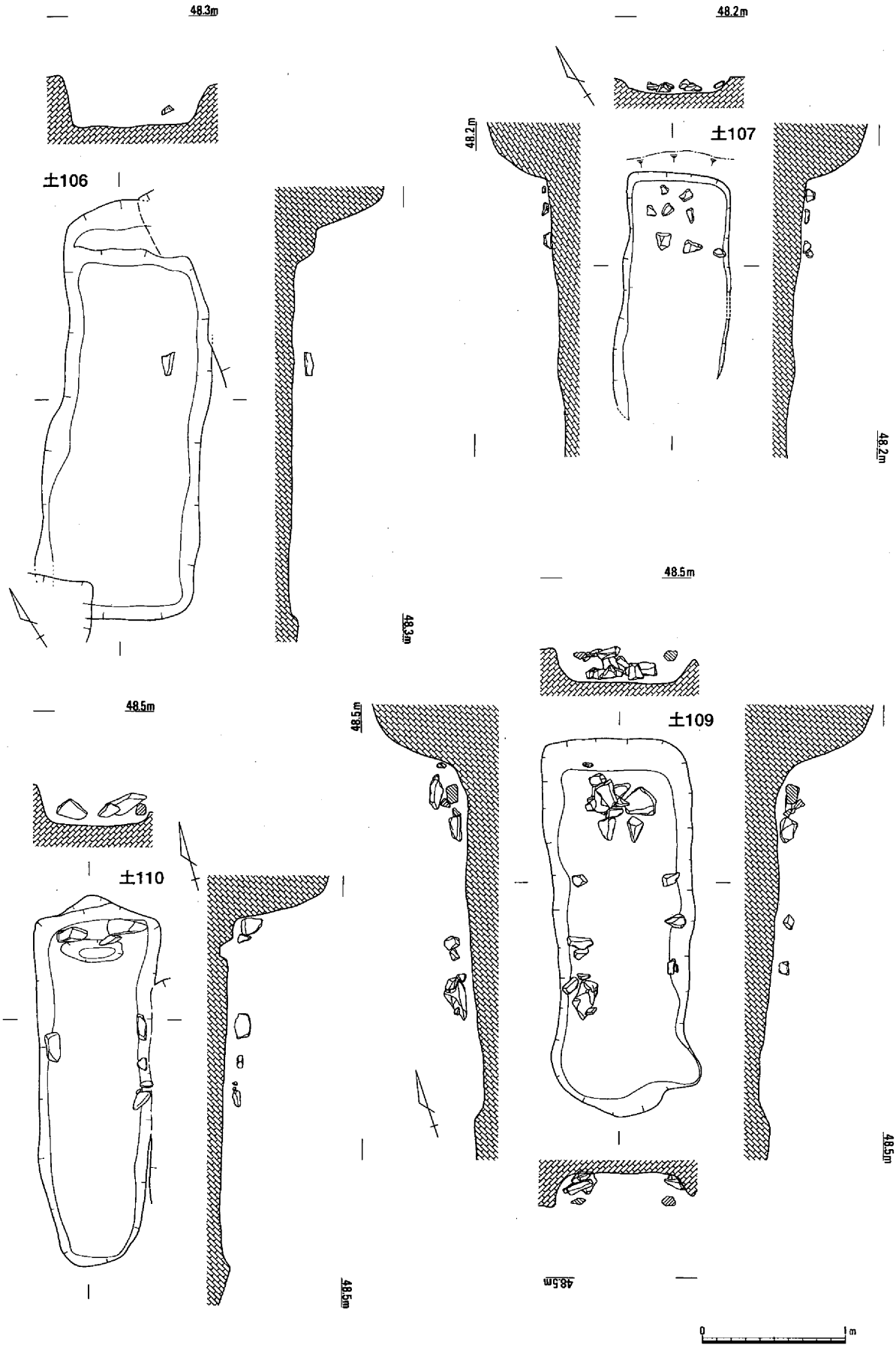
第48図　土壙墓88～93・95・97（1／40）



第49図　土壙墓94・96・98～100（1／40）



第50図　土壙墓101～105（1／40）

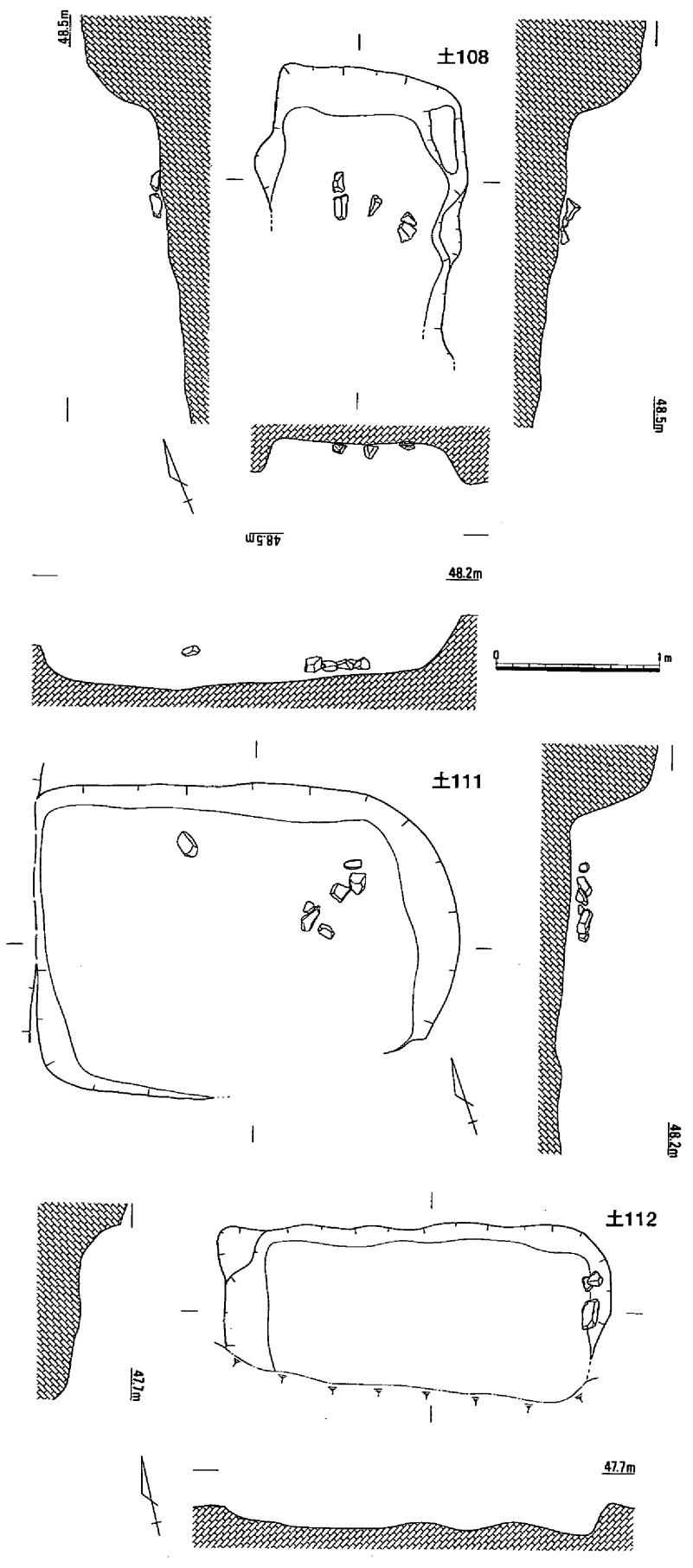


第51図　土壙墓106・107・109・110（1／40）

の土壙墓中、最大規模である。墓壙床面長226㎝、幅174㎝で、ちょうど、この遺跡の一般的なサイズの土壙墓を２基合わせた大きさである。精査の結果、２基の土壙墓が接している状況は見られなかった。床面は、ほぼ平らである。床面の北東部分に、10㎝大の石が６個が不規則に分布していた。これらのうち幾らかは石枕とされていたと考えられるが抽出できない。また木棺痕跡も解明できず、埋葬が一体なのか二体なのか、不明である。

〈土器棺墓〉

３基の土器棺墓がある。土器棺内堆積土を底面から５㎝程水洗したが何も検出されなかった。**土器棺墓12**（第53図）Ｄ群北端部に位置し、土壙墓66を切る。棺身の壺には口縁部から肩部にかけて打ち欠きがみられる。打ち欠き口は20×17㎝程で、この口を斜め上方に向けて壺を設置し、棺蓋の鉢で覆う。**鉢25**は内湾する体部をもち底部が突出する。口縁部外面はヨコナデによる凸凹があり、端部は肥厚しない。調整は内外面ともヘラミガキ。口径37.5㎝、底径12.0㎝、器高21.4㎝。内外面に赤色顔料の塗付がみられる。**壺26**は口縁端部が上下に拡張し、端面に４条の凹線が施される。体部外面はハケメのちヘラミガキ、内面はヘラケズリのちユビナデ上げ。口径19.2㎝。底径15.5㎝、器高57.1㎝。色調は黄橙色。時

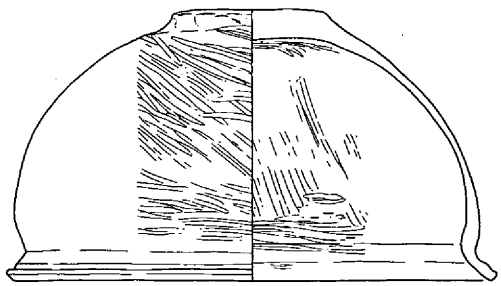


第52図　土壙墓108・111・112（1／40）

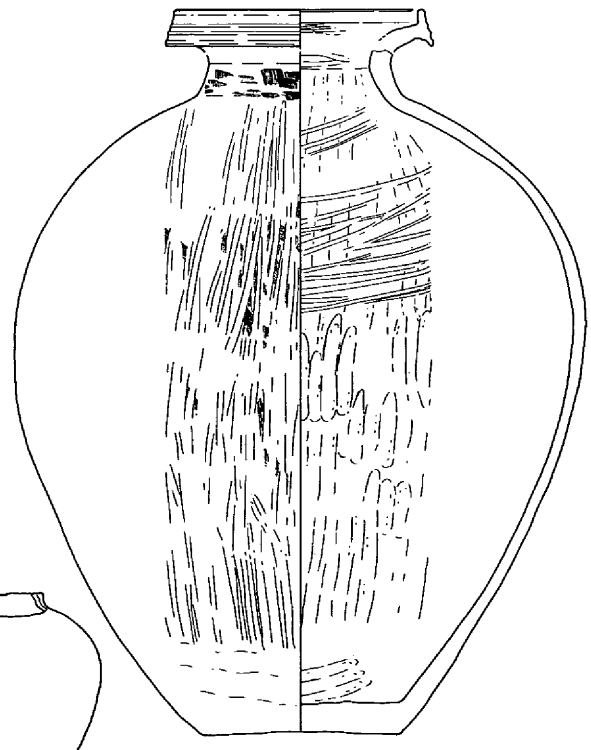
期は、後期中葉でも後半と考えられる。

土器棺墓13（第54図）土器棺墓12の北西約１ｍに在り、土壙墓64を切る。棺身は壺と考えられるが、肩部以上を全て打ち欠いている。打ち欠き口径は約33㎝で、この口を斜め上方に向け設置される。棺蓋の**鉢27**は、口縁部が屈曲して外方へ開き、端部が僅かに拡張する。外面はハケメのちヘラミガキ、内囲はヘラケズリを粗くナデ消している。口径46.0㎝、底径11.1㎝、器高25.5㎝。色調は黄橙色。**壺54**はずんどうとした胴部である。外面はハケメのちヘラミガキ、内面はヘラケズリのちユビナデ上げがみられる。胴部最大径45.0㎝、底径16.6㎝。色調は浅黄橙色。外面に赤色顔料が残存する。時期は後期中葉でも後半と考えられる。

土器棺墓14（第55図）Ｄ群南端に在り、土壙墓108を切っている。棺身の甕は口縁部から肩部上端を1／3程打ち欠き、この打ち欠き口を斜め上方へ向け墓壙に設置する。打ち欠き口は15×17㎝。棺蓋の鉢で打ち欠き口をすっぽり覆う。**鉢29**は「く」の字状に屈曲する口縁をもつ。口縁端部はナデて上方へ引っ張り出している。外面はハケメのちヘラミガキ、内面はヘラミガキ。口径33.6㎝、底径10.4㎝、器高21.2㎝。色調は淡黄色。**甕30**は、胴部が短かくおさまる。口縁端部を上方へつまみ出している。外面は頸部にヨコヘラミガキ、肩部以下、タテヘラミガキ、内面は上半にヨコヘラケズリ、下半にタテヘラケズリ。口径20.1㎝、胴部最大径32.5㎝、底径11.2㎝、器高31.5㎝。色調は橙色。内外に赤色顔料が残存する。時期は後期中葉でも後半と考えられる。



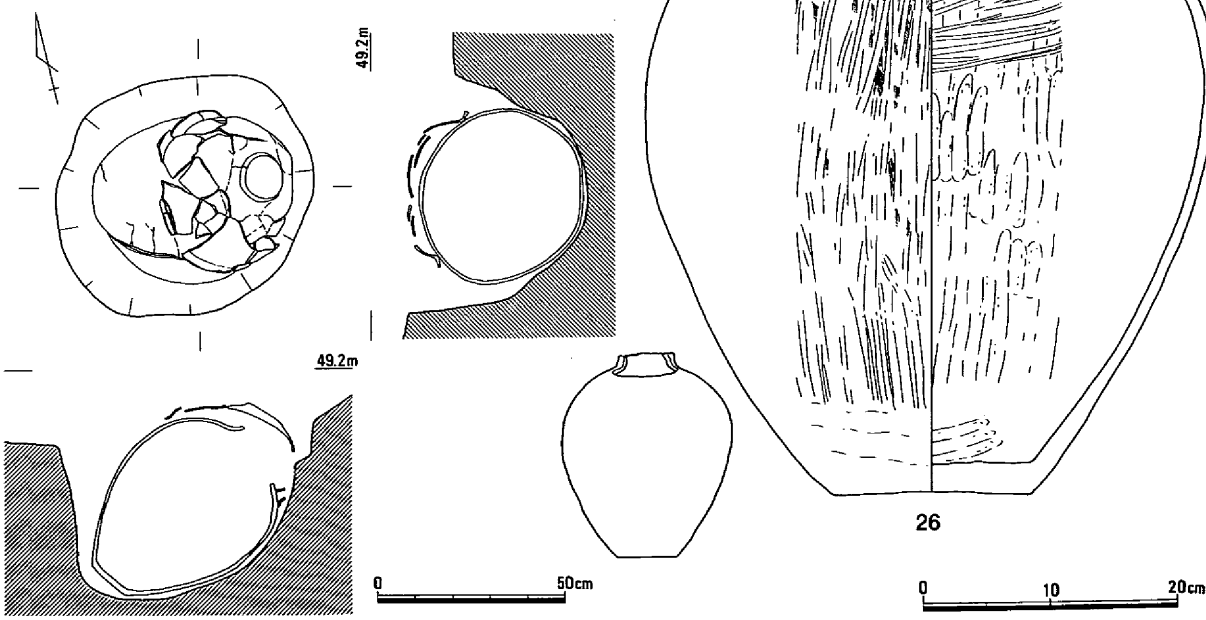
25



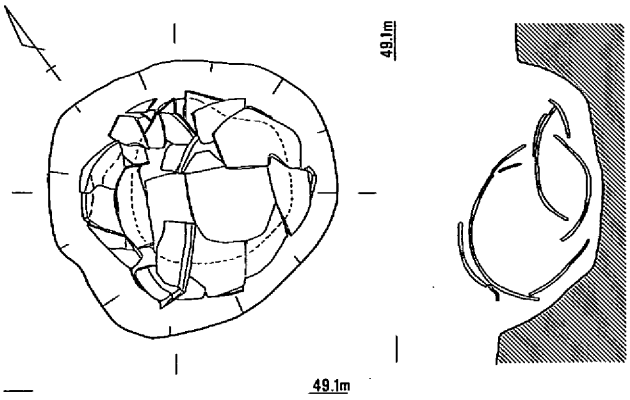
26

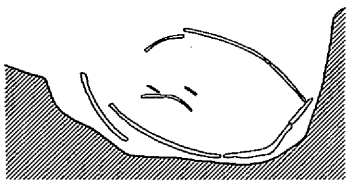
〈箱式石棺墓〉

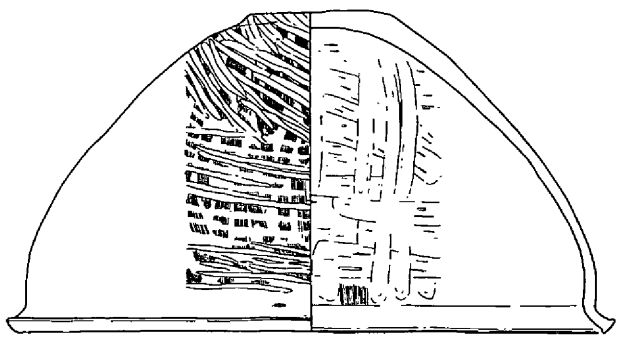
箱式石棺墓２（第56図）南斜面に等高線に平行して在る。土壙墓103、106、107の北東小口部を僅かに切



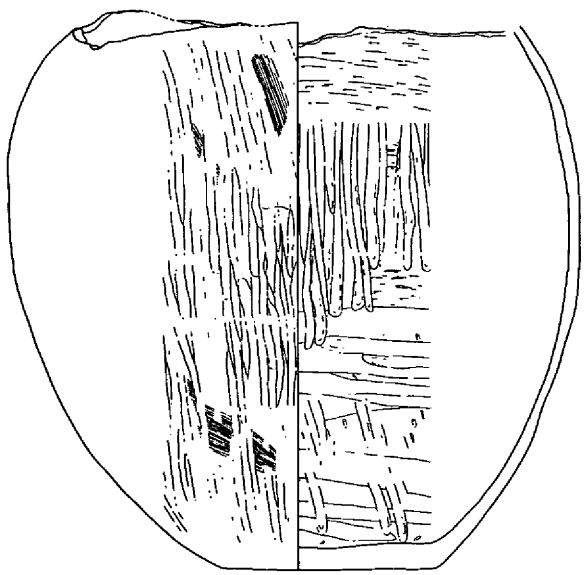
第53図　土器棺墓12　左：遺構、右：土器、中央下：打欠き模式図



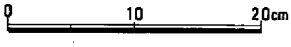




27

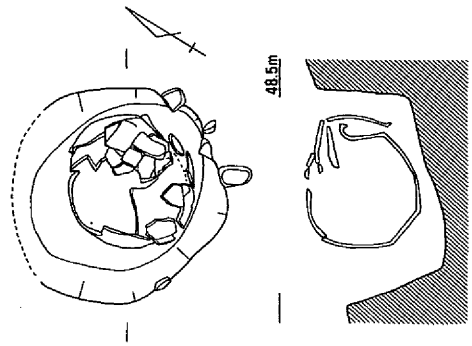


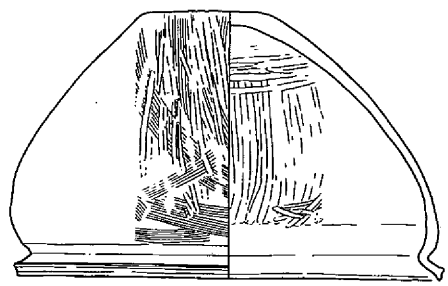
28



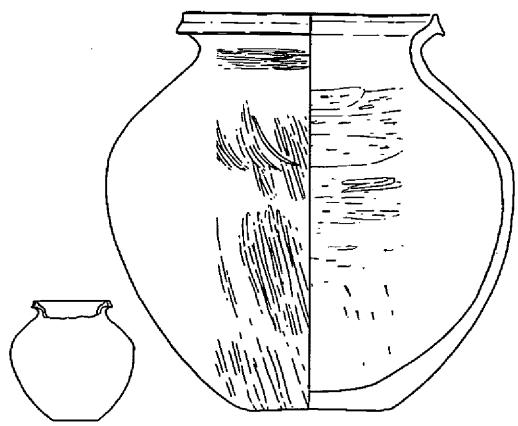
第54図　土器棺墓13
上：遺構、下：土器

っている。また、それら土壙墓の床面と、箱式石棺の床面との比高差は最低でも48cmあり、B群の箱式石棺墓1と同様に、土壙墓よりかなり高い位置から掘り込まれていると考えられる。墳丘盛土、及び周溝などは確認されなかった。石棺上には集石がみられる。集石は、最初、トレンチに当たり、多くを取り除いてしまった。第56図において、石棺上南東半分に集石がみられないの

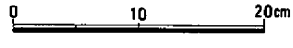




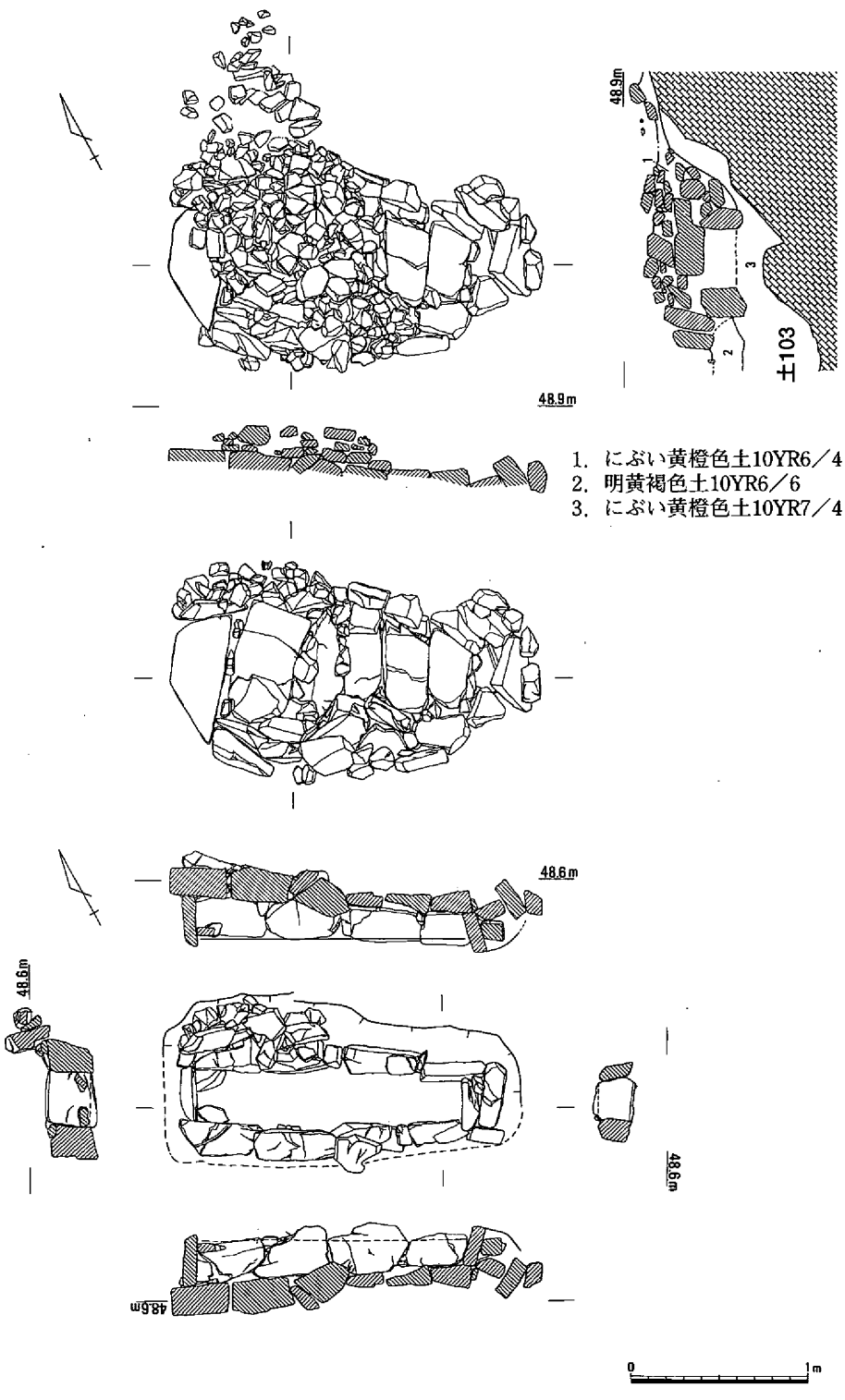
29



30



第55図　土器棺墓14
上：遺構、下：土器
左下：打欠き模式図



第56図　箱式石棺墓２（1／40）

はそのためであり、本来は石棺全体をほぼ覆っていた。集石は天井石に接してあり、北東斜面上方側に多少、張り出しているが、上方より流出してきたとは考え難い。石は大小あるが、10～15cm大のものが多い。墓壙は斜面上方側のみ確認された。かなり傾斜をもつ墓壙壁である。石棺はぶ厚い板石を用い、横位に立て並べている。側石で小口石を挟む。両小口石は各１枚、両側側石は各４枚、天井石に６枚の石を使用する。また石棺石材以外にも、石棺と墓壙壁との間に詰めた、又は、天井石の端を押さえたかたちの石が多数みられる。石棺内床面は非常に不明瞭であった。また北西小口に２石を「ハ」の字状に配置した石枕がみられる。石棺内流入土下半を水洗したが、遺物の検出はなかった。

〈土器溜り〉

土器溜り２（第40図）南西斜面に位置する。「**土壙墓83**」の覧で先述したように、土壙墓83に供献された土器群を含むと考えられる。土器は完形に近い状態のものも多数みられた。土器実測図は「**(7)土器**」で掲載する。

第57図　E群　遺構配置図（1／150）及び、流土中出土遺物（1／1）◉地点

(6)　**E群**（第57図）

西～北斜面にかけて在り、標高47m付近に位置する一群である。土壙墓12基、区画墓1基、石材抜き取り跡かと思われる穴1基が在る。墓は、北端部の土壙墓113～119が密集した状況であるが、土壙墓120～125、及び、区画墓は、比較的疎らになる。土壙墓どおしの切り合いがみられるが、僅かに墓壙の端を切る程度である。前後関係の判明したものは、土壙墓118と117のみで、前者が後者を切っている。

〈土壙墓〉

主軸　すべて等高線に平行か直交する。

規模　E群中、最小規模のものは土壙墓116で、床面長100cm、幅41cmである。最大規模のものは、墓壙の北西側が残存していないが、土壙120である可能性が高い。残存床面長132cm、床面幅95cmである。

小グループ　2基がセットになるものが目立つ。土壙墓117と118、土壙墓121と122、土壙墓124と125である。土壙墓115の墓壙が不明確であるが、土壙墓114と並列している。

木棺の痕跡　土壙墓114の東半分で検出できた。西半分は明確にできなかった。木棺幅41cm。小口板で側板をはさむ構造であろう。

墓壙床の形状　①小口溝、側板溝をもつもの1基（8％）、③床面の中ほどが緩く窪むもの2基(17%)、④床面が平らなもの9基（75%）。②床面に僅かな段差をもつものはない。④の割合が大きいのがE群の特徴である。

副葬品　管玉1点が土壙墓120から検出された。出土位置は、南東小口側の墓壙壁と枕石の間、やや壁よりの床面上である。管玉は、緑色凝灰岩製、最大長14.0㎜、最大径4.0㎜、孔径2.0㎜、重量0.34ｇ。片面穿孔である。また、流土中より、副葬されていたと考えられる管玉1点が出土した（第57図）。出土地点は、石枕抜き取り跡と考えられる穴と土壙墓121のほぼ中間（第57図の◉地点）である。緑色凝灰岩製、最大長21.0㎜、最大径8.0㎜、孔径2.0㎜、重量1.96ｇ、片面穿孔である。D群、あるいはA群からの流出と考えられる。

赤色顔料　検出されなかった。

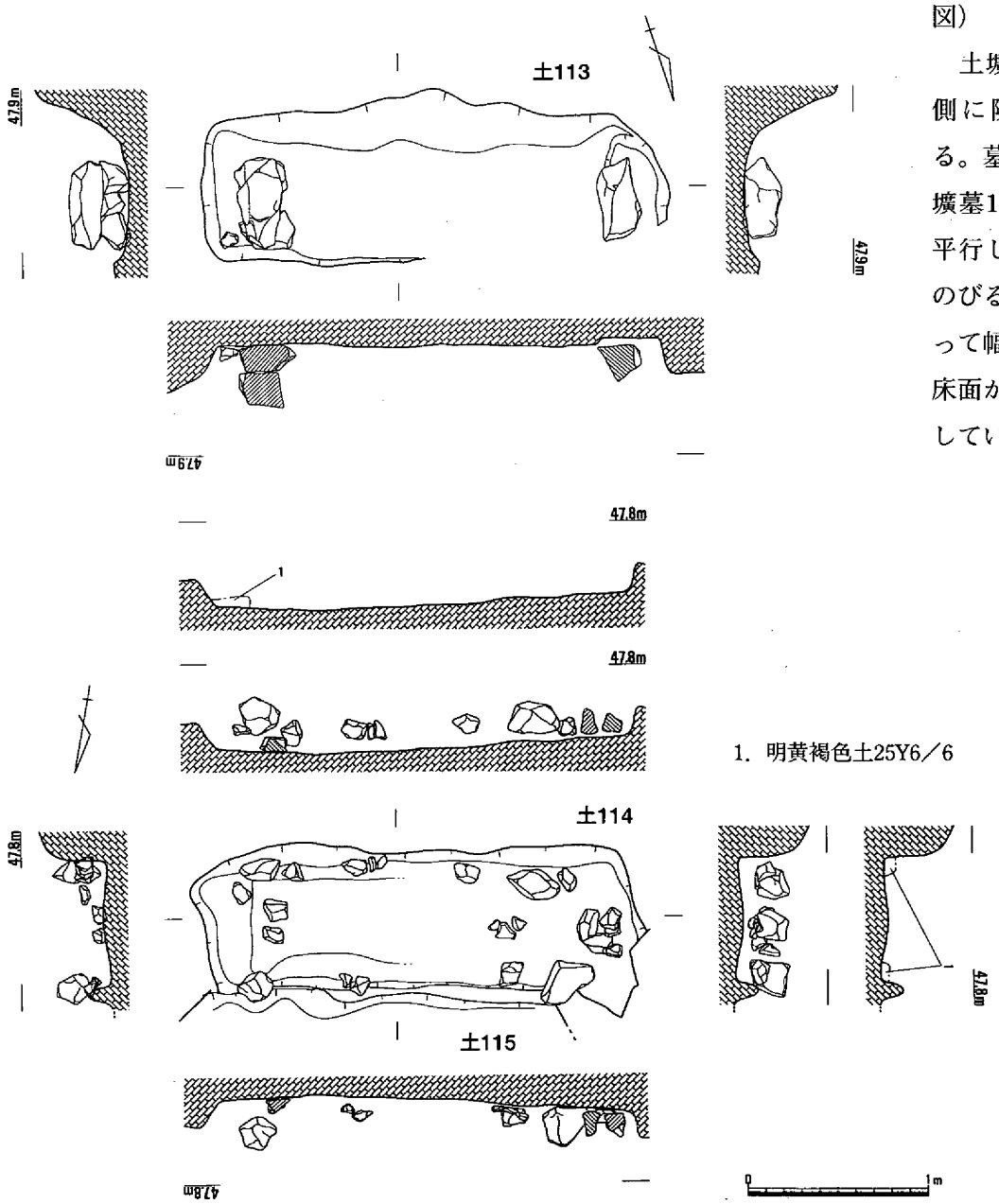
石枕　石材の形状、配置状況から明瞭であるものは、土壙墓114と土壙墓120で、共に２個の石材をハの字状に配置する。土壙墓118には、４個の石があるが、２個の石を八の字に配置し、残りの２石を添えていると理解したい。土壙墓121も石枕をもつのかもしれない。石材２個を使用した石枕が主体である。

土壙墓113（第58図）

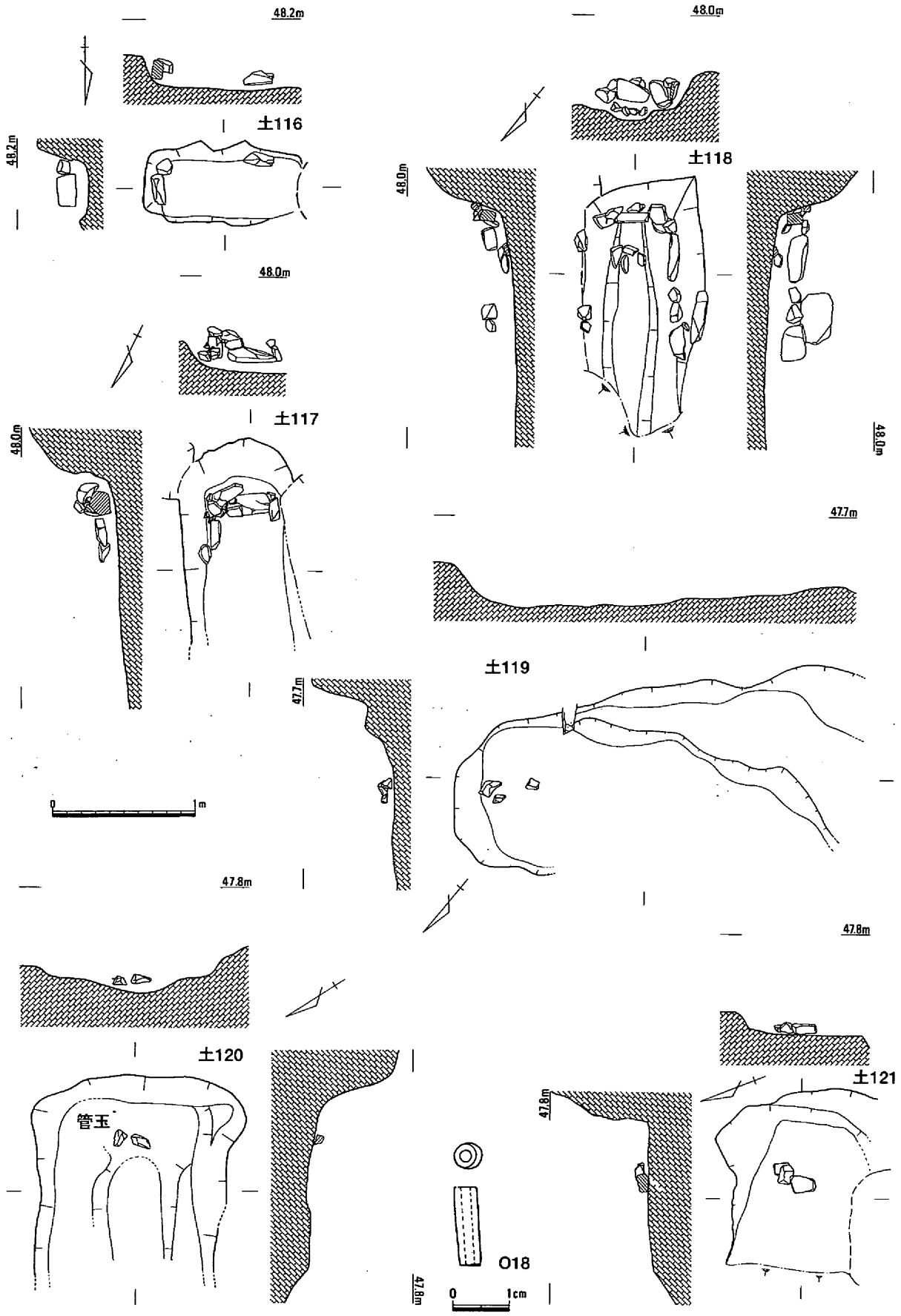
E群の最北端に位置する。等高線に平行して作られている。床面長246cm、幅66cm。両小口部に大きな石を配している。東側のものは４つの石材を組み合わせている。２段に石を積んでいる。下段は、20cm大の石を３個、並列させて並べ、その上に50×25×10cmの石を渡している。西側には、長さ45cmの石を1個配している。この石の直下には、浅い小口溝がある。

土壙墓115（第58図）

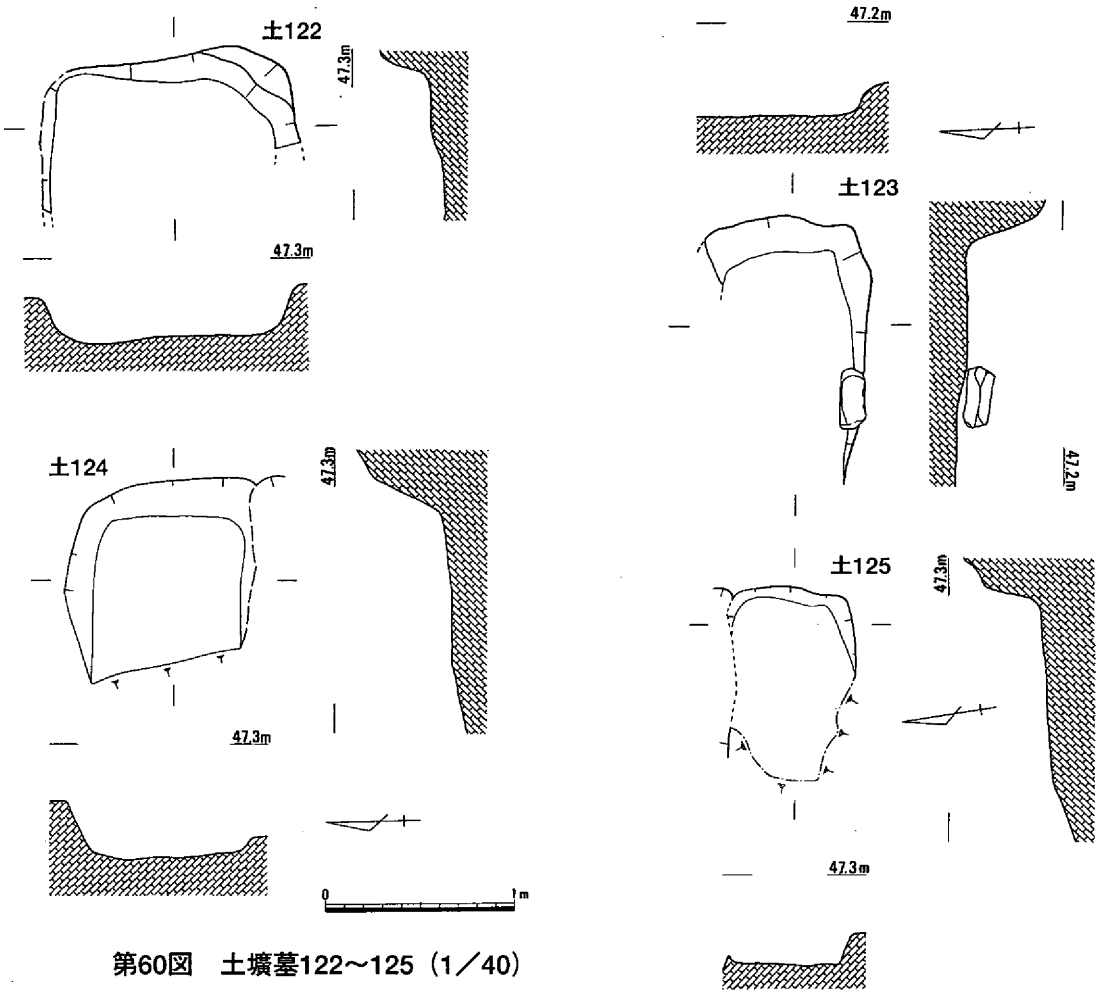
土壙墓114の北側に隣接している。墓壙南壁は土壙墓114の北壁と平行して215cm程のびる。それに沿って幅７cm前後の床面が僅かに残存している。



第58図　土壙墓113～115（1／40）



第59図　土壙墓116～121（1／40）及び土壙120出土遺物（1／1）



第60図　土壙墓122～125（1／40）

〈区画墓〉（第61図）

E群の南端に位置する。西斜面に立地する。斜面に２ケ所、等高線に直交する幅約1.5ｍの浅い溝を掘っている。この溝によって南北を区画し、上面を多少整形し作り出された平坦面は、南北2.4ｍ、東西1.8ｍの長方形を呈する。溝の底と平坦面の比高差は最大で20㎝程である。平坦面の西縁から斜面下方にかけては、表土下に岩盤があり、もともと、僅かに張り出したような地形があったらしい。盛土の有無は不明である。

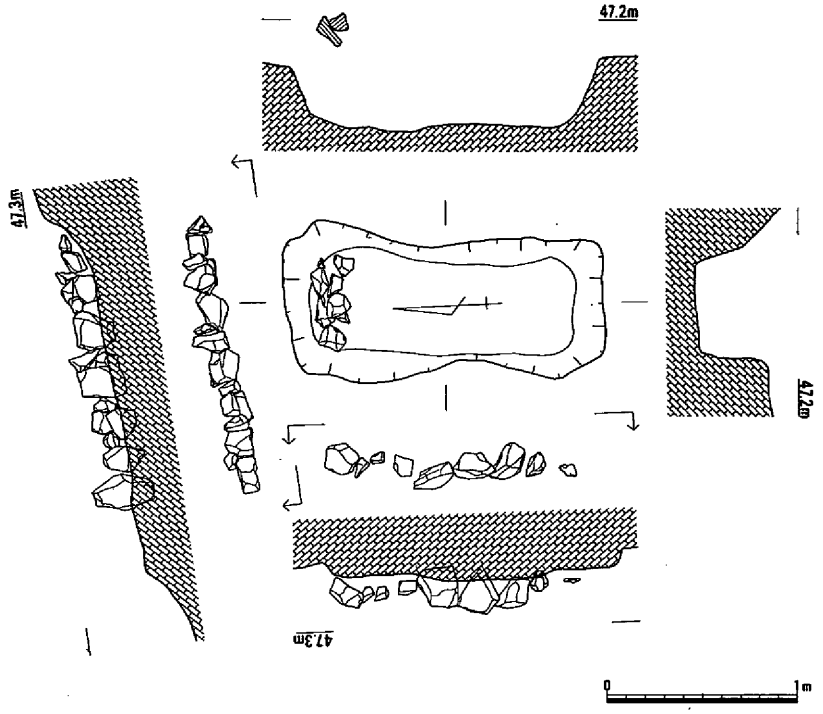
この平坦面の北縁辺と西縁辺に石列がみられた。当初、この２本の石列は、土壙墓の墓壙壁と木棺の間に詰めた石材であり、土壙墓３基が規則的に配置されているように考えられた。しかし、石列を伴うと考えた２基の土壙墓床面の標高と、中央の土壙墓床面の標高が著しく違う点、石列が、平坦面の端に、きれいに並ぶ点、平坦面を区画する浅い溝の存在などから、２列の石列は平坦面と中央の土壙墓に伴うものであると判断した。石列の残存長は、北側のものが約1.5ｍ、西側のものが1.2ｍで、石列は北側のものが残りが良い。両列とも20㎝大の角礫を内側、つまり平坦面の側に面をそろえて、縦位に立て、それらの間にやや小さめの石を配している。石列石材の下端は地山に接しているが、掘り方、及び根固めしたような土層は検出できなかった。本来、これらの石列が墓上に露出したものであるのか、ないのか、解明できなかった。また、南側に石列がみられないが、流れてしまったのか、当初から存在しないのか不明である。

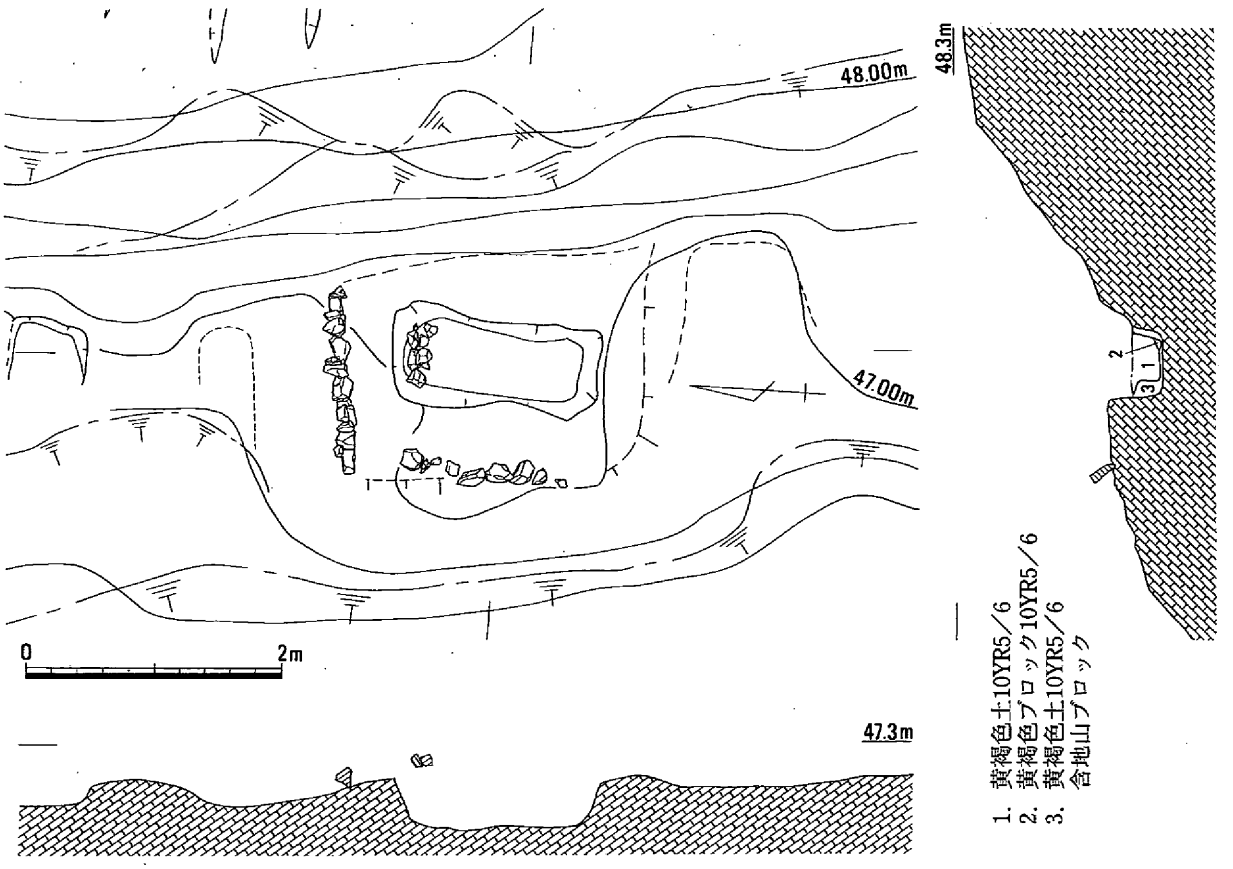
主体部は土壙墓１基である。平坦面の中央に位置し、等高線に平行に作られている。墓壙の主軸と石列の主軸は、ほぼ平行と直角になる。墓壙床面の寸法は、137×49㎝、残存高49㎝である。前山遺跡の土壙墓のサイズの中では、中間サイズといえる。平面では確認できなかったが、横断面で木棺痕跡の土層を確認した。木棺幅33㎝である。また、墓壙北側小口部の埋土上に、集石が検出された。10～20㎝大の石が８個前後、墓壙北縁から20㎝程内側に、東西に長く、墓壙幅におさまって集石されている。墓壙底から40㎝上方にあり、墓の目印のようなものかもしれない。

副葬品は無い。

〈石材抜取り痕跡か？〉

1.0×0.7ｍ、深さ40㎝の穴である。にぶい黄橙色土で埋まっており、床面は岩盤に当たり凸凹である。





第61図　区　画　墓
上：主体部と石列（1／40）　下：地形図（1／60）

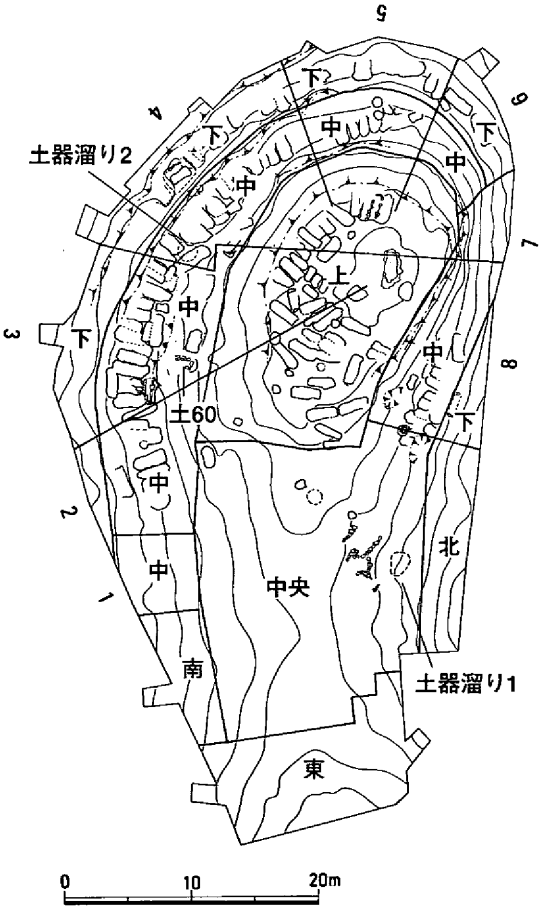
(7) 土　　器

土壙墓などに供献されたと考えられる土器は、尾根先端部を中心に斜面にかけて出土した。ほとんど全て流土中からの出土で、上方から流出した土器片との分別が困難な状態であり、残念ながら個々の遺構の時期を明らかにできない。しかし、幸いにも調査中に、斜面下方へと調査区の拡張を繰り返したことで、土器の出土地点の上下方向の区別が明確に行えた。また、横方向の区別も、斜面に設定したトレンチ間単位で土器を袋詰めしたことで、比較的細かく出土地区を限定できる。A～E群のどこで造墓が開始され、どこで終了したのか。造墓は各群において、併行して行われたのか、それとも、順々に墓域を移していったのか。

このような問題を念頭に置き、土器整理の段階では、斜面下方の土器片を上方の土器片と接合させ、流れ下った土器片をできるだけ元の場所へ返す作業に時間を割いた。作業は思った以上に難かしく、完全に行えたと確信できるものではない。20数点土器片が上方の土器片と接合した。斜面の最下方（E群）出土の土器片が、頂上部（A群）出土の土器片と接合した例も数点みられた。

土器の出土地区分けは第62図のとおりである。尾根先端部は、頂上の緩斜面を上地区、斜面は上下2段に分かれ、上方を中地区、下方を下地区とする。横方向の区分は、南端から時計回りに1～8地区に分かれる。上・中・下と1～8を組み合わせて、出土地区を示す。上地区は、横方向の区分に不明確な点があったので、一括した。また尾根鞍部の中央地区は、前山1・2号墳の墳丘及び旧表土以下の層の掘り下げ時に出土した土器を示す。北東斜面に在る土器溜り1は上方の土器が流れ下ったものと考えられるので中央地区の中に置く。中央地区の南西側斜面下方を南地区、北東側斜面下方を北地区、南東側の尾根が上がってくる所を東地区とする。

出土土器全体の状況を概観する。総個体数は400から500個体程度と考えている。器種は、壺形土器、甕形土器、高坏形土器、鉢形土器、器台形土器、蓋形土器（以下、壺、甕、高坏、器台、蓋と略す）、小形の壺・高坏・鉢・器台、装飾された高杯・壺、その他、器種不明の土器も僅かにある。吉備地方のいわゆる「特殊器台、特殊壺」と呼ばれるものは、全くみられなかった。出土器種のうち半数を占めるのは高坏であり、次いで、甕及び小形の土器が多い。赤色顔料を塗付された土器は、高坏に多く、直口壺、鉢、器台などにみられるが、全体に占める割り合いは多くない。穿孔された土器もある。壺、甕の底部、あるいは胴部下半に主に見られる。祭祀用と考えられる小形の壺や鉢、脚付壺の胴部にも穿孔されている例が僅かにある。また胎土は、石英、長石を主に含み、橙色に発色したもの、あるいは、精製粘土を使用したものがほとんどであるが、中に僅か1％程、備中南部の高梁川以西によくみられる角閃石を含み、茶褐色に発色した胎土をもつ土器が存在する。



第62図　弥生土器出土地区分け

上地区出土土器（第63・64図）上地区の土器は、もとから上地区にあったと考えられる。後世に斜面下方へ流れ落ちる可能性はあっても、斜面に在った土器が上地区へ上ってくる可能性はほとんどないので、上地区出土土器はA群の墓群に供献された土器と考えられる。実測可能土器片の約90%を掲載できた。土器は小片が多く、表面が風化したものも多い。壺は、長頸壺の口縁部と思われる31がある。端部が肥厚し、端面に凹線がみられる。甕には、口縁端部を肥厚し、端面に凹線を施す33、口縁部を外方へ折り曲げるだけの34、口縁部上面端部をナデて僅かに窪ませる48・49、口縁端部が上方へ立ち上がる65・66・67・79・80などがある。79は1㎜大以下の砂粒を多く含む胎土である。高坏の口縁部では内外に拡張し、上面端部はナデられ僅かに窪む35、屈曲して斜め外方へ拡張する36・37、口縁部内面に段をもち、口縁部上半がやや肥厚し僅かに外湾する38・39・40・41、緩く屈曲して開く52・53・54、外湾する83・84・85・86・88・89などがある。脚部には緩やかに開いて端部が肥厚する42・43・44・97・98・99・100があり、2㎜以下の砂粒を含む胎土。42～44は、脚端部の外方への突出が比較的鋭い。42・43には径5㎜程の竹管文がみられる。97は器台かもしれない。長脚のものは55のみで他は短脚である。鉢には大形の46・57・58・77がある。土器棺の棺蓋とも考えられるが、セットとなる壺、甕の土器片がなく、供献されたものと考えたい。口縁部が屈曲して立ち上がる72・90、内湾しておさまる102がある。器台には59・104がある。104の胎土は角閃石、黒雲母を含み赤褐色を呈する。小形土器には直口壺の60・78・105・106があり、106には横方向の細く粗いヘラミガキがみられる。小形の甕81、鉢91もある。装飾された土器61～64がある。63・64は同種の施文具を使用しており、同一個体と考えられる。脚台45・47・103がある。時期は後期前葉から末葉までみられる。

1中地区の土器（第65図）出土土器数は非常に少なかった。109以外は、溝状の窪みにまとまって検出され、完形に近ものが多い。壺107は、口縁上面の貝背面による施文は6個のみで口縁端面には不規則な鋸歯文がみられる、甕108・109には底部や胴部下半に穿孔があり、胎土は共に砂粒を多く含む。高坏110・111、脚付直口壺112は、脚裾部1／4のみを欠損する。時期は後期後葉である。

2中地区出土土器（第66・67図）1中地区に比べると、出土土器数が格段に増える。壺116～118・128は、口縁部が大きく外方へ開く。132の底部には外からの穿孔がみられる。甕は、口縁部が内面に稜をもって屈曲して開く121・122・131と、あまり稜をもたないもの119・120・129がある。131は口縁端部を上方へ引っぱり出している。底部には、直線的な胴部下半をもつ123・124、丸味をもつ133～135がある。高坏口縁には、端部が斜め外方へ拡張し坏部外面に多角形ヘラミガキのある113、内面に稜をもつ125、外湾する136、短かく立ち上がる138・139・152がある。113は3㎜大以下の砂粒を多く含む胎土で、器面の風化が著しく、この形態のものは113の1点のみである。脚部は、114以外はすべて短脚のものである。130の脚柱部下端には半円形の刺突文が巡る。149は、脚付直口壺かもしれない。脚裾内面に布目圧痕（縦6本／㎝、横7本／㎝）がある。鉢153には高坏152と同様の細かく粗い横方向のヘラミガキがみられる。器台150は胎土に角閃石を多く含み、内外面に赤色顔料の塗付がみられる。151は直口壺、127は装飾高坏と思われる。時期は後期前葉から末葉までみられるが、中心は中葉から後葉である。113の高坏は上方から流れ落ちた可能性もある。

3中地区出土土器（第68・69図）出土土器数は非常に多い。甕には、口縁端部の立ち上がりがあまりみられない155と、よく立ち上がる162・164がある。底部は底面の器厚が薄いもの163・165がある。161は台付の甕だろうか。高坏には、口縁部内面に稜をもつもの156・157、外湾するもの166・168～170、外傾するもの167・197、短かく立ち上がるもの171、外湾あるいは外傾して長く伸びるもの191

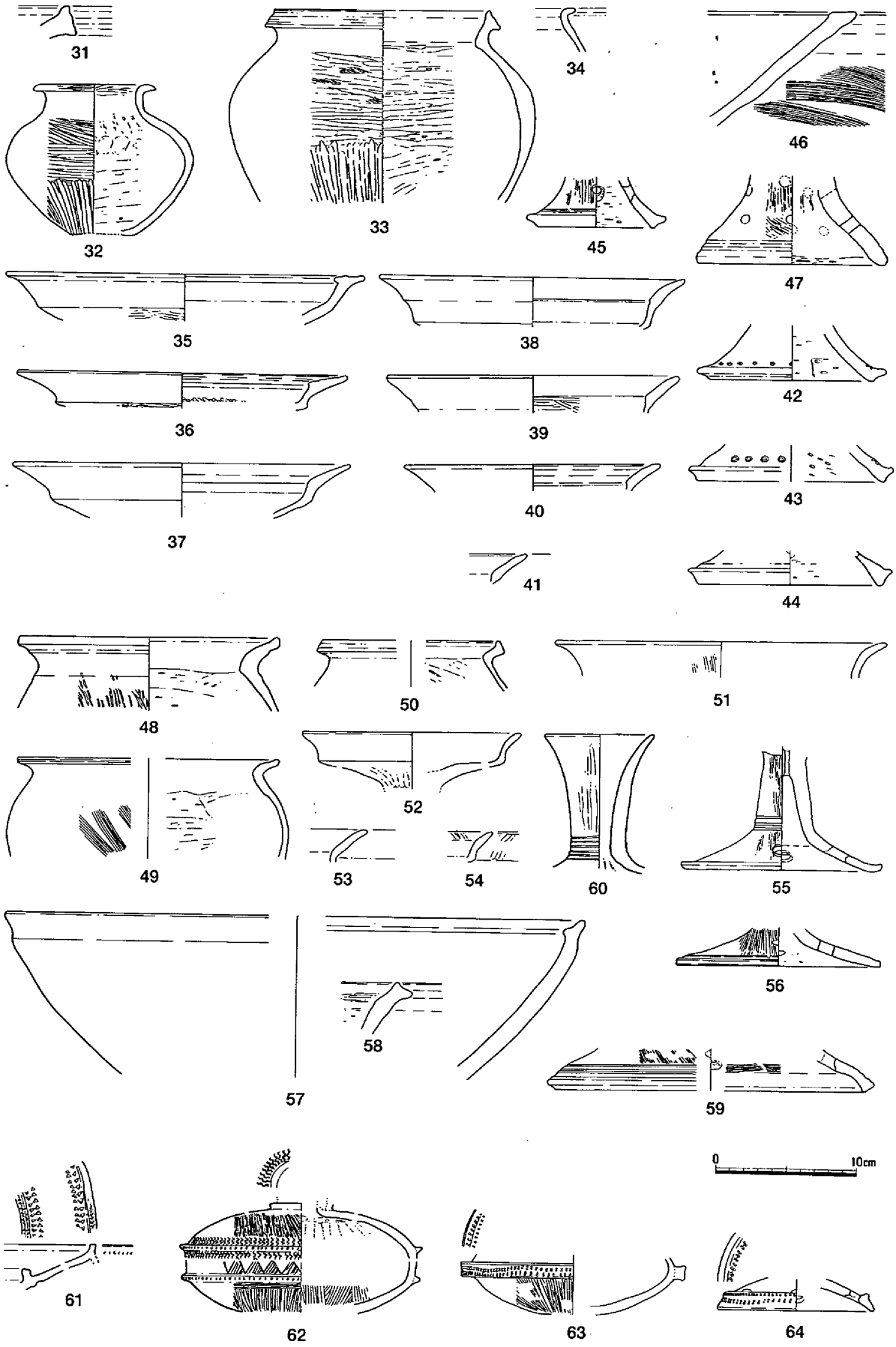
～196がある。158は円盤充填で摩滅している。157の口縁下半部内面には横方向のヘラミガキが入る。鉢には、各種あり、浅い皿状の181、肩部をもつ182、口縁端部が屈曲して開き、深い183と底部185・186がある。直口壺には187・188がある。小形土器には、甕154、高坏172・173、鉢184、直口壺198～200がある。装飾されたものでは、189は、高坏であろうか。口径23.5㎝。190は、小型の壺か。時期は、後期前葉から末葉と思われ、特に後葉から末葉の土器が多い。

3中地区・土壙墓60周辺出土の土器（第70図）C群に属する土壙墓60の周辺から出土したものとして3中地区出土土器の中でもD群には伴わない土器として区別できる。大形の鉢201・202、壺203・204、高坏205～207がある。時期は後期中葉から末葉の土器がみられるが、高坏206・207の末葉の土器がこの地点で出土することは注意される。

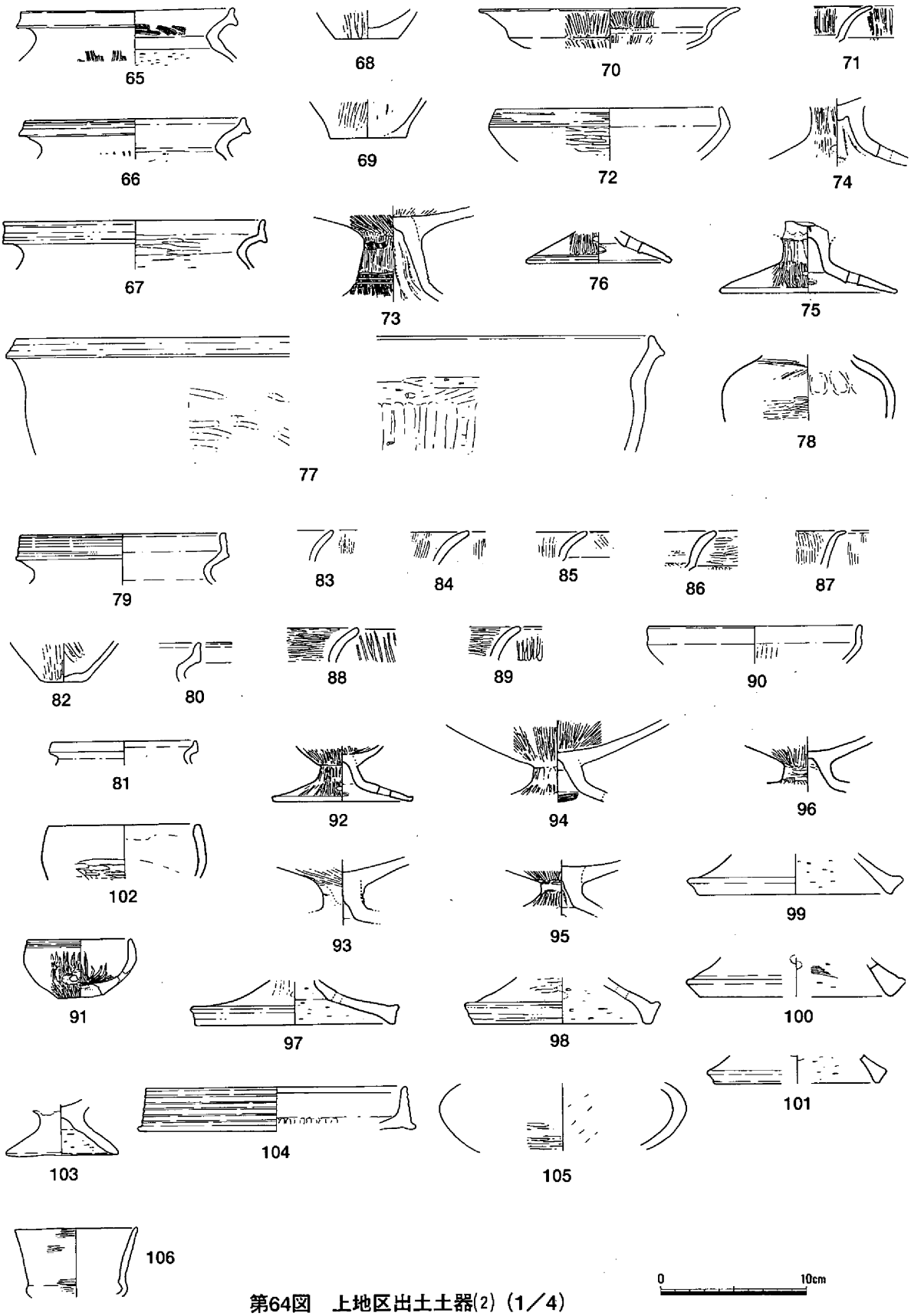
4中地区出土土器（第71図）4中地区の中で土器溜り2以外から出土した土器で、出土量は少ない。甕の底部211、高坏では、口縁部が外湾するもの212、外傾して長く伸びる222。高坏脚部では、長脚208、短脚213・214、脚端面に沈線の入る215、脚端が肥厚する216がある。鉢217、直口壺219と口縁部が外傾して長く伸びる221がある。小形の鉢218、小形の脚付直口壺220、また装飾高坏209・210がある。時期は後期中葉から末葉と考えられる。

4中地区出土土器―土器溜り2―（第72・73図）多量の土器が集中して出土した。土壙墓83に伴う土器群を含んでいる。壺261の胎土は、3㎜大以下の石英・長石を含み、にぶい橙色を呈する。甕には、口縁端部が上方へ僅かに引き出される223～225・230、口縁部が「く」の字状に屈曲して開き、端部は丸くおさまり、不安定な底部をもつ262がある。262は完形で出土した。高坏には、口縁部が外湾する226・231～234、短かく立ち上がる235、外傾して長く伸びる263がある。脚部は、241の脚端が肥厚するもの以外はすべて短脚。227が僅かに長めか。鉢には、口縁部が短かく立ち上がり、端部が丸い242～244のみみられる。器台はない。直口壺259、蓋260がある。小形の土器は多くある。胴下半部に穿孔された壺229、脚付の壺248は、短い頸部から屈曲して開き、さらに端部か上方へ立ち上がる口縁部をもつ。類例をみないものである。247も、同様の器形と考えられる。高坏236～239は内傾する口縁部をもつ。鉢245は、内からの穿孔がある。脚付直口壺249～257・264・265がある。255・256は、口縁部の形状が236の高坏と似ており、高坏とも考えられる。小形の手捏ね土器・鉢246には赤色顔料の塗付がみられる。装飾された土器には、壺258と高坏の脚と思われる228がある。時期は、高坏脚部241の判断に苦しむが、後期後葉から末葉にかけてであり、特に後葉の小形土器が多い。

5中地区出土土器（第74・75図）3中・4中地区に次いで出土量が多い。壺と考えられる266は口縁端部が肥厚し、端面に凹線が施される。甕は271～274・283・284・287・288があり、283・284は口縁端部の立ち上がりが、他より、やや発達する。高坏には、口縁端部が斜め外方へ拡張される267、口縁部が外湾する268・269・290～294、外湾ぎみに長く伸びる315、外傾する316・317がある。特に外湾するものの中で268と269は大形である。268は口径は推定35.2㎝。269は、口径32.6㎝。両者とも細かく丁寧なヘラミガキが施されている。高坏脚部は長脚の276が1点みられたのみで、他は短脚で、脚端部にクセをもつ296・297・300・301がある。鉢303、直口壺は多く、279～282・305～310があり、口縁部が比較的広く短いものと細かく長いものがある。装飾された土器には、高坏270、肩部にヘラ描沈線による連続S字状文が描かれ、突帯の付く壺311、312・313・314は器形が定かでない。312と313は口縁端部が上下に拡張される。312の傾むきは小片のため自信がない。314は、4中地区出土の258の土器に類似し、壺、あるいは器台であろう。小形土器では、甕275・285・286、高坏299、鉢304があ



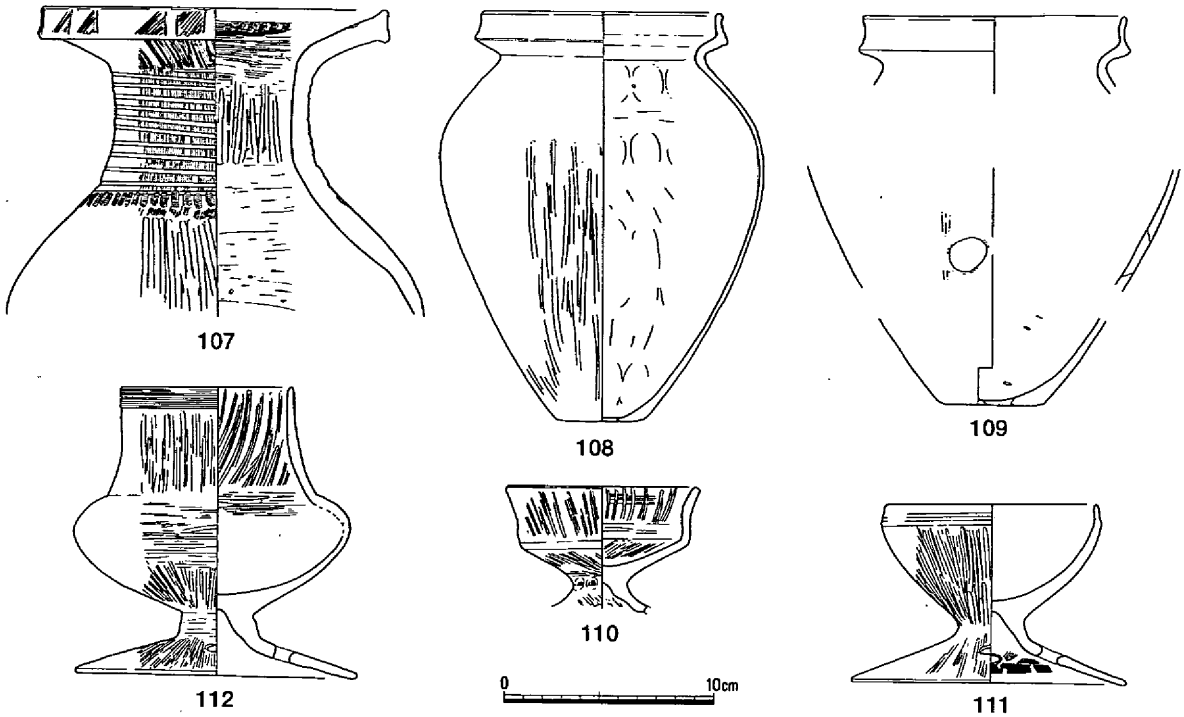
第63図　上地区出土土器(1)（1／4）



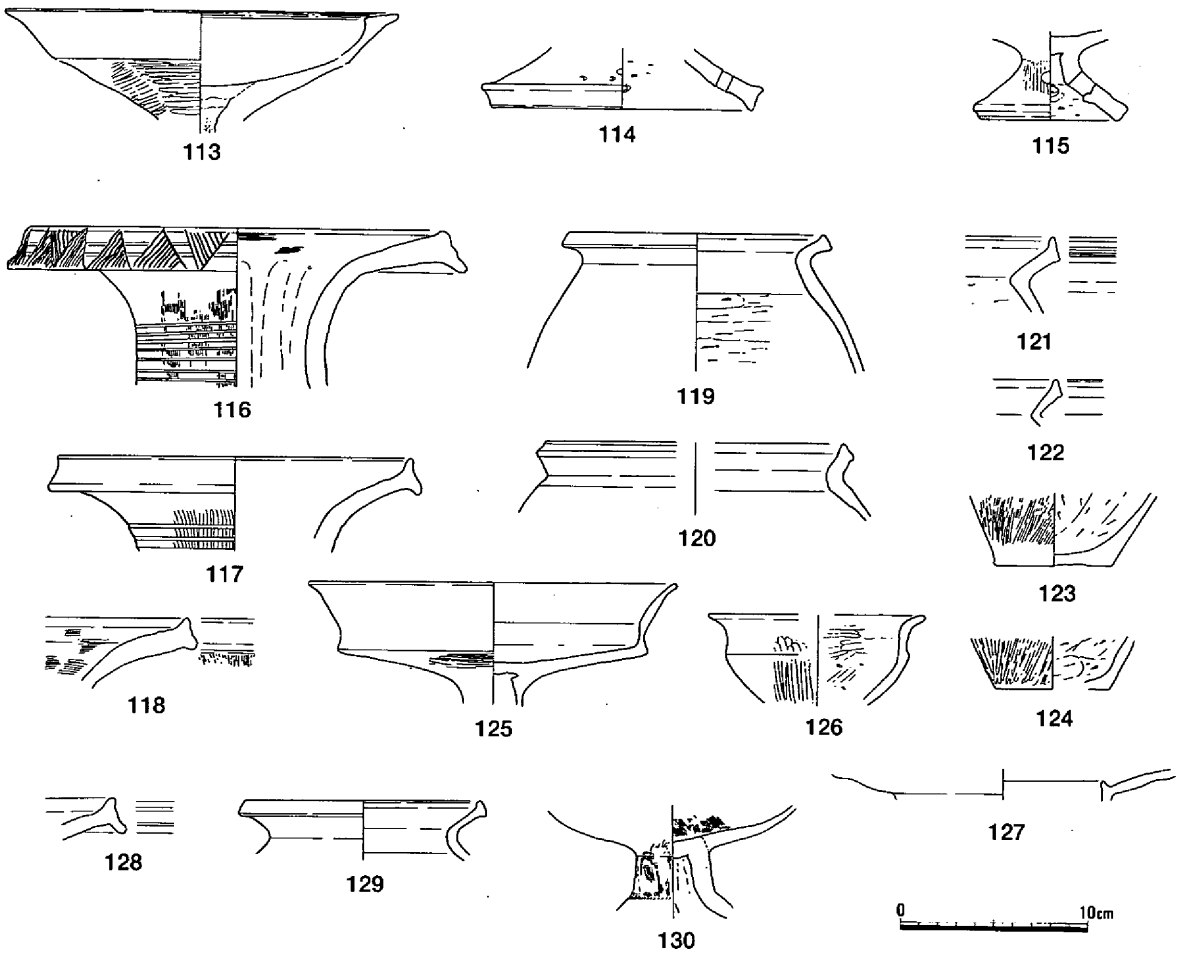
第64図　上地区出土土器(2)（1／4）

る。277、302は壺、甕の台と考えられる。時期は後期中葉から末葉。特に後葉の土器が中心である。

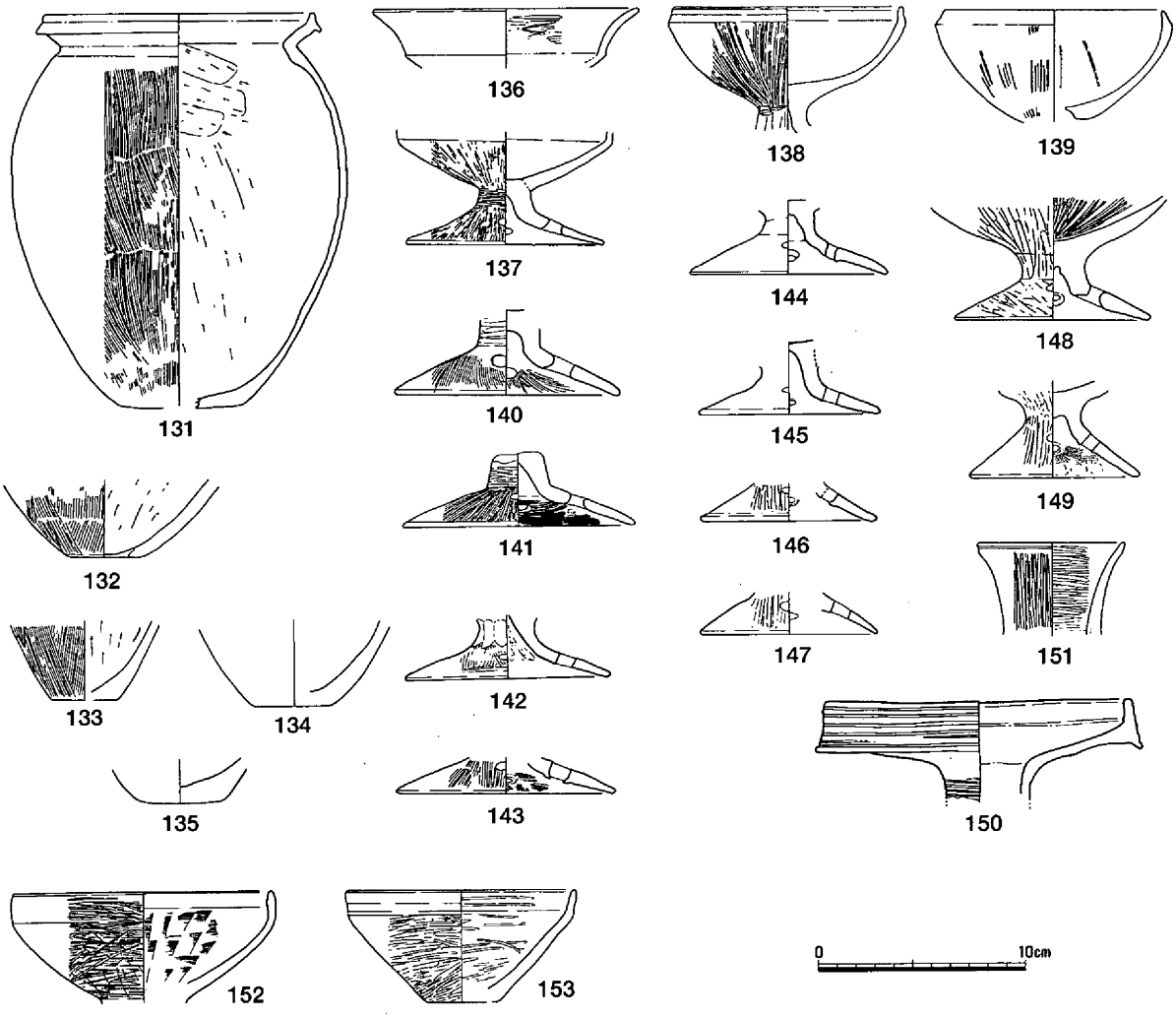
6 中地区出土土器（第76図）出土量は少ない。320は小形の脚付直口壺だろうか。322の胎土は、1㎜



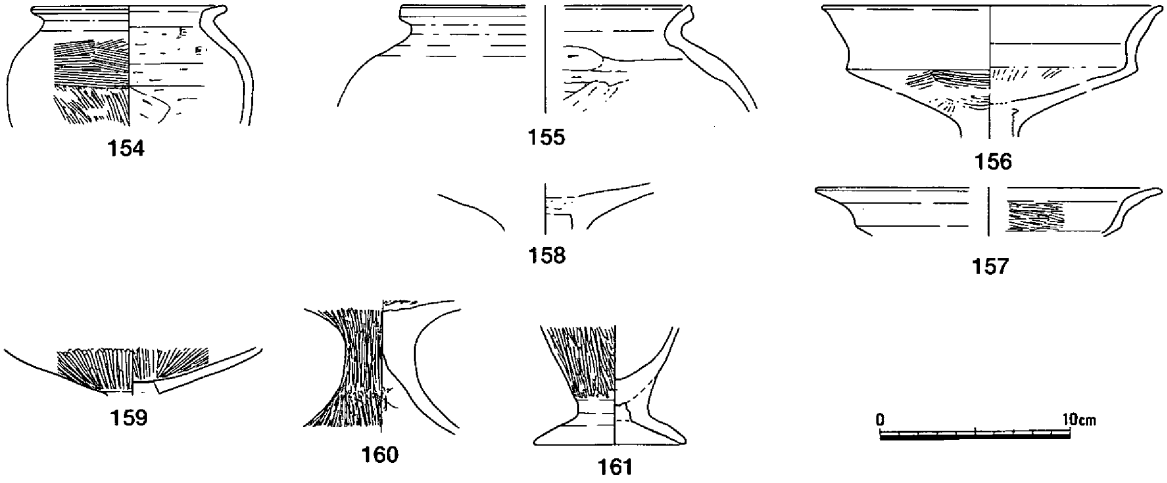
第65図　1中地区出土土器（1／4）



第66図　2中地区出土土器(1)（1／4）



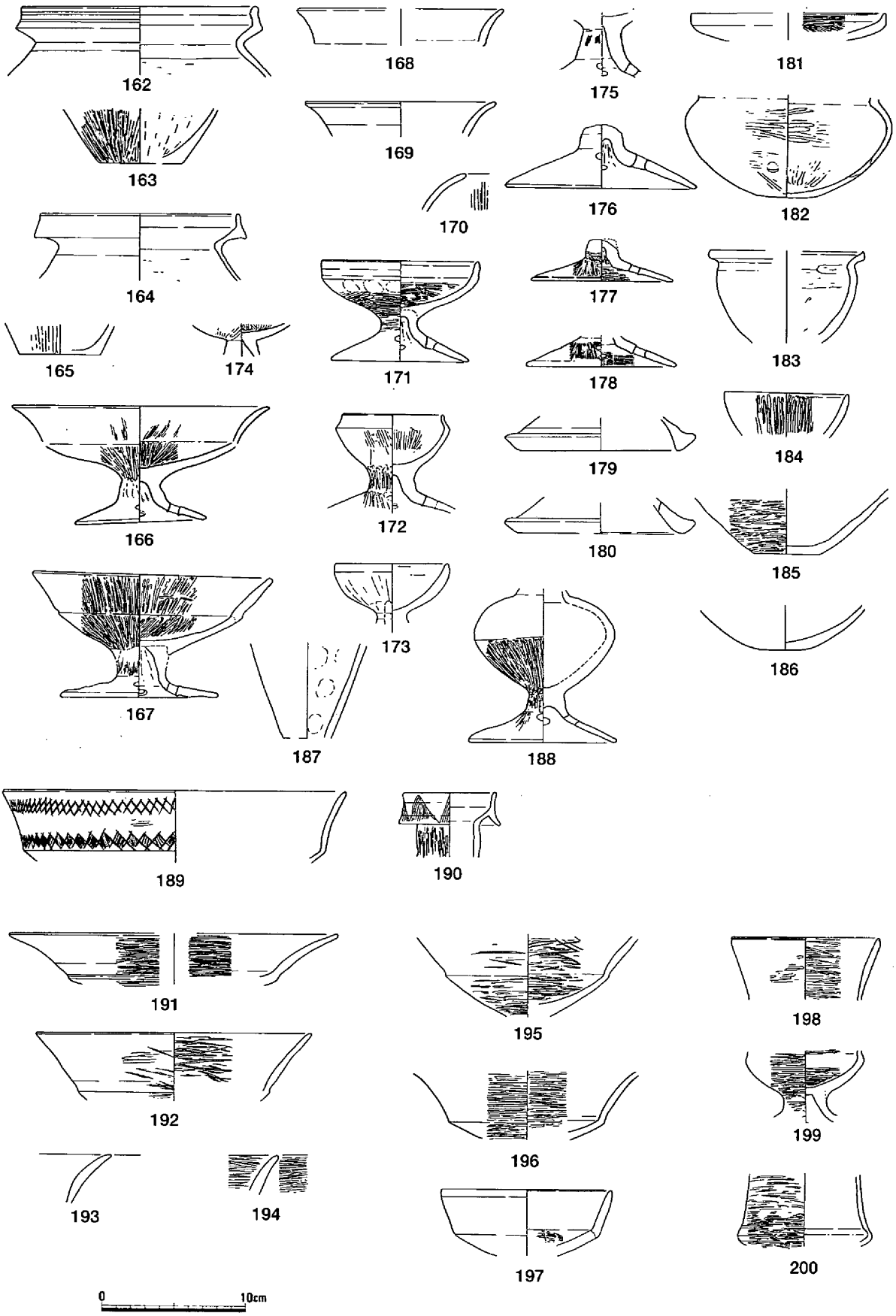
第67図　2中地区出土土器(2)（1／4）



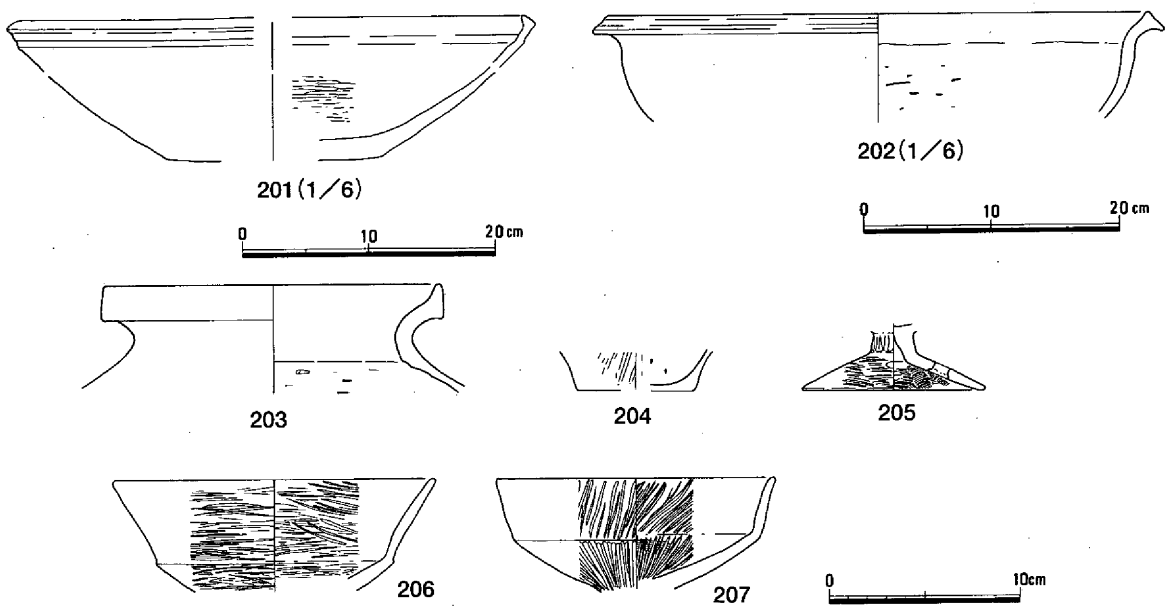
第68図　3中地区出土土器(1)（1／4）

以下の石英、長石を含み、色調は橙を呈する。時期は甕319が後期中葉、他は後期後葉。

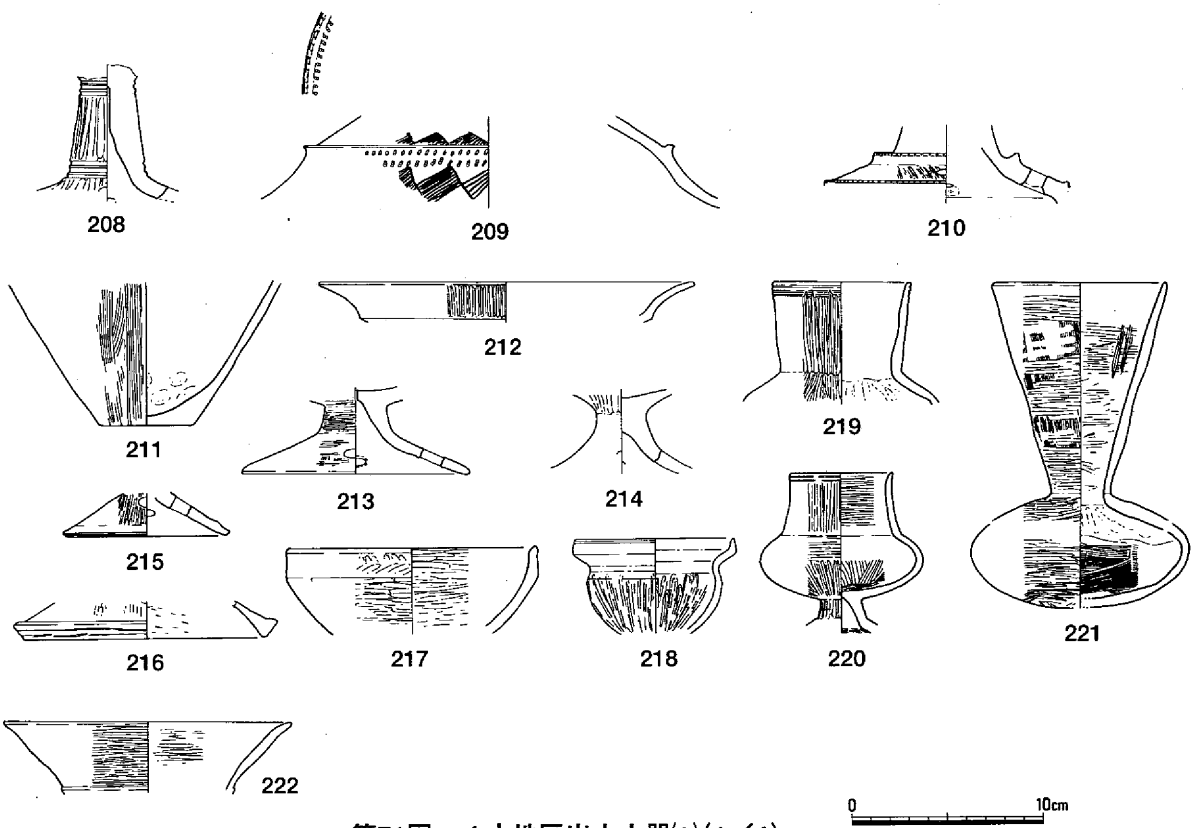
7中下地区　岩盤が崖になっている下方斜面にあたる。出土したのは弥生土器の小片がわずか数点のみ。



第69図　3中地区出土土器(2)（1／4）

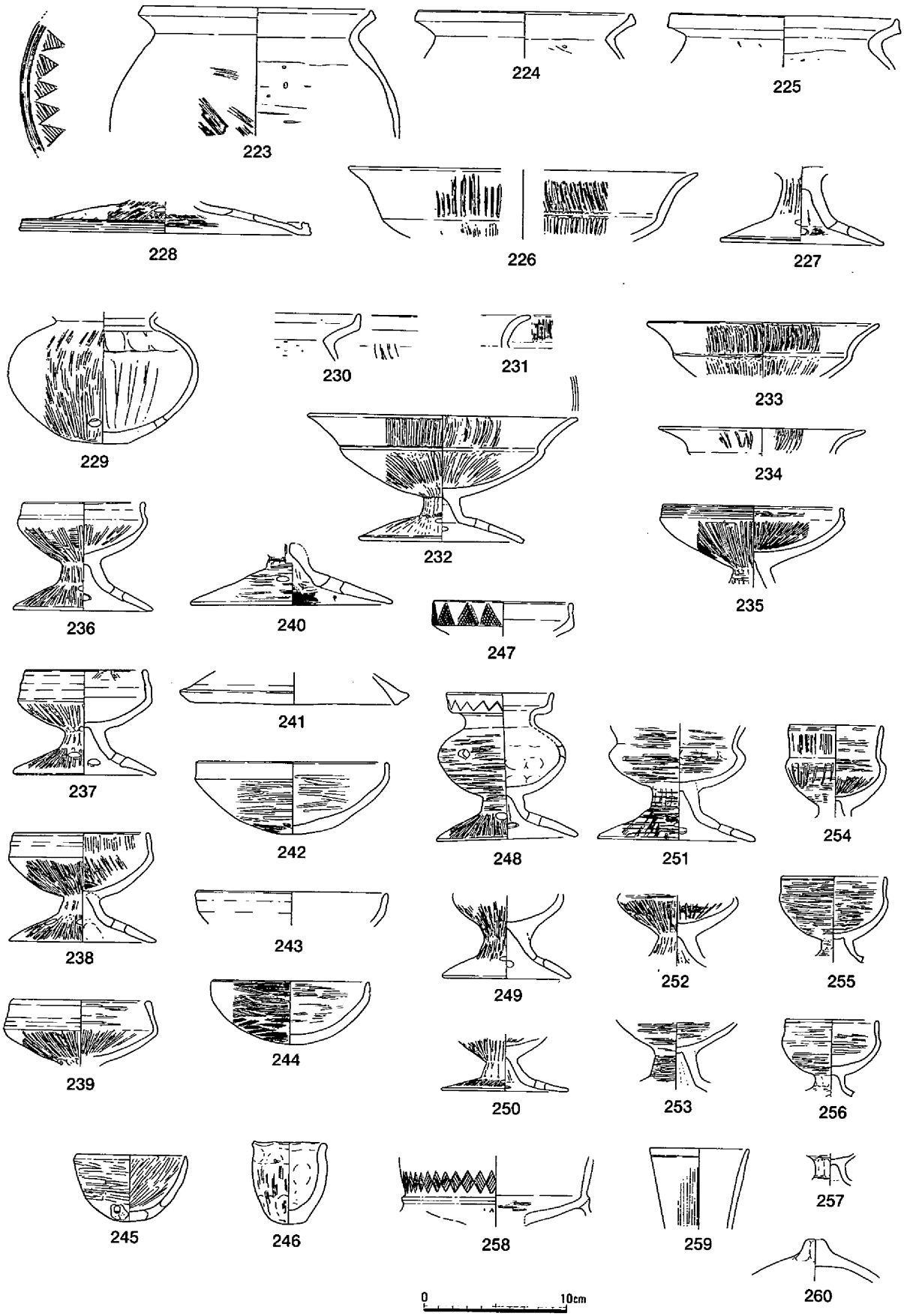


第70図　3中地区出土土器(3)ー土壙墓60周辺ー（1／4）一部（1／6）

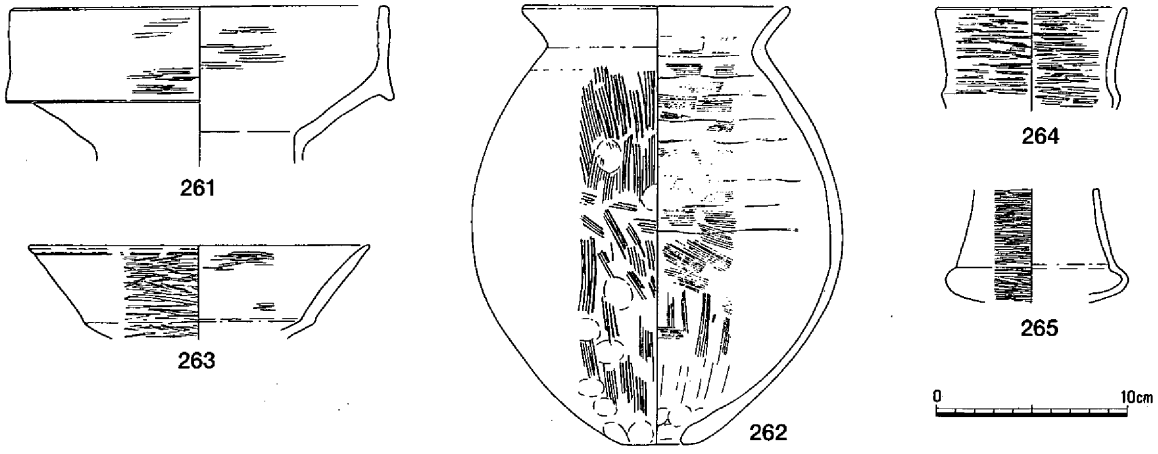


第71図　4中地区出土土器(1)(1／4)

8中地区出土土器（第77図）甕には323～325・327～329がある。口縁部はすべて外方へ短かく折り曲げ、端部は肥厚しない。高坏には外湾する口縁に暗文風のヘラミガキが施される330、脚端部が肥厚する335～337がある。鉢には、口縁も緩やかに外湾させ、端部の肥厚しない大形の326と、端部が上方につまみ出される大形の332がある。脚付直口壺333、装飾高坏334、小形の高坏331がある。時期は、弥生時代中葉から後葉である。325は前葉に溯るかもしれない。335～337の高坏脚部は、器壁が厚く、



第72図　4中地区出土土器(2)—土器溜り2— (1／4)



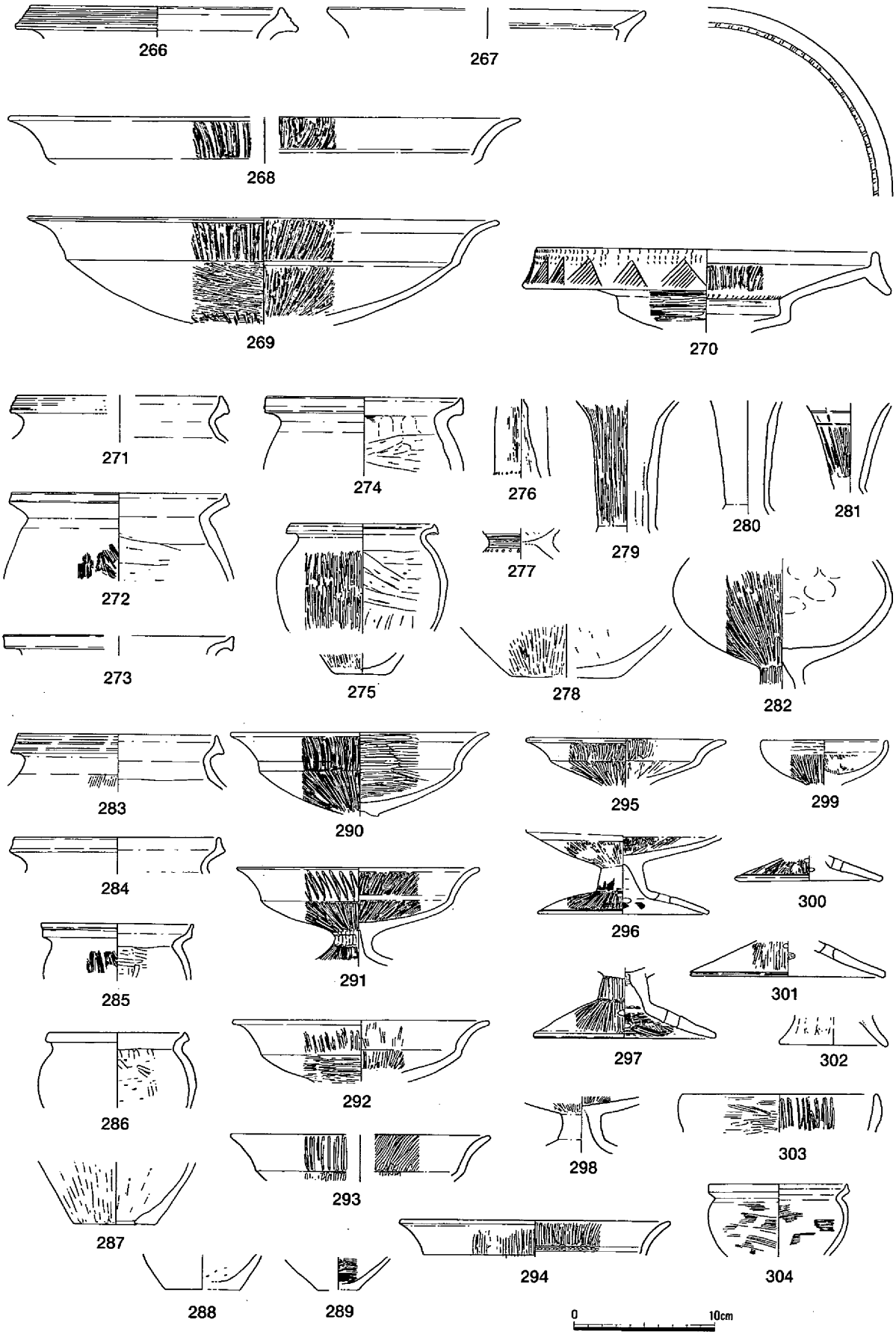
第73図　4中地区出土土器(3)ー土器溜り2ー（1／4）

そう古くならないと考えた。

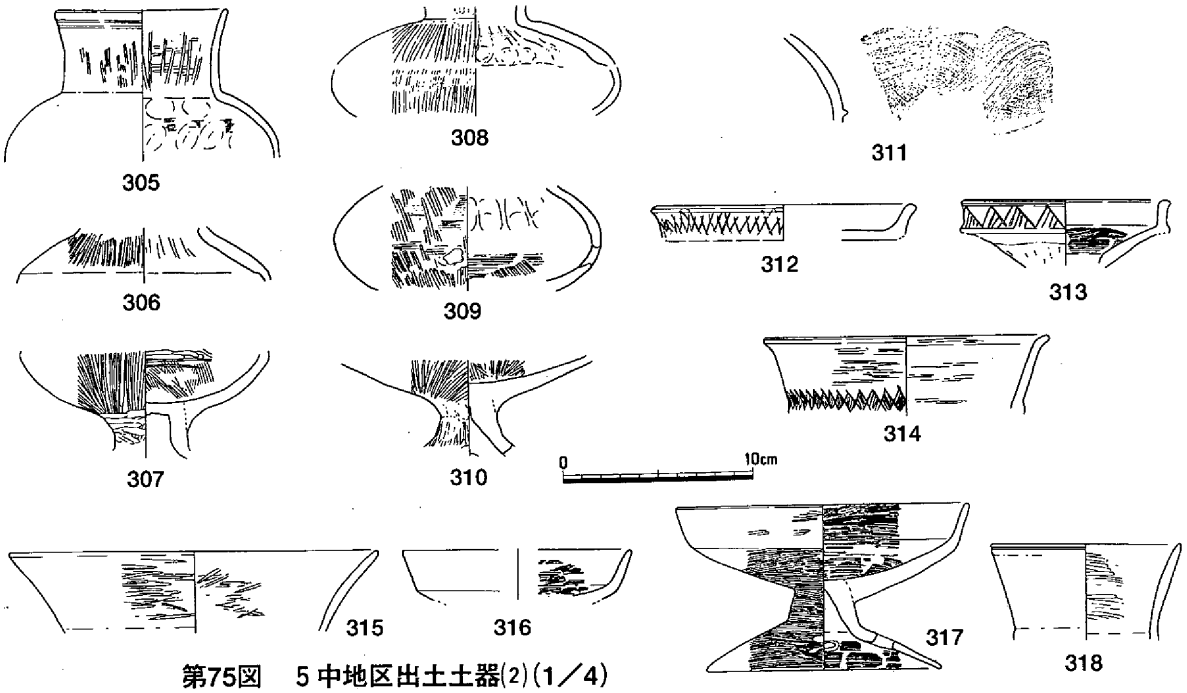
2下地区出土土器（第78図左端）土器は少量である。甕338は口縁端部の立ち上がりが比較的発達している。時期は後期後葉。2下地区には土壙墓は存在せず、2中地区からの流出の可能性が高い。

3下地区出土土器（第79図）この地区にも土壙墓は存在しないので、3中地区、あるいは4中地区土器溜り周辺からの流出が考えられる。甕342は口縁端部の内外面をナデて、僅かに立ち上がる気配をみせる。高坏は、口縁部内面に不明瞭であるが稜をもつ343、外湾する344、内湾ぎみに立ち上がる347、やや大形の346、外傾して長く伸びると思われる354がある。脚部345の脚裾部内面には、布目（縦6本／cm、横7本／cm）がみられる（図版14）。341は台付鉢と考えられる。小形土器には、口縁部が内傾する高坏348、底部に内からの穿孔のある鉢、器台351・352、脚付直口壺353がある。特に器台は、筒部と受部の境の内面に鋭どい稜をもち、類例を知らない。胎土には3㎜大以下の石英、長石を含み、赤色顔料はみられない。時期は、341が後期中葉、354が末葉で、それ以外は後葉と考えられる。

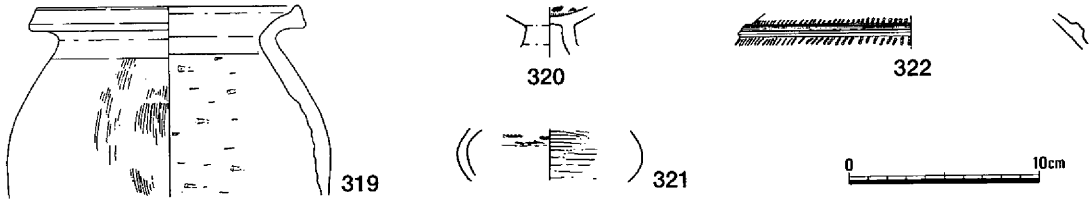
4下地区出土土器（第80図）出土量は上方の4中地区に比べると格段に少ないが、まとまった量が出土している。甕359、高坏には、大形の355、外湾する口縁部をもつ360・361、短かく立ち上がる口縁部をもち、端部に面のある362、短脚の364がある。大形の高坏355は、口径25.7cm。鉢には、大形の365、中形の356、366、小形の367がある。357は、脚付直口壺で器形の3／4が残存する。精選された胎土で、にぶい赤褐色（5YR4／4）に発色している。このような胎土は、他にみられず、ただ土器棺墓11の土器棺の胎土と類似する。文様土器358がある。器種は、装飾高坏の一種ではないかと考えている。脚端部を全周欠損しており、その割れ口に円形透かしの上半が僅かに残存しているので、透かしは2巡りあり、脚裾部はもう一回り広がるものと考えられる。脚柱部は脚裾上端部から屈曲して内湾ぎみに開く。エンタシス状の脚柱部ではなかろうか。脚柱内面の色調は灰黄色（2.5Y6／2）を呈し、直口壺の内面など、空気の通りのよくない部分に共通の発色である。ただ、脚柱部と脚裾部が閉じている点や、脚柱部内面にヘラミガキが施される点など疑問が残る。文様は脚裾部上面に描かれる。文様はヘラ描沈線で描かれ、真庭郡落合町中山遺跡出土の特殊器台にみられる扇形の文様と類似し、これを主体とする。1ケ所のみ、円孔をとりまいて複線で描かれた帯状の文様がある。扇形の文様は、円孔に取り付くもの、扇形の基部を合わせて「蝶」のように対称になるものがある。扇形の内部は、扇形の広がりに合わせて左右にカーブする8～12本の沈線で埋められる。それらの沈線の中央に直角



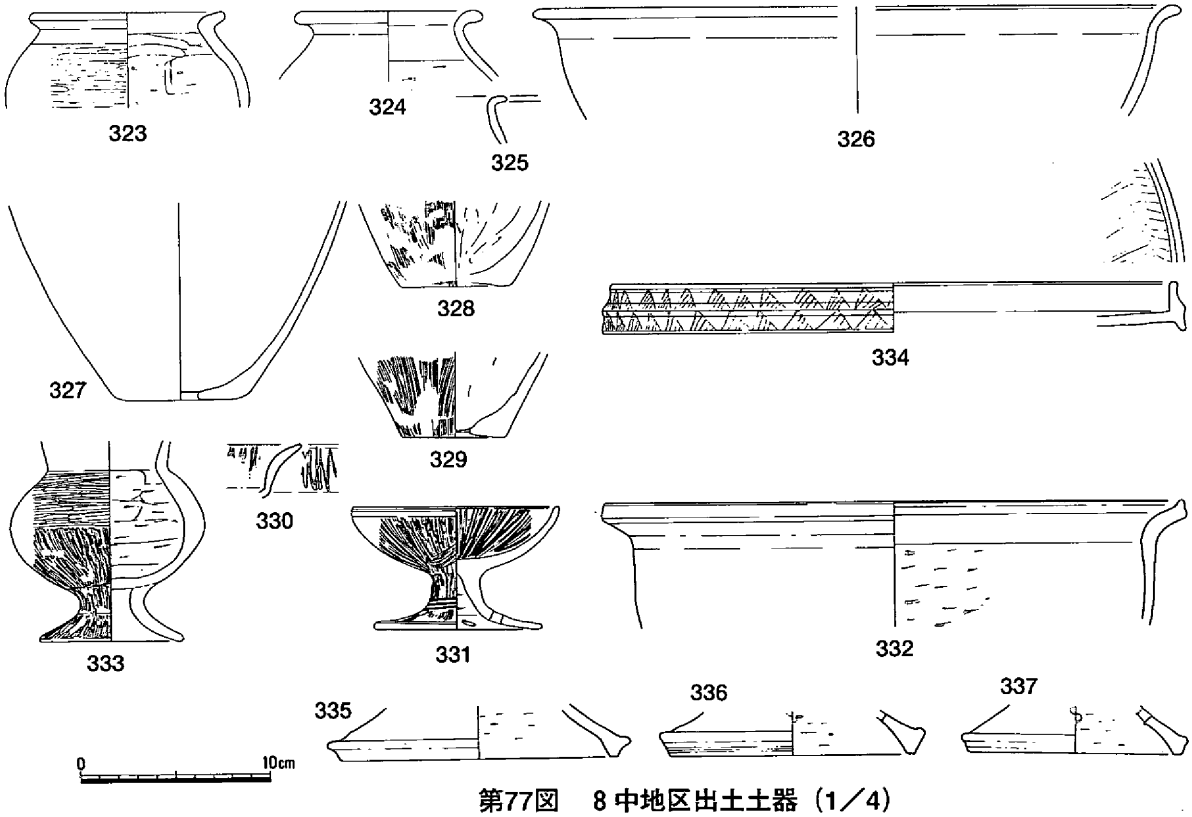
第74図　5中地区出土土器(1)（1／4）



第75図　5 中地区出土土器(2)(1／4)



第76図　6 中地区出土土器（1／4）



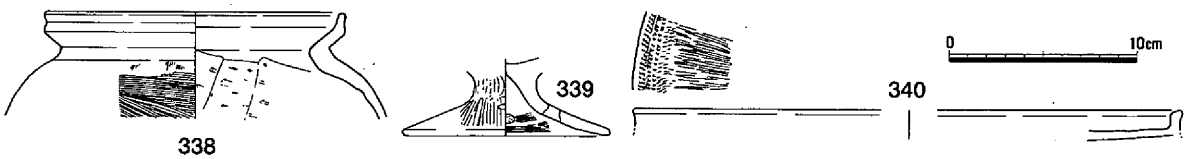
第77図　8 中地区出土土器（1／4）

方向の短かい平行沈線が３～４本入るものもある。文様は外枠を描いてから内側を埋めている。時期は後期後葉である。

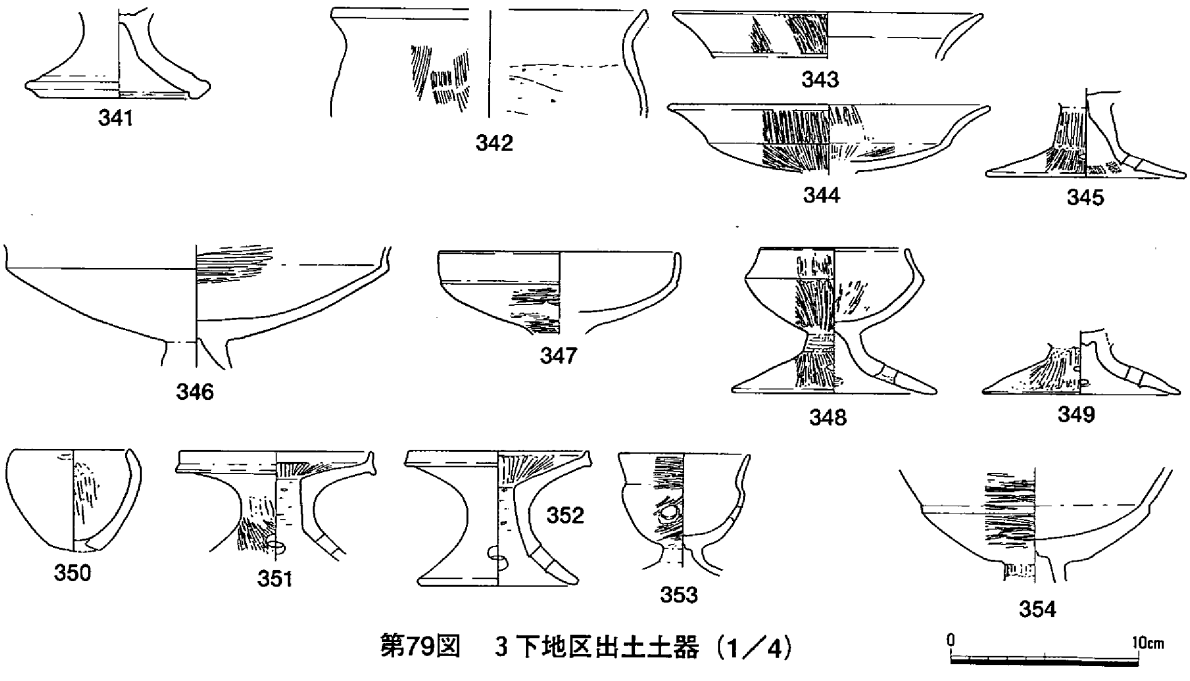
５下・６下地区出土土器（第78図中央・右端）両地区とも出土量は僅かである。339は、５下地区出土の短脚の高坏、340は、６下地区出土の装飾高坏である。時期は、339が後期後葉、340は、後期中葉。

８下～北地区出土土器（第81図）８中地区、および中央区からの流出土器と考えられる。壺には、368・373がある。368は、口縁部を緩く外下方へ曲げるもので、調整は摩耗により不明、甕371、高坏には、369・370・374～376がある。369は、脚端部外側を著しく外方へつまみ出している。370の坏部底面に上からの穿孔がある。374は外湾する口縁部をもつ。375は、摩耗著しく調整不明。鉢377、直口壺には脚の付く372と、長く伸びる口縁部378がある。時期は、後期中葉から後葉と考えられる。

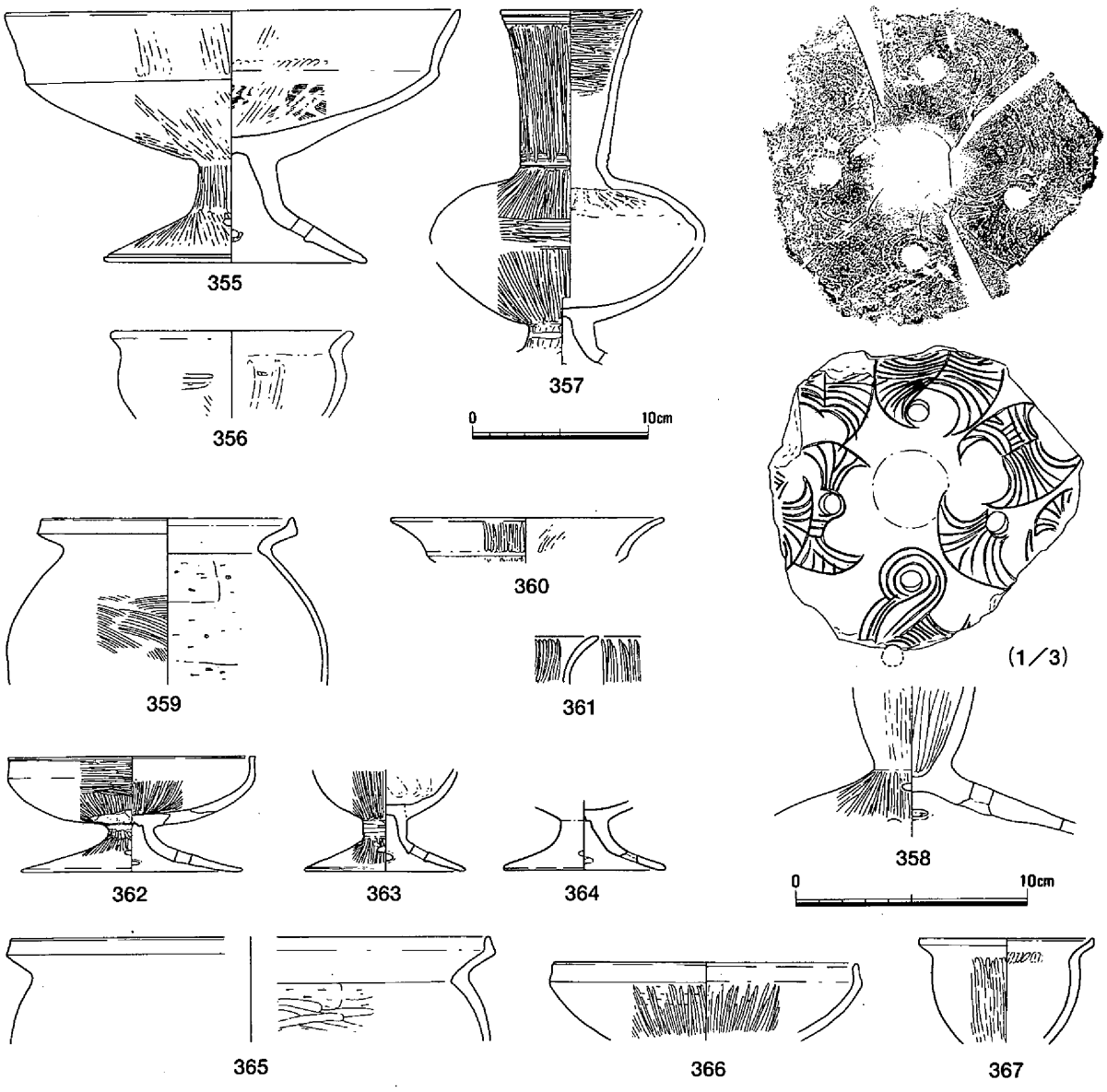
中央地区出土土器（第82図）多量の土器が出土した。中央地区の中でも、尾根鞍部の最低部より尾根先端側に多く、最低部から東地区にかけては極端に土器出土が減る。壺には大形の379、口縁部が屈曲せず短かく外湾し端部が僅かに肥厚する380、口縁部が大きく開き、端部が上下に拡張する396などがある。大形の379は、肩部上半に突帯が巡り、その上側に鋸歯文と刻みのある棒状浮文を交互に配する。胴部最大径約50cm。甕385～387・389・397、高坏は、口縁端部が斜め外方へ拡張する381、脚端が肥厚し、脚裾に刺突文が施された382、脚柱下部に平行沈線と半円形の刺突文が巡る390、脚端部に沈線のある398、脚端の肥厚する405・406、浅い皿状の坏部をもち、脚裾部に雑な鋸歯文が描かれる399、口縁部と坏部の境いに突帯をもち、口縁部が内湾して伸びる400がある。400は口縁端部を欠損する。鉢には大形の391・392、口縁端部が丸くおさまる407がある。器台には408・409がある。408



第78図　２下・５下・６下地区出土土器（1／4）左から２下・５下・６下



第79図　３下地区出土土器（1／4）

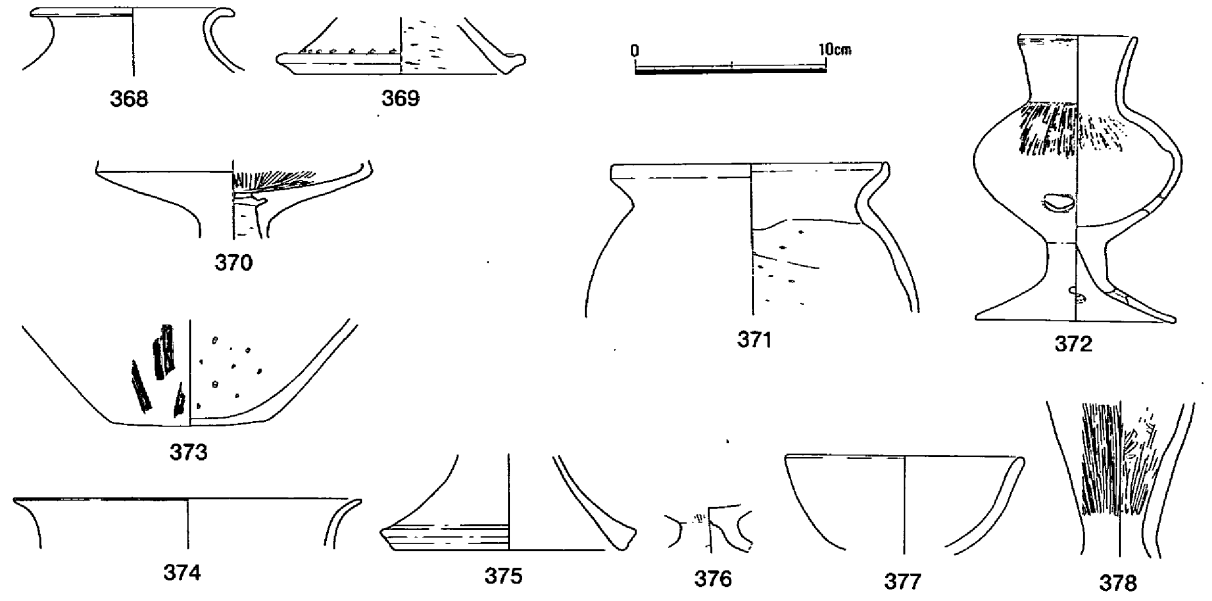


第80図　4下地区出土土器（1／4）一部（1／3）

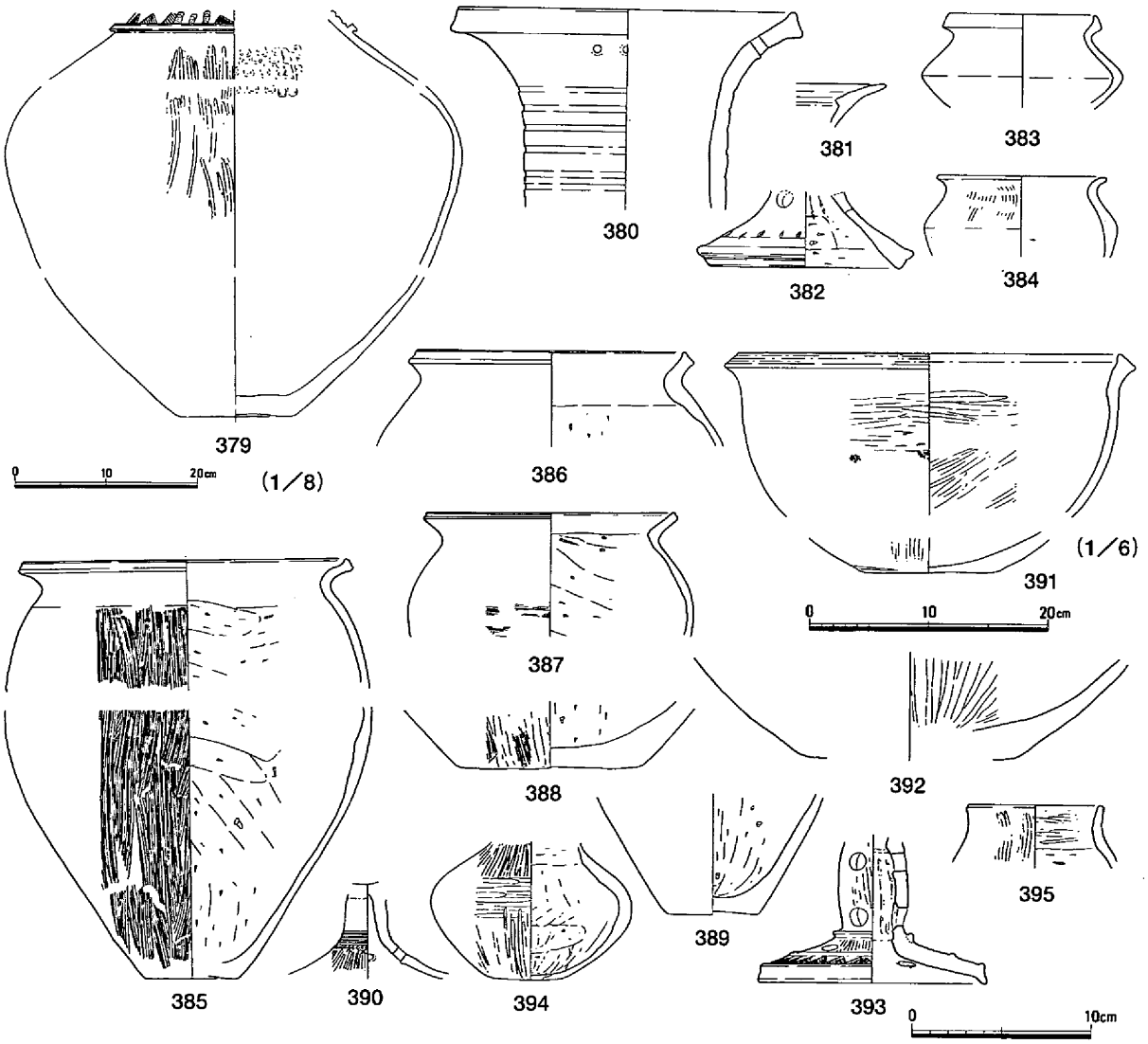
は胎土に角閃石を多く含み、色調はにぶい褐色（7.5YR5／3）を呈する。外面に赤色顔料が塗付されている。409は、石英、長石を含む胎土で明赤褐色（5YR5／8）を呈する。赤色顔料はみられない。直口壺402、脚台と考えられる403・404、装飾高坏393。小形土器では、壺394、鉢383・384・395がある。383は、屈曲する胴部をもつ。時期は、後期前葉から後葉までである。

中央地区出土土器―土器溜り1―（第84図）上方からの流出と考えられる。壺410、甕411・412・415・418・419がある。甕の底部は大半が外から穿孔されている。高坏は口縁部内面に稜をもち、坏部外面に多角形のヘラミガキの施される417、口縁部が外湾する421、脚柱下端部に沈線がある420がある。鉢には大形の414・416がある。414には、端部が拡張する台が付く。器台423は、胎土・色調など中央地区出土の器台口縁409と類似し、同一個体の可能性がある。直口壺424・425には、比較的長い脚部が付く。小形土器には、皿状の坏部の高杯422、鉢413がある。時期は後期中葉から後葉である。

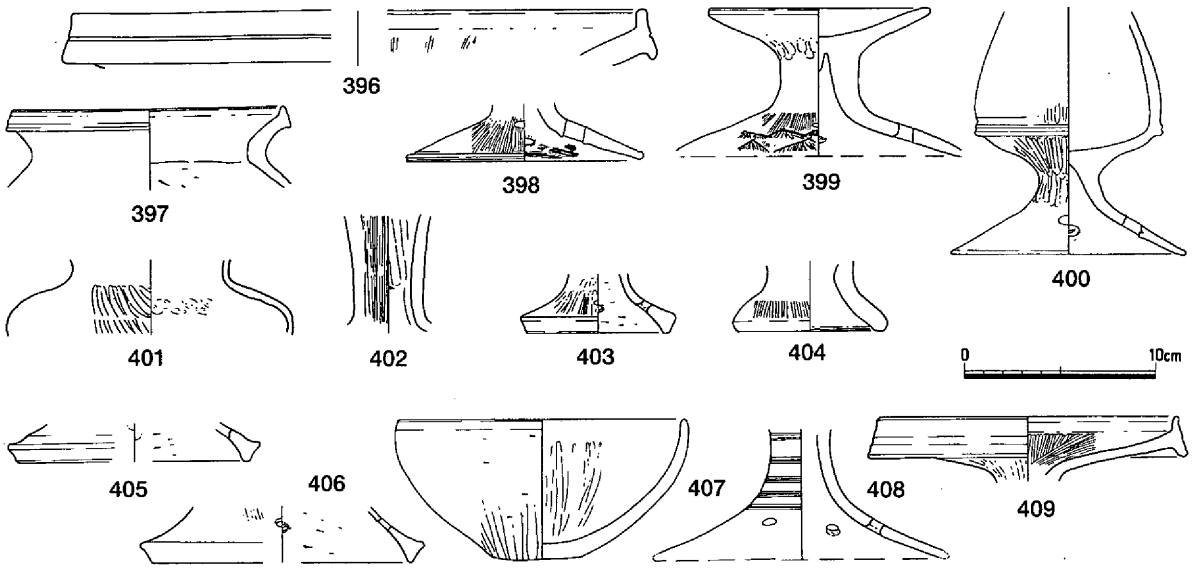
南・東地区　土器の出土は全くみられなかった。



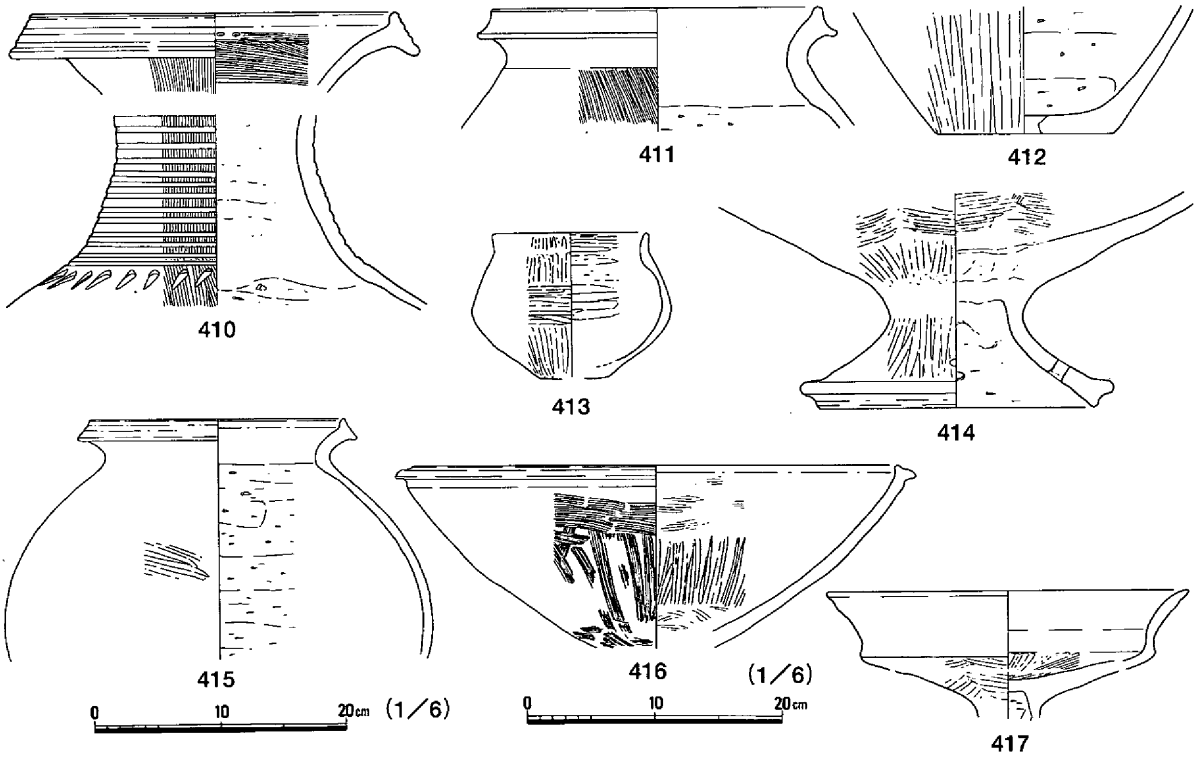
第81図　8下～北地区出土土器（1／4）

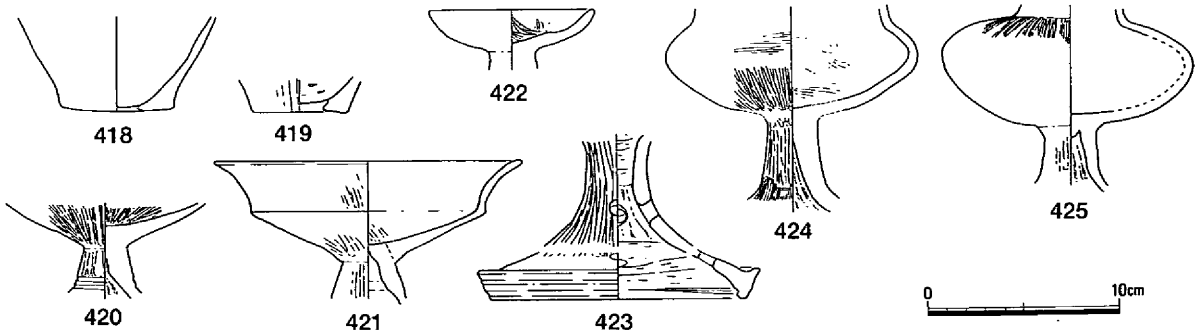


第82図　中央地区出土土器(1)（1／4）一部（1／6、1／8）



第83図　中央地区出土土器(2)（1／4）





第84図　中央地区出土土器(3)ー土器溜り１ー（1／4）一部（1／6）

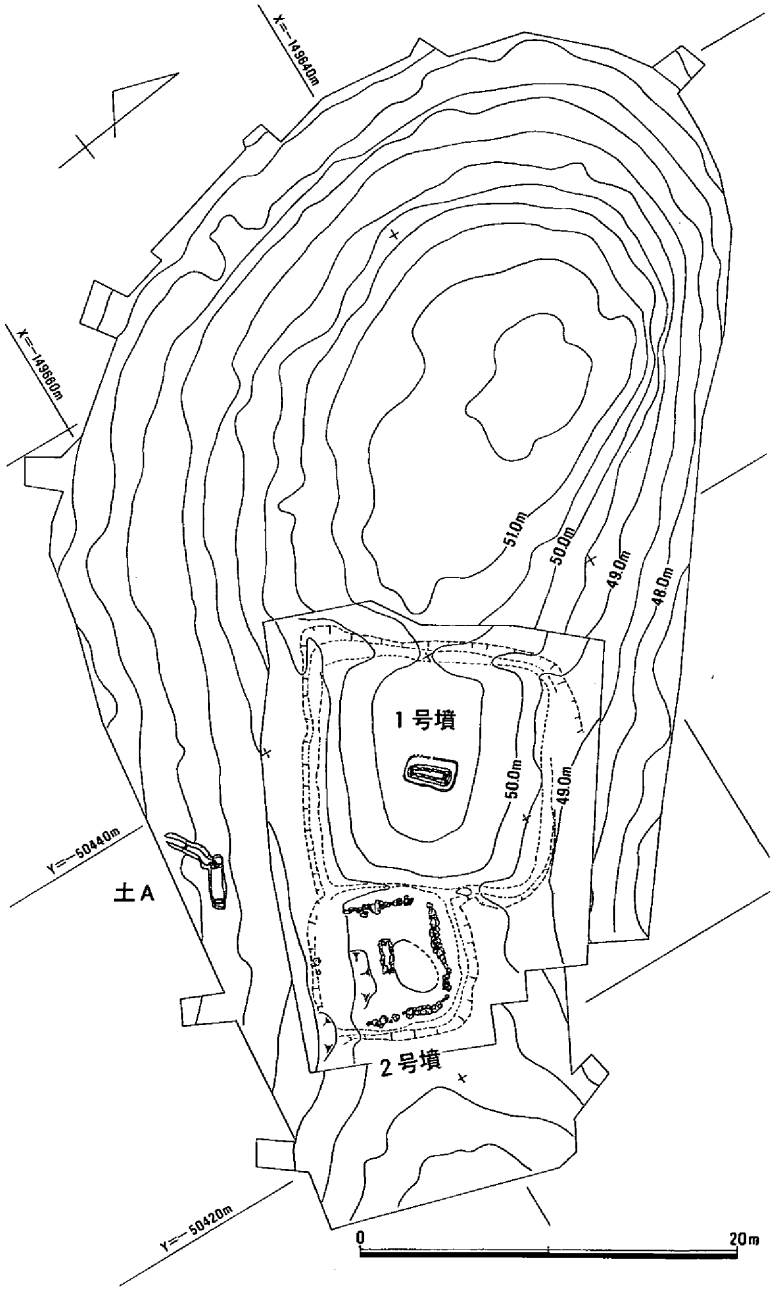
3．古墳時代の遺構・遺物

丘陵の鞍部に、箱式石棺墓を内部主体とする方墳が、周溝を重複させて２基ある。北西側の大きな方を前山１号墳、南東側の小さい方を前山２号墳とする。１・２号墳の南西側、斜面下方に土壙墓１基（土壙墓Ａ）がある。

以下、各説する。

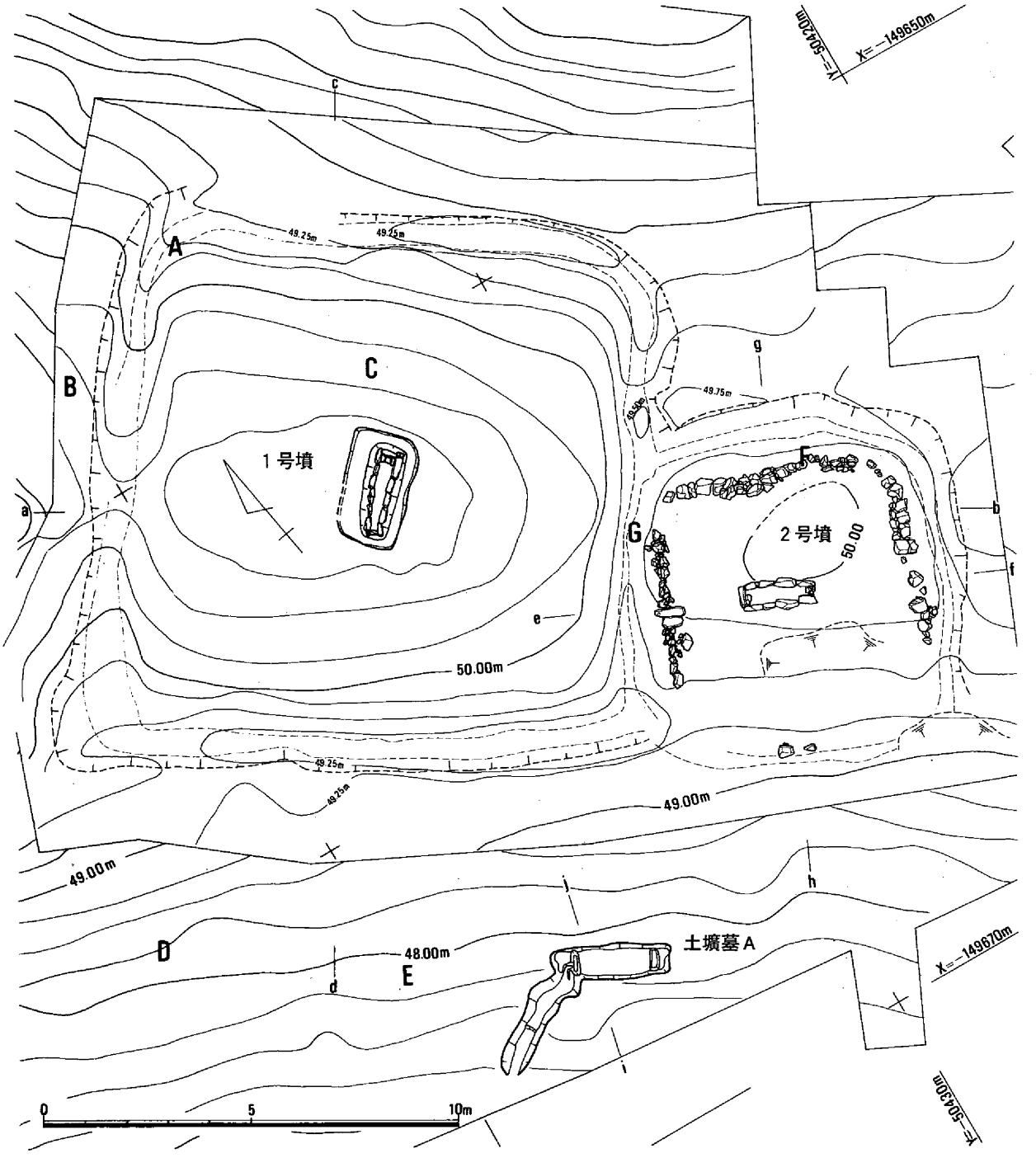
前山１号墳

墳丘　尾根先端部の最高所から鞍部へと徐々に下がってくる、その部分に選地している。墳丘規模は、周溝底間で12.0ｍ×12.0ｍで、正方形を呈する。墳丘の高さは1.7～0.5ｍである。墳丘断面図（第87図）を参照していただくと、盛土（23～27層）は、一番残りの良い墳頂部で45㎝ある。墳丘中心から南東側にのみ旧表土と思われる黒く、しみた層（28層）がみられる。北西側に旧表土層が存在しないのは、ある程度の整地が行われたのかもしれない。墳丘南半分の旧表土直下の層、あるいはそれに対応する層（31層）は、礫を多く含んでおり、周溝内流入土下層（13、16層）には、それらが流れ落ちた状況が確認できた。また、旧表土、及びそれに対応する層の直上、すなわち、盛土最下層（26層）は、黄橙色を呈する比較的硬く、締まった層で、踏み固められた状況とも考えられる。盛土中、および、旧表土層以下の層に弥生時代後期の土器片が、かなり多く含まれていた。おそらく、弥生土器片が流れていた周溝部分の土を墳丘盛土として使用したものと考えられる。



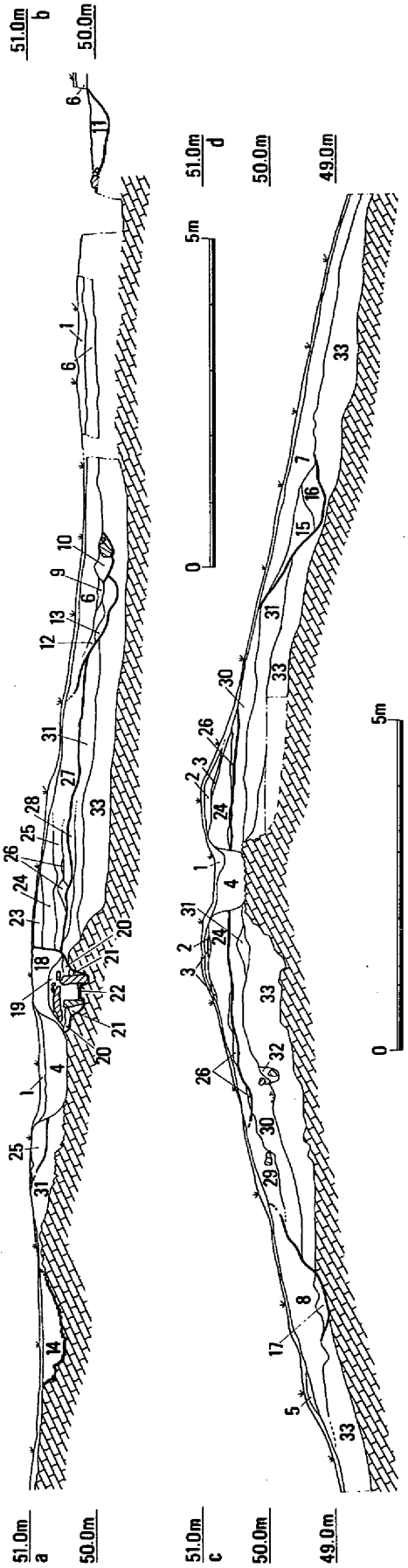
第85図　古墳時代の遺構配置図（1／400）

周溝　周溝は北側で一部流出しているが、墳丘を一周する。検出面での幅は約1.5㎝、深さ約30㎝。尾根筋に沿ってみられる石英の岩脈と周溝が交差する北西側周溝の中央部と、南東側周溝の北東よりの所で、岩脈を掘りきれずに、そのまま放置している状況が確認された。



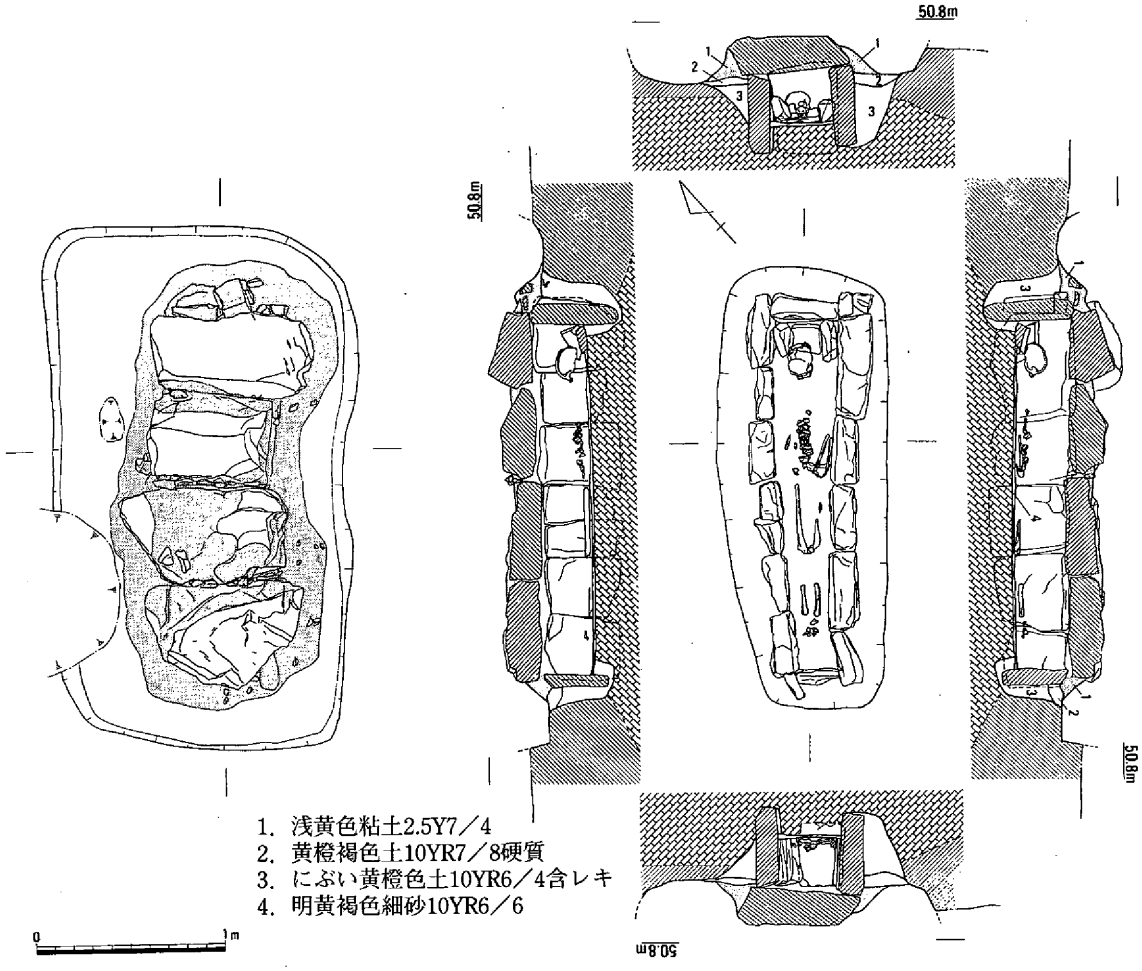
第86図　前山１・２号墳、土壙墓Ａ（1／150）

主体部（第88図）主体部は箱式石棺墓１基のみである。ちょうど墳丘中央部に位置し、主軸は尾根稜線に直交する。墳丘の軸線ともほぼ一致する。後世の乱掘穴が存在したが、墓壙を一部破壊した程度にとどまる。墓壙は墳丘盛土から２段に掘り込まれている。まず、長辺2.8ｍ、短辺1.6ｍの長方形の穴を掘っている。底面は平らで、深さは現存で54㎝である。その底面のやや北東よりに、箱式石棺がちょうど納まる程度の、長軸235㎝、短軸北東側90㎝、南西側70㎝、深さ25㎝に、石英の岩脈を削って穴を掘っている。その底面周囲に石棺石材を設置するための深さ15㎝前後の溝を巡らしている。箱式石棺は内法で長さ184㎝、幅は北東側が33㎝、南西側が24㎝である。石棺は、両小口に１枚、両側壁部に大小７枚のぶ厚い板石を縦位に、一部横位に立てている。両側の側石で小口石を挟んでいる。

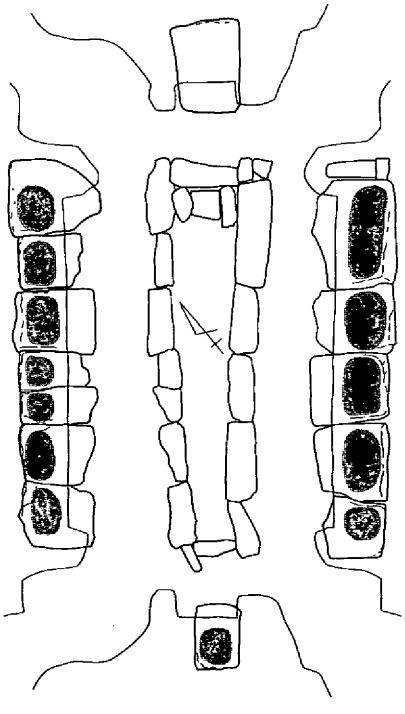


第87図　前山1号墳墳丘断面図（1／100）

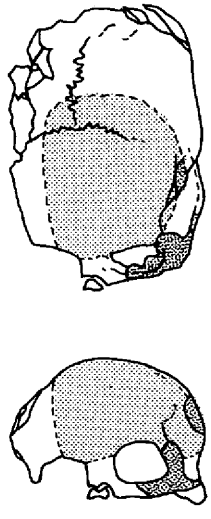
天井石は、80×50×20㎝前後の大きな石材を4枚使用している。材質は鑑定の結果、すべて花崗石で、この尾根上で容易に採取できる。また、第89図のように石材どおしの接合がみられた。天井石のつぎ目や、天井石と小口石、側石との間に粘土目張りがみられた。粘土は天井石をすっぽり覆うほど多量ではない。石棺底面北東小口部に3個の石材を組み合わせた石枕がある。この石枕を設置したのち、棺底に明黄褐色細砂を敷き、床面を整えている。埋葬は人骨が遺存しており、1体のみである。頭位方向N－46°－S。遺存状態はよくないが、頭骨、脊椎、仙骨、四肢の骨のそれぞれ一部が残存した。頭骨の顎の部分も完全になくなっていたが、周辺の土を水洗した結果、歯が3本、検出された。人骨は、元位置を保っていると考えられ、その位置から推定される被葬者の身長は、足首以下が不明瞭であるが、おおよそ、160㎝前後である。



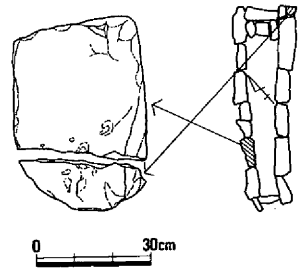
第88図　前山１号墳主体部（1／40）



第90図　前山１号墳
箱式石棺内赤色顔料塗付状況



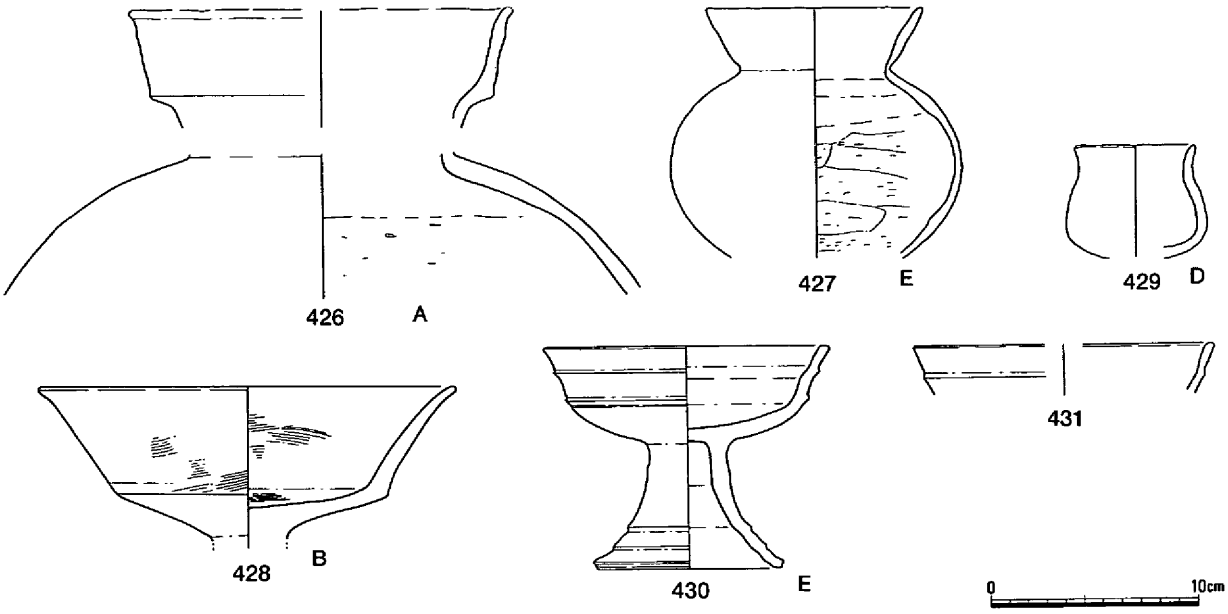
第91図　前山１号墳
出土頭蓋骨の
赤色顔料付着
範囲



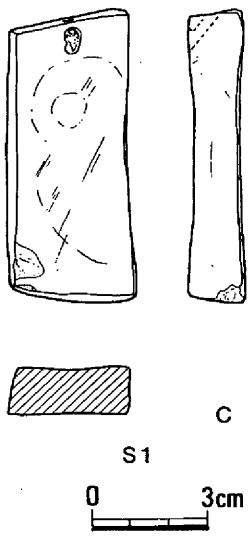
第89図　前山１号墳
箱式石棺使用石材接合関係

人骨、歯について鑑定を依頼した（第四章、第一節、第三節参照）

赤色顔料　石棺内面と頭骨は赤色顔料の塗付、付着がみられた。石棺内面の赤色顔料は、両側側石と南西側小口石にのみ塗付され、北東側小口石、天井石、床面にはみられない。また、赤色顔料の塗付は、床下に埋った面にはみられなかったので、石棺の壁石を据え



第92図　前山１号墳関連遺物１（1／4）



第93図　前山１号墳関連遺物2(1／2)

付けて後、塗付されたと考えられる（第90図参照）。頭骨にみられた赤色顔料の付着は、第91図を参照してもらうと、左頬骨と左側頭部の一部に鮮やかに一面赤色をした部分（濃いスクリーントーン）と、前頭部から左側頭部にかけて、肉眼で僅かに赤色粒が観察される範囲（薄いスクリーントーン）とがある。これらの赤色顔料を分析を依頼した結果、石棺石材にみられたものと、頭骨にみられたものに違いがみられた（第四章、第四節参照）。

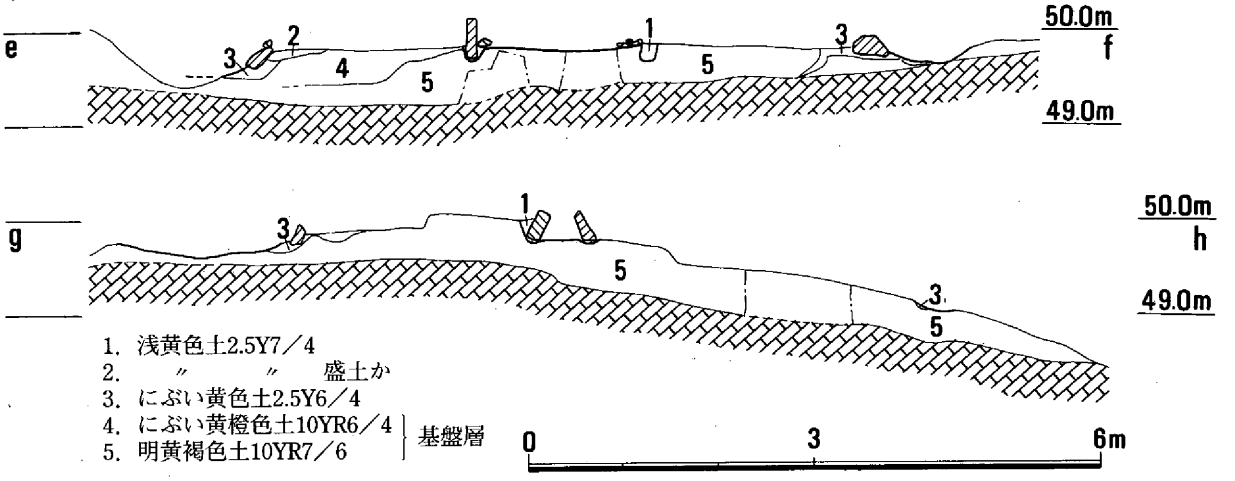
副葬品　皆無であった。

関連遺物（第86図、第92、第93図）土師器４点426～428、須恵器２点430・431、石製品１点Ｓ１がある。426は二重口縁の壷で、周溝流入土中（第86図Ａ地点）より出土した。口縁端部が僅かに欠損している。427はやや小形の甕と思われる。口縁部は「く」の字に開く。外面は摩滅、体部内面はヘラケズリで肩部にヨコナデが入る。口径11.3cm。南斜面流土中（第86図Ｅ地点）より出土。429は小形丸底壷で、南斜面流土中（第86図Ｄ地点）より出土。428は高杯で、周溝外縁（第86図Ｂ地点）より出土、杯部のみ完存した。杯部は屈曲し稜をもつ。内外とも摩耗しているがハケメがみられる。430は須恵器の高杯で、427と同様に南斜面流土中（第86図Ｅ地点）より出土した。杯部3／4を欠損する。杯部は底部から内湾して立ち上がり、口縁部で僅かに外反する。口縁端部には面をもつ。脚部は緩やかに外反して開く、脚端部にも面があり、浅い凹線が巡る。杯部に２条、脚裾部に２条の断面三角の突帯をもつ。胎土に２㎜大以下の砂粒を非常に多く含む。色調は暗紫灰色（５RP4／1）。杯部外面に自然釉が残存する。口径14.6cm、器高11.9cm。431は、430とほぼ同様の口縁形態を示す高杯で、１号墳の南下方、はるか山裾で表採された。小片である。430とくらべると、口縁端部は丸くおさまり、突帯も若干鈍い。胎土、色調は全く異なり、砂粒は少く、暗灰色を呈する。この429と430は初期須恵器と考えられる。須恵器について、胎土分析

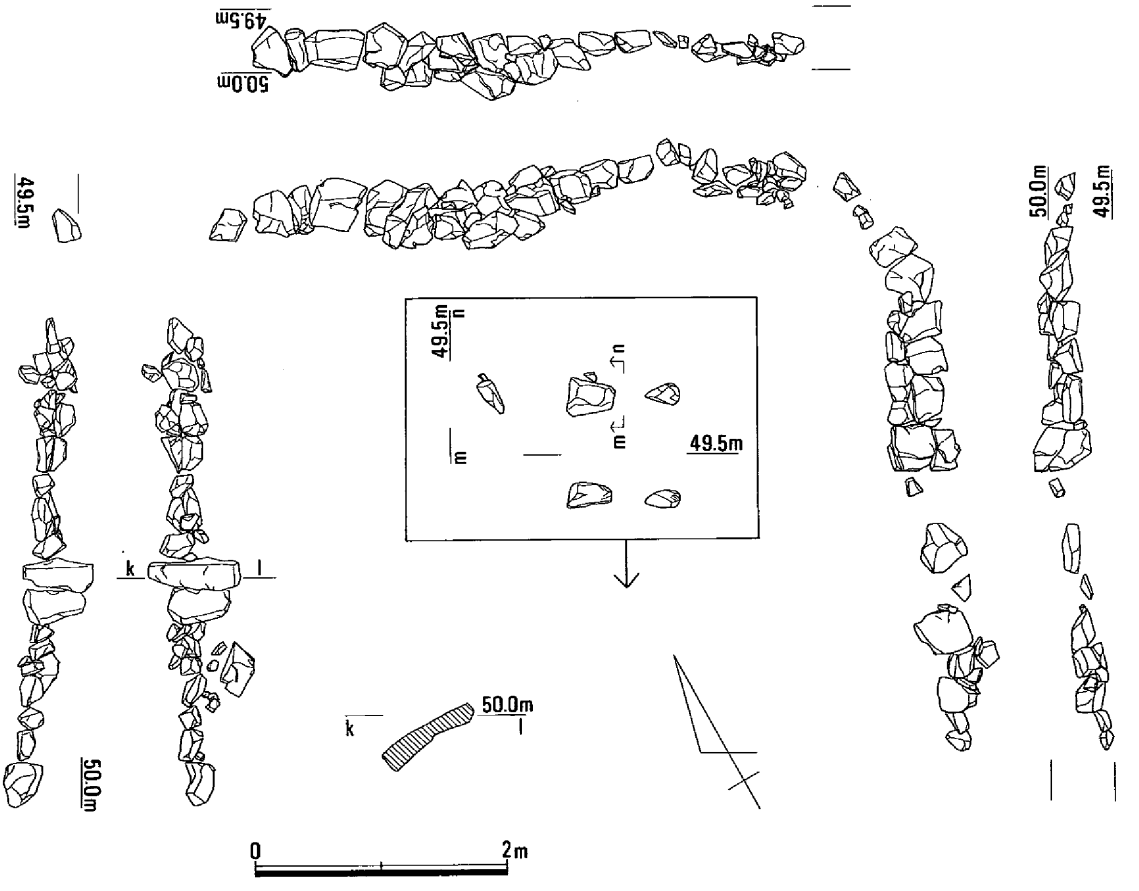
を依頼した（第四章第五節）。Ｓ１は携帯用砥石である。１号墳の盛土下の旧表土層（第86図Ｃ地点）より出土。全面に使用痕があり、斜めに径３㎜の孔が通る。重量74.7ｇ。１号墳築造段階に伴うものと考えたい。これらの遺物は、１号墳に伴っていた可能性が高い。

前山２号墳

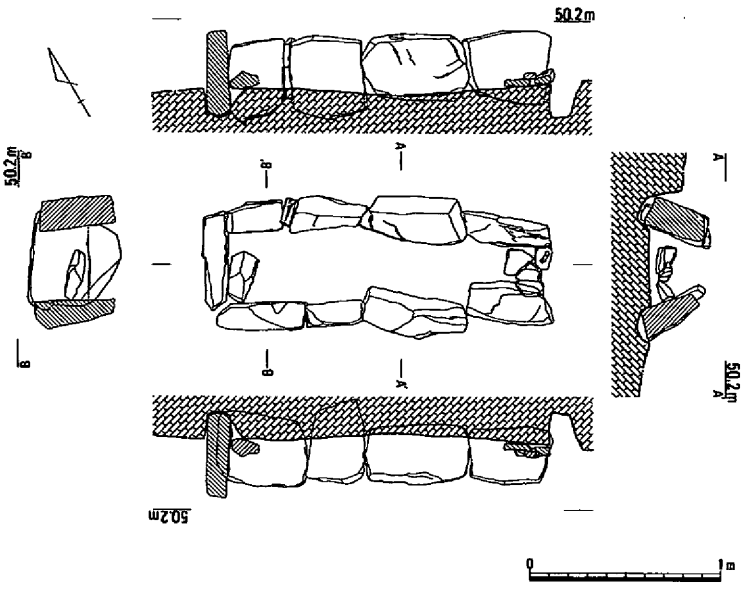
墳丘　尾根鞍部のやや南斜面によった位置に１号墳に接して在る。墳丘規模は周溝底間で7.5×7.7ｍの正方形に近い平面形をもつ、高さは、現在で0.5～1.0ｍ。盛土はほとんど流出している。



第94図　前山２号墳墳丘断面図（1／80）



第95図　前山２号墳葺石（1／60）

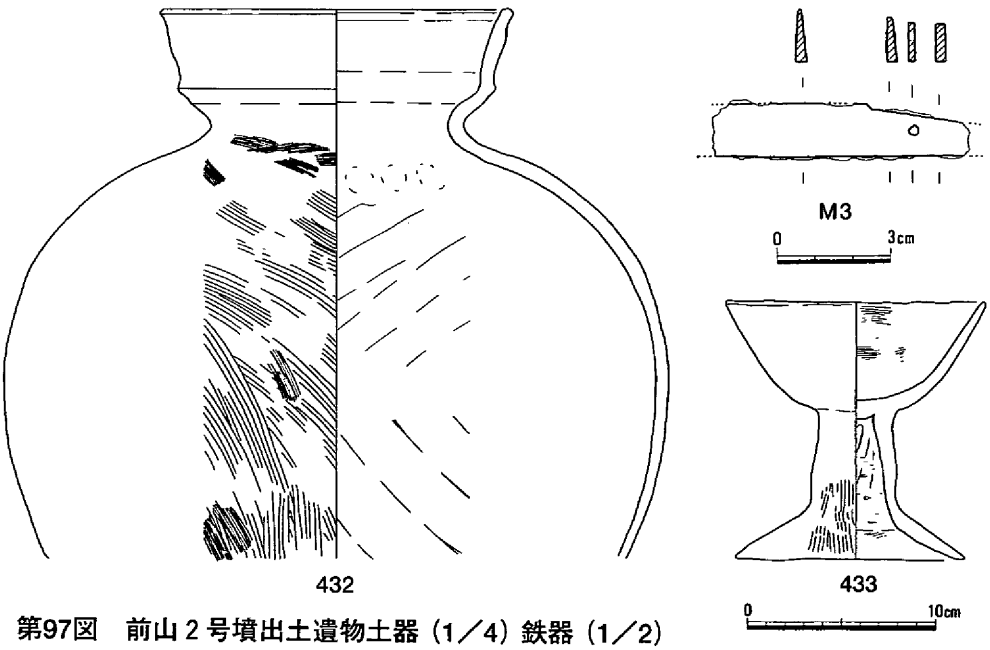


第96図　前山２号墳主体部（1／40）

周溝　周溝は墳丘を全周する。南西側周溝は流出が著しいが、僅かに段として確認された。北西側周溝は１号墳の周溝と重複する。断面の土層観察で、２号墳周溝が１号墳周溝を切り込んでいる状況がみられた（第87図）。

葺石　墳丘南西斜面は流出が著しいが、２個の石が墳丘中心に傾むいた状況で周溝に沿って検出された。これは葺石と考えられ、葺石は墳丘を全周したと考えられ、墳丘の四隅を角ばらず丸く巡っている（第95図）。石材の大きさは30㎝大のものが多く、一回り大きな石材を根石として使用している部分もある。北西辺の葺石のほぼ中央には、長さ80㎝と60㎝の長大な石２個を縦位に並べている。葺石の数点を鑑定してもらった結果、やはり花崗岩であった。実見のかぎり、葺石はすべて、この尾根と同じ花崗岩と思われる。

主体部（第96図）主体部は箱式石棺１基のみである。墳丘中央に位置する。石棺長軸は尾根等高線に平行し、墳丘軸線にのっている。天井石、南東側小口石は、すでに無く、側石の幾つかは内側に倒れかかっている。盛土が全て流出しているので、墓壙の規模・形態、および、盛土を掘り込んでいるかどうかは不明。箱式石棺は、小口石１個、両側側石各４個のぶ厚い板状の石を横位、一部縦位に立て並べ、小口石で側石を挟む式である。石棺内法は長さ170㎝、幅は一様に40㎝、天井石までの高さは、推定30㎝である。南東小口部に４枚の板石を使用した石枕がある。北西小口部の石は転落と考える。床面上の土２㎝程度を水洗した結果、歯が１点検出されたので鑑定を依頼した（第四章、第二節）。



第97図　前山２号墳出土遺物土器（1／4）鉄器（1／2）

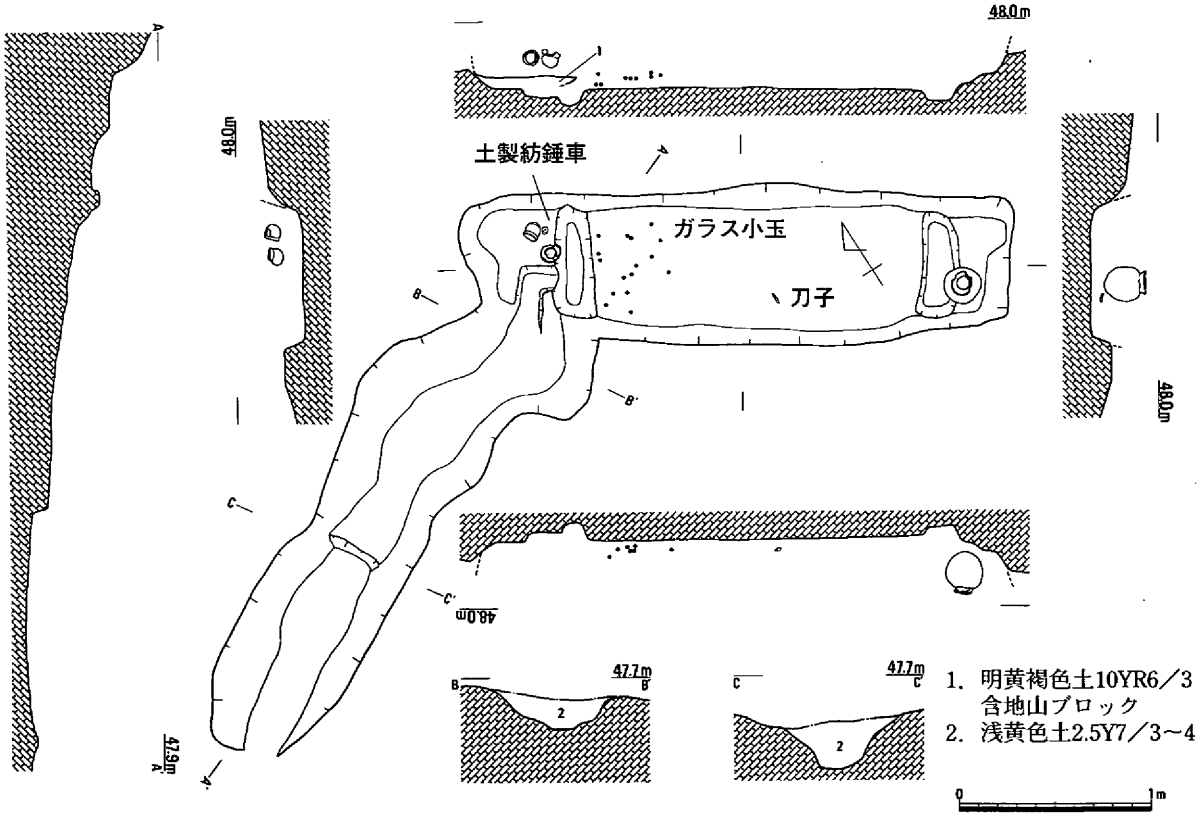
副葬品（第97図）東端の枕石上、僅かに浮いて、鉄製刀子Ｍ３が一点出土した。刀身先や茎部の多くを欠損する。茎部に目釘穴状の穴がみられるが錆化のためかもしれない。

遺物（第86図、第97図）土師器が２点出土した。432は、二重口縁をもつ大形の壺で、北西側周溝内（第86図Ｇ地点）に転落した状況で検出された（図版８）。約1／3が残存し、特に内面の風化が著しい。肩がよく張る。外面に幅14㎜に６本程度の粗いハケメがみられる。口径18㎝、体部最大径34.9㎝。433は高杯で、転落した葺石の中に挟まって出土した（第86図Ｆ地点）。約1／2が残存し、表面の風化が著しい。杯部はほとんど平らな底面を持たず内湾し、屈曲せず、そのまま直線的に外傾して伸びる。脚柱部はあまり開かない。透かしは無い。口径13.5㎝、器高13.6㎝。

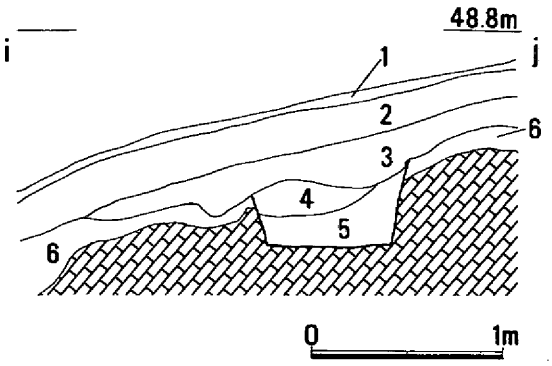
土壙墓Ａ

１・２号墳の南西約５ｍ離れた南斜面に位置し、等高線に平行して作られている。墓壙は290×80㎝の長方形を呈する。両小口壁より20～30㎝内側に入った床面に小口溝が１対あるので木棺を使用していたらしい。両小口間の距離は約180㎝。また、墓壙の西コーナーから斜面下方へ抜ける溝が付く。北西側小口溝の中央やや南西よりから幅約13㎝、深さ６㎝程の溝が直角に北東へ20㎝伸びる。そこから直角に南西方向におれ曲がり、墓壙外に出る。墓壙外から溝は幅約70㎝、深さ約25㎝になり、西よりに方向を変え、約３ｍ程伸びて斜面へと抜ける。類例をみないもので、排水溝と考えたいが、溝埋土中には礫や砂利は全くなく、木材の痕跡も検出されず、性格不明と言う外ない。

副葬品（第100図）434は南東側棺外の南隅に垂直に置かれていた土師器の丸底の甕である。口縁部内外面と体部外面は粗いハケメ調整。内部底に有機物様の黒色物質が５㎜程貼り付いていたので鑑定を依頼した（第四章第七節）。435、436の土師器の小形丸底壷２点とＣ１の土製紡錘車１点は北西側棺



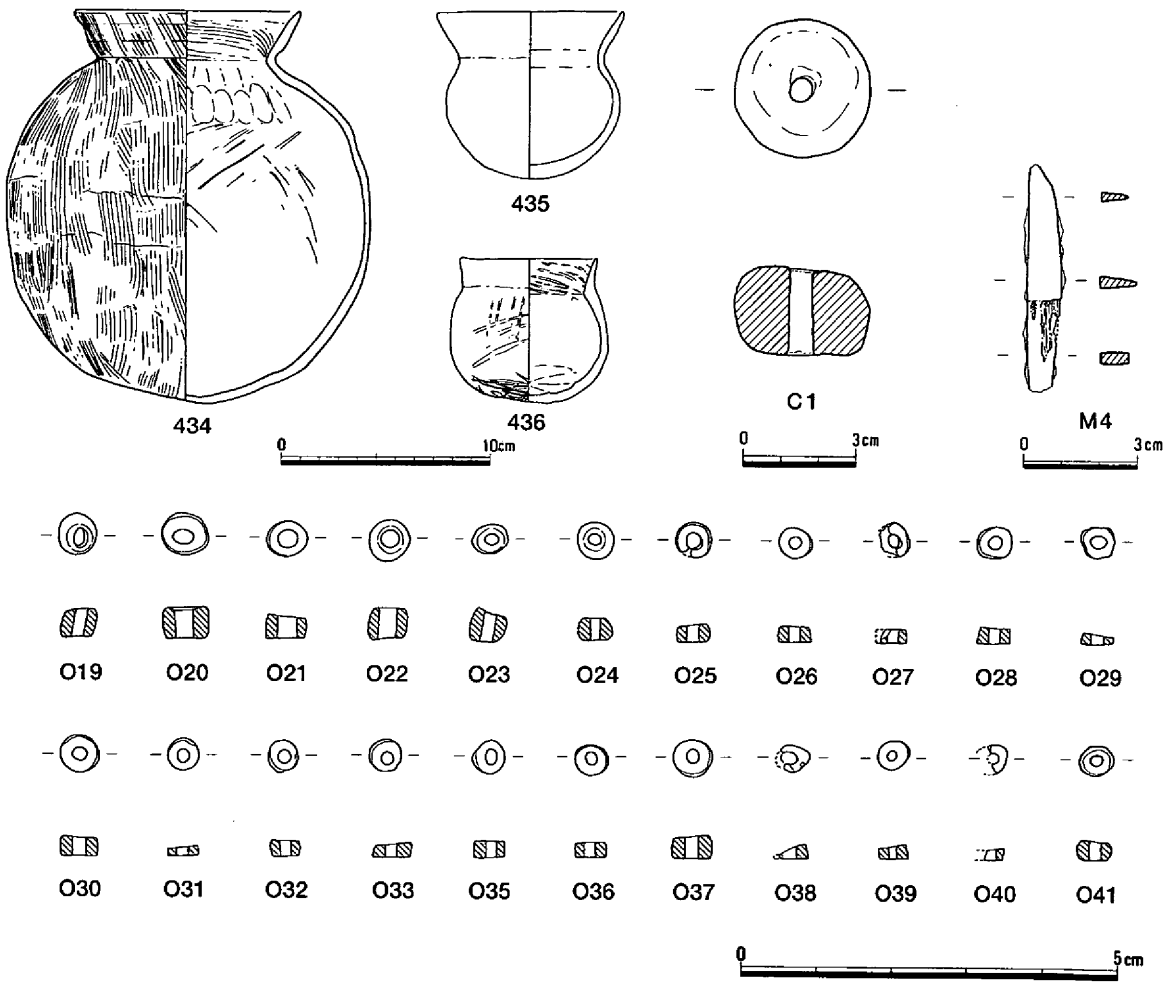
第98図　土壙墓Ａ（1／40）



1. 表土
2. 明黄褐色土（2.5Y7／6）
3. 浅黄色土（2.5Y7／4）
4. 明黄褐色土（10YR7／6）
5. にぶい黄橙色土（10YR6／4）
6. 明黄褐色土（10YR6／6）

第99図　土壙墓Ａ断面土層図(1／40)

外北東寄りに床面から浮いて出土した。436は横転した状態であった。土製紡錘車は直径3.7㎝、厚さ2.3㎝、孔径６㎜、重量34.26ｇである。保存状態も良好である。断面は厚さのほぼ中央部に僅かに稜をもつ。いわゆる「算盤玉形」のややくずれた形態と思われる。Ｍ４は棺内の南西土壙壁沿いに副葬されていた。小形の鉄製刀子である。刃長約36.0㎜、刃幅9.2㎜、柄長は現存で24.0㎜、柄幅6.6～8.3㎜、重量4.19ｇ。柄部には、刃部との境から木質が残る。Ｏ19～Ｏ41はガラス小玉で23点検出された(第３表)。棺内北西小口側に、まとまりなく散らばった状態で検出された。色調は水色と青色と２色ある。ガラス小玉の成分分析を依頼した（第四章第六節)。



第100図　土壙墓Ａ出土遺物土器（1／4)、土製品・鉄器（1／2)、玉類（1／1)

第三節　ま　と　め

弥生時代後期の集団墓地は、後期前葉でも新しい段階から後期の末葉まで継続して営まれたものと考えられる(1)。本報告書で群分けしたA～E群の時期は、供献されたと思われる土器の多くが原位置を留めていないことや、斜面下方のB～E群中の埋葬に伴う祭祀をA群の在る丘陵頂上部で行う可能性も考えられることから、細かく状況を追うことは不可能である。「第2節の(7)土器」をもとに大枠につかまえると、上・8中・8下・中央地区で後期前葉から、中葉でも古い時期の土器が、比較的多く出土していることにより、A・B群、特にA群で造墓が開始されたと考えられる。後期中葉から後葉にかけては、A～E群で同時併行で造墓されている可能性が大きい。後期末葉の土器は3中地区に多くみられ、土壙墓60周辺からも出土、上地区にも僅かにあるのでA・D・C群の中で造墓が終了したと考えられる。また、4・5・6下地区では後期中葉でも古い時期の土器がみられないので、D群より、やや遅れてE群の造墓が開始された可能性がある。これらのことから、A～E各群は、造墓の開始が多少異なるが、同時併行で埋葬が行われ、A群の造墓が終了して後にB群へ墓域を移した、というものではないように思われる。

土壙墓の床面形状について留意されるのは、A・B群、特にA群に小口溝、側板構をもつ土壙墓の割合が他群に比べて非常に高いことである。御津郡御津町みそのお遺跡において、後期後葉から末葉にかけて木棺型式が小口溝を有する墓壙に納まるタイプ（古相）から割竹形木棺など墓壙に溝のないものへの推移することが確認されている(2)。前山遺跡の場合でも、A・B群は造墓が最初に始まったと考えられる群であり、正にこの推移に当てはまるように思われる。

また、墓域全体を調査したが、供献土器群の中に吉備地方の特殊器台・特殊壷が全く含まれていないことは、この集団墓地の特色である。

前山1・2号墳関連及び出土遺物は、肩の張った二重口縁の壺がやや古く思われるが、その他は5世紀前半代に比定され、築造もその時期と、とらえたい。土壙墓Aも5世紀前半と考えられる。副葬品の中に、算盤玉形土製紡錘車が出土していることから渡来人との関係がうかがわれる。

註

(1) 弥生土器の編年は、柳瀬昭彦「結語」『川入・上東』（岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16）岡山県教育委員会　1997、高畑知功「2．備中地区」『弥生土器の様式と編年－山陽・山陰編－』正岡睦夫・松本岩夫編　木耳社　1992を主に参考にした。上東・鬼川市Ⅰ式を後期前葉、同Ⅱ式を後期中葉、同Ⅲ式を後期後葉、いわゆる酒津式の段階を後期末葉と表記した。

(2) 椿真治「第Ⅻ章まとめ」『みそのお遺跡』（岡山県埋蔵文化財発掘調査報告87）岡山県教育委員会　1993年

第1表　土壙墓一覧表

※小口溝の欄の「両」は小口溝が両側にあること「片」は片側のみにあることを示す。
※土壙墓の切り合い関係は、判明したもののみ記入する。記入のないものは、切り合い不明である。

群	番号	掘り形寸法 cm ( )＝以上 上場 長	上場 幅	下場 長	下場 幅	深	床面の標高 m	主軸方向	等高線に	床面の形状 小口溝	側板溝	段差	中窪み	平ら	遺物	備考
A	1	295	130	224	100	50	51.30	N－54°－W	－					○	水銀朱	
	2	224	(88)	209	61	38	51.05	N－35°－W	直交	○片						墓壙上に小集石あり
	3	209	(61)	197	61	35	51.05	N－35°－W	〃	○両						木棺170×40cm程
	4	(145)	(64)	(129)	64	25	51.03	N－35°－W	〃					○		木棺幅48cm程　石枕1（石材数1） 土3を切っていると思われる
	5	(179)	(63)	(175)	63	18	50.95	N－59°－W	〃					○		
	6	(233)	82	225	65	17	50.99	N－79°－E	〃	○片						
	7	(101)	81	(88)	60	15	51.02	N－85°－E	〃	○						
	8	206	74	196	64	9	50.80	N－76°－E	〃	○両						木棺長180cm程、土10を切る
	9	217	98	210	55	16	51.07	N－12°－W	平行	○両	○両				水銀朱	木棺175×45cm程、土10を切る
	10	148	63	132	54	16	50.91	N－12°－W	〃		○両					木棺46cm程
	11	115	54	103	36	18	50.97	N－20°－W	〃	○両	○両		○			木棺長88cm程
	12	102	65	93	45	26	51.02	N－20°－W	〃	○両	○両		○			木棺長84cm程
	13	114	51	97	30	47	50.92	N－20°－W	〃	○両			○			木棺長82cm程
	14	133	57	114	40	29	51.04	N－89°－W	直交	○両						墓壙内に土器片と平石を配置する。
	15	(146)	80	(135)	52	22	50.70	N－85°－E	〃					○		
	16	(160)	69	(140)	62	15	50.82	N－77°－E	〃	○					水銀朱	西側小口部の溝は、墓壙成形時、岩石を抜き取った跡の可能性あり、
	17	205	87	192	67	10	50.82	N－79°－E	〃	○両	○両					木棺173×53cm程
	18	183	86	175	71	18	50.77	N－84°－E	〃	○両	○両					木棺130×55cm程　40×30cm大の右が、床面近くまで落ち込んでいる。
	19	204	90	195	60	15	51.14	N－20°－E	〃	○両	○両					木棺177×47cm程、石枕1（石材数2）
	20	206	75	186	57	29	51.20	N－4°－E	〃							
	21	248	73	222	58	36	51.10	N－1°－E	〃							石枕1（石材数3）土20を切る
	22	(184)	78	(180)	70	10	51.08	N－55°－W	平行	○両						木棺長165cm程
	23	233	92	201	69	45	50.81	N－77°－W	〃	○両					水銀朱 鉄鏃1	木棺長185cm程
	24	251	78	225	50	20	51.24	N－75°－E	〃	○両	○両			○		木棺190×45cm程、石枕1（石材数1）
	25	166	(70)	127	(48)	17	51.15	N－77°－E	〃					○		
	26	(137)	98	(115)	83	12	51.08	N－83°－E	〃					○		
	27	(185)	81	(179)	67	10	51.22	N－42°－E	〃	○	○					
	28	158	63	142	45	33	51.18	N－62°－E	〃					○		
	29	244	85	230	68	20	50.99	N－59°－E	〃	○両						木棺長195cm程
	30	258	77	238	60	30	50.79	N－86°－E	〃					○		木棺幅40cm程
	31	210	84	190	40	24	51.02	N－43°－E	〃					○		石枕？1（石材数1）
	32	231	91	212	56	15	50.99	N－39°－E	〃	○両	○片					木棺長180cm程
	33	248	90	218	58	21	50.69	N－29°－E	〃					○		
	34	237	75	224	54	22	50.68	N－16°－E	〃		○両					木棺幅50cm程
	35	222	54	194	34	15	50.46	N－53°－E	斜交					○		
	36	(143)	54	(122)	43	28	50.28	N－23°－E	平行		○両					木棺幅40cm程
	37	235	82	216	69	24	51.05	N－39°－W	直交	○両	○片					木棺185×49cm程、石枕1（石材数3）
	38	(162)	79	(145)	60	32	50.83	N－68°－E	〃					○		木棺幅47cm程、石枕1（石材数1）
	39	(148)	(71)	(140)	(50)	13	51.03	N－70°－E	〃					○		石枕1（石材数2？）
B	40	(93)	84	(71)	69	32	49.14	N－59°－E	〃			○				木棺幅43cm、南西小口床面に段差あり、土41を切る
	41	(87)	79	(60)	61	25	49.05	N－57°－E	〃					○		
	42	(106)	104	(86)	91	12	49.33	N－50°－W	〃					○		
	43	(84)	72	(77)	51	27	49.20	N－61°－E	〃					○		石枕1（石材数3）
	44	(108)	79	(99)	58	36	49.04	N－63°－E	〃	○						石枕？（石材数4）
	45	(92)	66	(83)	61	33	49.00	N－64°－E	〃	○						
	46	(94)	88	(87)	80	41	48.78	N－73°－E	〃			○				南西小口床面に段差あり
	47	(59)	(98)	(46)	43	9	48.81	N－30°－W	平行					○		
	48	(200)	(50)	(200)	(50)	0	48.73	N－33°－W	〃					○		両小口の石材のみ、木棺長170cm、幅32cm程（北西小口の石材より）
	49	118	53	94	35	44	49.34	N－22°－W	平行					○		石枕1？（石材数1）
	50	(130)	42	(100)	(32)	39	49.27	N－29°－W	〃	○						
	51	(122)	(69)	(106)	(66)	37	48.98	N－68°－E	直交					○		石枕1（石材数4）
	52	(118)	92	(87)	80	38	48.87	N－27°－W	〃			○				南西小口床面に段差あり
	53	(108)	(68)	(83)	(57)	50	49.05	N－56°－E	〃	○						
	54	(228)	(67)	(228)	(49)	28	49.14	N－54°－E	平行	○						
	55	216	(99)	188	(88)	32	48.68	N－48°－W	〃	○						
C	56	(152)	64	(120)	31	31	49.12	N－27°－E	斜行			○				床面に段差あり
	57	(181)	(91)	(166)	(70)	26	49.35	N－18°－W	平行			○				床面に段差あり
	58	(249)	(94)	(193)	(90)	18	49.35	N－37°－W	〃					○		
	59	178	103	145	70	21	49.03	N－35°－W	〃					○		
	60	(181)	(115)	(160)	(99)	31	49.14	N－38°－E	直交					○		木棺幅42cm程
	61	146	79		68	28	49.05	N－67°－W	平行					○		木棺125×34cm　石枕1（石材数2）
D	62	107	62	103	44	17	48.45	N－17°－E	斜行					○		
	63	(85)	(70)	(80)	(65)	14	48.43	N－36°－E	平行					○		
	64	(75)	65	(55)	55	29	48.43	N－85°－W	直交					○		
	65	(123)	(70)	(110)	(51)	20	48.94	N－86°－W	斜交					○		
	66	(147)	(104)	(123)	81	44	48.73	N－64°－W	直交					○		石枕？

群	番号	掘り形寸法 cm ( )＝以上 上場 長	上場 幅	下場 長	下場 幅	深	床面の標高 m	主軸方向	等高線に	床面の形状 小口溝	側板溝	段差	中窪み	平ら	遺物	備考
	67	(157)	66	(141)	54	28	48.70	N－59°－W	直交					○		
	68	(143)	76	(126)	61	32	48.72	N－67°－W	〃				○			石枕１（石材数２）
	69	(165)	105	(158)	80	40	48.78	N－73°－W	〃	○						
	70	(198)	107	(190)	91	65	48.72	N－78°－W	〃					○		石枕１（石材数２）
	71	(161)	85	(150)	74	39	48.69	N－83°－W	〃	○	○片					
	72	(103)	98	(82)	61	46	48.49	N－89°－E	〃	○	○両					木棺幅45cm
	73	(128)	129	(100)	98	48	48.34	N－89°－E	〃					○		
	74	(110)	(61)	(93)	(51)	18	48.37	N－83°－E	〃					○		
	75	(143)	82	(130)	62	28	48.23	N－86°－E	〃					○		
	76	144	91	109	42	42	48.55	N－3°－E	平行					○		
	77	110	77	88	38	47	48.45	N－84°－E	〃					○		床面に粘土を貼る　木棺幅23cm
	78	126	(56)	119	37	21	48.55	N－8°－E	〃	○片						石枕か？
	79	(166)	127	(150)	91	37	48.29	N－89°－W	直交					○		
	80	(168)	83	(140)	76	42	48.28	N－87°－E	〃				○			
	81	(135)	78	(100)	57	44	48.32	N－80°－E	〃					○		石枕？
	82	(167)	(69)	(153)	(62)	30	48.33	N－86°－E	〃					○		
	83	(250)	108	204	67	42	48.47	N－1°－W	平行					○		
	84	(150)	(60)	(150)	(54)	22	48.42	N－26°－W	〃					○		内部の凹みは岩を抜き取った跡か
	85	130	53	123	38	17	48.21	N－24°－W	〃					○		
	86	(172)	102	(157)	74	44	48.07	N－80°－E	直交				○			
	87	(163)	90	(140)	86	30	48.05	N－55°－E	〃				○			
	88	(131)	73	(124)	41	19	48.00	N－66°－E	〃	○						
D	89	(147)	54	(135)	44	35	48.00	N－71°－E	〃					○		
	90	(46)	65	(41)	49	30	48.25	N－54°－E	〃					○		土91を切る
	91	(198)	108	(177)	90	26	47.94	N－54°－E	直交				○			石枕１（石材数２）
	92	98	57	84	36	16	48.14	N－46°－E	〃					○		北東小口を２段に掘る
	93	(124)	88	(100)	75	28	47.80	N－53°－E	〃					○		
	94	257	97	218	72	35	48.04	N－44°－W	平行					○		石枕１（石材数２）
	95	155	56	149	49	20	47.93	N－38°－W	〃					○		土98を切る
	96	(140)	91	(122)	55	21	47.85	N－51°－E	直交				○			石枕１（石材数２）
	97	(128)	82	(119)	66	37	47.60	N－55°－E	〃	○						
	98	255	102	226	80	57	47.41	N－52°－E	〃					○		木棺175cm×56－49cm
	99	(152)	89	(128)	75	42	47.79	N－57°－E	〃				○			北東小口に52×27×13cmの石を立てる。床面から40cm程の高さがある。
	100	238	88	205	80	61	47.60	N－52°－E	〃				○			
	101	286	102	228	75	76	47.58	N－49°－E	〃					○		石枕か？
	102	100	(56)	90	54	15	47.83	N－37°－E	〃				○			
	103	(85)	56	65	48	38	47.81	N－32°－E	〃				○			
	104	234	88	218	50	19	47.35	N－37°－E	平行					○		石枕１（石材数３）土106を切る
	105	291	68	256	48	32	47.60	N－9°－E	直交					○		石枕１（石材数２）土106を切る
	106	294	108	240	84	61	47.51	N－32°－E	〃			○				北東木口床面に段差あり
	107	(168)	75	(162)	67	40	47.62	N－34°－E	〃					○		石枕１（石材数２）
	108	(120)	127	(90)	105	50	47.95	N－22°－E	〃					○		石枕１（石材数２～３）
	109	265	99	229	77	52	47.70	N－18°－E	〃					○		石枕１（石材数２）
	110	260	77	233	64	67	47.67	N－15°－E	〃	○片						
	111	256	190	226	174	41	47.55	N－17°－E	平行					○		
	112	235	(94)	197	(88)	17	47.36	N－73°－W	〃					○		
	113	260	91	246	66	19	47.28	N－73°－W	〃	○片						東小口に４つの石を２段に積む
	114	246	88	238	66	26	47.32	N－80°－E	〃					○		木棺幅41cm、石枕１（石材数２）
	115	(215)	(15)	(205)	(7)	13	47.29	N－80°－E	〃							
	116	110	54	100	41	21	47.70	N－89°－E	〃					○		
	117	(149)	80	(122)	55	59	47.32	N－25°－W	直交					○		
	118	(180)	87	(152)	65	50	47.25	N－39°－W	〃				○			石枕１（石材数２～４）
	119	243	113	175	97	27	47.08	N－50°－E	平行					○		
E	120	(151)	129	(132)	95	56	47.07	N－58°－W	直交				○		管玉１	石枕１（石材数２）
	121	(114)	(90)	(104)	(82)	70	47.08	N－85°－W	〃					○		石枕１（石材数３？）
	122	(82)	137	(65)	117	27	46.88	N－8°－E	〃					○		長軸が等高線に平行する小形の墓の可能性もあるが、定かでない。
	123	(142)	(92)	(125)	61	36	46.65	N－87°－W	〃					○		
	124	(86)	97	(88)	77	40	46.69	N－88°－W	〃					○		
	125	(102)	67	(95)	63	31	46.80	N－83°－W	〃					○		
	区画墓	165	65	137	49	40	46.62	N－18°－W	平行					○		石列２列残存　墓壙土に小集石あり

第２表　土器棺墓計測値

群	番号	墓壙寸法 cm 長軸	短軸	深	墓壙底標高 m	棺身開口方向
A	1	65	49	33	51.11	S－12°－E
	2	65	56	18	51.20	—
	3	65	60	31	51.20	上向き
	4	66	64	17	51.20	N－87°－E
	5	95	77	42	50.76	N－33°－W
A	6	63	40	38	50.92	N－82°－E
	7	71	54	34	50.82	N－75°－E
	8	65	52	45	49.92	N－45°－E
	9	85	73	44	50.25	N－64°－E
	10	—	—	—	—	不明
B	11	63	52	18	49.01	N－10°－E
D	12	71	61	47	48.60	S－76°－E
	13	78	63	39	48.56	N－54°－E
	14	57	51	30	48.10	N－69°－E

第3表　玉　類　一　覧

番号	器種	出土遺構・出土地点	材　質	色　調	最大長㎝	最大径㎝	孔　径㎝	重量g	時　期	備　考
O1	小玉	箱式石棺墓1	緑色凝灰岩	明緑灰色10GY7／1	2.4	3.3	1.4	0.05	不明（弥生・後期？）	
O2	〃	〃	〃	〃	2.2	3.3	1.4	0.04	〃	
O3	〃	〃	〃	〃	2.0	3.3	1.4	0.04	〃	
O4	〃	〃	〃	〃	2.3	3.3	1.3	0.05	〃	
O5	〃	〃	〃	〃	1.9	3.3	1.4	0.04	〃	
O6	〃	〃	〃	〃	1.6	3.3	1.3	0.03	〃	
O7	〃	〃	〃	〃	2.0	3.4	1.3	0.03	〃	
O8	〃	〃	〃	〃	2.3	3.5	1.3	0.05	〃	
O9	〃	〃	〃	〃	1.6	3.4	1.0	0.03	〃	
O10	〃	〃	〃	〃	1.6	3.3	1.0	0.03	〃	
O11	〃	〃	〃	〃	2.0	3.3	1.1	0.04	〃	
O12	〃	〃	〃	〃	2.2	3.3	1.3	0.03	〃	
O13	〃	〃	〃	〃	1.7	3.5	1.3	0.03	〃	
O14	〃	〃	〃	〃	2.0	3.3	1.3	0.05	〃	
O15	〃	〃	〃	〃	2.5	3.5	1.2	0.05	〃	
O16	〃	〃	〃	〃	—	—	—		〃	破砕
O17	管玉	5下地区、流土中	〃	明緑灰色5G7／1	21.0	8.0	2.0	1.96	弥生・後期	片面穿孔
O18	〃	土壙墓120墓壙内	〃	明緑灰色10GY8／1	14.0	4.0	2.0	0.34	〃	片面穿孔
O19	小玉	土壙墓A　木棺内	ガラス	水　色	4.0	5.5	2.5×1.8	0.31	古墳・中期	
O20	〃	〃	〃	〃	4.2	6.0	2.5×1.8	0.20	〃	
O21	〃	〃	〃	〃	3.5	5.6	2.8×2.0	0.12	〃	
O22	〃	〃	〃	〃	4.5	5.5	2.2	0.18	〃	
O23	〃	〃	〃	〃	4.3	5.0	1.8	0.15	〃	成分分析試料1
O24	〃	〃	〃	青	3.0	4.5	1.5	0.09	〃	
O25	〃	〃	〃	〃	2.3	4.5	1.7	0.07	〃	一部欠損
O26	〃	〃	〃	〃	2.0	4.3	1.5	0.05	〃	
O27	〃	〃	〃	〃	2.2	4.3	2.0×1.5	0.03	〃	一部欠損
O28	〃	〃	〃	〃	2.5	4.5	1.5	0.05	〃	
O29	〃	〃	〃	〃	1.5	4.0	2.0×1.5	0.03	〃	
O30	〃	〃	〃	〃	2.5	5.0	1.7	0.09	〃	
O31	〃	〃	〃	〃	1.4	4.0	1.5	0.04	〃	
O32	〃	〃	〃	〃	2.0	4.2	1.5	0.03	〃	
O33	〃	〃	〃	〃	2.0	4.2	1.5	0.04	〃	
O34	〃	〃	〃	〃	—	—	—	—	〃	粉砕
O35	〃	〃	〃	〃	2.2	4.2	2.0×1.5	0.05	〃	
O36	〃	〃	〃	〃	2.0	4.5	1.5	0.06	〃	
O37	〃	〃	〃	〃	3.0	5.1	1.5	0.12	〃	
O38	〃	〃	〃	〃	2.0	4.0	1.5	0.03	〃	1／3欠損
O39	〃	〃	〃	〃	2.0	4.2	1.5	0.05	〃	
O40	〃	〃	〃	〃	2.0	3.8	1.5	0.03	〃	1／2欠損
O41	〃	〃	〃	〃	2.5	4.5	1.5	0.09	〃	成分分析試料2

1．前山遺跡　土壙墓群空中写真（上方が尾根先端）

図版 2

1．前山遺跡空中写真
（南東上空から）

2．南～西斜面
の土壙墓群
（南から）
・右上頂上部から
左下へ、A・
C・D・E群

3．頂上部の土壙墓群
（A群）（北から）
・手前が土壙墓1

1．頂上部の
土壙墓群
（A群）
（南から）
・中央が土壙墓
14

2．土壙墓群 2 ～ 5
（A群）
（北東から）

3．北東斜面の
土壙墓群
（B群）
（北東から）

1．南西斜面の
土壙墓群
（D群）
（南東から）

2．西斜面の
土壙墓群
（D・E群）
（南から）

3．区画墓
（南から）

1．北斜面の土壙墓群（北東から）

2．箱式石棺墓 2
天井石直上の
集石
（南東から）

3．箱式石棺墓 1
（北東から）

1．土器棺墓 5
（南西から）

2．土器棺墓 6：右
土器棺墓 7：左
（北東から）

3．右下
土器棺墓 2
（東から）

4．左下
土器棺墓12：上
土器棺墓13：下
（北西から）

1．前山１号墳
（南東から）

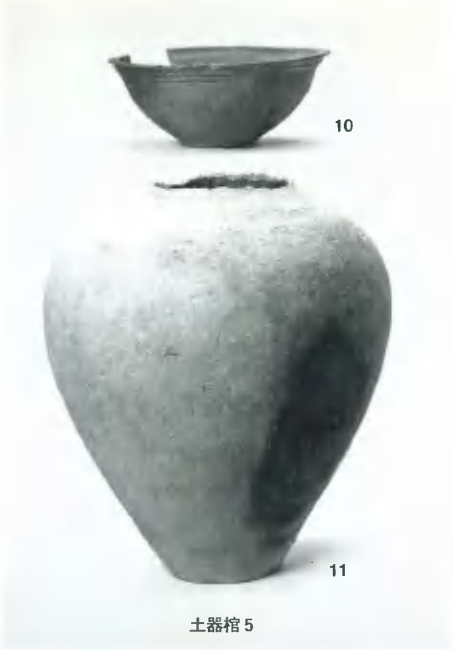
2．前山１号墳　主体部（南西から）

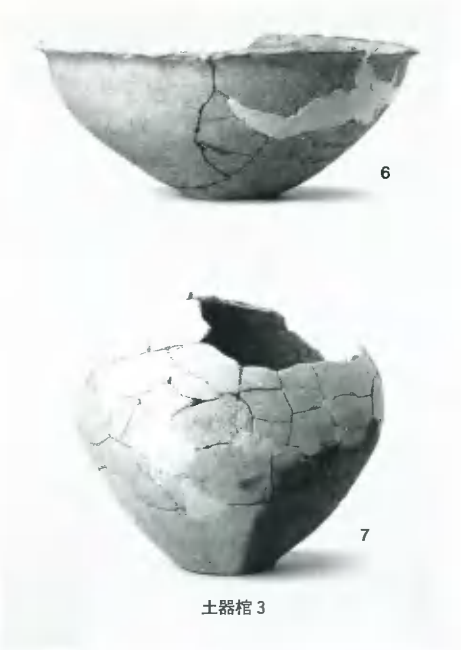
3．前山1･2号墳
周溝部の
切り合い
（南西から）

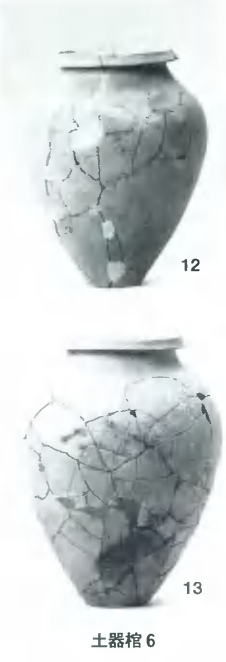
1．前山２号墳
（北西から）

2．土壙墓Ａ
遺物出土状況
（南西から）

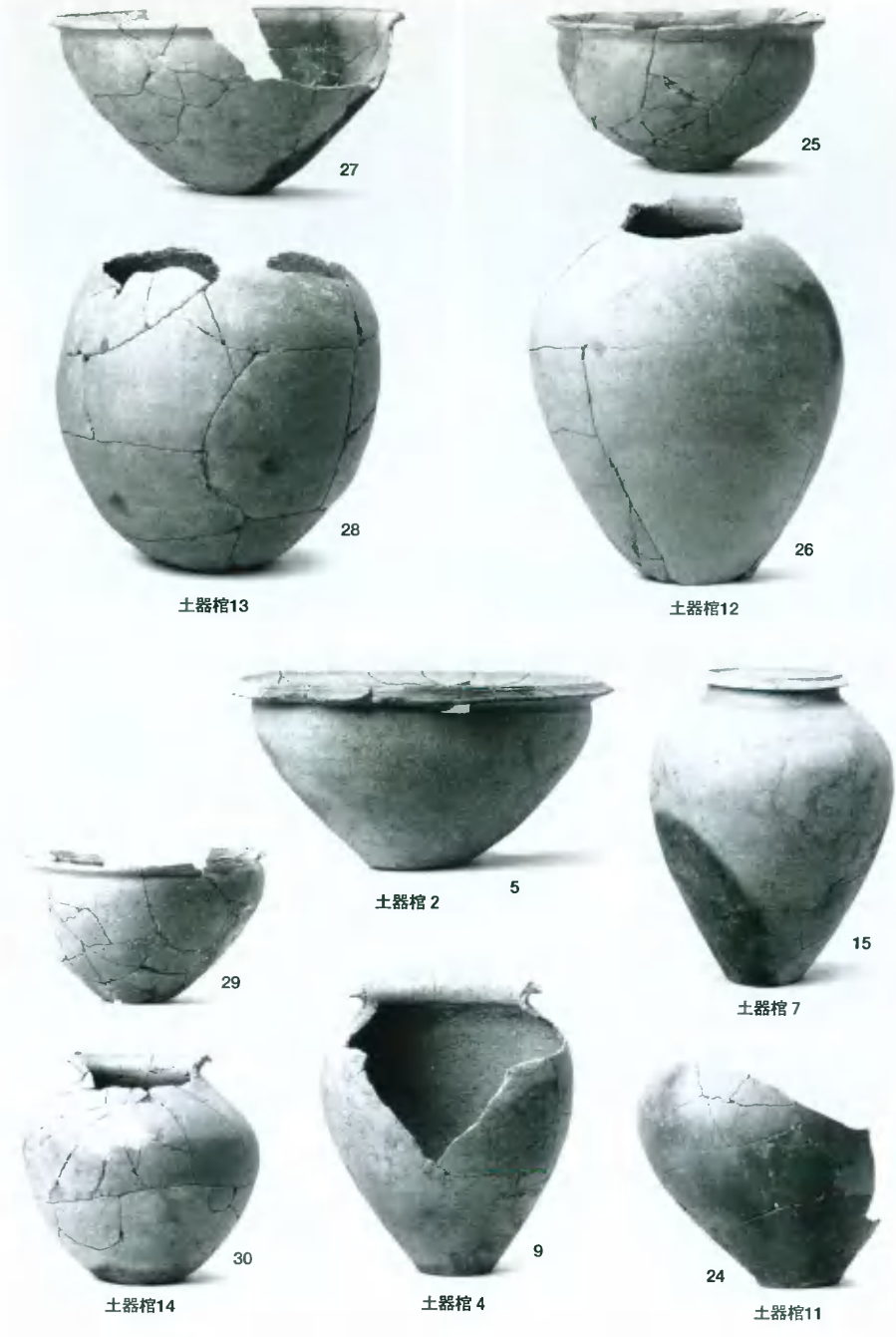
3．土壙墓Ａ
完堀状況
（南から）







1．土器棺 1・3・5・6・8（1／8）



1．土器棺 2 ・ 4 ・ 7 ・11・12・13・14（1／8）

32　1／3

55　1／3

1．上地区出土土器

116　1／4

131　1／5

108　1／5

275　1／3

290　1／3

172　1／3

317　1／3

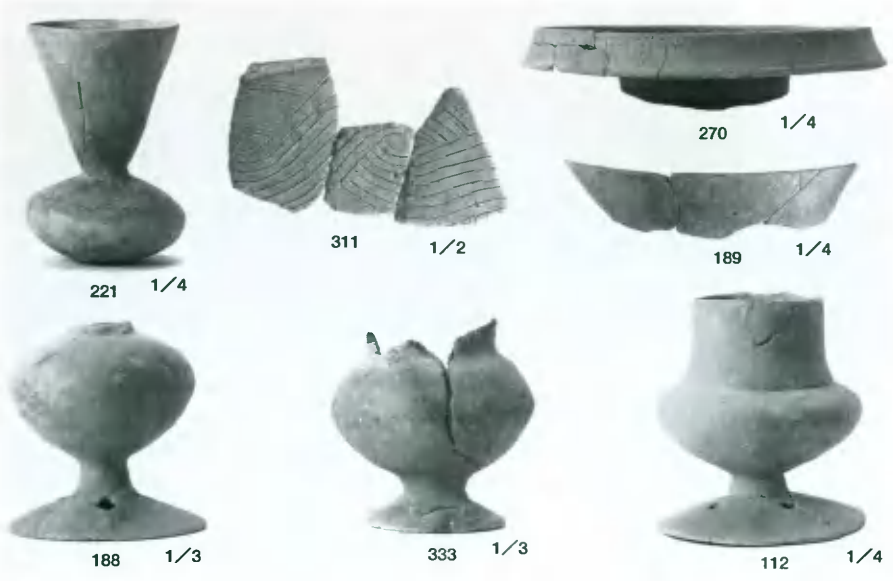
111　1／3

331　1／3

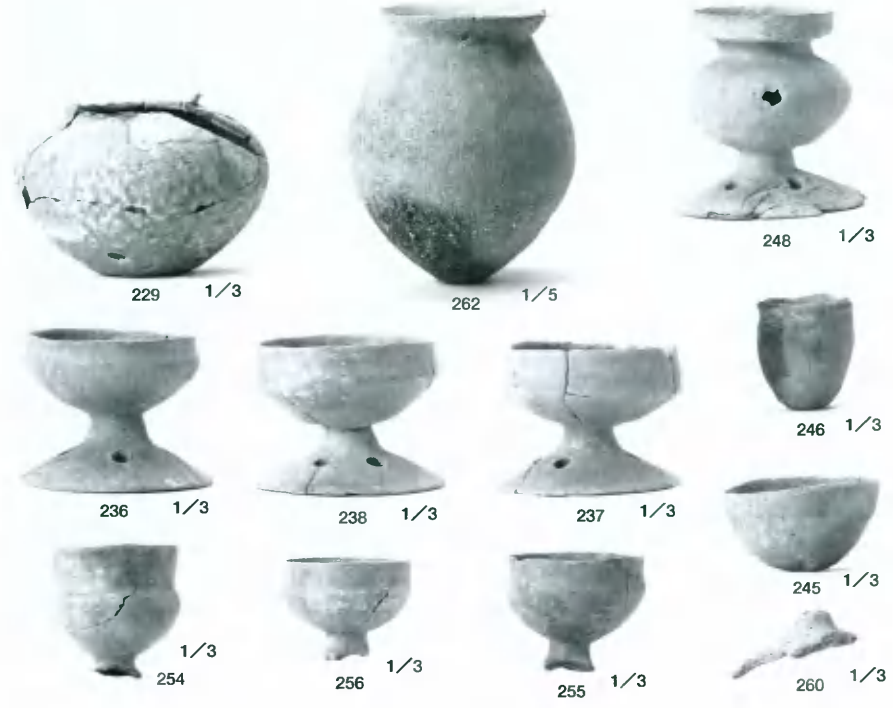
167　1／3

150　1／3

2．中地区出土土器(1)



1．中地区出土土器(2)



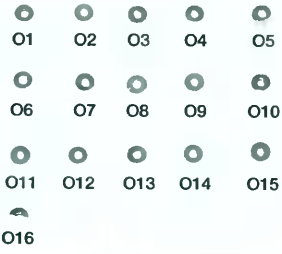
2．土器溜り2出土土器

1．下地区出土土器

2．中央地区・土器溜り1出土土器

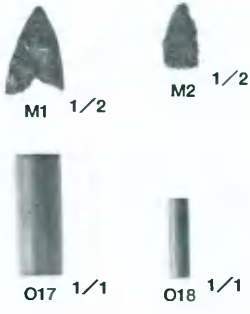
1．前山1号墳関連遺物

2．前山2号墳出土遺物



4．箱式石棺墓1出土遺物（1／1）

3．土壙墓A出土遺物



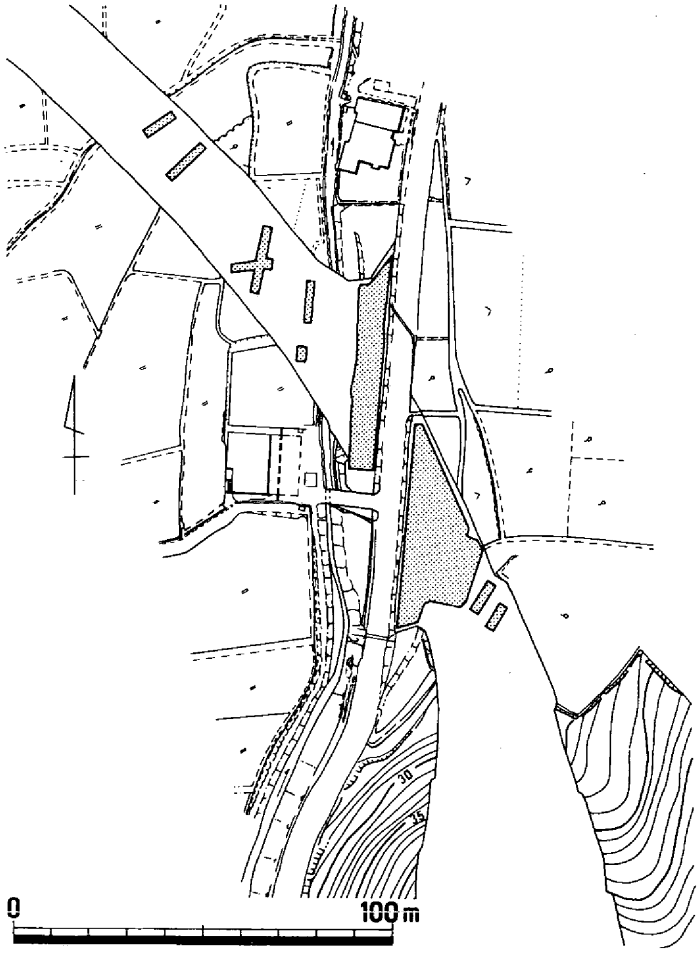
5．土壙墓及び、流土中出土遺物

第３章　鎌戸原遺跡の調査

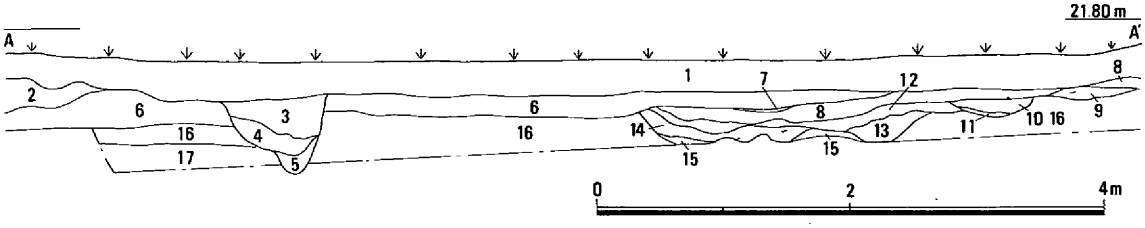
第１節　調査の経過と概要

鎌戸原遺跡は都窪郡山手村宿字鎌戸原に所在する。倉敷市から山手村へ国道429号線を通って入ると、総社市に向かって沖積地が広がっている。谷部の出口には大池があり、池の東側には狸岩山からのびる支丘の一つが突出している。丘陵の先端部に前山遺跡がある。

前山遺跡のある丘陵の北側裾部に鎌戸原散布地と呼ばれる周知の遺跡が存在した。現状では遺跡の範囲を明確にできないため、平成５年４月５日から同年４月23日の間、15本のトレンチを設定して第１次調査を行った。その結果、丘陵部斜面にかかる部分と北西側で一段低くなる低位部からは無も検出されなかった。北部に行くにしたがって、堆積土が深くなり、グライ化した土壌となって、谷地形を呈している。山裾の平坦面から

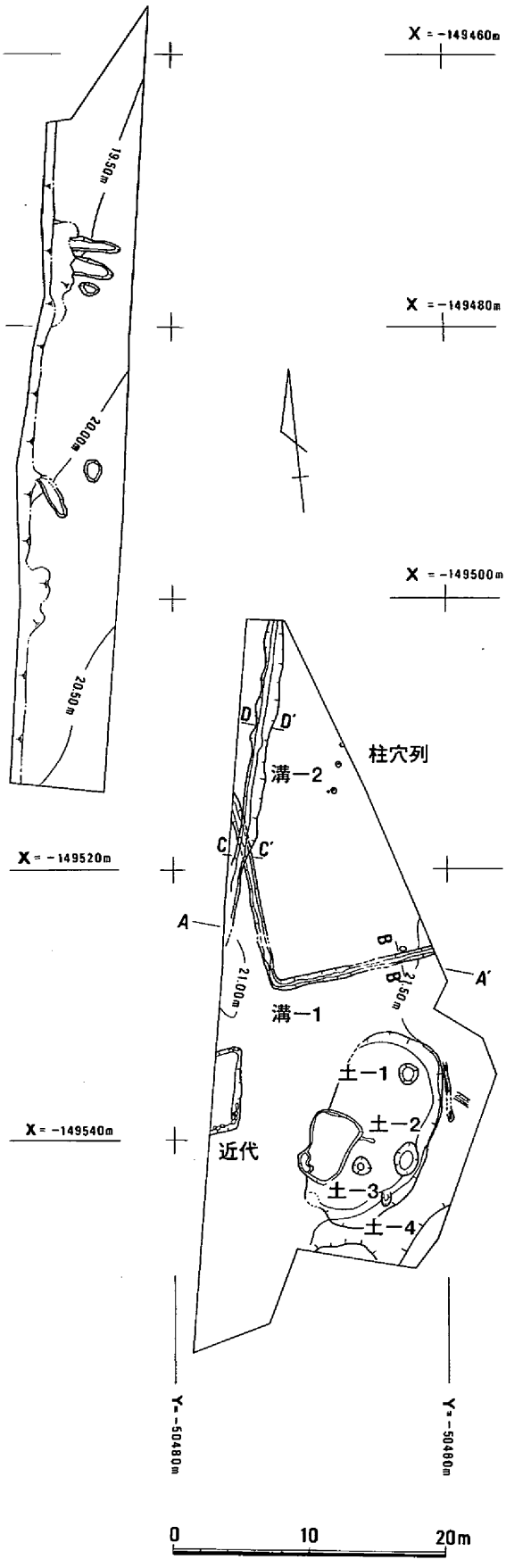


第１図　鎌戸原遺跡調査範囲図（1／2,000）



1．耕土
2．暗褐色土
3．暗褐色土（溝－２）
4．黄褐色ブロックまじり暗褐色土
5．にぶい黄褐色砂質土
6．暗褐色土
7．褐色土
8．褐色土
9．暗褐色土
10．褐色土
11．オリーブ褐色土
12．にぶい黄褐色土
13．暗オリーブ褐色土
14．暗オリーブ褐色土
15．褐色土
16．褐色土
17．褐色土

第２図　土層断面図（1／60）



第３図　鎌戸原遺跡遺構配置図（1／500）

は、遺構と遺物が確認された。そのため、現在の国道429号線の東側と西側の平坦面について全面調査を実施した。全面調査は平成５年４月26日から始め、平成５年６月16日に完了した。なお、遺構を確認したことから、遺跡の名称を鎌戸原遺跡とする。

また、鎌戸原遺跡の北西側の谷部を越えた地区についても、平成６年１月５日から同年１月21日の間、トレンチによる第１次調査を実施したが、遺構・遺物は発見されなかった。

全面調査を実施したところは、畑地、果樹園となっていたが、下層には水田跡があり、近代まで水田として利用されていたことがわかる。したがって、上部はかなり削平されていて、遺構の残存状況はよくなかった。山裾部に小さな谷地形があり、現在も湿気をおびている。

谷部では、下層に弥生時代前期の包含層が認められた。地山面には、不整形の凹みが多くあり、自然の湧き水の跡とみられる。湧き水を取水した跡と思われる土壙を３基検出した。北寄りには、中世の溝があり、Ｌ字形に曲がるものもある。ほかに、少数の柱穴を検出した。

日　誌　抄

平成５年

４月５日　鎌戸原遺跡調査開始

５月６日　弥生時代前期包含層を確認

５月11日　中世土壙群を確認

５月25日　中世の区画溝を確認

５月31日　専門委員会開催

６月16日　鎌戸原遺跡調査終了

平成６年

１月５日　鎌戸原遺跡周辺第１次調査開始

１月21日　同上調査終了

第二節　調　査　報　告

1．縄文・弥生時代の遺構・遺物

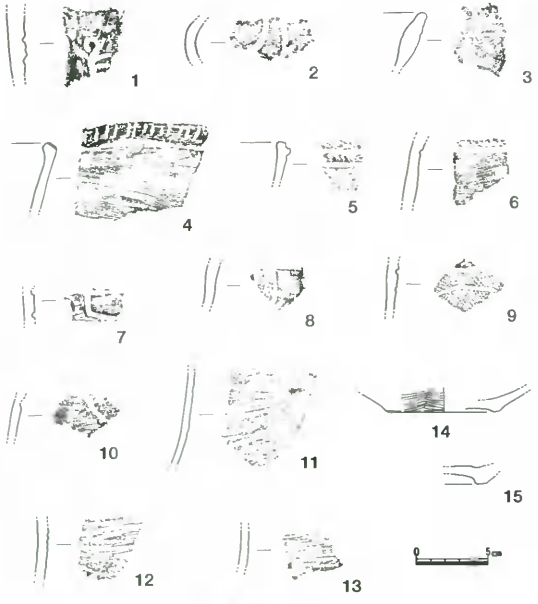
全面調査を実施したところは、周辺の水田部より一段高くなった台地状を呈している。台地の端部にあたり、調査範囲の全域から縄文時代と弥生時代の遺物が出土した。調査地全域が畑地であり、耕作のため削平されたり、たくさんの穴が掘られていた。検出された遺構はすべて中世以降のものであり、縄文・弥生時代の遺物は、中世以後に形成された堆積層や表土層から出土したものが多い。一部浅い谷状地形を呈するところの下部では、弥生時代前期の土器の包含層が認められた。

縄文土器（第4図）

縄文時代の遺構は検出されていないが、縄文土器と石器が少量出土している。以前の分布調査においても縄文時代後期の土器片が表採されていて、縄文時代の遺跡の所在は推測されていた。縄文時代の純粋な包含層はなく、遺物は中世以降に堆積した土層や表土層から出土している。縄文土器と認められるものでも、表面が著しく摩滅しているものが多く、拓本・図化できたものは、第4図に示したものがすべてである。

1は深鉢の口縁部の突起部で、太い沈線と縄文がみられる。2は深鉢の口縁部の波状部で、摩り消し縄文が施されている。3は深鉢の口縁部の突起部と推測され、太い沈線がある。4・5は鉢の口縁部で、4の口縁部に太いキザミメがあり、5は口縁端部付近に縄文が施されている。6は太い沈線の上方に縄文、下方に条痕文を施している。7は太い沈線による区画がある。8は3本の太い沈線とその間に縄文があり、ほかは消している。9は太い沈線と摩り消し縄文を施している。10は条痕文のうえに太い沈線を配している。11～13には条痕文が見られる。14・15はあげ底の底部で、少し上げているだけである。

これらは縄文時代後期を主体とし、1～4・6・7・9・10は中津式、5・8は福田KⅡ式に比定されよう。ほかに晩期の細片もある。

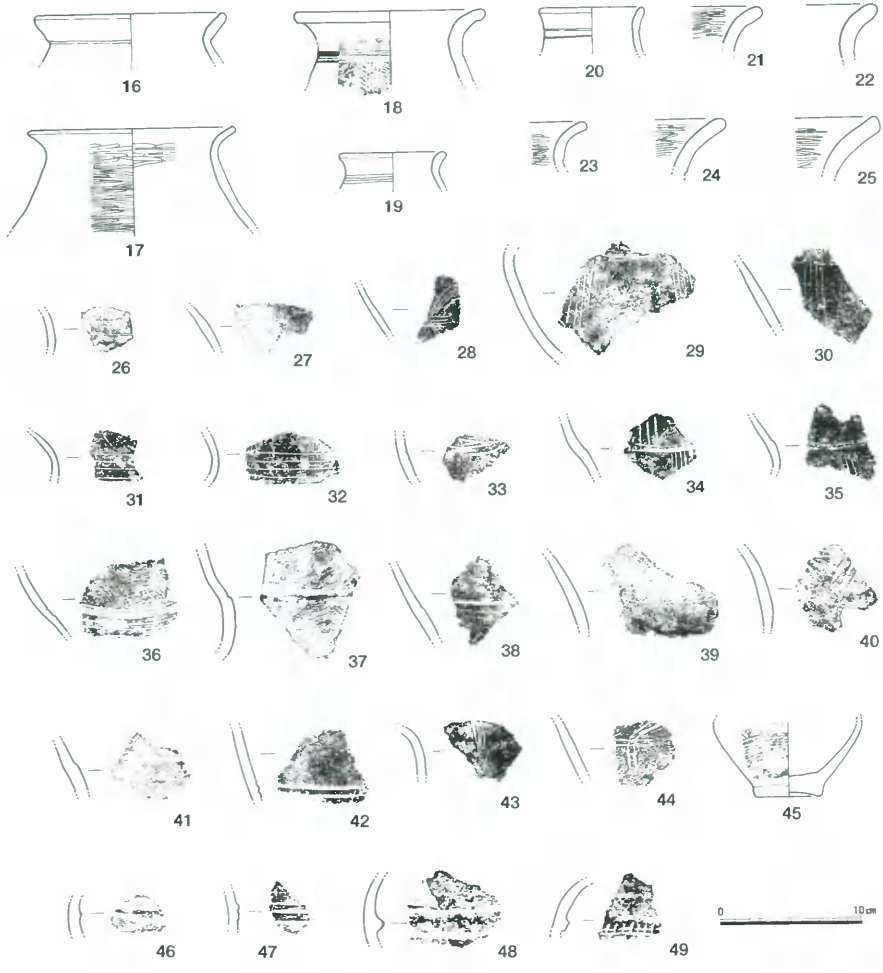


第4図　縄文土器（1／4）

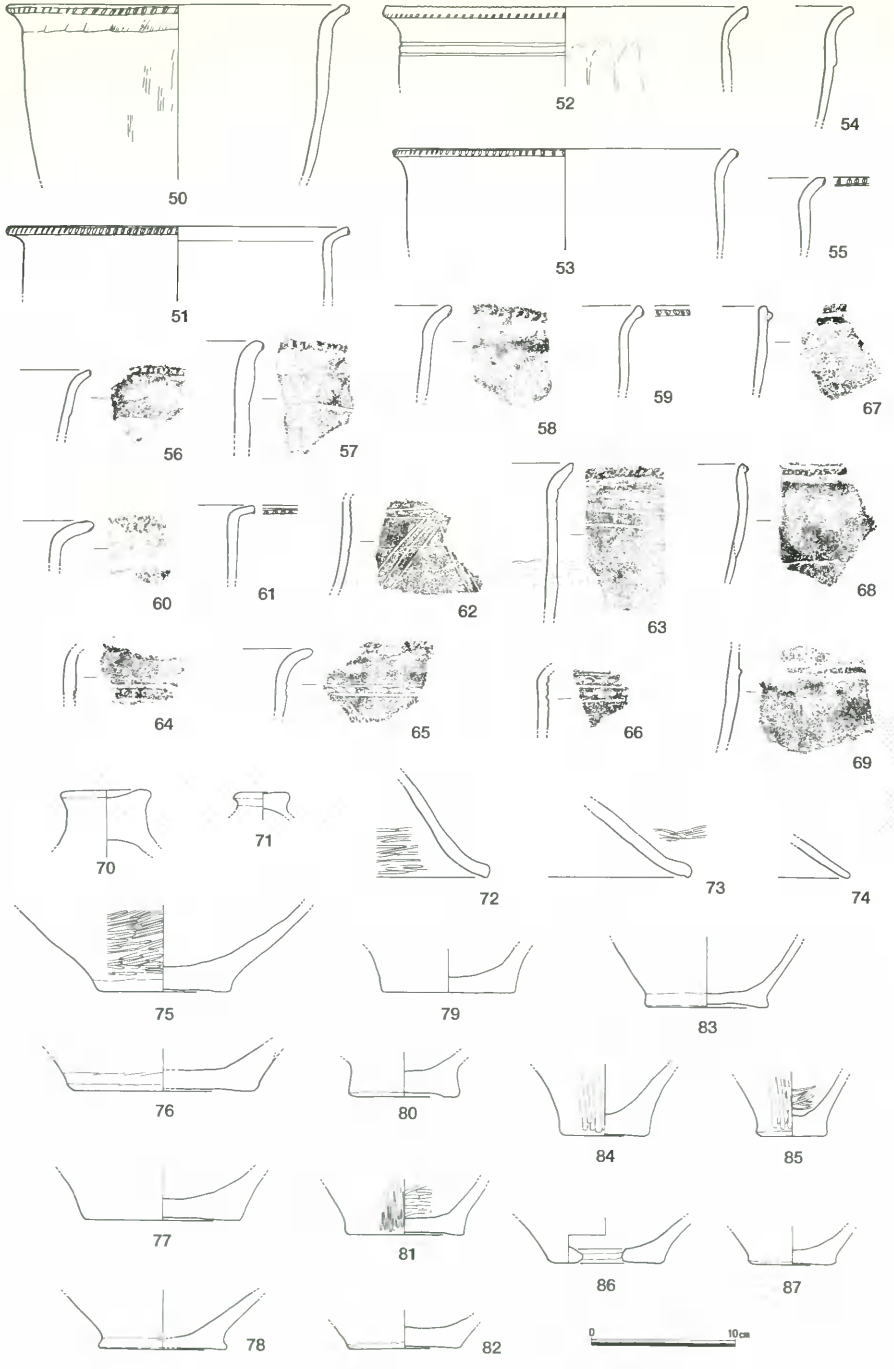
弥生土器（第５～７図　図版３）

弥生土器は各時期のものが出土しているが、大部分は前期のものである。出土状況は中世以後の撹乱層と表土から主に出土し、谷地形の下層部では前期の土器の包含層を形成していた。ほとんどの土器の表面が摩滅しているもので、図化できたものは少ない。

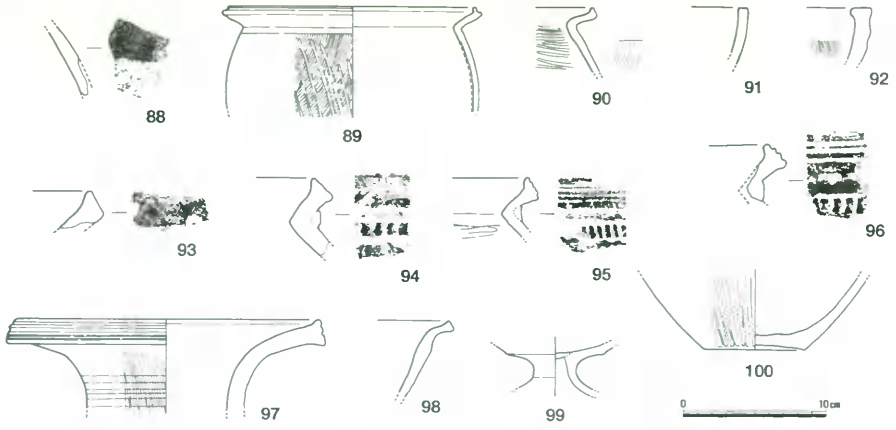
前期の土器には、壺、甕、蓋がある。いずれも小破片が多く、全形を復元できるものはない。壺の口縁部には、口縁を短かく斜め上方へ外反させ、明瞭な段を有するもの16・23・24、明瞭な段を形成しないもの17、頸部に沈線を配するもの18・19、やや細い筒形を呈し、頸部に沈線を施すもの20がある。大きさでは、小型のもの19、中型のもの16～18、大型のもの24・25がある。いずれも内外面を横位にヘラで摩いている。



第５図　弥生土器１（1／4）


50
52
54
53
55
51
56
57
58
59
67
60
61
62
63
68
64
65
66
69
70
71
72
73
74
75
79
83
76
80
84
85
77
81
86
87
78
82
0
10cm

第6図　弥生土器2（1／4）



第７図　弥生土器３（1／4）

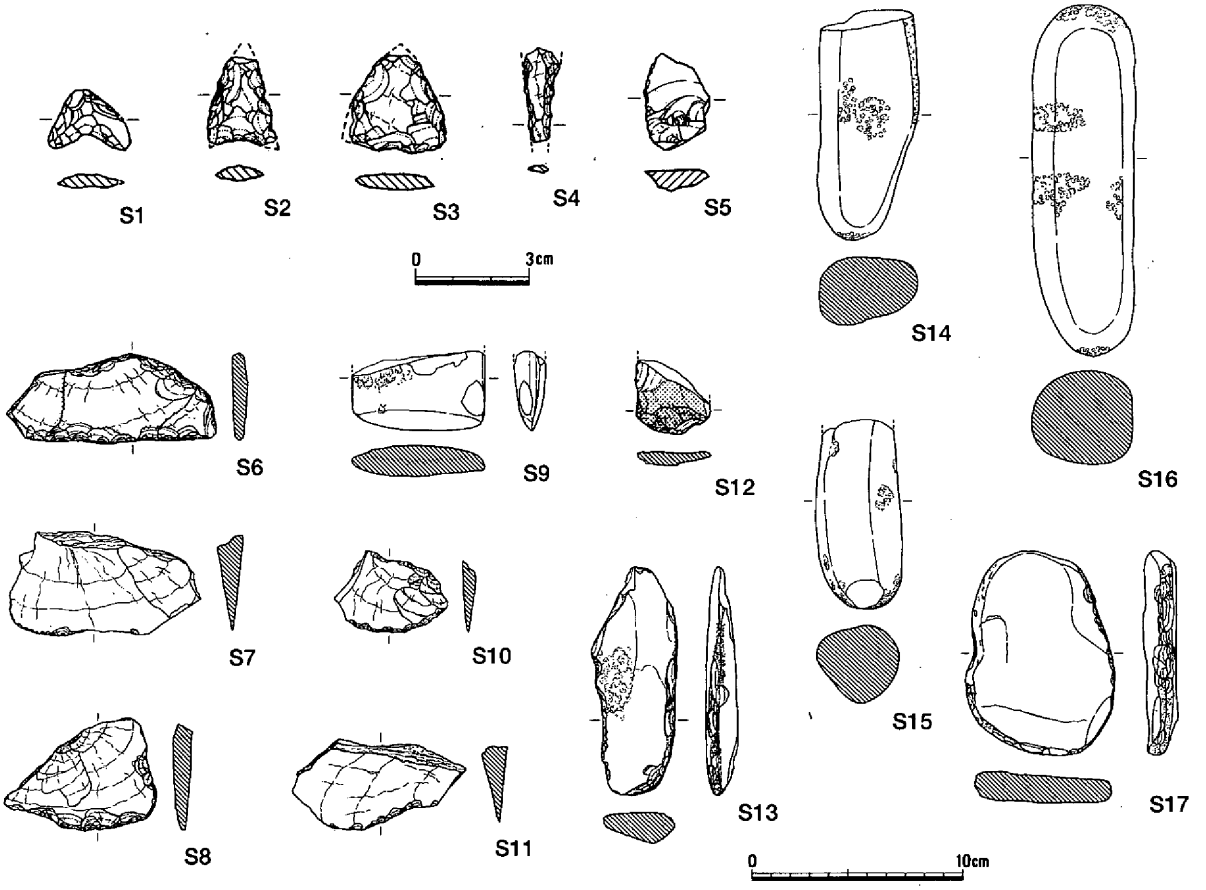
壺の肩部に施文したものがある。沈線で区画した中に有軸の木葉文を施すもの26・27・31、沈線で区画した中に重弧文を施すもの36、沈線の上下に重弧文を施するもの28、沈線の下方に重弧文を施するもの37、肩部ないし胴部に数本の縦線を間隔をおいて配するもの29・30・34・35、斜め方向に数本の沈線を配するもの18・39・40・43、２本の沈線を交差させたもの44、胴部に数本の沈線を平行に配したもの45などがある。また、肩部に明瞭な段を有するもの37・41、削り出し突帯を有するもの42・47があり、その他は沈線を配している。小型壺では、19と45は大きさも類似していて、接合はできないが、同一個体の可能性もある。頸部に突帯文を配するものもある。突帯文には小さくつまみ出した上に小さなキザミメを施すもの46、断面三角形の太い突帯にキザミメを施すもの48、扁平な突帯に横位の沈線をひき、縦位のキザミメを施したもの49がある。胎土には径１～３㎜程度の砂粒を含み、色調は橙色～明赤褐色を呈するものが多い。

甕の口縁部には、突帯文を有しないもの50～66と突帯文を配したもの67～69がある。口縁部で見ると、緩やかに外反し、下半部にキザミメを入れたものが多く、上端部と下端部にキザミメを入れたもの60がある。明瞭な段を有するもの54・56も少量ある。施文は少ないが、胴部に山形文を配したもの62・65がある。縄文系の突帯文を施す甕67・68があり、削り出し突帯を配したもの69がある。胎土には１～３㎜の砂粒を多く含み、色調はにぶい橙色～明赤褐色を呈するものが多い。

蓋70～74は太いつまみと緩やかにひろがる形のものである。底部75～82は壺または甕のものである。75・76は壺、その他は甕と推測される。86の底部は、焼成後の穿孔があり、こしきとして利用されたことが分る。前期の土器の時期についてみると、壺と甕に明瞭な段を有するものがあり、古段階に比定される。削り出し突帯文を有するものや段の無くなったものもあって、中段階のものが多い。少量であるが、貼り付け突帯文があり、新段階に比定されるものもある。

中期の土器も少量ある。壺には肩部に波状文を施すもの88、甕89～96・100は口縁部を「く」の字に折り曲げ端部を肥厚している。口縁端部外面に凹線文を施し、頸部にキザミメを入れた突帯文を配するもの94～96がある。ほかに鉢91・92がある。

後期の土器も若干みられる。器種は長頸壺97、鉢98、高杯99がある。



第8図　石器（1／2・1／4）

石器（第8図　図版4－2）

鎌戸原遺跡は、縄文時代後期から中世の遺構・遺物が検出されたが、削平されたところも多く、中世の遺構以外は、中世の遺物を含む包含層および畑地などの撹乱層中から出土する遺物がほとんどである。石器については、すべて時期の限定できる遺構に伴っていない。したがって、時期の特定が難しいことから、ここに一括して取り上げることにした。特に叩石については、古墳時代以降に下だるものも含まれているものと考えている。図面に掲載した以外にサヌカイトの破片はかなり多い。

石鏃は3点あり、S1は凹基式で脚部が長く、表面が風化していて縄文時代に比定される。S2・S3はいずれも三角形を呈し、S2はわずかに凹基となり、S3は平基となっている。時期は決め難い。S4は石錐で、基部と先端部を欠失している。S1～S4はサヌカイト製である。S5は黒曜石（松脂岩）製のスクレイパーで、剥片の端部を加工している。時期は縄文時代と推定される。S6は打製石包丁と考えられるが、両端の打ち欠きは明瞭でない。S7・S8・S11はサヌカイトの剥片の端部を加工したスクレイパーである。

S9は安山岩製の扁平摩製石斧で、先端部のみ残存している。S12はサヌカイト製で、一部分しか残存していないが、先端部に使用による摩滅が見られ、石鏃と推定される。時期は弥生時代前期と推定されるが、特定できない。S13～S17は叩石である。S13とS17は、主に側辺部に叩きの痕が残り、S14～S16は棒状の石材で、先端部を主に使用している。S13・S17は頁岩、S14・S16は石英斑岩、S15は閃緑岩である。

2．古墳・歴史時代の遺構・遺物

(1) 遺　　構

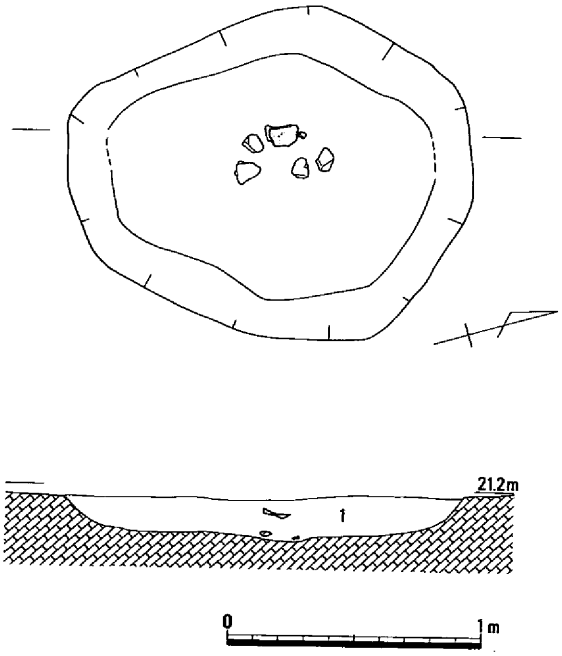
調査地はすべて畑地となっていて、上部がかなり削平されている。そのため、柱穴もわずかに残っている状況である。検出された遺構はいずれも中世のもので、住居を区画した溝、取水のために谷部へ掘られた土壙などがある。

土壙－1（第9図　図版1－2）

山裾部にあり、湧き水のある小さな谷地形の中に位置している。付近に、土壙－2・3のほか、不整形の凹みがあり、湧き水を利用していたところと推測される。平面形はいびつな楕円形を呈している。大きさは、長径162cm、短径132cm、深さ17cm、底面の標高20.98mを測る。埋土は黒褐色粘質土で、自然の角礫と土器片が含まれている。土器片は弥生時代前期のもので、底部のほか小破片が少量出土している。他の時期の遺物は検出されなかったが、谷部全体に弥生時代前期の土器片があり、付近の土壙が中世のものであることから、前期の土器は混入と考えて、時期は中世と推定される。

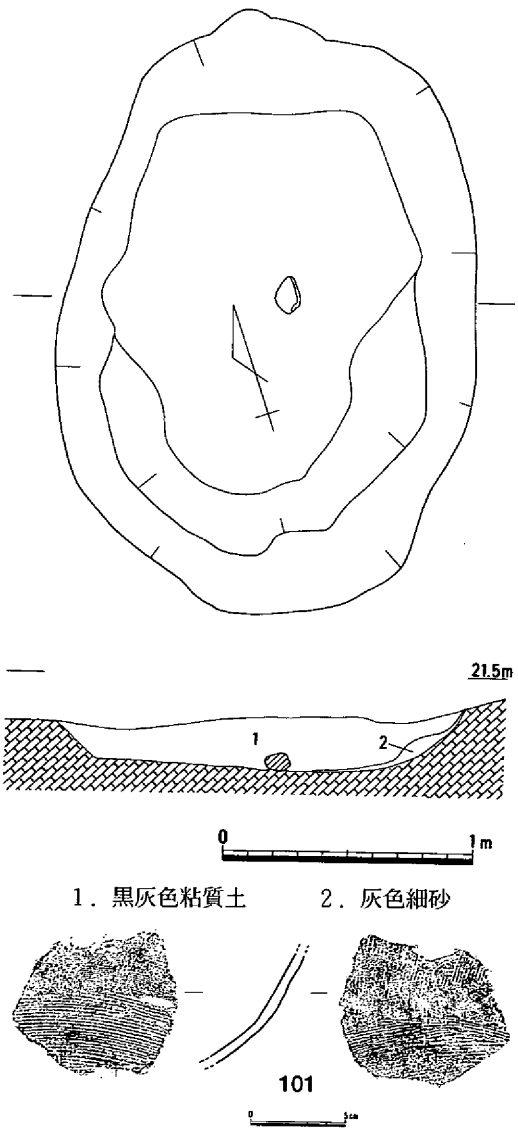
土壙－2（第10図　図版2－3）

山裾部の各地形の中にあり、土壙－1の南に位置している。平面形はいびつな楕円形を呈している。大きさは、長径241cm、短径168cm、深さ25cm、底面の標高21.17mを測る。埋土は黒灰色粘質土で、角礫のほか土器片を



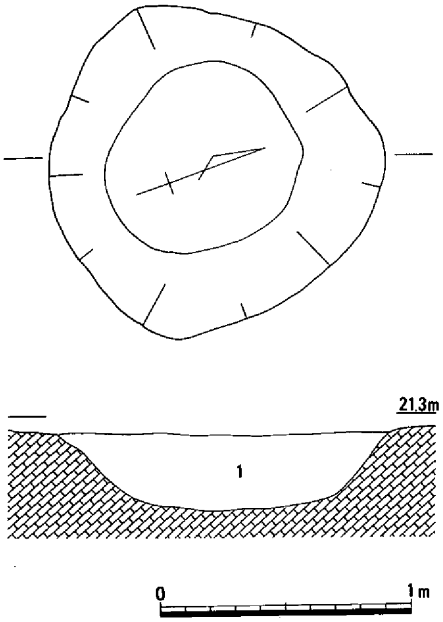
1．黒褐色粘質土

第9図　土壙－1（1／30）



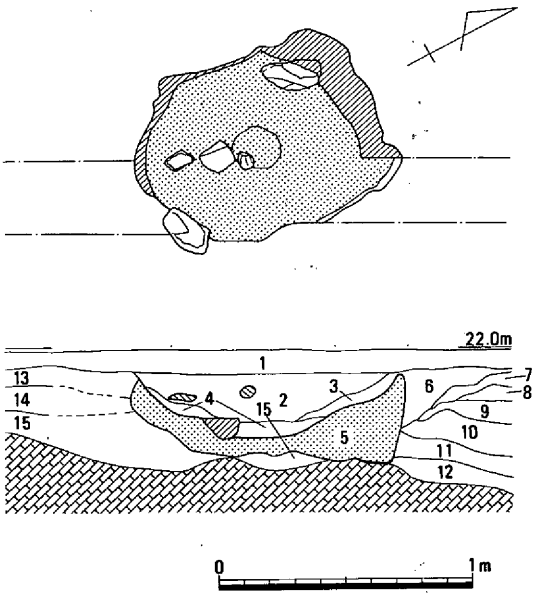
1．黒灰色粘質土　　2．灰色細砂

第10図　土壙－2(1／30)・出土遺物(1／4)



1．黒色粘土

第11図　土壙－3（1／30）



1．にぶい黄橙色砂質土
2．明褐色砂質土
3．にぶい黄橙色細砂
4．灰褐色粗砂
5．明赤褐色粘土
6．灰黄褐色粘質土
7．暗灰黄色粗砂
8．浅黄橙色細砂
9．淡黄色細砂
10．褐色粗砂
11．黄灰色細砂
12．灰色粗砂
13．灰黄褐色細砂
14．褐色粗砂
15．黄褐色粗砂

第12図　土壙－4（1／30）

含んでいる。土器には、弥生土器、須恵器の甕、内黒の土師器椀などの小破片のほか、土鍋101が出土した。土器は内外ともハケメで仕上げてあり、外面には煤が付着している。時期は出土遺物から中世に比定される。

土壙－3（第11図　図版2－4）

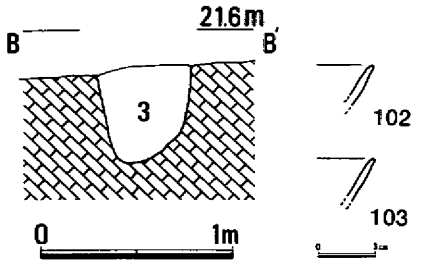
山裾部の谷地形の中にあり、土壙－2の西に位置している。平面形はいびつな円形を呈している。大きさは、長径134cm、短径131cm、深さ30cm、底面の標高20.92mを測る。埋土は黒色粘土で、埋土中からは、弥生土器の小破片が検出された。しかし、周辺との関係から時期は中世と推定される。

土壙－4（第12図　図版2－5）

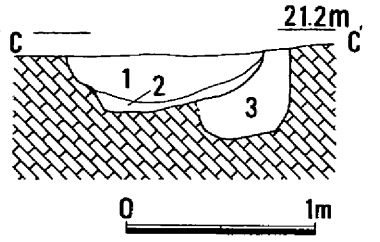
山裾部にあり、土壙－2の南西に位置している。自然堆積層の上から切り込まれていて、土壙の底面には厚く、明赤褐色粘土が貼られている。被熱のあとかと検討したが、火を使用した跡は確認されなかった。粘土の内側の大きさは、長径85cm、短径72cm、深さ25cm、底面の標高21.64mを測る。埋土は主に明褐色細砂で、角礫を含んでいるが、遺物は検出されなかった。掘り込まれた下部の土層中から須恵器片が検出されていて、周辺の状況から判断して、時期は中世と推定される。

溝－1（第13図　図版1－2・2－6）

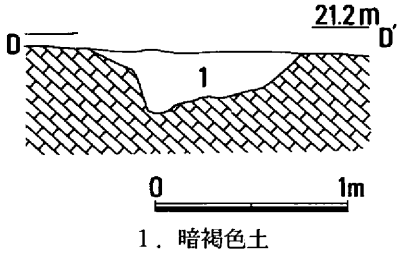
山裾から北へ広がる平坦面があり、小さな谷部の北側に近接している。溝はL字形に検出されたが、さらに北側と東側へ続いていて、方形に区画した溝と推測される。折れ曲った角度は直角で、北へのびる溝の方位はN－5°－Wを示している。検出状況での溝の大きさは、幅70cm、深さ20～25cmを測る。埋土中からは、弥生時代前期・同後期の土器片、土師器の椀の破片102・103が出土しているが、時期は中世と判断される。なお、102は口縁部に沈線があり、平安時代のものと推測される。



第13図　溝－1断面(1／40)・出土遺物(1／4)



第14図　溝－1・2断面（1／40）



第15図　溝－2断面（1／40）

溝－2（第15図　図版2－7）

平坦部にあり、溝－1を切って、ほぼ南北に走る溝である。重複の状況は第14図に示されるように溝－1の方が深く、その上に少し浅く掘られている。方位はN－15°－Eを示している。検出面での溝の大きさは、東側が崩れていて、約120cmあるが、崩れた部分を除くと約60cmである。埋土中からは、弥生土器、土師器、須恵器、布目瓦142などが出土しているが、土鍋の小破片があり、内外に横位のハケメが見られる。時期は中世に比定される。

柱穴列（第3図）

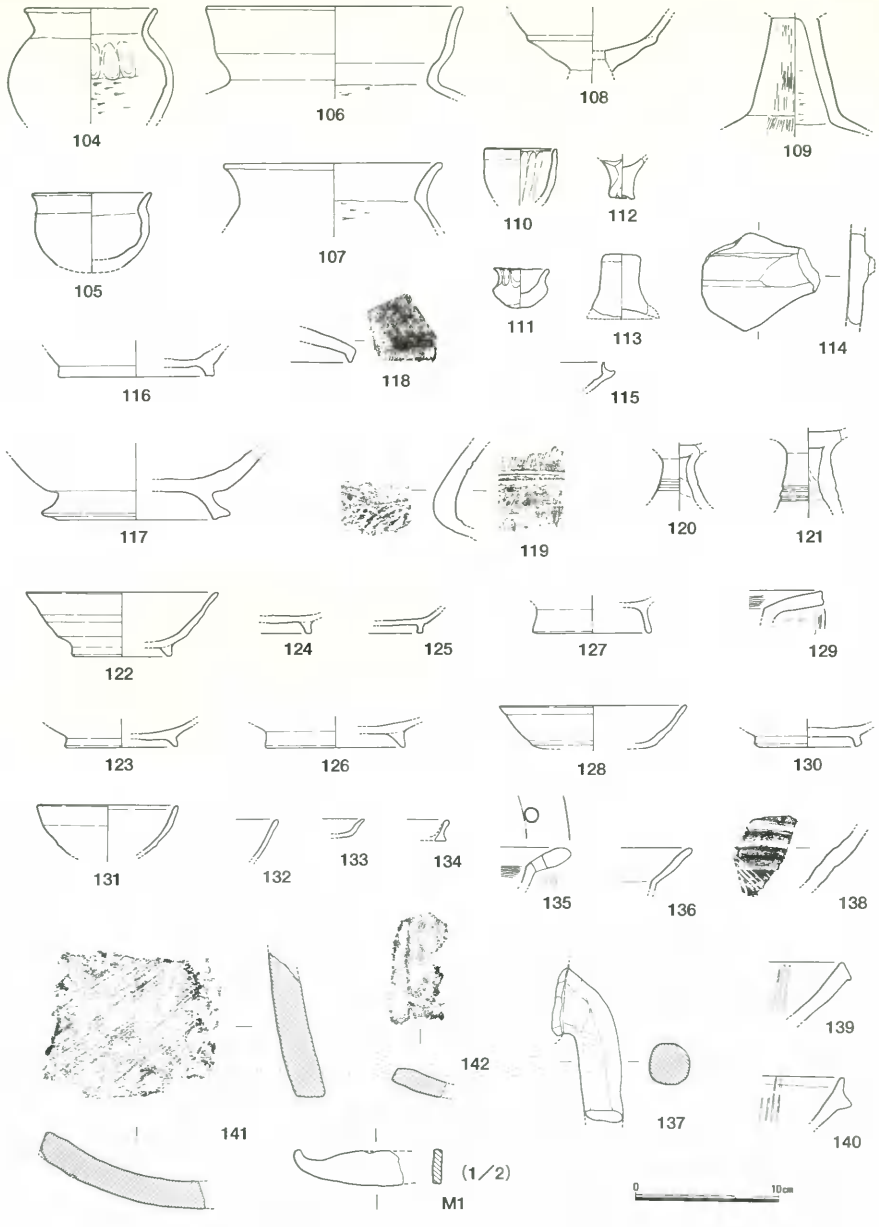
溝－2の東側で、1列に並ぶ柱穴を3個検出した、柱列の方位はN－17°－Eを示している。

(2)　遺構に伴わない遺物

包含層から出土している遺物には、古墳時代以後についても、各時代の遺物がある。小破片が多いが、図化できたものについて概要を述べる。104～109は古墳時代の土師器で、104は短頸の壺、105は鉢、106は二重口縁の壺、107は甕、108・109は高杯である。これらはほぼ5世紀代に比定される。110～113は小型手捏ね土器で祭祀関係のもので、古墳時代のものと推定される。114は円筒埴輪である。他には埴輪は無く、直上の丘陵部の古墳にも埴輪は伴っていない。115～121は須恵器で、7～8世紀代に比定される。115は杯身、116は高台付杯、117は壺の高台部分、118は蓋、119は甕の頸部、120・121は高杯の脚部である。

122～129は土師器である。122～125は内黒椀で、内面だけ黒褐色を呈する。126は土師器の高台付椀で、炭素を含まない。127は少し高い高台付椀である。128は高台が付かない。129はいわゆる長甕の口縁部である。130は高台付の椀で、内面にオリーブ黄色の釉のかかった灰釉陶器である。ほかに、図化できなかったが、須恵器の椀の内外面に薄い緑色の釉をかけた緑釉陶器片が1点ある。また、小片であるが、面取りされた土師器の高杯の脚部143がある。122～126・128～130は9世紀後半から10世紀に比定される。127は少し新しい。

131～137は土師器である。131は早島式の椀、133・134は土師器の皿、135・136は土鍋の口縁部、137は土鍋の脚である。138は備前焼の擂鉢、139・140は亀山焼の擂鉢である。以上のものは中世の遺



第16図　土師器・須恵器・埴輪・瓦・鉄器（1／2・1／4）

物である。141・142は平瓦である。瓦は少量出土しただけである。M1は鉄製の火打ち鎌と推定されるが、時期は分からない。

第3節　ま　と　め

縄文時代では、遺物が少量出土したが、いずれも後の撹乱層中から発見されたもので、純粋な包含層はなく、遺構も検出されなかった。時期は主に後期のもので、判別できるものでは、中津式と福田KⅡ式に比定され、後期の前半のものである。ほかに、晩期の土器の小片も若干検出された。

撹乱層を中心にして、弥生土器が出土した。前期のものが多いが、ほとんど表面が摩滅している。前期の土器には、壺・甕・蓋があり、壺と甕には明瞭な段を有するものが古段階、削り出し突帯を有するもの、段の無くなったものが中段階、貼り付け突帯文を有するものも若干あって新段階のものもあるが、中段階のものが多い。縄文系の貼り付け突帯を有するものも2片検出された。中期・後期のものも少量出土している。

石器には、石鏃、石錐、スクレイパー、打製石包丁、石鏃、叩石などがある。いずれも、包含層か撹乱層から出土したもので、時期を特定することは難しい。石鏃には、縄文時代と弥生時代に比定されるものがある。打製石包丁と石鏃は弥生時代と推定されるが、スクレイパーは時期を特定できない。

5世紀頃の壺・甕・鉢・高杯があり、小型手捏ね土器が出土している。丘陵上には、同時代の古墳があるが、何らかの祭祀が行われたものと推測される。古代では、内黒の椀、土師器の杯・皿・高杯・甕、緑釉陶器の椀、灰釉陶器の杯などの破片が少量出土している。調査地の東側は平坦地が続いていることから、平安時代前半の施設の存在が推測される。

中世には、L字状を呈する溝があり、区画された屋敷地と推測される。区画内部はかなり削平されているようで、溝に平行する柱穴3本を検出したにすぎないが、山裾の北東側に平坦地が広がっていることから、集落の広がりが推定される。出土遺物には、早島式土器の椀、土師器の椀・皿・土鍋、備前焼・亀山焼の擂鉢などがあり、一般の集落が想定される。

表1　鎌戸原遺跡石器一覧表

掲載番号	遺構名	遺物名	材質	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	時期	備考
1	包含層	石鏃	サヌカイト	16.3	21.5	3.7	0.98	縄文	
2	〃	〃	〃	22.0	17.8	3.9	1.46	弥生？	先端欠
3	〃	〃	〃	24.8	25.0	4.6	3.22	〃	
4	〃	石錐	〃	24.9	9.5	3.4	0.75	〃	
5	〃	スクレイパー	黒曜石（松脂岩）	26.2	16.4	7.2	2.75	縄文？	
6	〃	石包丁	サヌカイト	110.5	45.8	7.7	57.74	弥生	
7	〃	スクレイパー	〃	100.8	54.3	12.5	61.02	弥生？	
8	〃	〃	〃	79.4	54.6	10.4	42.54	〃	
9	溝　2	摩製石斧	安山岩	40.6	70.2	15.9	66.42	〃	破片
10	包含層	スクレイパー	サヌカイト	59.2	40.7	6.2	15.23	〃	
11	〃	〃	〃	92.0	47.4	12.0	39.70	〃	
12	〃	石鏃？	〃	38.0	43.4	7.4	11.80	〃	破片
13	〃	叩石	頁岩	119.7	44.6	16.6	103.94	不明	
14	〃	〃	石英斑岩	120.9	52.6	39.3	365.01	〃	
15	〃	〃	閃緑岩	99.7	43.5	40.9	262.64	〃	一部欠
16	〃	〃	石英斑岩	180.5	52.4	48.3	883.19	〃	
17	〃	〃	頁岩	105.9	77.6	17.9	229.16	〃	

1．鎌戸原遺跡南部
（東から）

2．鎌戸原遺跡北部
（南から）

3．鎌戸原遺跡西部
（南から）

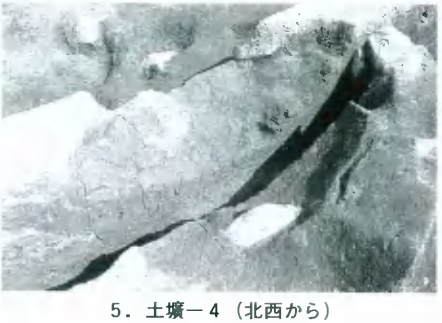
図版 2

1．溝－2（北から）

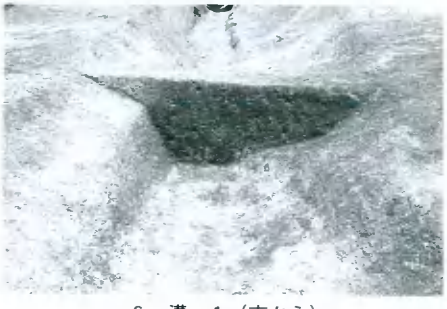
2．土壙－1（西から）

3．土壙－2（南から）

4．土壙－3（西から）

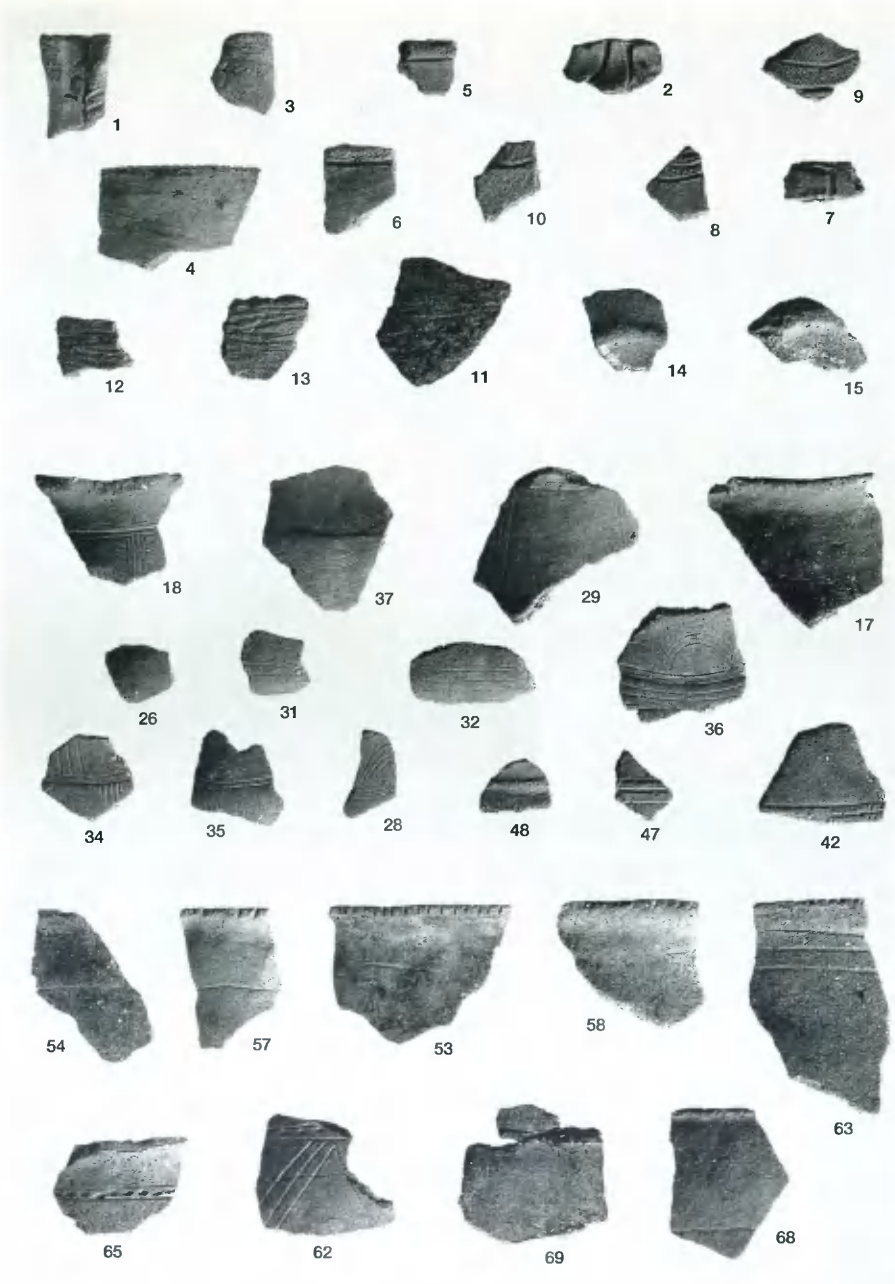


5．土壙－4（北西から）

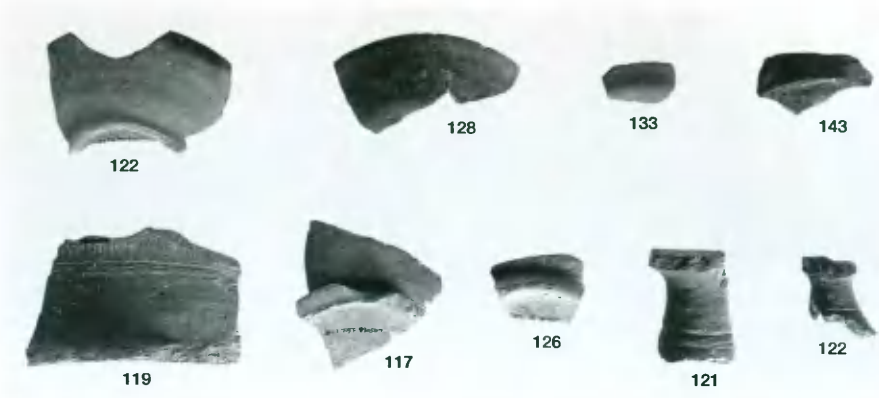


6．溝－1（南から）

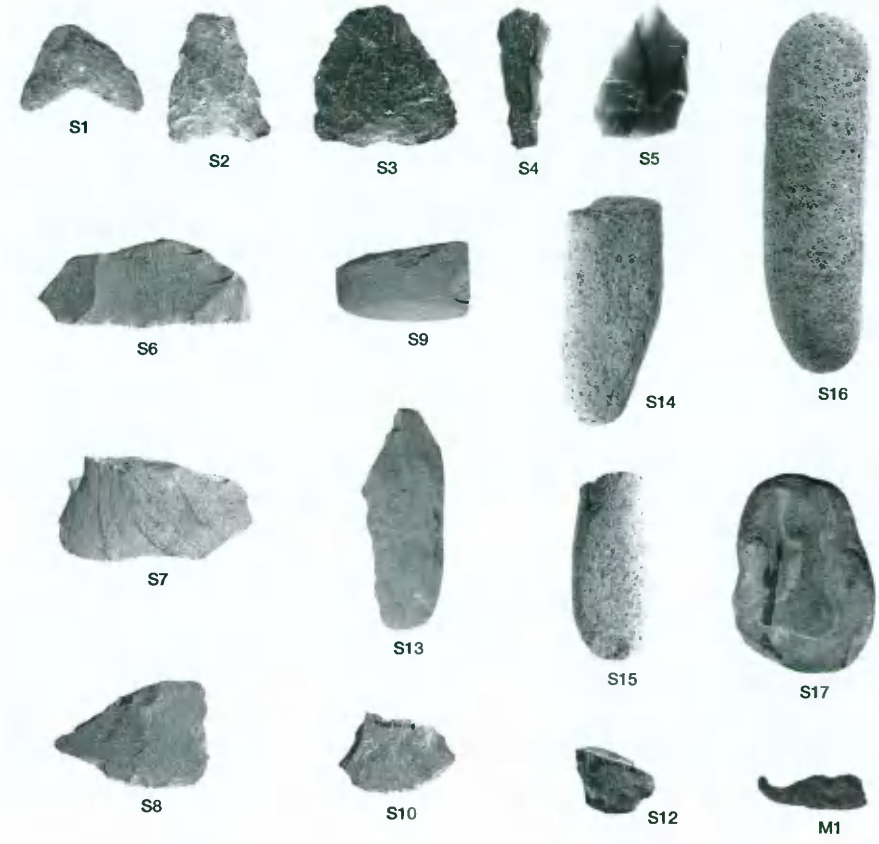
7．溝－2（西から）


1
3
5
2
9
4
6
10
8
7
12
13
11
14
15
18
37
29
17
26
31
32
36
34
35
28
48
47
42
54
57
53
58
63
65
62
69
68

1．縄文土器・弥生土器



1．土師器・須恵器



2．石器・鉄器（S1～S5は1／1、M 1 は1／2、他は1／3）

第四章　自然科学分野における分析・鑑定

第一節　前山１号墳出土・歯の鑑別

岡山大学名誉教授　小田嶋　梧　郎

鑑定依頼の３個の大臼歯所見は、下図に示す如く、いずれも上顎歯で、強度に咬耗した歯冠部の左上顎第一大臼歯（⌊6⌋）、比較的咬耗の少ない左上顎第二大臼歯（⌊7⌋）、および咬耗の激しい右上顎第二大臼歯（7⌋）と判別した（図１参照）。

◎個々の所見

１）左上顎第一大臼歯（⌊6⌋）：歯冠幅10.7㎜、歯冠厚11.6㎜で、上顎歯のうちで最も大きく、遠心舌側咬頭部分の欠損、および各咬頭頂の咬耗、ならびに三角隆線・副隆線の消失、中央溝、中央窩そのほかの溝も認められないほど激しい咬耗であるが、僅かに頬側溝が見られる程度である。しかしながら、各隅角が丸味を帯びた菱形で、近心頬側隅角の突出度、近心辺縁接触面のくぼみ、遠心辺縁接触面の突出などから、左上顎第一大臼歯（６）と判別した。計測値から、やや男性平均値に近く、年齢判別は強度の咬耗状態から可成の高年齢層(40代以後)と推察する。

２）左上顎第二大臼歯（⌊7⌋）：比較的咬耗の少ない典型的な上顎第二大臼歯である。すなわち、歯冠幅10.0㎜、歯冠厚11.4㎜で上顎第一大臼歯と比較してほとんど同大であるが、歯冠幅が小さい点と、外形が逆台形に近ずき、遠心舌側咬頭の退化がみられるので、３咬頭にみえる。また、上顎第二大臼歯と上顎第一大臼歯の接触面を咬合面の輪郭から眺めると、上顎第二大臼歯の近心縁はくぼみ、遠心縁は突き出ている。なお、頬面溝と中央溝は明瞭で、近心頬側咬頭、遠心頬側咬頭、近心舌側咬頭も明瞭であるが、遠心舌側咬頭が小咬頭より、むしろ小結節化していることなどの所見を総合すると、明らかに左上顎第二大臼歯と判別できる。

３）右上顎第二大臼歯（7⌋）：前述の左上顎第二大臼歯と異なり、咬合面の咬耗およびカリエスが激しいが、その全体観および外形からして右側の上顎第二大臼歯と判別は容易である。歯冠幅10.0㎜、歯冠厚11.4㎜で、頬側溝と遠心舌側三角溝およびその延長の舌面溝は明瞭なるも、中央溝は、まったく認められないほど咬合面の咬耗とカリエスが著明である。ただし、本例の遠心舌側咬頭の発育は良好で４咬頭を示す。

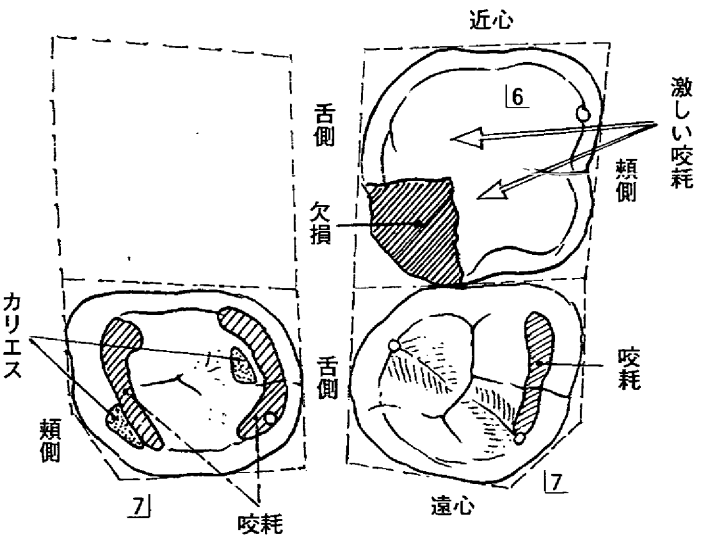


図１　上顎大臼歯・咬合面観

第二節　前山２号墳出土・歯の鑑別

岡山大学名誉教授　小田嶋　梧　郎

僅か一本の歯といえども、個体歯中のものであるからには、詳細に検索することによって、可成の成果をおさめることが可能な一例であった。

すなわち、鑑別歯の歯冠部に欠損も齲歯も皆無の咬合面観で、五咬頭性の、しかも頬側への傾斜が急である（図１・２）ことから、まず典型的な下顎大臼歯であることは確実で、咬頭頂の咬耗も無く、各咬頭からの三角稜も、中央溝そのほかの溝も明瞭であることは、個体の若年層の歯冠像判別が容易である。

細部に亙って観察すると、図１のごとくである。その大きさで歯冠幅（11.9㎜）と歯冠厚（10.3㎜）が、下顎のすべての歯より最も大きく、上顎第一大臼歯と逆に、最大厚径にくらべ最大幅径が大きく、歯冠幅が特に大きい点から、男性の下顎第一大臼歯と判別した。

歯冠の頬面観：外形は咬合縁を最も長くした底辺とする逆台形で、近心頬側咬頭が遠心頬側咬頭より高く、第５咬頭の遠心咬頭がみられる。歯頸線はほぼ水平に直線を画くが、中央部で歯根分岐部に向うエナメル質の小突起（根間突起）が突出する（図３）。また、頬側溝の延長した頬面溝が深く長い溝としてタテに歯冠頬面のほぼ中央の高さまで垂直に走り、その末端に頬面小窩とよぶくぼみをつくる(図３)。

近遠心面観：やや専門的になるが、近心面の歯頸線の走り方に特徴があって、頬側から僅かに上行斜線をとり、ほぼ中央付近で舌側に向って水平線をたどる(図２)。また、頬側縁を眺めると、歯冠の舌側方向への傾斜が強く現われるのが下顎大臼歯の特徴で、上顎第一大臼歯の頬側咬頭との咬合接触によるためである(図２)。

咬合面：外形は隅角が丸味を帯びた不正五辺形で、

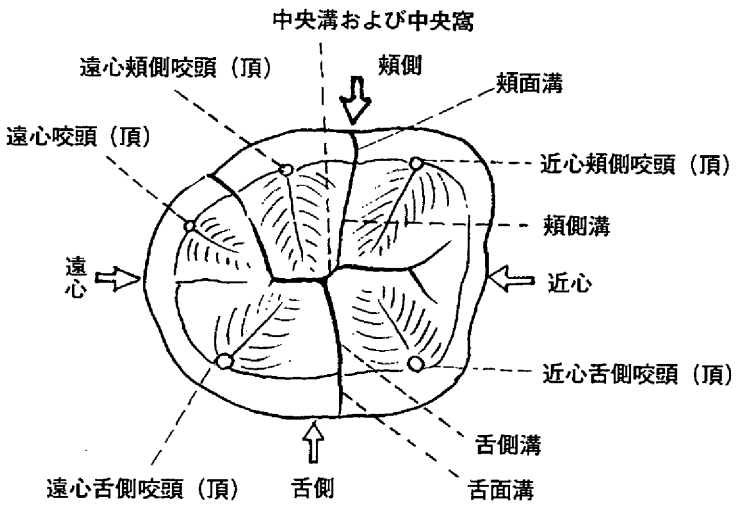


図１　咬合面観

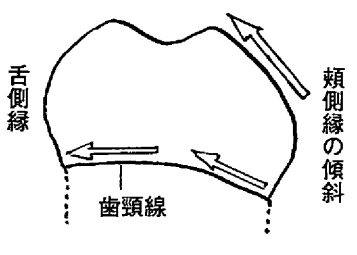


図２　近心面観

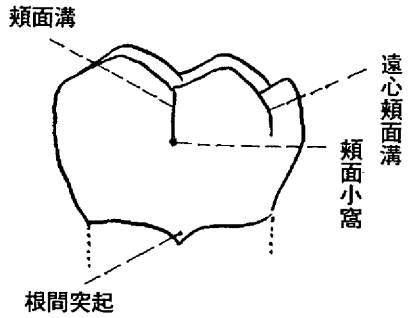


図３　頬面観

上顎大臼歯と比べてみると、厚径よりも幅径が大きいことから、本例が下顎大臼歯であるのに気付く。下顎第一大臼歯の咬頭間溝は、近心頬側咬頭と遠心舌側咬頭とが接しないのが大部分で、本例もその症例で、詳細はさける（図１）。

以上の総合所見から、本例が左側の下顎第一大臼歯（⌊6）であり、恐らく、若年男性歯と推察した。

第三節　岡山県都窪郡山手村宿前山１号墳出土人骨について

京都大学霊長類研究所助教授　濱　田　　穣

前山１号墳（岡山県都窪郡山手村宿）主体部より石棺が発掘され、中にそれぞれ断片的ではあるが、全身の人骨一体分が見出された。人骨は石棺内に移された後には、動かされた形跡はなく、人骨はすべてそれぞれ正常な位置にある。頭骨は棺底の平たい石の上に据えられており、さらに頭の両側に石棺壁を構成する石と底部石の間に平たい石が立てられている。頭骨は底部石を枕として仰向け、少し側方を向いた形で据えられ、右側頭部が側面石に接している。

残っている部分は、頭蓋骨、体幹部（胸柱・腰椎・仙椎、それぞれ一部）、寛骨の一部、四肢骨の一部である。また、頭骨の下に三本の大臼歯（上顎）が残る。このうち、第三大臼歯は、歯冠部しか残らず、咬耗も無いので顎骨内に未萌出のままだったのであろう。全身の形態からの印象として、きゃしゃな体格であったようだ。全体としての保存状態は良好ではないが、残存する部分から壮年（30代以降）の男性であろうと思われる。

性判定については、仙骨・寛骨は一部しか残っていないが、幸い耳状面部が残っており、その形状からこの人骨が男性だろうと推定した。また、大腿骨の中央部の矢状径と横径計測値を、成人男女の平均値と比較すると、男性平均値の方に近い。年齢については、第三大臼歯以外の二本の大臼歯の磨耗状態、および前頭縫合の癒合状況から30代以降と推定した。

以下、身体部位別の残存状況や特徴を記す。

① 頭　　部

残存するのは、脳頭蓋部では前頭より頭頂部分にかけて、および左側頭部であり、底部や後頭部、右側頭部は欠けている。顔面頭蓋部では、左眼窩周辺から頬骨弓にかけてが残存しているが、右側では眼窩の外側から下方にかけては欠損している。側頭線は発達しておらず、頬骨弓も側方への張り出しが弱く、頑丈でない。眉上隆起の発達は弱めで、眉弓から鼻尖方向への側面観形状はなめらかで、頑丈さの特徴を持たない。

② 体 幹 部

残存する脊椎は、それぞれ完全ではないが、第十～十二胸椎の３つ、第一～五腰椎、および第一仙椎である。胸椎は椎体のみ、それも右側１／６ないしは２／５程度しか残っていない。腰椎では椎体がかなり良く残存しているが、棘突起をはじめとする突起は多くが欠損している。

仙骨は第一仙椎の前面部右半頭部を残すのみであるが、構造としては、外側部の耳状面部より内側前面部と上関節突起の基部などが見られる。いくつかの寛骨残存片のうち、腸骨の耳状面部のみが形態として認識できる部分であり、仙骨耳状面と併せたふたつの関節面の形態がかなりきつく曲り、幅も広いので性判定資料に供することができた。

③ 四 肢 部

上肢では、両側ともに不完全な前腕部と、左橈骨遠位に手と手首の骨として唯一、舟状骨がそれぞれ残存していた。右橈骨は遠位三分の一あたりの45㎜長、右尺骨はほぼ中央部の１／２長ほどが残っているが、どちらも表面が凹凸に腐食を受けている。左橈骨は近位関節部と遠位端部分の茎状突起を

除き、ほぼ全体が残っている。左尺骨は残存状態は良好だが、橈骨とほぼ同様に近位関節部と茎状突起を欠き、両骨ともに最大長などの計測は不可能である。

右大腿骨は約５／６を残すが、両端部分を欠く。骨体は中央部分では表面まで良く残存し、粗線も良く観察される。大腿骨中央部と思われる部分では、矢状径25.2㎜、横径26.6㎜で、成人男性平均値（山口、1978）に近い。左大腿骨は遠位約２／５が残るが、遠位端部を欠く。右脛骨は中央部の約１／２長を残すが、表面の保存状態は良くない。左脛骨は中央部より遠位部にかけての約３／５を残すが、遠位関節部を欠く。脛骨中央部の横断面形状は、ヘリチカのⅠ型に分類されるが、正三角形というよりは、少しⅡ型にちかよった形である。

足部では十数個の骨断片が残っており、そのうちひとつのみが関節面の形状から、踵骨の距骨関節部分から踵骨隆起部にかけての部分だと推定された。

〈参考文献〉

山口　敏、1978. 日本人の骨「人類学講座６　日本人Ⅱ」（池田次郎編、雄山閣出版）pp. 143～174

頭　骨（左前より）

寛骨（腸骨部分・左）と仙骨（一部・右）

第四節　前山遺跡出土の赤色顔料について

別府大学助教授　本　田　光　子

はじめに

岡山県都窪郡山手村宿所在、前山１号墳の古墳時代箱式石棺墓および弥生時代土壙墓１、９、16、23からの出土赤色物について、その材質と状態を知るために顕微鏡による観察および蛍光Ｘ線分析を行った。

墳墓出土例に関する現在までの知見に寄れば出土赤色物は鉱物質の顔料であり、酸化第２鉄Fe_2O_3を主成分とするベンガラと、赤色硫化水銀HgSを主成分とする朱の２種が用いられている。これ以外に古代の赤色顔料としては、四三酸化鉛を主成分とする鉛丹があるが、出土例はまだ確認されていない。ここでは、これら三種類の赤色顔料を考えて調査を行った。

調査結果は表に示した通りであり、赤色物は朱とベンガラの２種の赤色顔料であった。１号墳では古墳時代に通例のように遺骸には朱、埋葬施設内面にはベンガラが使われていた。集団墓では４基の土壙墓ともに朱であった。弥生時代の集団墓出土赤色顔料についての調査例はまだ少なく、本例は貴重な資料であり、若干の考察を試みる。

試　　料

依頼を受けた試料のうちNo.１から４について、実体顕微鏡下で出来る限り調整（混入土砂、骨片等夾雑物の除去）し、赤色物を針先に付く程度の量を採り検鏡用に、残りを研和して蛍光Ｘ線分析に供した。赤色物の量は非常に微量であり、赤色物だけからなる小塊は少なかった。そのため、Ｘ線分析試料には土砂がかなり含まれている。No.５は石棺石材、No.６は頭蓋骨小片を各々そのままで測定した。

顕微鏡観察

顕微鏡により透過光・反射光40～400倍で検鏡した。検鏡の目的は、赤色顔料の有無・状態・種類、二種以上の赤色顔料があれば混和の状態と相対量、夾雑物の有無等を観察するものである。三種類の赤色顔料は特に微粒のものが混在していなければ、粒子の形状、色調等に認められる外観の違いから、検鏡により経験的に見極めがつく。朱粒子は、やや角張った塊状、落射光観察時に認められる独特の反射・光沢、透過光観察時の透明度および赤色の濃淡の調子等に特徴が認められる。ベンガラ粒子は、塊状、棒状、板（扁平）状、球状、不定形等様々な外観を持ち一様でない。出土ベンガラには透明な管状（パイプ）粒子を含む例があるが、本試料のベンガラには、いわゆるパイプ状粒子は含まれていなかった。

今回の試料には、赤色顔料としてはNo.１～４、６に朱、５にベンガラ粒子が認められた。

蛍光Ｘ線分析

赤色顔料の主成分元素の検出を目的として実施したものである。理学電機工業㈱製蛍光Ｘ線分析装置システム3511を用い、Ｘ線管球；クロム対陰極、印加電圧；50kV、印加電流；50mA、分光結晶；フッ化リチウム、検出器；シンチレーション計数管で測定を行った。

赤色顔料の主成分元素としては朱であれば水銀、ベンガラであれば鉄であるので、２種の元素の有無のみ表中に記した。他にマンガン、ストロンチウム、ルビジウムなどの元素が検出されたが、それらはみな主として混入の土砂部分に由来すると考えられるので表中では省略した。但し、鉄は土砂部分にも必ず含まれるので、赤色顔料由来のものとの区別は蛍光Ｘ線強度から判断した。なお、鉛丹の主成分元素である鉛は検出されなかった。

結　　果

上記の分析結果とそれにより推定される赤色顔料の種類は下記の通りである。

No.	試料の採取位置	顕微鏡観察	蛍光Ｘ線分析		赤色顔料の種類
			鉄	水銀	
1	土壙墓―23　床面付近	朱	＋	＋	朱
2	土壙墓―16　床面付近	朱	＋	＋	朱
3	土壙墓―９　床面付近	朱	＋	＋	朱
4	土壙墓―１　床面付近	朱	＋	＋	朱
5	１号墳箱式石棺墓石材	ベンガラ	＋	－	ベンガラ
6	１号墳箱式石棺墓内頭蓋骨	朱	＋	＋	朱

検鏡でベンガラ、蛍光Ｘ線分析で鉄が検出され、水銀が検出されなかったものをベンガラ、検鏡で朱、蛍光Ｘ線分析で水銀と微量の鉄が検出されたものを朱とした。蛍光Ｘ線分析で鉄、水銀が検出されたものは、二元素のＸ線強度と検鏡結果（ベンガラの有無）から、朱だけのものと朱とベンガラの両者からなるものとの区別を行った。

No.１～４と６は朱、No.５はベンガラであった。

考　　察

現在までの分析例から、弥生時代の墳墓出土赤色顔料の種類と使われ方は次の３類にまとめることができる。

a類：床面から朱だけが出土するもので、埋葬施設の床面あるいは遺骸から朱だけが検出され、朱は遺骸自身に施されていたものと推定される。

b類：朱とベンガラの両方が出土するもので、埋葬施設の内面にベンガラを塗布し、床面にもベンガラを塗布あるいは散布した状態に、a類の遺骸を納めたものと推定される。

c類：ベンガラだけが出土するもので、埋葬施設内面にベンガラだけを塗布したものあるいは床面からベンガラだけが出土するものである。

上記のうちa類は北部九州地方で弥生時代の当初よりみられ、特に大型甕棺墓で多用されるが、甕棺墓の衰退に伴い極端に減少する。一方、分析例は多くはないが、弥生時代中期末から後期初頭の近畿、山陽、山陰、北陸地方では、それまで墓から出土することがなかった赤色顔料が、主としてa類の形で認められるようになる。b類は北九州地方の後期中頃以降に始まり、弥生時代終末までは同地域内で盛行する。c類は北部九州地方で弥生時代の当初よりみられるが、例は多くない。c類が恒常的に認められるようになるのは、b類と同時期であり、b類同様に弥生時代終末までは同地域内で盛行する。

前山遺跡の弥生時代の集団墓では４基の土壙墓に赤色顔料が認められ、朱であった。出土状況から見て、おそらく遺骸の頭胸部を中心に朱が施されたものと推定される。赤色顔料の在り方はa類である。岡山県内では弥生時代の集団墓出土赤色顔料としては、みそのお遺跡で27点についての分析報告がある。そのうち20例は朱であり、残りはベンガラかあるいは赤色顔料の使用がなかったものと推定されている。丹後半島の大宮町御坂神社墳墓群と左坂墳墓群では、赤色顔料が認められた墓の90%以上が朱であり、残りがベンガラであった。弥生時代の墳墓出土赤色顔料の在り方について論ずるためには、北九州地方以外での分析例の増加が先決であるが、本例は今後の調査検討にとって良好な資料である。

古墳時代の墳墓での赤色顔料の在り方は弥生時代の３類に同じである。しかし、たとえば竪穴式石室ではその構築過程でベンガラを大量に用いるようになり、石室、石棺にはベンガラ、遺骸には朱を施すことが一般的な形で、b類が最も基本的な使い方である。

前山１号墳の箱式石棺墓では、朱は遺骸の特に頭部を中心に施されたものと考えられ、箱式石棺の内面にはベンガラが塗布されている。この赤色顔料の在り方は、古墳時代に通有のb類であるといえよう。

今回、調査の機会をいただきました岡山県古代吉備文化財センターおよび同物部茂樹氏に感謝いたします。蛍光X線分析の測定は九州産業大学総合機器センターで行ったもので、ご協力いただきました同古賀啓子博士に感謝いたします。

第五節　前山遺跡出土の初期須恵器の胎土分析

岡山理科大学自然科学研究所　白　石　　純

1．はじめに

この分析では、蛍光X線分析法により前山遺跡から出土した2点の初期須恵器（高坏）の胎土分析を行い、周辺遺跡（菅生小学校裏山遺跡[1]・窪木薬師遺跡[2]・榊山古墳・川入遺跡・法蓮23号、37号墳・小寺2号墳）から出土している初期須恵器との比較および窯跡生産地である和泉陶邑窯跡群（5世紀～8世紀）・岡山県内の窯跡群（6世紀中頃～7世紀代）との比較検討を行った。

2．分析方法および結果

分析装置・分析方法などは現在まで行っている方法である[3]。また、測定した元素は第1表のように SiO_2・Al_2O_3・Fe_2O_3・K_2O・CaO・TiO_2・Sr・Rbの8元素である。このうち初期須恵器の分析では、Fe_2O_3・K_2O・CaO・TiO_2・Sr・Rbの6元素に顕著な差がみられることからCaO/K_2O、Fe_2O_3/TiO_2、Sr/Rbの比をとりCaO/K_2O-Sr/Rb、CaO/K_2O-Fe_2O_3/TiO_2のXY散布図で検討した。

この結果、第1図CaO/K_2O-Sr/Rbの散布図では、前山遺跡出土の2点の高坏は陶邑窯跡群と岡山県内の窯跡群が重複する領域にプロットした。この領域には、菅生小学校裏山遺跡出土の初期須恵器も分布している。また、第2図CaO/K_2O-Fe_2O_3/TiO_2の散布図でも、この2点の須恵器は第1図と同様の結果となった。

以上のように、前山遺跡から出土した、胎土中に石英などの砂粒を多く含む高坏は、陶邑と岡山県内の窯跡群が重複する領域にプロットし、以前筆者が分析した前山遺跡周辺の遺跡[4]（窪木薬師遺跡・榊山古墳・川入遺跡・法蓮23・37号墳・小寺2号墳）から出土した胎土中に石英などの砂粒を多く含む初期須恵器のグループとは分布領域が異なった。

このように今回の分析では、胎土中に砂粒を多く含む初期須恵器の分布領域がやや広がるのか、または別のグループとなるのか、この分析結果では判断できず、今後の試料の蓄積を待ちたい。

第1表　前山遺跡出土初期須恵器の胎土分析値（%）　　ただしSr、Rbはppm

番号	遺跡名	出土地点	器種	SiO_2	Al_2O_3	Fe_2O_3	K_2O	CaO	TiO_2	Sr	Rb
1	前山遺跡	流土中	高杯	72.28	19.82	6.73	2.43	0.40	0.69	79	114
2	前山遺跡	南側山裾表採	高杯	68.87	20.47	6.04	2.43	0.54	0.76	87	132

※番号　1＝430　　2＝431（第二章 第92図）

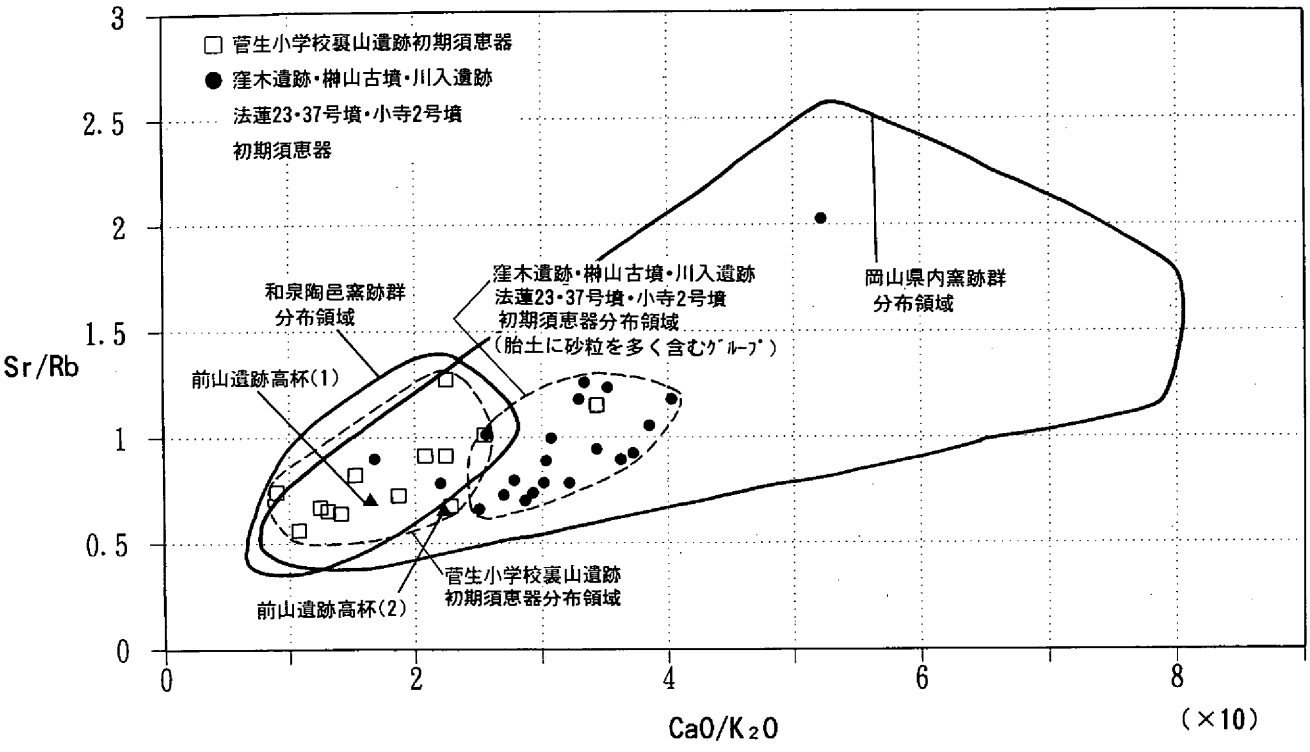
註

(1) 白石　純　1993「菅生小学校裏山遺跡出土遺物の胎土分析」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告81　—山陽自動車道建設に伴う発掘調査5—』岡山県教育委員会pp.440—414

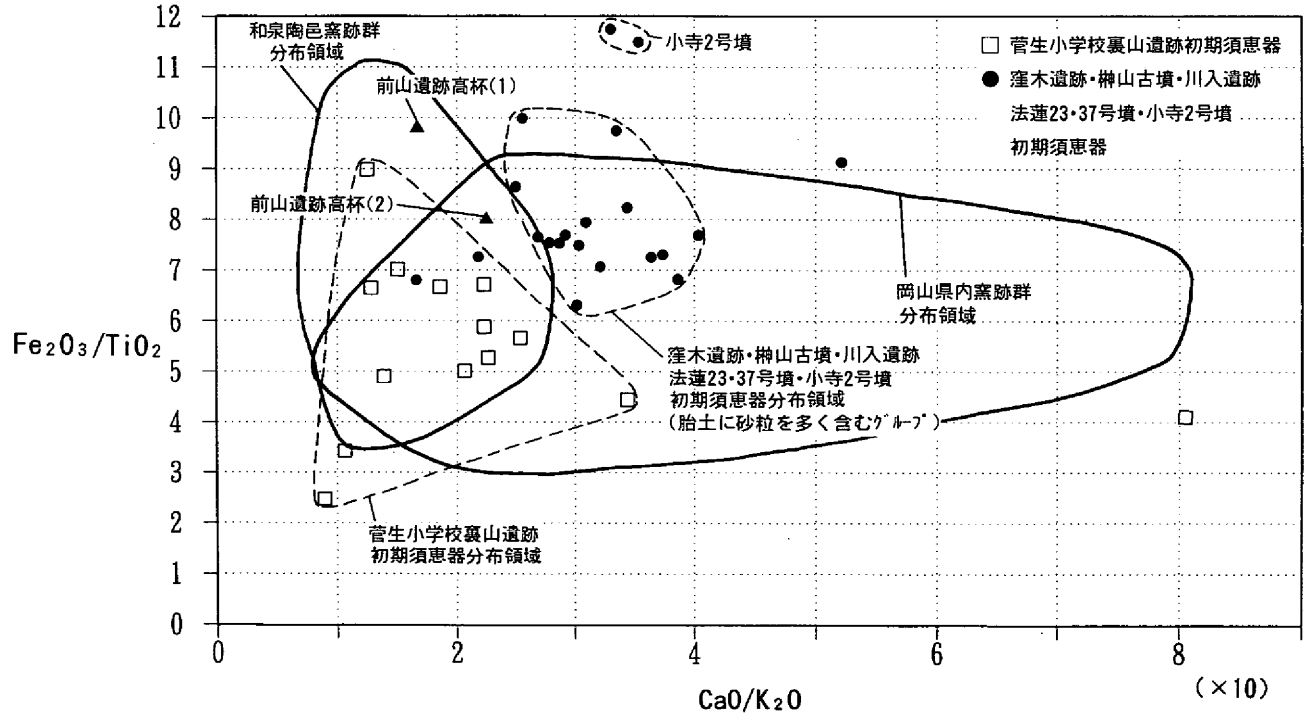
(2) 白石　純　1993「窪木薬師遺跡出土遺物の胎土分析」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告86　—前川河川改修工事に伴う発掘調査—』岡山県教育委員会pp.245—269

(3) 白石　純　1986「蛍光X線による考古学遺物（石器・土器）の化学分析（Ⅱ）」『蒜山研究所研究報告第12号』岡山理科大学pp.43—54

(4) 白石　純　1993「岡山県地方出土初期須恵器の胎土分析（Ⅰ）」『蒜山研究所研究報告　第19号』岡山理科大学pp.79—98



第１図　CaO/K_2O-Sr/Rb散布図
前山遺跡出土初期須恵器と周辺遺跡出土の須恵器との比較



第２図　CaO/K_2O-Fe_2O_3/TiO_2散布図
前山遺跡出土初期須恵器と周辺遺跡出土の須恵器との比較

第六節　前山遺跡土壙墓A内出土ガラス小玉の分析

岡山理科大学自然科学研究所　白　石　　純

前山遺跡の土壙墓A（5世紀中頃）より、23点のガラス製小玉が出土している。このうち色調の異なる2点の小玉について、ガラス成分および色調の違いを調べるためにエネルギー分散型蛍光X線分析を実施した。この分析では、試料を非破壊で分析した(1)。

分析の結果、第1表に示したように2点のガラス小玉は、SiO_2（二酸化珪素）・Al_2O_3（酸化アルミニウム）・Fe_2O_3（酸化鉄）・K_2O（酸化カリウム）・CaO（酸化カルシウム）・TiO_2（酸化チタン）を主成分とするアルカリ石灰ガラスである。

また、前記した成分以外に試料番号1の小玉には、CuO（酸化銅）1.33%・PbO（酸化鉛）0.68%MnO（酸化マンガン）0.06%がそれぞれ検出された。このガラス小玉のスカイブルーの着色には銅の成分が関係しているようである(2)。試料番号2のガラス小玉では、MnO（酸化マンガン）が1.81%検出されており、ブルーの着色はこの成分によるものと考えられる(2)。

第1表　前山遺跡 土壙墓A内出土ガラス小玉の分析値（%）

試料番号	出土地点	時期	種類	色	SiO_2	Al_2O_3	Fe_2O_3	K_2O	CaO	TiO_2	MnO	CuO	PbO
1	床面付近	5c中頃	小　玉	スカイブルー	79.37	10.88	1.44	2.45	2.42	0.82	0.06	1.33	0.68
2	床面付近	5c中頃	小　玉	ブルー	84.21	5.18	1.34	0.60	6.26	0.42	1.81	0.13	—

※試料番号　1＝O23　　2＝O41（第二章 第100図）

註

(1)　このガラス小玉の分析では非破壊を原則としているため分析機器に制限がある。そこで、この分析ではエネルギー分散型蛍光X線分析装置により分析した。この分析装置は、X線源が弱いため試料に与える損傷がほとんどない。（波長分散型蛍光X線の場合、X線源が強いためガラスなどの試料は色が変わることが考えられる。）また、試料の形状にあまり影響されず、ある程度の定量が行えるなどの非破壊で分析する装置としては最良の分析方法である。

分析装置：セイコー電子工業株式会社卓上型蛍光X線分析計SEA2010L

マイラー膜使用のためNa_2Oは測定していない。

(2)　山崎一雄　1987「日本出土のガラスの化学的研究」『古文化財の科学』思文閣出版pp.274—300

藤田　等　1994「弥生時代ガラス—小玉—」『弥生時代ガラスの研究』各著出版pp.124—146

第七節　甕の底部に認められた黒色物質の材質について

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

前山遺跡（都窪郡山手村宿所在）では、弥生時代後期前葉～終末の墓壙や古墳時代中期の方墳および土壙墓が認められている。特に古墳時代中期の土壙墓Aの棺外に副葬されていた甕の底部には、黒色物質と植物遺体様物質の集積が認められた。

今回の自然科学分析調査は、この黒色物質と植物遺体様物質の材質を明らかにすることを目的とする。その分析方法として、前者試料に対しては赤外線吸収スペクトル法による分析（赤外分光分析）を選択した。赤外線吸収スペクトル法は、既知のスペクトルと比較して未知物質の同定および確認ができ、物質の多重結合や官能基の構造がわかる（山田、1986）。黒色物質を観察したところ、かなり変質している状態であることが判った。そのため、今回は物質構造を捉えることを主目的とし、その構造判定から予想される物質の性状を考えてみる。また、後者試料についてはイネ科植物に由来することを推測して、その組織片を観察するために灰像分析を選択した。

1．試　　料

分析に供した試料は、甕底部に集積が認められた黒色物質および炭化植物遺体様物質である。

2．分析方法

(1) 赤外分光分析

分析は、以下の手順で進めた。

・分析試料の調製

試料（黒色物質）を、周囲の土壌を混入しないように注意深く、カッターナイフで削り取る。これをメノウ乳鉢で微粉砕（200メッシュ以下）する。

・赤外線吸収スペクトルの測定

微粉砕試料を次の条件（山田、1986）で測定した。

装置：島津製作所製FTIR—8100A

測光値（Measuring mode）：%T

分解能（Resolution）：4.0cm^{-1}

積算回数（No. of Scan）：40回

ゲイン（Gain）：自動

ミラー速度（Detector）：2.8mm/sec

アポダイズ関数（Apodization）：Happ-genzel

測定範囲：4600～400cm^{-1}

測定方法：KBr法

(2)　灰像分析

分析方法は近藤・佐瀬（1986）を参考にした。試料を電気炉にて乾式灰化（600℃、30分間）する。これを、プリュウラックスで封入し、プレパラートを作製して400倍の光学顕微鏡下で観察する。

3．分析結果

(1)　赤外分光分析

試料の赤外線吸収スペクトルを図1に示し、これらの特徴的なピークから推定される官能基を表1に示した。

3700cm^{-1}と3620cm^{-1}はO—H基の伸縮振動の吸収、1030cm^{-1}と430cm^{-1}はSi—O基の吸収、920cm^{-1}はO—H基の変角振動の吸収、800・780・690・540cm^{-1}はAl—O基の吸収とみられる。

表1　黒色物質の赤外吸収スペクトルの帰属結果

吸収ピークNo.	吸収波数cm^{-1}	推定される官能基
①	3,700	O－H基
②	3,620	O－H基
③	2,380	noise
④	2,340	noise
⑤	1,030	Si－O基
⑥	920	O－H基
⑦	800	Al－O基
⑧	780	Al－O基
⑨	690	Al－O基
⑩	540	Al－O基
⑪	430	Si－O基

noise：ブランクのノイズ

(2)　灰像分析

植物遺体様物質試料については、肉眼観察および灰像分析による観察を試みたが、その種類や由来を明確にできる所見を得ることはできなかった。

4．考　　察

これまでの出土遺物の中で黒色を呈する物質としては、漆、天然アスファルト、松脂、動植物油などが挙げられる。また、これら有機物質などが土壌中で変質し、土壌固有の腐植物質になると黒色を呈する。これらはいずれも固有の赤外吸収スペクトルの吸収帯がある。漆では3400・2900・1730・1620・1460・1060cm^{-1}、天然アスファルトでは2900・1600・1460・1380cm^{-1}（脂肪族飽和炭化水素）、松脂は1700cm^{-1}、動植物油は1740cm^{-1}にそれぞれ特徴的な吸収帯がある。腐植物質の中でより黒色の強い腐植酸については、腐植化度によって吸収帯の特徴は異なり、3400～2900cm^{-1}と1600～1700cm^{-1}の幅で吸収帯が認められる。

今回の試料については上記の有機化合物として判断される吸収帯は認められず、むしろ粘土鉱物由来と考えられるSi—O基、Al—O基が認められる。これは黒色物質に付着した覆土が除去しきれず、測定結果に影響を与えたためと考えられる。以上の結果から、黒色物質の材質を明確にすることはで

きないが、少なくとも漆、天然アスファルト、松脂、動植物油に由来する物質ではないと推定される。

一方、植物遺体様物質については、灰像分析結果により、イネ科植物に由来する組織片が認められなかったことから、試料はイネ科植物以外の植物遺体に由来するものと思われる。

引用文献

近藤錬三・佐瀬　隆（1986）植物遺体分析、その特性と応用．第四紀研究、25、p.31—64

熊田恭一（1977）土壌有機物の化学．220p.、東京大学出版会．

久馬一剛・佐久間敏雄・庄子貞雄・鈴木　皓・服部　勉・三土正則・和田光史（1993）「土壌の事典」．566p．朝倉書店

日本粘土学会編（1987）粘土ハンドブック　第二版．1289p.、技報堂出版．

山田富貴子（1986）赤外線吸収スペクトル法．機器分析のてびき第1集．p.1—18、化学同人．

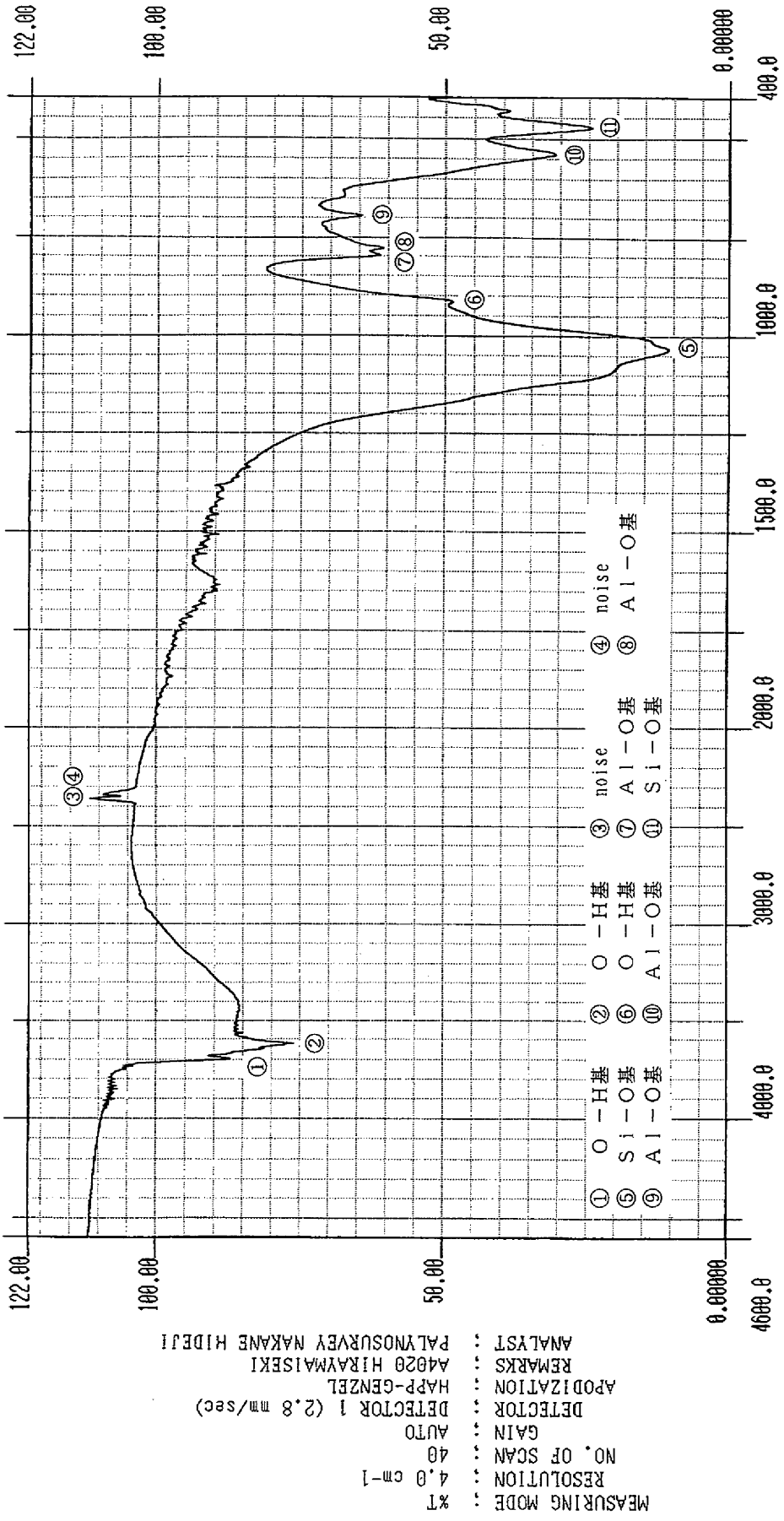


図１　黒色物質の赤外吸収スペクトル

報 告 書 抄 録

フリガナ	マエヤマイセキ　　カマトバライセキ
書名	前山遺跡　　鎌戸原遺跡
副書名	国道429号線改良に伴う発掘調査
巻次	I
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	115
編集者名	物部茂樹
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター　TEL086−293−3211
所在地	〒701−01　岡山県岡山市西花尻1325−3
発行機関	岡山県教育委員会
所在地	〒700　岡山県岡山市内山下2−4−6　TEL086−224−2111
発行年	西暦1997年3月31日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
マエヤマ 前山	オカヤマケンツクボグンヤマテソンシュクアザマエヤマ 岡山県都窪郡山手村宿字前山	33427		34度 38分 59秒	133度 46分 59秒	1993.6.16〜 1993.8.31 1993.11.1〜 1994.2.15	1,608	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
前山	墓地	弥生	弥生時代後期の土壙墓・土器棺墓	弥生時代後期の土器	約142基からなる弥生時代後期の集団墓地の全域を調査
		古墳	古墳と土壙墓	古墳時代中期の土器	5世紀代の土壙墓と副葬品

報 告 書 抄 録

フ リ ガ ナ	マエヤマイセキ　カマトバライセキ
書 名	前山遺跡　鎌戸原遺跡
副 書 名	国道429号線改良に伴う発掘調査
巻 次	I
シ リ ー ズ 名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	115
編 集 者 名	正 岡 睦 夫
編 集 機 関	岡山県古代吉備文化財センター　TEL086−293−3211
所 在 地	〒701−01　岡山県岡山市西花尻1325−3
発 行 機 関	岡山県教育委員会
所 在 地	〒700　岡山県岡山市内山下2−4−6　TEL086−224−2111
発 行 年	西暦1997年3月31日

フリガナ 所収遺跡名	フ リ ガ ナ 所 在 地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
カマトバラ 鎌 戸 原	オカヤマケンツクボグンヤマテソンシュクアザカマトバラ 岡山県都窪郡山手村宿字鎌戸原	33427		34度 39分 4秒	133度 47分 0秒	1993.4.5〜 1993.6.16 1994.1.5〜 1994.1.21	897.0 13.5	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
鎌 戸 原	集落	縄 文		縄文時代後期の土器	山裾の台地に断続的に形成された縄文時代後期から中世の集落跡
		弥 生		弥生時代前期中葉の土器	
		古代・中世	中世の区画溝と土壙	平安時代前半の土器	

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告115

前山遺跡
鎌戸原遺跡

国道429号線改良に伴う発掘調査Ⅰ

平成９年３月15日　印刷
平成９年３月31日　発行

編　集　岡山県古代吉備文化財センター
発　行　岡山県教育委員会
印　刷　西尾総合印刷株式会社